福岡市埋蔵文化財調査報告書第1380集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

Motooka Kuwabara

元岡・桑原遺跡群32

—第52次・第54次調査の報告—

２０１９

福岡市教育委員会

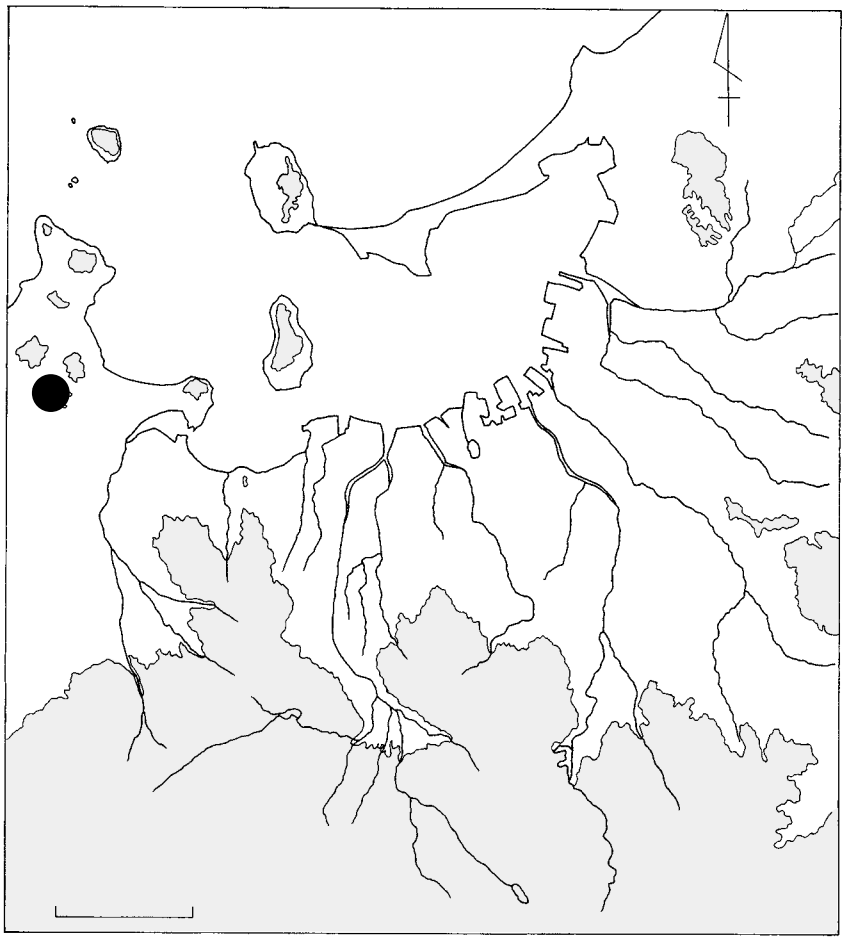
福岡市埋蔵文化財調査報告書第1380集

九州大学統合移転用地内埋蔵文化財調査報告書

Motooka　　Kuwabara

元岡・桑原遺跡群32

—第52次・第54次調査の報告—



0763・0844

２０１９

福岡市教育委員会

序

九州大学は、福岡市箱崎地区・六本松地区・春日市原町地区のキャンパスを統合移転し、福岡市西区元岡・同桑原・糸島市にまたがる新キャンパスを建設する事業を進め、平成30年度に全学移転が完了したところです。本市は九州大学統合移転事業の円滑な促進のための協力支援を行うとともに、多角連携型都市構造の形成に向けて、箱崎・六本松地区の移転跡地や西部地域におけるまちづくりなど、長期的・広域的な視点から対応を行っております。

統合移転用地内における事前発掘調査もこの一環として平成7年度から当教育委員会が取り組んでおり、29年度までに、統合移転関係用地内関係調査報告書31冊発行されております。また本年度も、本書を含めて関係調査報告書が3冊、パンフレットが2冊発行され、本年度を持って伊都キャンパス内の調査報告事業は完結します。

本書は、以前報告した第52次・第54次調査の追加報告と付編として第42次調査の分析報告を掲載しております。いずれも地域の歴史を語る上で欠かすことが出来ない成果と考えております。

本書が文化財保護のより一層のご理解の一助となり、学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

最後に調査を委託された九州大学をはじめとする関係各機関と地元の方々に厚くお礼を申し上げます。

平成31年3月25日

福岡市教育委員会
教育長　星子　明夫

例　言

1　本書は九州大学統合移転事業に伴い、福岡市教育委員会が九州大学の委託を受けて福岡市教育委員会が実施した元岡・桑原遺跡群第52・54次調査の報告書及び第42次調査の分析報告である。このうち第52次調査は、福岡市埋蔵文化財調査報告第1354集「元岡・桑原遺跡群29」に、第54次調査は、同1173集「元岡・桑原遺跡群20」で既報である。

2　本書に掲載した遺構図の作成者は次のとおりである。
第52次調査：吉留秀敏（調査担当者）
第54次調査：池田祐司（調査担当者）

3　本書に掲載した遺物の実測図の作成者は次のとおりである。
第52次調査：吉留・米倉秀紀・小林義彦・大庭友子・井上加代子・山崎賀代子
第54次調査：萩原博文、山口譲治、山口朱美（石器）、池田（木器）

4　本書に掲載した図の整図者は次のとおりである。
第52次調査：小林・米倉・井上加代子
第54次調査：萩原・池田

5　本書に掲載した写真の撮影者は次のとおりである。
第52次調査：吉留・米倉
第54次調査：池田

6　図番号・図版番号等は調査ごとの通し番号とした。

7　掲載した遺物の番号は、調査ごとの通し番号とし、挿図と図版の番号を一致させた。

8　本書の編集は池田・常松の助言を得て米倉が行った。

10　本書の執筆はⅠを大塚紀宜、Ⅱ（第52次調査）を米倉・小林・古環境研究所、Ⅲ（第54次調査）のうち2（1）、（2）、3を萩原が、そのほかを池田、付編を新美倫子氏（名古屋大学博物館）・比佐陽一郎（福岡市埋蔵文化財センター）が行った。第54次調査の木器について、山口譲治から教示を得た。

11　本調査で出土した遺物および調査の記録類は福岡市埋蔵文化財センターに収蔵し、活用される。

本　文　目　次

Ⅰ　はじめに …… 7
1　元岡・桑原遺跡群の調査経過 …… 7
2　元岡・桑原遺跡群の位置と環境 …… 8
3　調査組織 …… 12
Ⅱ　第52次調査の報告－2（Ⅰ区）
1　はじめに …… 15
2　ＳＤ０１・ＳＤ０１関連遺構及び同出土遺物 …… 18
3　元岡・桑原遺跡群遺跡第52次調査における自然科学分析 …… 66
4　おわりに …… 89

Ⅲ　第54次調査の報告－2 …… 97
1　第54次調査の概要 …… 97
2　黒曜石石刃等集中部ＳＸ００５ …… 97
（1）ＳＸ００５出土石器 …… 98
（2）ＳＸ００５における石器分布状況 …… 103
3　第54次調査出土石器 …… 104
4　第54次調査出土木器 …… 109
5　おわりに …… 112

付）元岡・桑原遺跡群42次調査出土の動物遺体と骨角製品
新見倫子（名古屋大学博物館） …… 117
付）元岡・桑原遺跡群出土玉類の保存科学的調査
比佐陽一郎（埋蔵文化財センター） …… 125

挿　図　目　次

Ⅰ　はじめに

第１図　元岡・桑原遺跡群と周辺遺跡 …… 8
第２図　元岡・桑原遺跡群調査地点位置図 …… 10

Ⅱ　第52次調査の報告－２

第１図　元岡・桑原遺跡群第52次調査区位置図 …… 15
第２図　元岡・桑原遺跡群　第42次・52次調査区遺構配置図 …… 16
第３図　第52次調査区（Ｚ～Ｅ9区）土層断面図 …… 17
第４図　ＳＤ０１出土土器実測図１ …… 19
第５図　ＳＤ０１出土土器実測図２ …… 20
第６図　ＳＤ０１出土土器実測図３ …… 21
第７図　ＳＤ０１出土土器実測図４ …… 22
第８図　ＳＤ０１出土土器実測図５ …… 23
第９図　ＳＤ０１出土土器実測図６（土器群出土） …… 24
第10図　ＳＤ０１出土土器実測図７及びＳＤ－170・207・507出土土器実測図 …… 25
第11図　ＳＤ０１出土土器実測図８（Ａ－８・９、Ｂ－８区） …… 26
第12図　ＳＤ０１出土土器実測図９（Ａ－10、Ｂ－10区） …… 27
第13図　ＳＤ０１出土土器実測図10（Ｃ－７区） …… 28
第14図　ＳＤ０１出土土器実測図11（Ｃ－７区） …… 29
第15図　ＳＤ０１出土土器実測図12（Ｃ－７区） …… 30
第16図　ＳＤ０１出土土器実測図13（Ｃ－７区） …… 31
第17図　ＳＤ０１出土土器実測図14（Ｃ－７区） …… 32
第18図　ＳＤ０１出土土器実測図15（Ｂ～Ｄ－７区） …… 33
第19図　ＳＤ０１出土土器実測図16（Ｃ－７区） …… 34
第20図　ＳＤ０１出土土器実測図17（Ｃ・Ｄ－７区） …… 35
第21図　ＳＤ０１出土土器実測図18（Ｃ－８区） …… 36
第22図　ＳＤ０１出土土器実測図19（Ｃ－８区） …… 37
第23図　ＳＤ０１出土土器実測図20（Ｃ－８区） …… 38
第24図　ＳＤ０１出土土器実測図21（Ｃ－10区） …… 39
第25図　ＳＤ０１出土土器実測図22（Ｃ－10区） …… 40
第26図　ＳＤ０１出土土器実測図23（Ｃ－10区） …… 41
第27図　ＳＤ０１出土土器実測図24（Ｄ－８区） …… 42
第28図　ＳＤ０１出土土器実測図25（Ｄ－８区） …… 43
第29図　ＳＤ０１出土土器実測図26（Ｄ－８区） …… 44
第30図　ＳＤ０１出土土器実測図27（Ｃ－９・11、Ｄ－７・８，Ｅ－７・８区） …… 45

第 31 図　Ⅰ区出土土器実測図 28 ･･･ 46
第 32 図　Ⅰ区出土土製品・石製品・石器実測図 ･････････････････････････････････････ 47
第 33 図　Ⅰ区出土剥片石器・石核実測図 ･･･ 49
第 34 図　Ⅰ区出土礫石器実測図１ ･･･ 50
第 35 図　Ⅰ区出土礫石器実測図２ ･･･ 51

Ⅲ　第 54 次調査の報告－２

第 1 図　第 54 次調査全体図下面 ･･･ 97
第 2 図　12 トレンチおよびＳＸ００５土層図 ･････････････････････････････････････ 97
第 3 図　ＳＸ００５における石器分布状況 ･･･ 99
第 4 図　ＳＸ００５出土石器１ ･･･ 100
第 5 図　ＳＸ００５出土石器２ ･･･ 101
第 6 図　ＳＸ００５出土石器３ ･･･ 102
第 7 図　第 54 次調査出土石器１ ･･･ 105
第 8 図　第 54 次調査出土石器２ ･･･ 107
第 9 図　第 54 次調査出土石器３ ･･･ 108
第 10 図　第 54 次調査出土木器１ ･･･ 110
第 11 図　第 54 次調査出土木器２ ･･･ 111

付　第 42 次調査分析報告

第 1 図　元岡・桑原遺跡群 42 次調査出土の骨角製品（1/2） ･････････････････････････ 120
第 2 図　元岡・桑原遺跡群 42 次調査区イノシシ類下顎骨出土地点 ･････････････････････ 121
第 3 図　土器群 104 イノシシ類下顎骨出土状況 ･････････････････････････････････････ 121

図　版　目　次

Ⅱ　第52次調査の報告－２
1　上　第52次調査全景（東より）　下　第52次調査全景（北東より）…… 90
2　上　第52次調査全景（東より）　下　縄文草創期調査区とSD01（東より）…… 91
3　上　ＳＤ０１土層断面　下　遺構面（最上層）下土層断面 …… 92
4　遺物出土状況 …… 93
5　遺物出土状況 …… 94
6　遺物出土状況 …… 95
7　出土石器 …… 96

付　第42次調査分析報告
1　動物遺体１…… 122
2　動物遺体２･骨角製品 …… 123
3　動物遺体３…… 124
4　分析調査を行った玉類 …… 127

表　目　次

Ⅰ　はじめに
表１　元岡・桑原遺跡群調査一覧 …… 12
表２　元岡・桑原遺跡群関係発掘調査報告書一覧 …… 14

Ⅱ　第52次調査の報告－２
表１　出土遺物一覧表 …… 52

Ⅰ　はじめに

１．元岡・桑原遺跡群の調査経過

九州大学の福岡市西区元岡・桑原地区への統合移転が決定したことを受け、福岡市教育委員会は平成７（1995）年に対象地内の踏査を行い、平成８（1996）年にはこの事業を担当する大規模事業等担当課を設置した。造成予定地の詳細な試掘調査は平成８年３月から同年９月までに実施し、あわせて桑原金屎古墳や元岡石ヶ原古墳などの確認調査を実施した。

移転用地は福岡市土地開発公社が全域を先行取得した後に九州大学が再取得することとなったため、造成工事に伴う発掘調査は福岡市教育委員会と福岡市土地開発公社が受託契約を結び、平成８年から平成20（2008）年まで実施された。しかし、造成工事計画が変更となり、未造成のまま九州大学が再取得した地区についても造成工事に先立つ埋蔵文化財の発掘調査が必要となった。その調査範囲は大規模な面積に及ぶことなどから、福岡市教育委員会が発掘調査を行うことで九州大学と協定書を締結した。これに基づき、平成15（2003）年から平成27（2015）年度まで九州大学との受託契約による発掘調査を実施した。

移転用地内の埋蔵文化財包蔵地は、古墳などを除いて「元岡・桑原遺跡群」と総称しており、同遺跡群内では平成27（2015）年度までに66次の調査が実施されている（表１）。

発掘調査は平成27年度に終了し、その後も出土遺物の整理・発掘調査報告書の刊行を継続しており、本年度（平成31年度）をもって発掘調査事業は終了する。この間、発掘調査は66次、発行された報告書は31冊に及ぶ。

なお、九州大学の移転事業は、平成30年度の末を持って一応完結し、平成30年度には移転元である箱崎地区の発掘調査が開始された。

元岡・桑原遺跡群第42・52次調査区

２．元岡・桑原遺跡群の位置と環境

（1）地理的環境

元岡・桑原遺跡群は、福岡市西区元岡・桑原地区に所在し、玄界灘に突出する糸島半島の東側基部の丘陵地帯に位置する。丘陵には、小河川により樹枝状に浸食された狭い谷が無数に入り込む。現在の糸島半島はその全面で九州本島と繋がっているが、縄文海進以降、中世のある時期までは中央の一部が陸橋状に繋がっていた以外は、東と西にそれぞれ大きく海が湾入していたと考えられる。この東西の湾入部が干拓によって江戸時代に埋め立てられ、現在のような地形をなすに至っている。元岡・桑原遺跡群は、その東側の湾（古今津湾）の奥部北側に位置する（第１図）。

糸島半島の地質は、大きく３つに分類でき、北側の北崎トーナル岩、「野北－今津帯」と言われる三郡変成岩、糸島花崗閃緑岩で形成されている。元岡・桑原遺跡群が立地する元岡丘陵は、北東端が三郡変成岩帯に含まれるが、大部分は糸島花崗閃緑岩帯に含まれている。糸島花崗閃緑岩は斜長石、カ

第１図　元岡・桑原遺跡群と周辺の遺跡

1 元岡・桑原遺跡群　2 大原Ｄ遺跡　3 桑原飛櫛貝塚　4 元岡瓜尾貝塚　5 志登支石墓　6 今山遺跡
7 今宿五郎江遺跡　8 潤地頭給遺跡　9 泊大塚古墳　10 御道具山古墳　11 権現塚古墳　12 稲葉１号墳
13 稲葉２号墳　14 井田原開古墳　15 大原Ａ遺跡　16 八熊製鉄遺跡　17 柑子岳城跡

リ長石、黒雲母、普通角閃石から構成される中～粗粒岩で、白亜紀に形成されたものと考えられている。三郡変成岩帯は、後期古生代からジュラ紀にかけて形成されており、このうち野北－今津帯は3億3千万年～2億8000年前に相当する。

これらの丘陵体から流出した土砂が堆積して、狭い平野を形成している。糸島半島の南側には現在低地が広がっているが、これは古今津湾と古加布里湾が東西から深く入り込み、入海を形成していたものが、瑞梅寺川や雷山川などの南からの河川堆積によって埋まったものである。

（2）元岡・桑原地区の発掘調査における成果

元岡・桑原地区では、旧石器時代の明確な遺跡は発見されていない。しかし3次、20次、26次調査など元岡丘陵の北側から東側を中心にナイフ形石器、剥片尖頭器、細石核が包含層から出土しており、後期旧石器時代の人々がこの地で活動していたことは確実である。

縄文時代には、第3次調査で縄文草創期～早期の遺構・遺物が出土しており、遺構は石組み炉や集石遺構が20基以上確認されており、連結土坑も1基見つかっている。ともに条痕文土器、押型文土器、撚糸文土器などの土器類、石器類も出土している。縄文草創期から早期の遺跡は桑原地区北側に隣接する大原D遺跡でも見つかっており、付近の低丘陵上に集落が点在していたとみられる。

平成4（1992）年度に調査された桑原飛櫛貝塚は縄文中期～後期の貝塚で、アサリやマガキの貝層が厚さ80cmにわたって堆積していた。貝塚中から土壙墓が検出され、うち1基には貝輪装着の女性が被葬されていた。元岡丘陵東麓にある元岡瓜尾貝塚は縄文後期の貝塚で、溜池の岸に貝層が露出している。マガキやシジミなどの貝殻や動物骨、魚骨が出土している。縄文時代当時、糸島半島の南部は入海になっていて漁撈採集活動が盛んだったと考えられ、糸島半島南岸は天神森貝塚や岐志貝塚などとあわせて北部九州での貝塚の集中地区になっている。

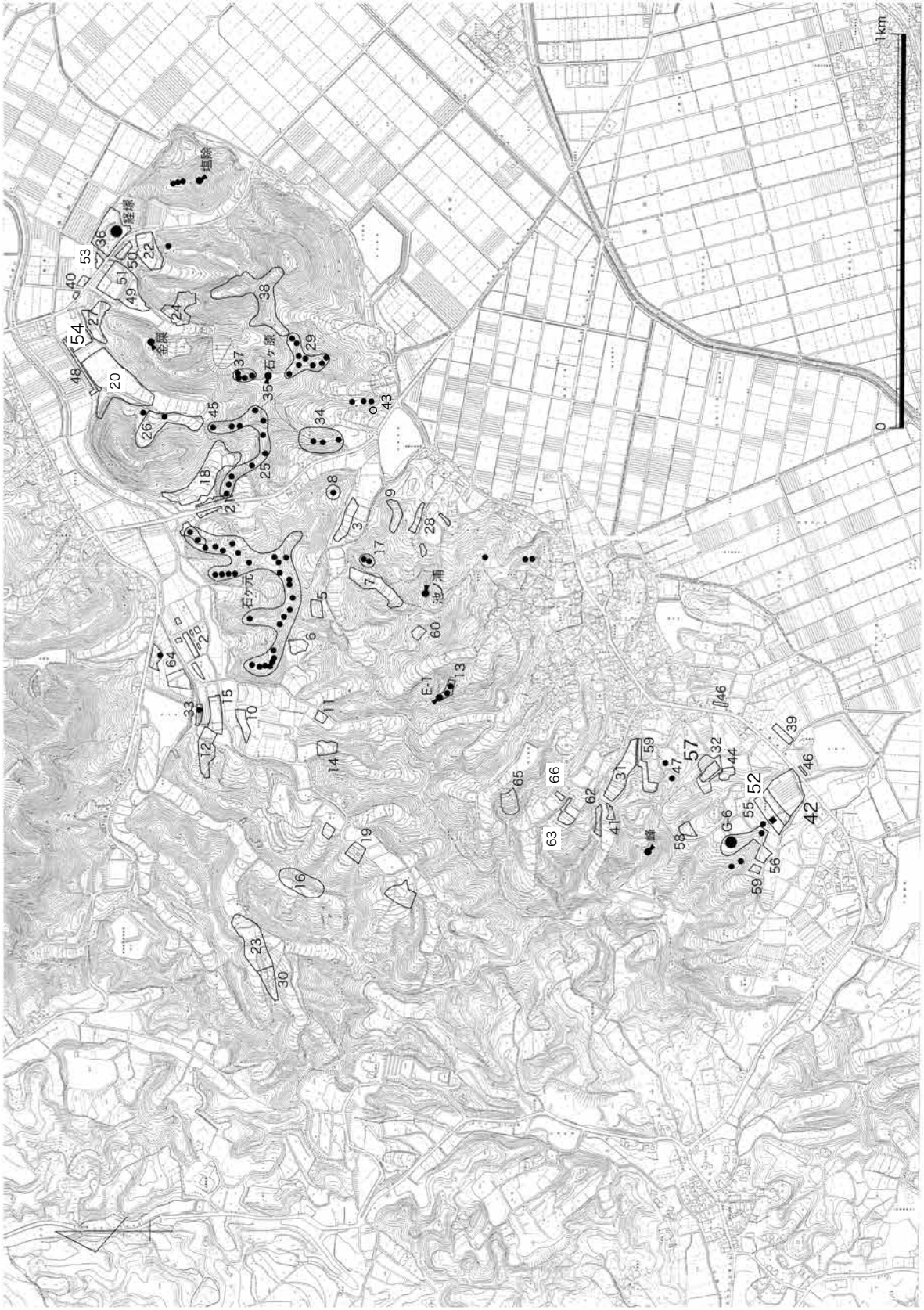
縄文晩期には2次調査で貯蔵穴が1基検出されており、42次調査では晩期中頃の包含層が自然流路最下層で確認されており、丘陵の谷部や裾部で初期水田耕作が行われていた可能性も示唆される。

弥生時代には42次調査で大規模な遺物堆積がみられる。遺物量は6000箱を超え、弥生中期から後期の土器の他、祭祀に使用された木器や小銅鐸、朝鮮半島系土器をはじめとする外来系土器も出土しており、広範囲にわたって活発に活動していたことがうかがえる。

元岡・桑原遺跡群の南側に広がっていた入海（今津古湾）の沿岸には弥生時代を通じて集落や分布しており、弥生前期の志登支石墓、磨製石斧の材料としての玄武岩産地である今山遺跡、弥生後期以降の拠点集落である今宿五郎江遺跡や潤地頭給遺跡など、湾岸一帯で活発な生業が営まれていたことがわかる。42次調査も今津湾岸での生業活動に係わる集落に付随する遺物包含層と考えるべきであろう。

なお、元岡・桑原遺跡群の弥生時代の遺構の特徴として、北部九州の独自の埋葬形態である甕棺墓が全くみられないことが挙げられる。甕棺墓の存在をうかがわせる甕棺破片も出土しないため、もともと甕棺墓が作られなかったものとみられる。一方、甕棺墓の欠落を補うような土壙墓の存在も確認できない。弥生時代の元岡丘陵における墳墓については、その存在も含めて検討すべき課題となっている。

古墳時代には丘陵上に7基の前方後円墳が築かれ、丘陵の南方にも2基の前方後円墳が確認されているが、調査が行われた古墳が少なく、詳しい状況は不明である。調査が実施された前方後円墳では13次調査の金屎古墳があり、前期の古墳で割竹形木棺を主体部とし、2面の鏡が副葬されていた。35次調査の元岡石ヶ原古墳は横穴式石室を持つ後期の古墳であった。糸島半島には元岡・泊地区の前方後円墳群をはじめ、井田原開古墳、権現塚古墳等の前方後円墳があるが、いずれも半島の南側に位置している。このことは当時の集落拠点の分布や支配構造を考える上で着目すべきものであろう。



第２図　元岡・桑原遺跡群調査地点位置図

古墳時代後期になると丘陵の各所に小型の円墳が集中的に築造され、群集墳として形成される。その中で桑原石ヶ元古墳群からは鍛冶に関係する工具が副葬されており、被葬者が鍛冶活動に従事していたことが想定され、桑原地区での鉄器製作が6世紀後半にはすでに行われていたことを物語っている。

奈良時代には元岡・桑原地区は嶋郡に属し、登志、川辺、韓良、明敷、久米、志麻、鶏永の七郷が『和名類聚抄』に記載されている。このうち川辺郷については正倉院文書の「筑前国嶋郡川辺里戸籍」（大宝2年）に記録が残されており、郷戸主肥君猪手以下18名の郷戸主と各戸の成員が記されている。肥君猪手は当時の志摩郡の大領職で、他に元岡・桑原遺跡群出土木簡には当時の氏姓が具体的に記載されている。川辺郷（川辺里）の所在については諸説あるが、桑原地区を川辺里に比定する説もある。

古代に関する発掘調査では、7次、12次、18次、20次、24次の各調査で製鉄炉を主とする製鉄関連遺構が多数検出されている。これらの調査では製鉄の過程で生成された鉄滓が大量に確認されており、総量で80トン以上の鉄滓が廃棄されたことが判明している。

鉄生産に関連する資料は他に、7次調査で出土した「壬辰年韓鐵」木簡や15次調査出土の「祓」に関する木簡等の文字資料もあり、元岡で行われた製鉄事業が公的なものであったことが裏付けられる。周辺では大原Ａ遺跡や大原Ｄ遺跡で8～9世紀の製鉄炉や鍛冶炉が出土し、糸島半島西側の八熊製鉄遺跡でも8世紀の製鉄炉や鍛冶炉、木炭窯などが出土している。今津湾南岸の今宿から飯氏にかけての地区でも製鉄炉や木炭窯が見つかっており、8世紀～9世紀にかけて糸島地区で製鉄、鉄器生産が大々的に行われたとみられる。

また31次調査で平安時代の瓦窯跡が検出され、鴻臚館で使用された瓦の生産が行われたことが確認されている。

中世には、志摩郡に広大な皇室領荘園（法金剛院領怡土庄）が設定され、他に観世音寺領船越庄、安楽寺領板持庄、同桑原庄もあった。桑原地区の18次調査では斜面を造成して集落が形成されていたことが確認されており、寺院荘園領の「別所」と推定されている。このほかに46次調査でも11～15世紀の集落が検出されている。

弘安の役後は恩賞地として大友氏に与えられ、大友氏がこの地を領する淵源となった。柑子岳城は志摩郡代の番城として築かれたものである。戦国期、16世紀前半には一時大内氏が志摩郡を支配した時期もあり、この地を巡って大友、大内の争いが繰り広げられた。58次調査では堀切とみられる大型の溝が検出されているが、丘陵上には『筑前國続風土記拾遺』に記載のある水崎城をはじめとする柑子岳城の枝城が築かれており、38次調査では水崎城に関する堀切等を確認している。58次で確認された溝も中世山城に関する遺構とみられる。天正7（1579）年に柑子岳城が高祖城主原田了栄によって落とされ、以後志摩郡は原田氏の支配下に置かれた。

近世には糸島半島は21村を含む元岡触と26村の御床触に分けられ、元岡・桑原地区は一農村として構成される。36次、63次調査では近世の墓群を確認しており、近世には墓域が集落の山側に作られていたものとされる。

明治22年には元岡・桑原を含む5カ村が合併して糸島郡元岡村が成立し、この元岡村が福岡市に編入されたのは昭和36（1961）年のことである。（大塚紀宜）

３．調査組織

発掘調査

調査主体：福岡市教育委員会

調査担当：埋蔵文化財第２課　　課長　田中壽夫

第 52 次調査（平成 20～22 年度）　常松 幹雄・吉留秀敏

第 54 次調査（平成 20 年度）池田祐司

庶務担当　文化財管理課

平成 30 年度（報告書発行）

経済観光文化局文化財活用部埋蔵文化財課　課長　大庭康時

報告書担当　米倉秀紀・池田祐司・常松幹雄

庶務担当　　文化財活用課

※埋蔵文化財課は、平成 24 年度に教育委員会から経済観光文化局に移管された。

表１　元岡・桑原遺跡群調査一覧

調査番号	遺跡名	原因	調査期間	調査面積	古墳	内容等	報告書（集）
9602	第１次	確認	971201～981031			試掘のみ	743
9656	桑原石ヶ元古墳群	公社	961111～980131	4737		円墳	743
9657	桑原金屎古墳	確認	960820～961129	500		前方後円墳	909
9685	元岡石ヶ原古墳	確認	960827～961129	1280		前方後円墳	909
9656	第２次	公社	961111～970325	3007		古墳時代～古代、溝、土抗、水田	722
9763	第３次	公社	971129～990222	3500	1	縄文時代石組炉、弥生時代住居跡、円墳	829
9764	第４次	公社	971201～980331	1219		古代～中世掘立柱建物、溝	829
9771	元岡古墳群第２次	確認	971110～971128	60			
9811	第５次	公社	980427～980623	2500		古代土抗、包含層	639
9812	第６次	公社	980630～980828	2800		古墳時代包含層	639
9813	第７次	公社	980506～990611	7500		古墳時代～古代住居跡、池状遺構、製鉄路	1012
9829	第８次（元岡古墳群Ｍ群）	公社	980916～981225	300	1	円墳	829
9851	第９次	公社	981102～981210	190		弥生時代住居跡	1172
9854	第 10 次	公社	990106～990225	1336		古代～中世包含層	639
9855	第 11 次	公社	990106～990320	1650		古墳時代～古代土抗、包含層	829
9902	第 12 次	公社	990406～000328	5500		古代製鉄路	860・1063
9903	第 13 次	公社	990412～000316	600	3	前方後円墳、円墳	861
9904	第 14 次	公社	990422～990722	1200		古代包含層	639
9923	第 15 次	公社	990611～990928	3500		古代包含層、中世水田	860
9933	第 16 次	公社	990602～991110	1200		古代包含層	639
9934	第 17 次（元岡古墳群Ｂ群）	公社	990910～991208	517	2	円墳	861
9946	第 18 次	公社	991010～020215	16800	2	古墳時代～古代住居跡、掘立柱建物、池状遺構、製鉄炉、円墳	1063・1102・1172・1246・1302
9947	第 19 次	公社	991016～991215	3000		古代包含層	743
0001	第 20 次	公社	000405～030523	20130		古墳時代住居跡、古代掘立柱建物、製鉄炉	962・1013・1063・1105
0002	第 21 次（石ヶ元古墳群）	公社	000405～000921	3170	3	円墳	861

調査番号	遺跡名	原因	調査期間	調査面積	古墳	内容等	報告書（集）
0033	第 22 次	公社	000410～001025	4750		古代掘立柱建物、製鉄関係遺構	909
0019	第 23 次	公社	000601～010331	8110		確認調査	743
0034	第 24 次	公社	000821～030320	500		古墳時代住居跡、古代製鉄炉	860
0052	第 25 次（元岡古墳群Ａ群）	公社	001124～011130	2200	7	円墳	861
0110	第 26 次	公社	010405～011130	5487	1	古墳時代住居跡、円墳、古代掘立柱建物	963
0153	第 27 次	公社	011201～020820	4495		古墳時代住居跡	909
0154	第 28 次	公社	020201～020704	2200		古代～中世包含層	909
0202	第 29 次（元岡古墳群Ｎ群）	公社	020405～030930	4000	11	円墳	861
0240	第 30 次	公社	020801～020930	2450		古代包含層	743
0242	第 31 次	九大	030401～060113	9000		古代瓦窯、掘立柱建物、鍛冶炉、古墳時代祭祀関連	1103
0257	第 32 次	九大	030120～030331	1700		試掘	
0303	第 33 次	九大	030408～030519	450	1	円墳	1064
0310	第 34 次（元岡古墳群Ｊ群）	公社	030401～030812	1200	3	円墳	909
0340	第 35 次（石ヶ原古墳）	公社	030520～050112	1853	1	前方後円墳	909
0341	第 36 次（経塚古墳）	公社	030901～050331	3500	1	円墳、中近世墓群	1011・1105
0365	第 37 次（元岡古墳群Ｏ群）	九大	031020～040226	461	4	円墳	861
0371	第 38 次（水崎城）	公社	040308～050117	1000		中世山城	1105
0404	第 39 次	民間	040405～040416	88		弥生時代包含層	1064
0410	第 40 次	九大	040407～040430	1000		包含層	1064
0435	第 41 次	九大	040507～041130	900		古代包含層、製鉄関連遺構	1064
0451	第 42 次	九大	041001～090331	7000		縄文時代晩期～古墳時代初頭自然流路	1174・1246・1275・1276
0486	第 43 次	公社	050207～050308	500		古墳墓道	1173
0523	第 44 次	九大	050601～051020	1189		古墳～古代集落	1064
0535	第 45 次（桑原古墳群Ａ群）	公社	050720～051122	1128	3	円墳	1105
0538	第 46 次	福岡市土木局	050808～051011	403	1	弥生～中世集落	965
0562	第 47 次（元岡Ｉ－１号墳）	九大	060105～060310	107		円墳	1064
0563	第 48 次	公社	060110～060223	447		弥生～古代集落	1173
0611	第 49 次	公社	060403～070322	4000		古墳時代～古代集落	1173・1356
0709	第 50 次	公社	070401～070827	811		近世末～近代墓地	1173・1356
0741	第 51 次	公社	070829～081003	6888		古墳時代～古代集落	1173
0763	第 52 次	九大	080121～100331	3000		弥生～古墳時代初頭自然流路	
0768	第 53 次	九大	080215～080409	770		古代集落	1328
0844	第 54 次	公社	081006～090109	1872		古代集落	1173・1380
1001	第 55 次	九大	100401～110330	3300	2	大型方墳	1381
1043	第 56 次	九大	110411～111228	6970	2	大型円墳、中世集落	1210
1103	第 57 次	九大	110413～130906	6700		古墳時代包含層、古代～中世集落	1328・1356
1110	第 58 次	九大	110620～130315	1152		縄文時代早期集落、古代包含層	1301
1140	第 59 次	九大	120123～130315	2298		古墳時代～中世集落	1246
1306	第 60 次	九大	135022～130829	271		古墳～古代包含層	1302
1315	第 61 次	九大	130701～131023	407		古代包含層	1275
1327	第 62 次	九大	130901～131115	1374		中世集落	1356
1328	第 63 次	九大	131001～140423	1244		古代～中世集落	1328
1331	第 64 次	九大	131110～140430	2900	1	弥生集落、円墳、中世集落	1302
1413	第 65 次	九大	140501～141226	2451		弥生～古代包含層	1356
1525	第 66 次	九大	150929～151008	167		中世～近世包含層	1328

表 2　元岡・桑原遺跡群関係発掘調査報告書一覧

書名	調査次数	集数	発行年
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報 1		福岡市埋蔵文化財調査報告書第 693 集	2001
九州大学統合移転用地内埋蔵文化財発掘調査概報 2		福岡市埋蔵文化財調査報告書第 743 集	2003
元岡・桑原遺跡群 1	第 2 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 722 集	2002
元岡・桑原遺跡群 2	桑原石ヶ元古墳群	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 744 集	2003
元岡・桑原遺跡群 3	第 3 次・4 次・8 次・11 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 829 集	2004
元岡・桑原遺跡群 4	第 12 次-1・15 次・24 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 860 集	2005
元岡・桑原遺跡群 5	第 13 次・17 次・25 次・29 次・37 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 861 集	2005
元岡・桑原遺跡群 6	第 22 次・27 次・28 次・34 次・金屎古墳・石ヶ原古墳	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 909 集	2006
元岡・桑原遺跡群 7	第 21 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 910 集	2006
元岡・桑原遺跡群 8	第 20 次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 962 集	2007
元岡・桑原遺跡群 9	第 26 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 963 集	2007
元岡・桑原遺跡群 10	第 46 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 964 集	2007
元岡・桑原遺跡群 11	第 23 次・30 次・36 次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1011 集	2008
元岡・桑原遺跡群 12	第 7 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1012 集	2008
元岡・桑原遺跡群 13	第 20 次-2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1013 集	2008
元岡・桑原遺跡群 14	第 12 次-2・18 次-1・20 次-3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1063 集	2009
元岡・桑原遺跡群 15	第 33 次・40 次・41 次・44 次・47 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1064 集	2009
元岡・桑原遺跡群 16	第 18 次-2	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1102 集	2010
元岡・桑原遺跡群 17	第 31 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1103 集	2010
元岡・桑原遺跡群 18	第 20 次-4・36 次-2・38 次・45 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1105 集	2011
元岡・桑原遺跡群 19	第 9 次・18 次-3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1172 集	2012
元岡・桑原遺跡群 20	第 43 次・48 次・49 次-1・50 次・51 次-1・54-1 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1173 集	2012
元岡・桑原遺跡群 21	第 42 次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1174 集	2012
元岡・桑原遺跡群 22	第 56 次-1 (G-3・G-6 号墳)	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1210 集	2013
元岡・桑原遺跡群 23	第 18 次-4、42 次-2、59 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1246 集	2014
元岡・桑原遺跡群 24	第 42 次-3、61 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1275 集	2015
元岡・桑原遺跡群 25	第 42 次-4	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1276 集	2015
元岡・桑原遺跡群 26	第 58 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1301 集	2016
元岡・桑原遺跡群 27	第 18 次-5、60 次・64 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1302 集	2016
元岡・桑原遺跡群 28	第 20 次-5、42 次-5、53 次、57 次-1、63 次、66 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1328 集	2017
元岡・桑原遺跡群 29	第 42 次-6、52 次-1	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1354 集	2018
元岡・桑原遺跡群 30	第 56 次-2 (G-6 号墳)	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1355 集	2018
元岡・桑原遺跡群 31	第 49 次-2、51 次-2、57 次-2、62 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1356 集	2018
元岡・桑原遺跡群 32	第 52 次-2、54 次-2　付 42 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1380 集	2019
元岡・桑原遺跡群 33	第 55 次、56 次-3	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1381 集	2019
元岡・桑原遺跡群 34	調査総括編	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 1385 集	2019
桑原遺跡群 1　第 1 次発掘調査報告	第 1 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 432 集	1995
桑原遺跡群 2 飛櫛貝塚第 1 次調査	桑原飛櫛貝塚第 1 次	福岡市埋蔵文化財調査報告書第 480 集	1996

Ⅱ　第 52 次調査－２（Ⅰ区）

１．はじめに

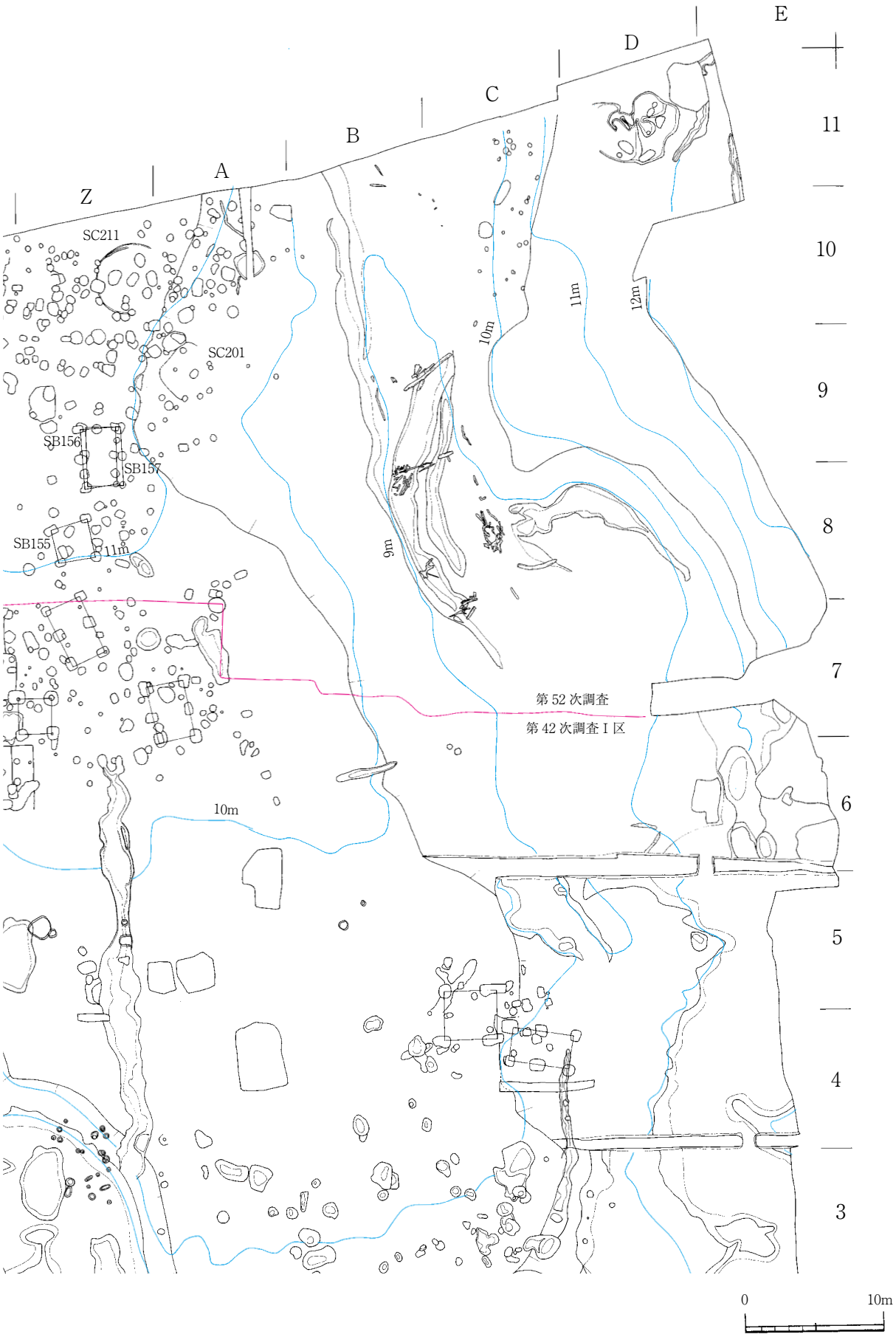
第 52 次調査は、平成 20 年 1 月 21 日～平成 21 年 6 月 30 日に、東半（Ⅰ区）を吉留秀敏、西半（Ⅱ区）を吉留・常松幹雄が調査を行った。Ⅱ区については、平成 30 年 3 月に常松が調査報告書を刊行（福岡市埋蔵文化財調査報告書 1354 集「元岡・桑原遺跡群 29」）が、Ⅰ区については、調査担当者である吉留が、平成 25 年 3 月に逝去したため、第 52 次調査の南隣接地（第 42 次調査）を調査した米倉秀紀が制作することとした。

第 52 次調査区は、南東側に隣接する第 42 次調査区と同様、幅約 100ｍの小さな沖積平地上にある。平地の両側には低い尾根・低台地がある。この沖積平地は、最上層が白色シルト層から成り、縄文時代後期～晩期に形成されたと考えられるが、晩期には東西両方の尾根際に幅 30ｍの自然流路が流れる。この流路（東側：ＳＤ０１、西側：ＳＤ０２）この２本の流路内からは、弥生時代中期から古墳時代初頭前後の遺物が、あわせて１万箱近く出土した。また両流路の間の平地部分には、掘立柱建物や竪穴住居などの遺構群がある。

第 52 次調査地区も 42 次調査区とほぼ同様の立地で、ＳＤ０１・０２や両流路間の遺構も、42 次調査と同様に展開している。両溝から出土する遺物の時期もほぼ同様であるが、遺物総量は 42 次調査区に比べてずいぶん少ないが、それでも約 3000 箱の遺物が出土した。

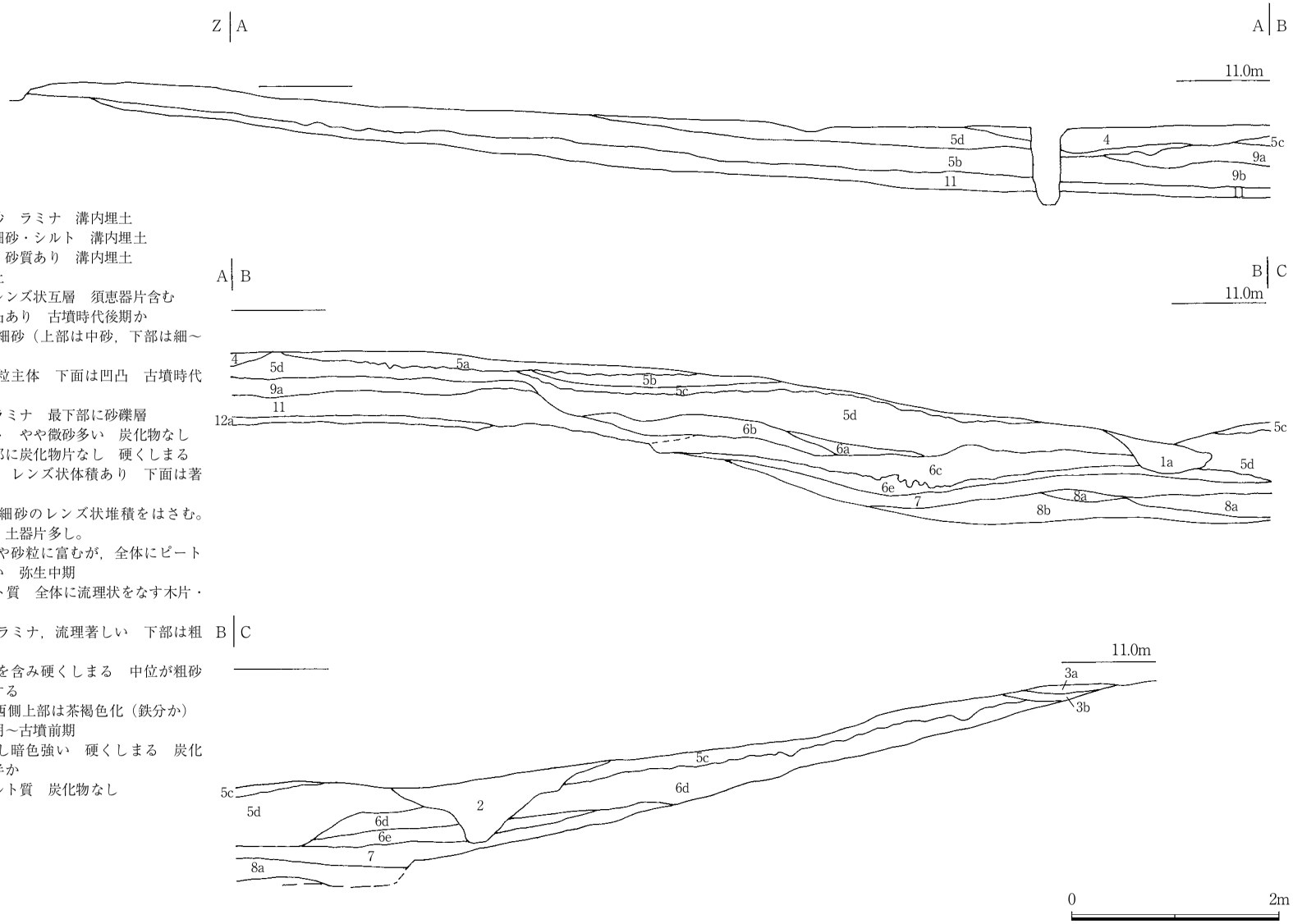
調査区最北端の、南西向き緩斜面上では、縄文時代草創期の遺物包含層があった。遺構は検出されなかったが、多量の石器と少量の土器片がユニット状に出土した。石器には大型の異形石鏃を含み、

第１図　元岡・桑原遺跡群第 52 次調査区位置図



第２図　元岡・桑原遺跡群　第 42 次・52 次調査区遺構配置図（1/400）

1　黄灰～青灰色粗・細砂　ラミナ　溝内埋土
2　暗褐色～青灰色粗～細砂・シルト　溝内埋土
3a　黒褐色土　硬くなる　砂質あり　溝内埋土
3b　青灰色中砂　溝内埋土
4　暗灰色粗砂～細砂　レンズ状互層　須恵器片含む
5a　黒褐色土壌　下面凹凸あり　古墳時代後期か
5b　黒灰～灰白色，中～細砂（上部は中砂，下部は細～微砂）下面フラット
5c　黒褐色土壌　細～微粒主体　下面は凹凸　古墳時代前期か
5d　暗灰色細砂～粗砂　ラミナ　最下部に砂礫層
6a　暗灰色～灰褐色シルト　やや微砂多い　炭化物なし
6b　黒褐色粘質土　上半部に炭化物片なし　硬くしまる
6c　暗褐色粗砂～シルト　レンズ状体積あり　下面は著しい凹凸
6e　暗青灰色粘土　中～細砂のレンズ状堆積をはさむ。下面に粗砂部分あり。土器片多し。
7　黒褐色有機質土　やや砂粒に富むが，全体にピート質　木片・炭化物多い　弥生中期
8a　暗灰褐色細砂～シルト質　全体に流理状をなす木片・植物片を多く含む
8b　暗灰色細砂～粗砂　ラミナ，流理著しい　下部は粗砂　上部は細砂
9a　灰褐色砂質土，粗砂を含み硬くしまる　中位が粗砂に富み，上下に漸移する
9b　暗褐色～茶褐色土　西側上部は茶褐色化（鉄分か）硬くしまる　弥生後期～古墳前期
10　暗褐色土　上位に対し暗色強い　硬くしまる　炭化物含む　弥生中期後半か
11　暗青灰色土　ややシルト質　炭化物なし



第3図　第52次調査区（Z～E9区）土層断面図（1/60）

土器には微隆起線文土器があった。この地点については、上記 1354 集に報告済である。

今回報告を行うのは、第 52 次調査区の東半部であるＩ区について報告を行う。Ｉ区のほとんどは第 42 次調査区から続く自然流路ＳＤ０１の中に含まれる。ＳＤ０１の西側にある竪穴住居等の遺構群については、前記報告書で記載済である。ＳＤ０１の遺構についての記載は、第 42 次調査と大きく変わるところがなく、土層断面等の報告のみとした。

出土した遺物は土器・石器・木製品等があり、木製品については前記報告書に記載済である。出土土器については、本来は出土グリッド・層位等により分別したうえで掲載するべきであるが、遺構図面や土器に記載の出土層位等の分析が間に合わず、グリッド別のみの掲載とした。なお、出土場所・層位を記載したラベルの内容を一覧表に記載した。土器の詳細な説明文章については紙数等の見解で割愛し、一覧表に替えた。石器については剥片石器の一部について図化を行ったが、石斧・石錘等の礫石器については、時間不足で実測まで至らず、数量記載と写真掲載のみとなった。また本書では、第 52 次調査で実施した各種化学分析についても掲載した。

２．ＳＤ０１・ＳＤ０１関連遺構及び同出土遺物

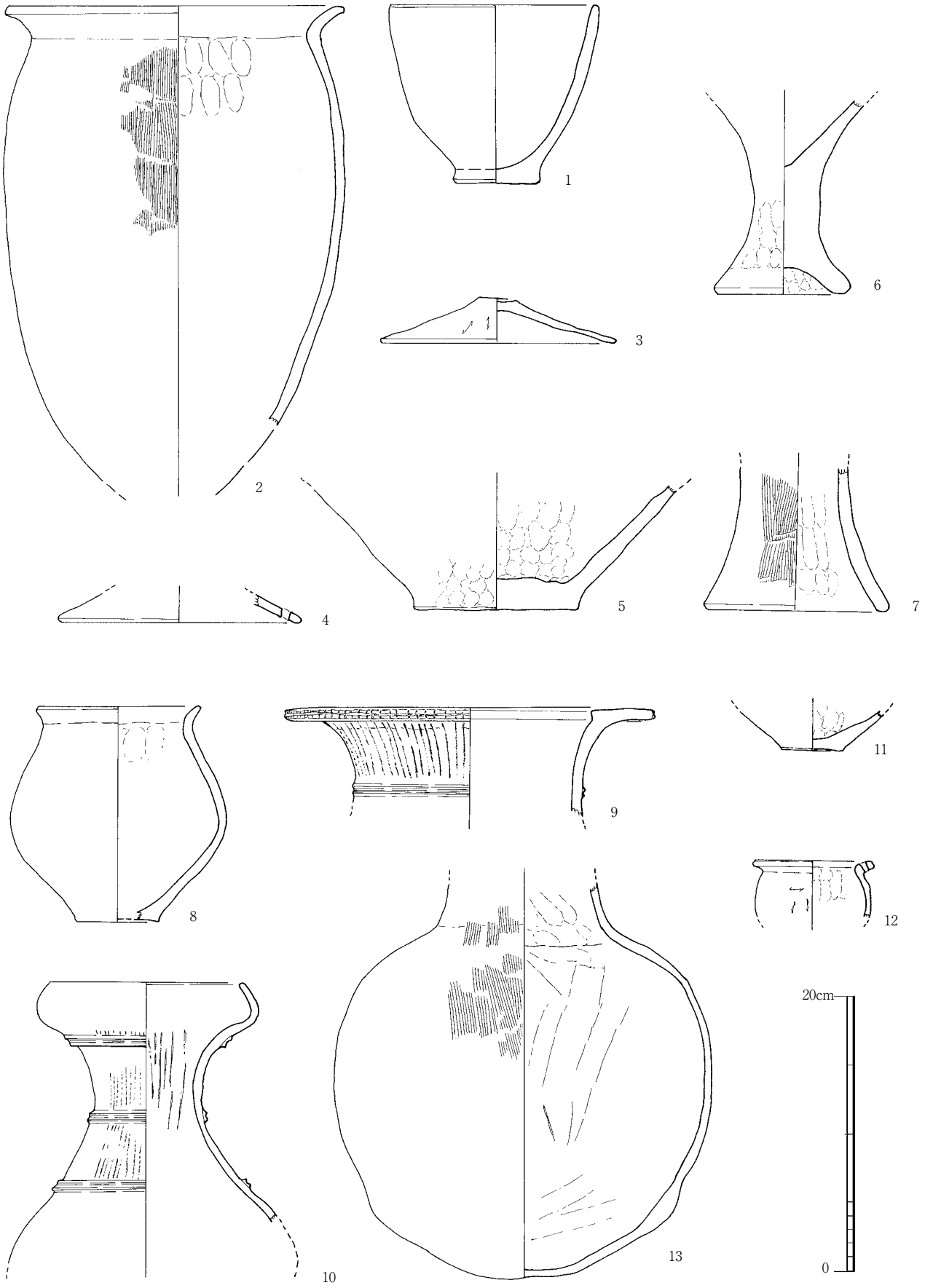
ＳＤ０１は、２つの丘陵間を流れる自然流路で、上流は調査区外へ伸び、下流は第 42 次調査へ続き、42 次調査区内で大きく曲がっている。第 42 次調査区の直線部分では幅 20m に満たないが、当調査区内ではやや弧を描き、幅 35m を超える部分がある。深さは 1～2m を測る。第 42 次調査では、弥生時代中期から古墳時代初頭にかけて層をなすようにびっしりと遺物が累々と堆積している部分があり、同調査区内のＳＤ０１から出土した土器は 4000 箱前後に及んでいる。

第 42 次調査では、縄文時代晩期に開削し、弥生時代中期中葉から土器の大量投棄が始まった。この時期に大型柱を有する建物 2 棟が建築され、赤彩の完形土器群を置いていた。その後、時期により、遺物量の多寡はあるものの、古墳時代初頭頃まで、大量投棄が継続している。

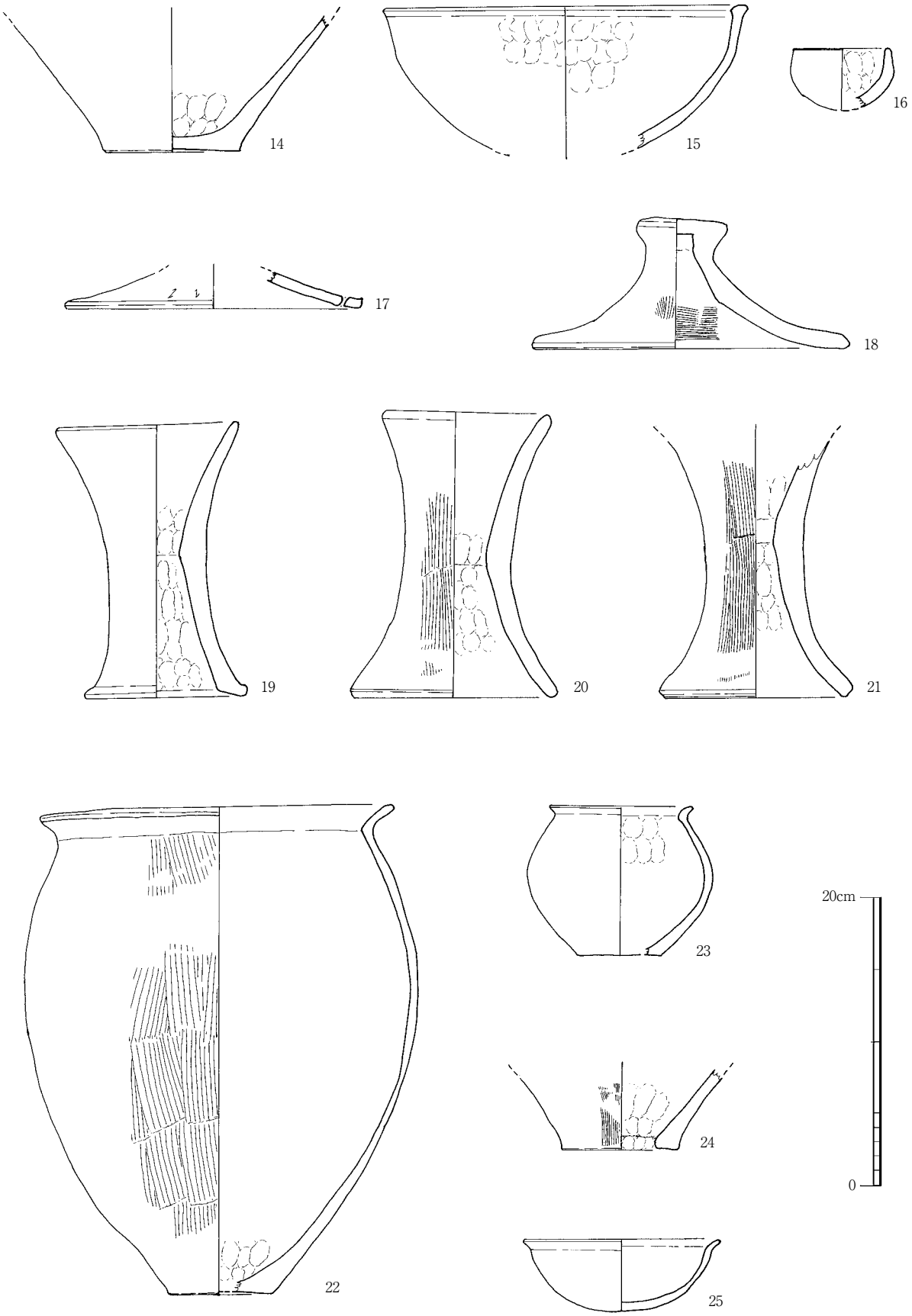
遺物の投棄とともに、たびたび祭祀が行われているが、時期によって祭祀のあり方が異なっている。弥生時代中期は赤彩土器群、弥生時代後期になると金属器や玉類、古墳時代初頭は小型土器群などによる祭祀の傾向が強い。

当調査区でも出土遺物の時期など基本的な傾向は変わらないが、当調査区のＳＤ０１から出土した遺物の総量は第 42 次調査区よりかなり少ない。また祭祀的な遺物はほとんど確認できない。

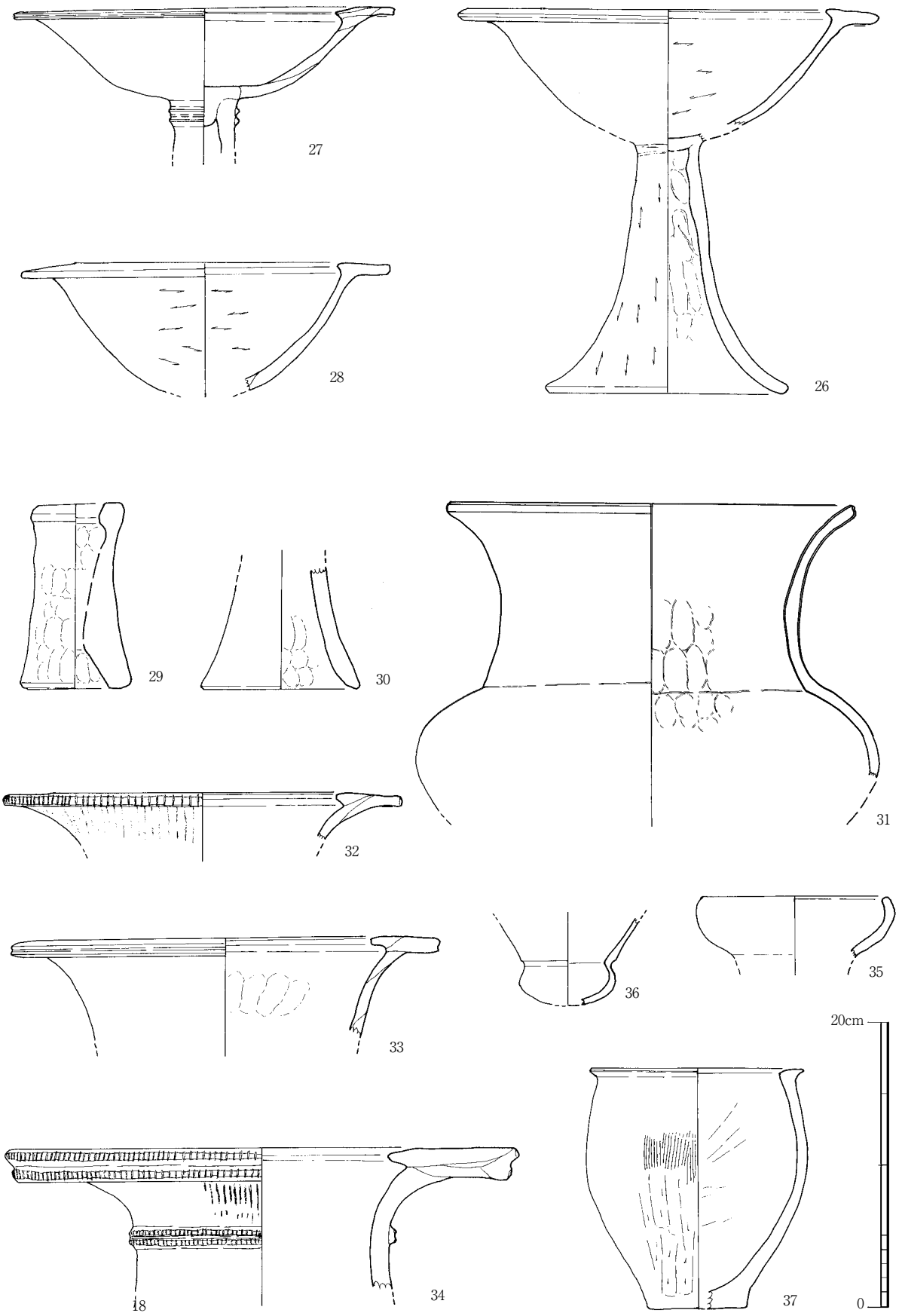
出土した遺物は、弥生時代～古墳時代初頭を中心とする土器・石器・木製品である。これらの遺物は各層から各時代のものが出土している。またまとまって出土した部分があり、土器群の名称を付している。本稿でこれらの出土遺物を層ごとに、あるいは土器群ごとに報告・検討するべきであるが、残された原図や記録から層と出土遺物の関係や土器群の位置関係を明確化するのは困難であった。出土遺物のうち、木製品には前記報告書にすでに記載済みである。本書では、その他の遺物について記載するが、土器については比較的多くを掲載することができたが、それでも実測できなかった土器は相当量ある。さらに遺構や層と対比した分類や記載・検討が行なえなかった。土器のうち、縄文土器は実測まで至らなかった。第 42 次調査では縄文時代晩期の包含層があり、同期の遺物が出土したが、第 52 次調査では晩期の遺物に加え、後期初頭の滑石入り土器が出土しているのが目を引く。石器については出土石器の一部しか掲載できなかった。実測図を掲載した以外にも、石斧・石錘・砥石・磨石など多くが出土した。なお、本報告書作成に掲載した遺物について、紙数等の関係で遺物の記載は簡略化し、一覧表での記載とした。



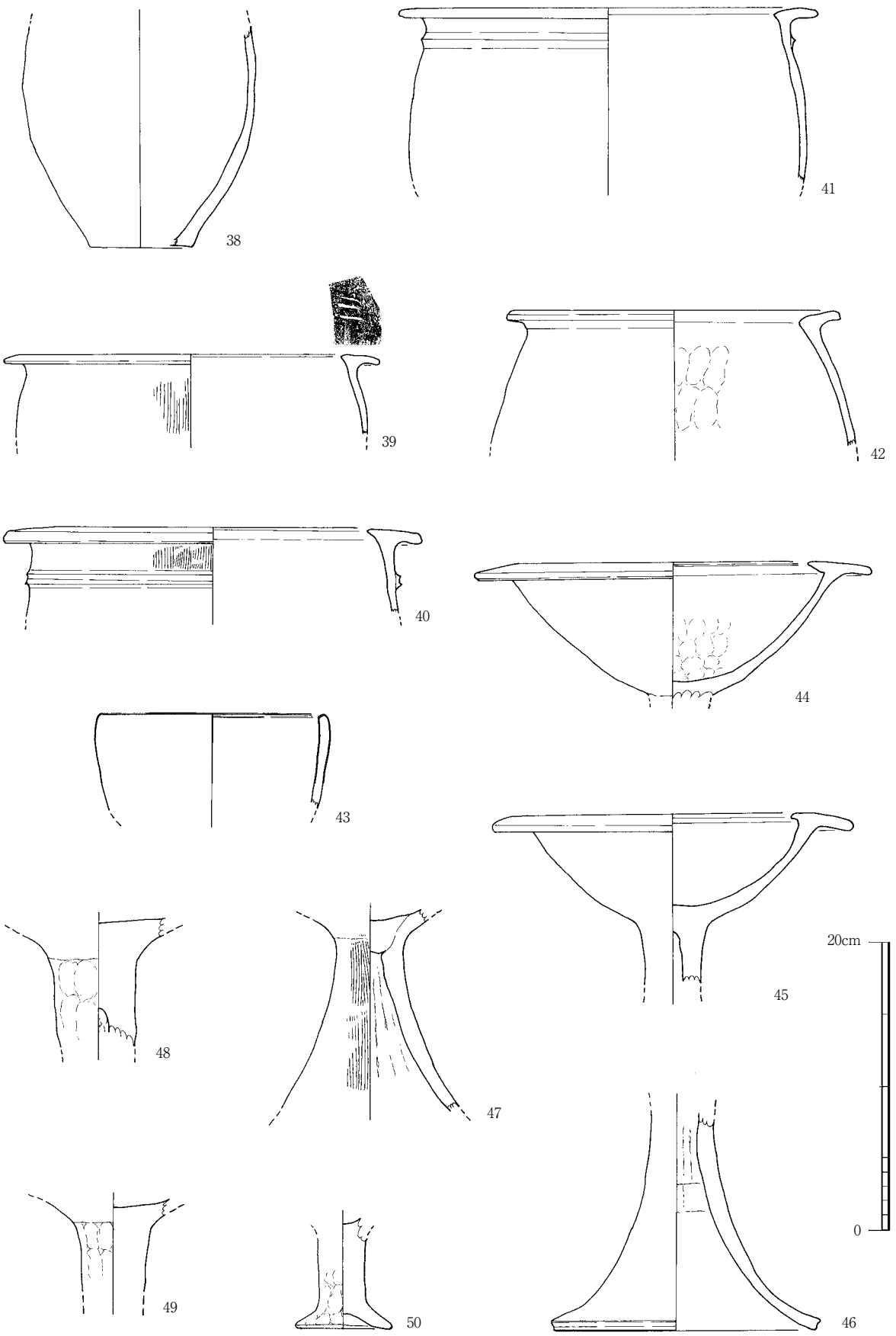
第４図　ＳＤ０１出土土器実測図１（1/4）



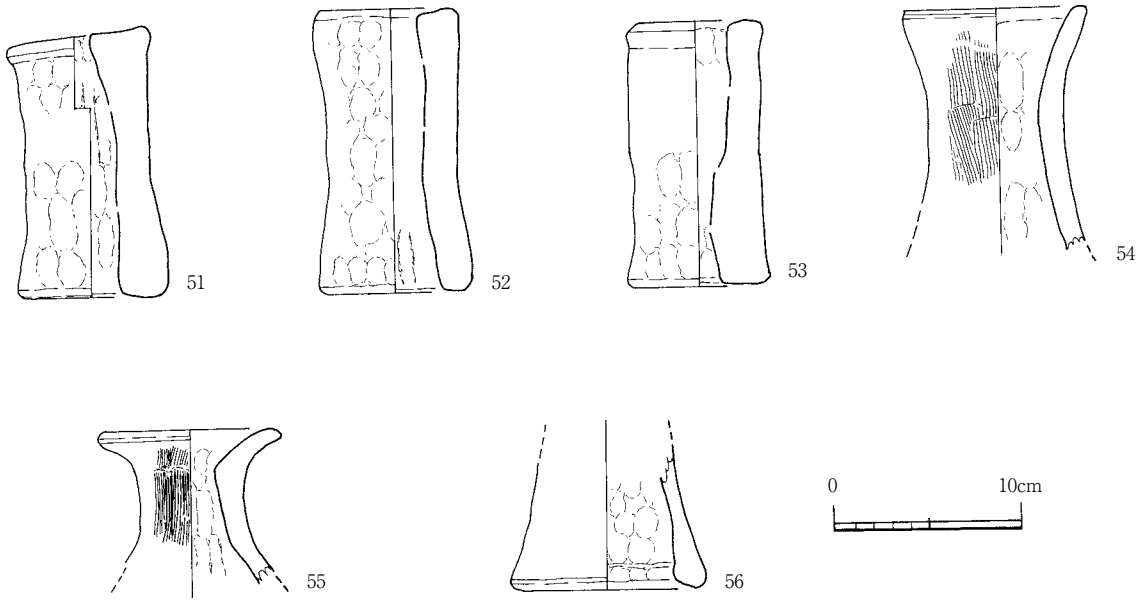
第５図　ＳＤ０１出土土器実測図２（1/4）



第６図　ＳＤ０１出土土器実測図３（1/4）



第７図　ＳＤ０１出土土器実測図４（1/4）

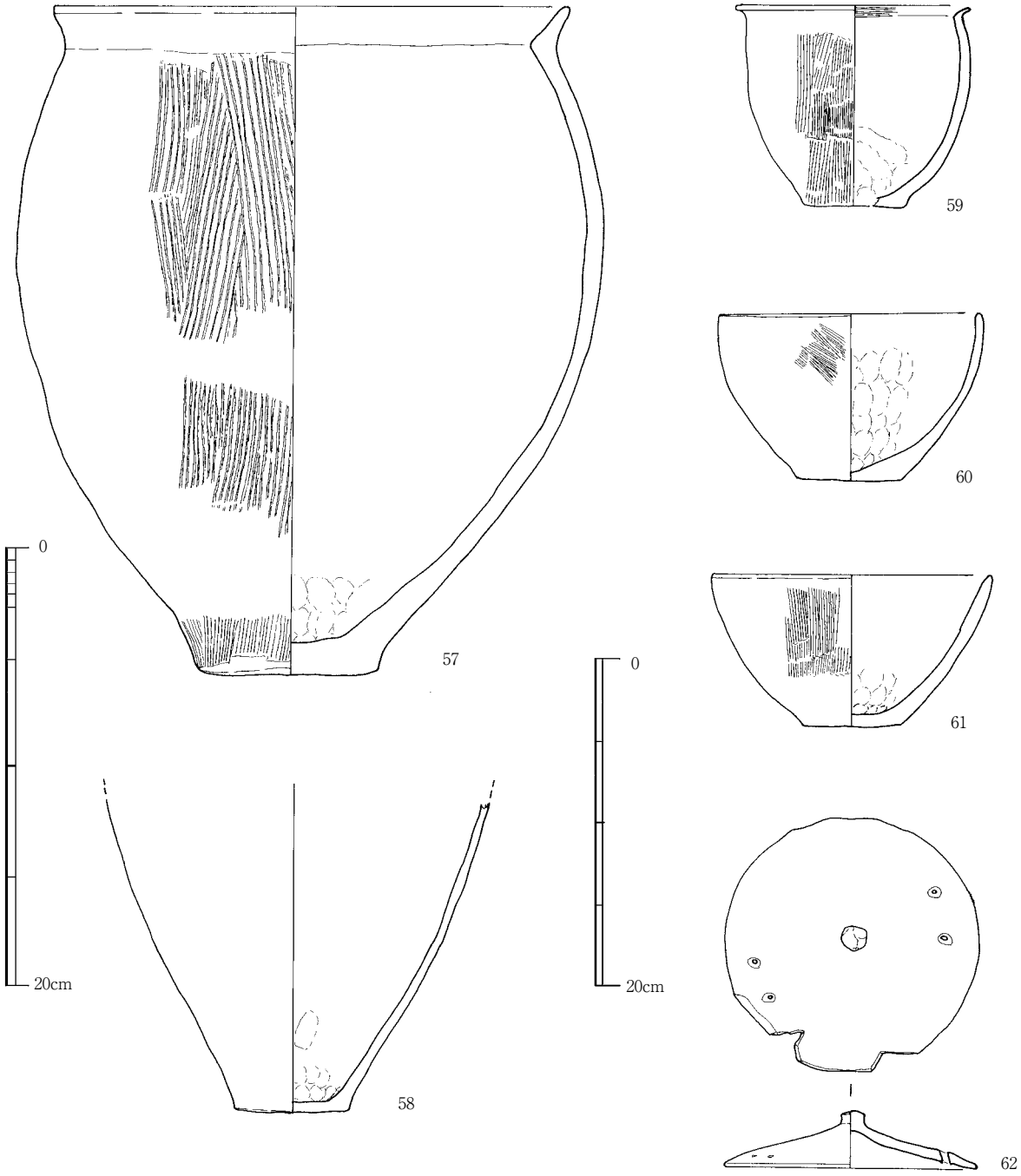


第８図　ＳＤ０１出土土器実測図５（1/4）

出土遺物（第4～35図）

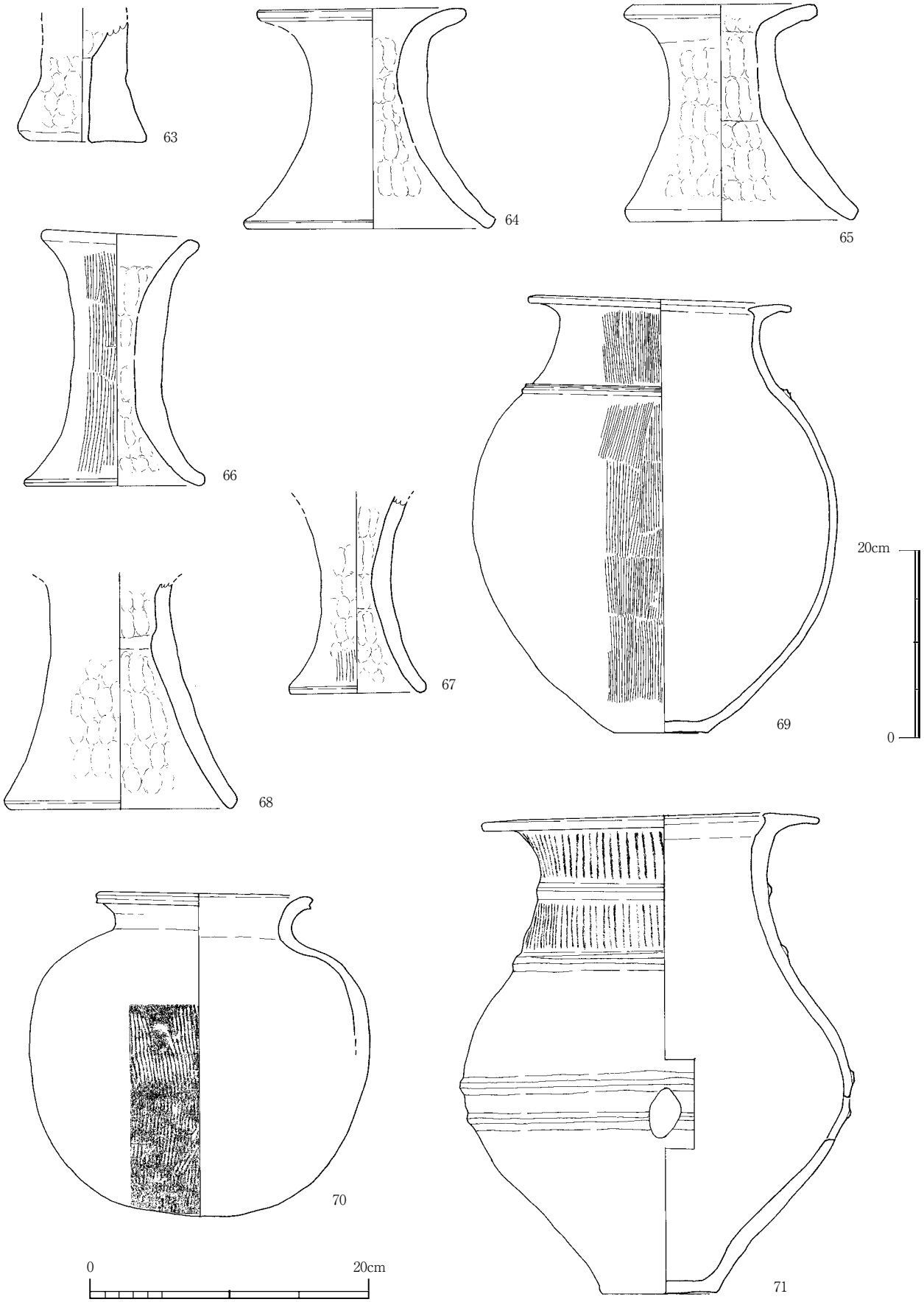
遺物は、本調査区を南北流する溝ＳＤ－０１内およびその流路埋没後の埋土上からの出土したものがほとんどで、若干の遺構面等から出土したものと、中世以降の水田面等から出土した遺物がある。本来なら、層ごとに分類するべきであるが、残された図面や出土遺物のラベル等からは、詳細にわからなかったため、おおむねグリッド毎に分けて壷～甕の順で版組みして作成した。ところが、注記や出土位置を記したラベル等の混乱があり、筆者の誤解も重なって、校正段階になって、記載したグリッド等が異なっていたものが多数あった。そのため、結果的には、同じグリッドから出土した遺物が別の図に分かれて記載してしまうなど、不都合が生じてしまった。遺物のデータ・調整等については、P52からの一覧表にまとめたので、参照いただきたい。以下、本ページ・P23･24･27･34･38に、主な出土について簡単に記述する。

3は口径17.3cmを測る丹塗の無頸壺蓋で、外面は幅が3～5mmのヘラ先工具で放射状に研磨している。8は口径11.8cm　器高15.6cmの壺である。口縁部は「く」字状に短く外反し、胴部は肩の張りが緩い。9は口径が27cmの丹塗の鋤先口縁壺で、外唇にはヘラ工具による線刻がある。頸部下半には1条のＭ字凸帯が巡り、その間には暗文を施文している。10は口径が14cmの丹塗袋状口縁壺。口縁部下と頸部中位および胴部との境の3か所に各1条のＭ字凸帯が巡り、凸帯間には暗文を施文している。12は口径が9cmの丹塗無頸壺で、口唇部には蓋との結紐孔があり、内面上半にも丹塗り痕が残る。13は球形の胴部から頸部は内傾して立ち上がる。外面は粗いハケ目、内面はやや粗いケズリ。15は鉢。口径25.2cmで半球形の体部から直口する口縁部は小さく外方に摘み出す。22は口径が23.8～24.4cm、器高が33.9cmの「く」字口縁の甕で胴部は倒卵形をなす。外面は粗いハケ目、内面は押圧ナデを施している。

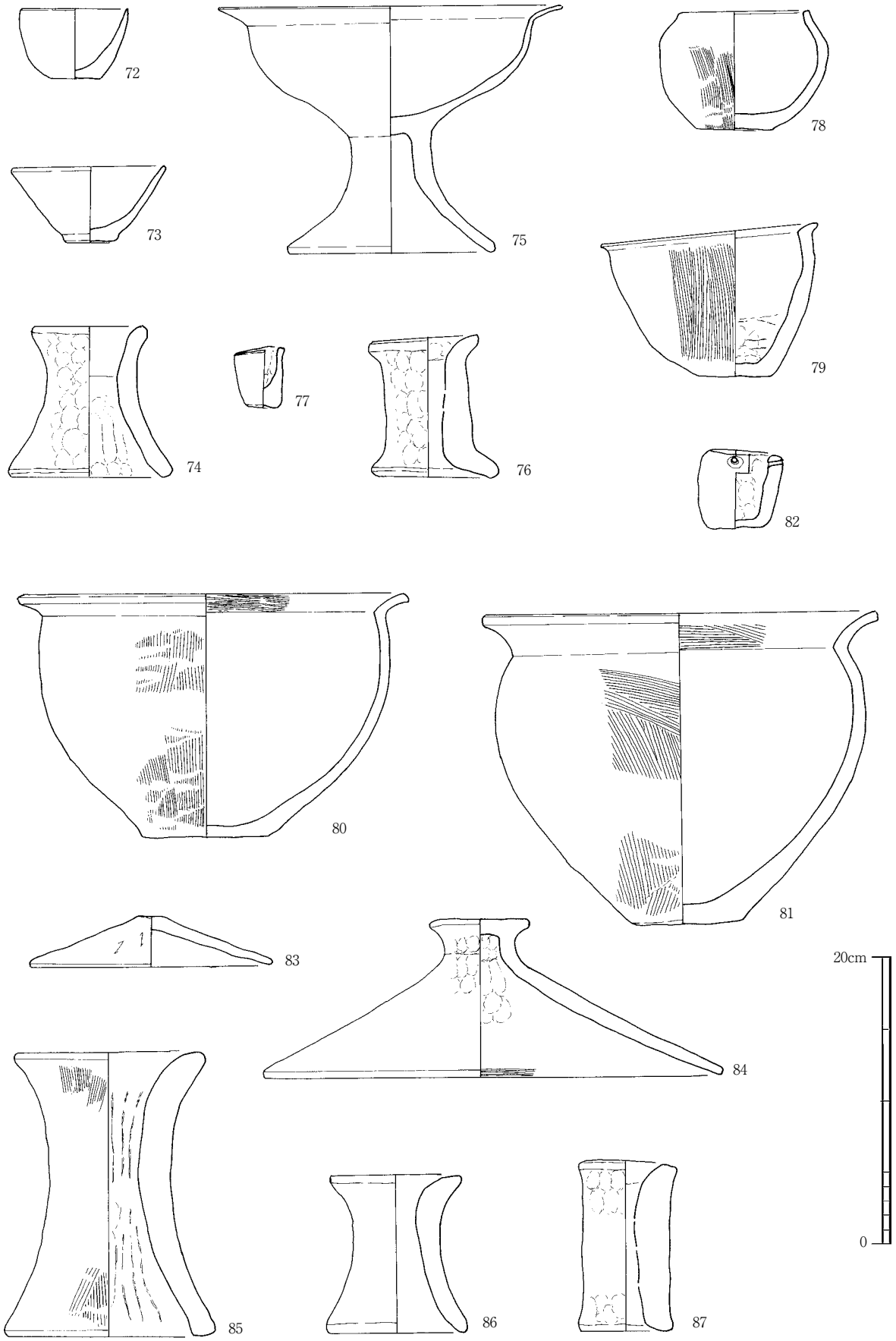


第９図　ＳＤ０１出土土器実測図６（土器群出土）（1/4・1/6）

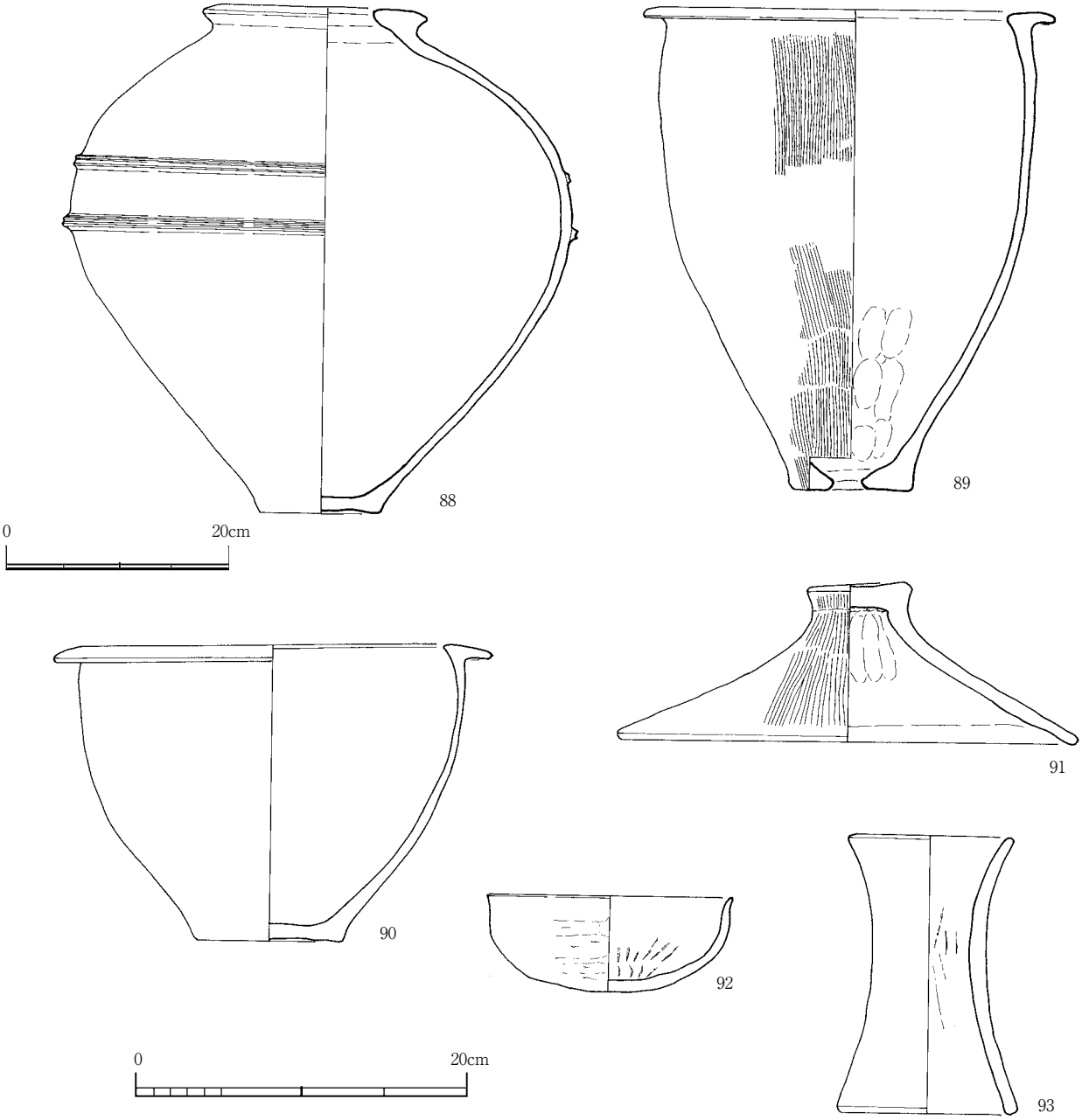
26～28は鍬先口縁の高坏で、3点とも丹塗りである。26は口縁部が29.6cm、器高27cmを測る。27は坏部と脚部の境に1条のM字凸帯が巡る。31は口径が28.6cmの丹塗り広口口縁壷。口頸部は扁平な玉葱状の胴部から緩やかに外反し口縁端部は凹レンズ状に浅く窪む。32～34は丹塗りの鍬先口縁壷。口縁端部は凹レンズ状に浅く窪み32と34にはヘラ工具で刻み目を彫り込み頸部には暗文を施文している。34の頸部には1条のM字凸帯が巡る。39～42は逆Ｌ字状口縁の甕で39の上唇にはヘラ工具による線刻がある。40の口縁部下にはM字状、41の口縁部下には三角凸帯が巡る。57は「く」字状口縁の甕で口径が23.5cm、器高は30.5cm。外面は粗いハケ目。62は丹塗の無頸壺蓋。天井部には小さなボタン状の摘みが付き外縁には2孔一対の結紐孔を穿っている。



第10図　ＳＤ０１出土土器実測図７及びＳＤ-170・207・507出土土器実測図（1/4・1/6）

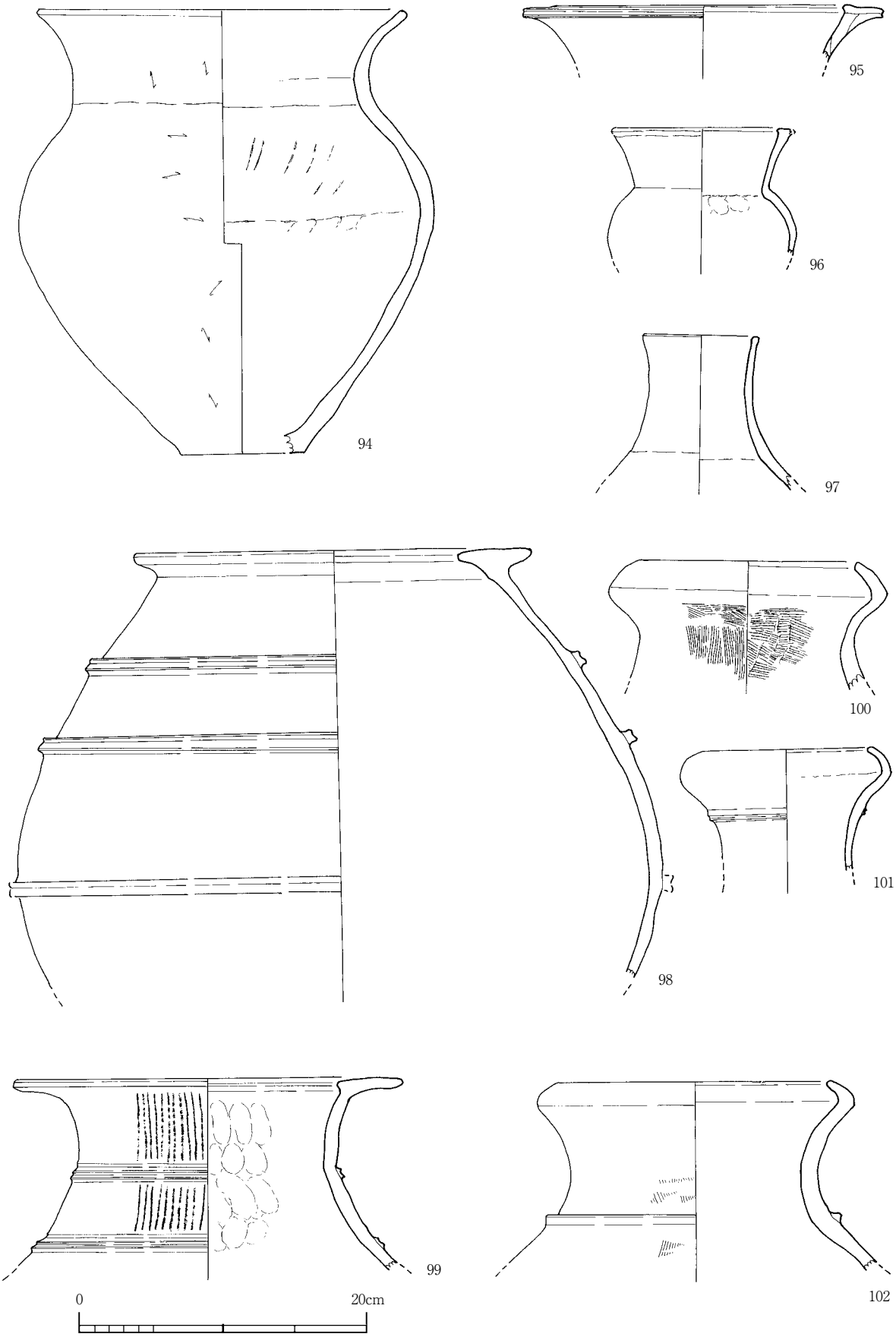


第 11 図　ＳＤ０１出土土器実測図８（A-8・9、B-8 区）（1/4）

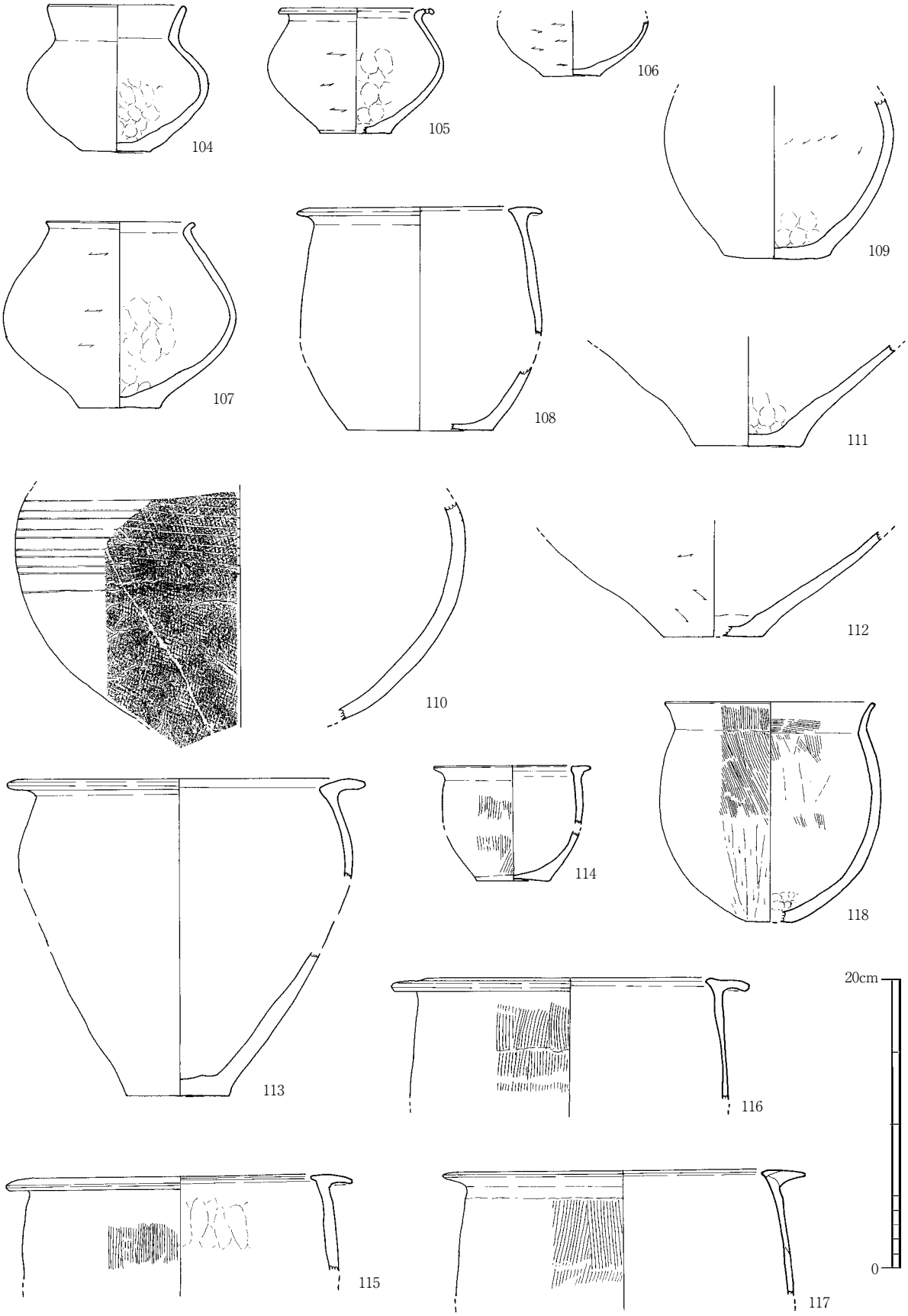


第12図　ＳＤ０１出土土器実測図９（A-10、B-10区）（1/4・1/6）

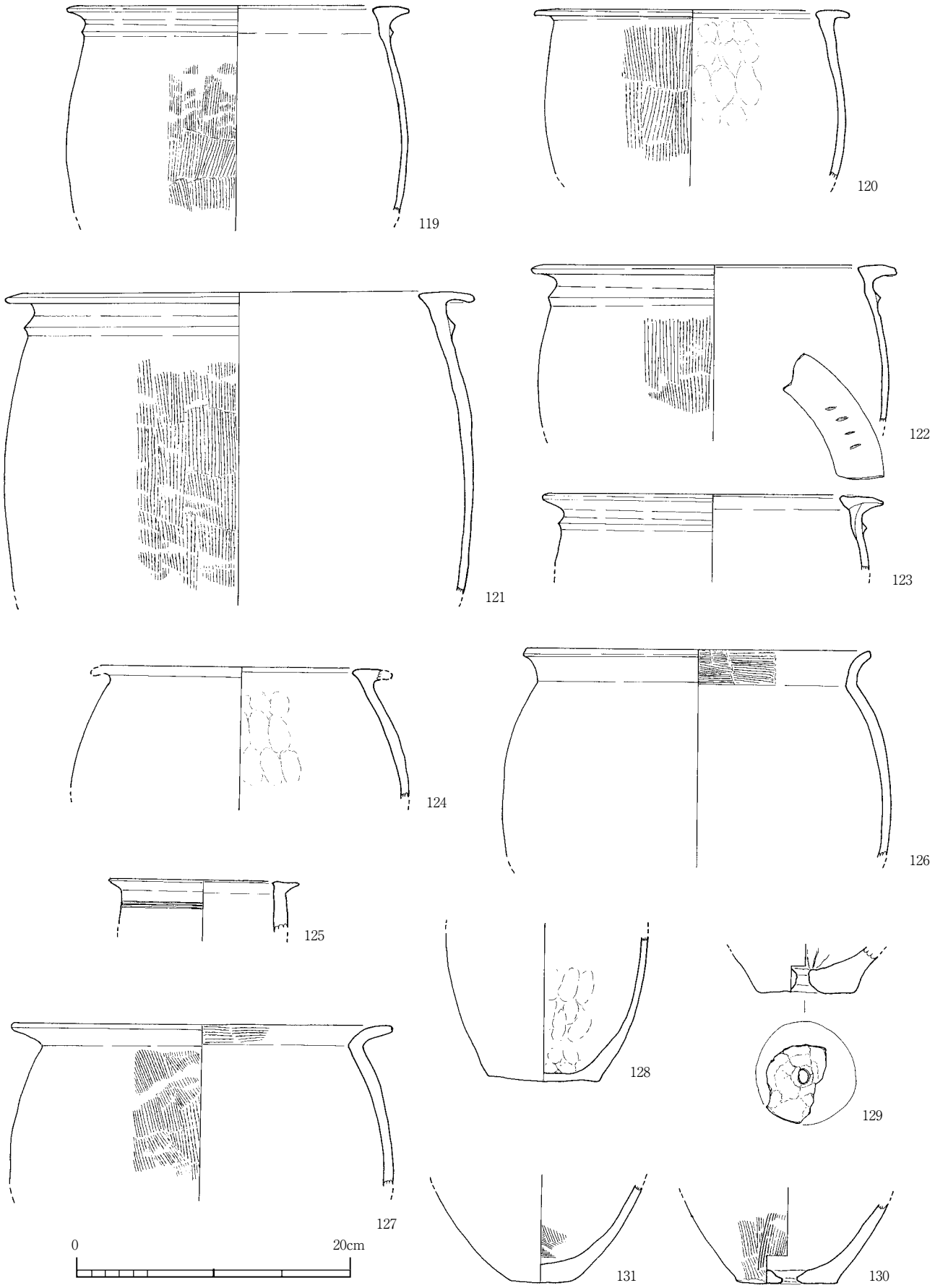
64・65は器台で、受部は筒状の体部から強く屈曲して外反し、裾部は伸びやかにラッパ状に開いている。器高と受部の径が概ね近く、15cm前後を測る。69・71は大型の丹塗鋤先口縁壺である。69は頸部は短く直口し、頸部との境にM字凸帯が巡る。口径28.5cm、器高は47.8cmを測る。71は頸部中位と胴部の境に1条、胴部最大径部に２条の凸帯が巡り、頸部には凸帯間に２段の暗文を施文している。胴部最大径付近に焼成後の穿孔が施されている。70は口径15.7cm、器高23.5cmを測る軟質の陶質壺で、胴部外面に並行タタキを施し、内面はヨコナデ仕上げている。朝鮮半島製であろう。75は口径が24.2cm、器高が17.2cmの高坏。口縁部は半球形の体部から大きく「く」字状に外反する。



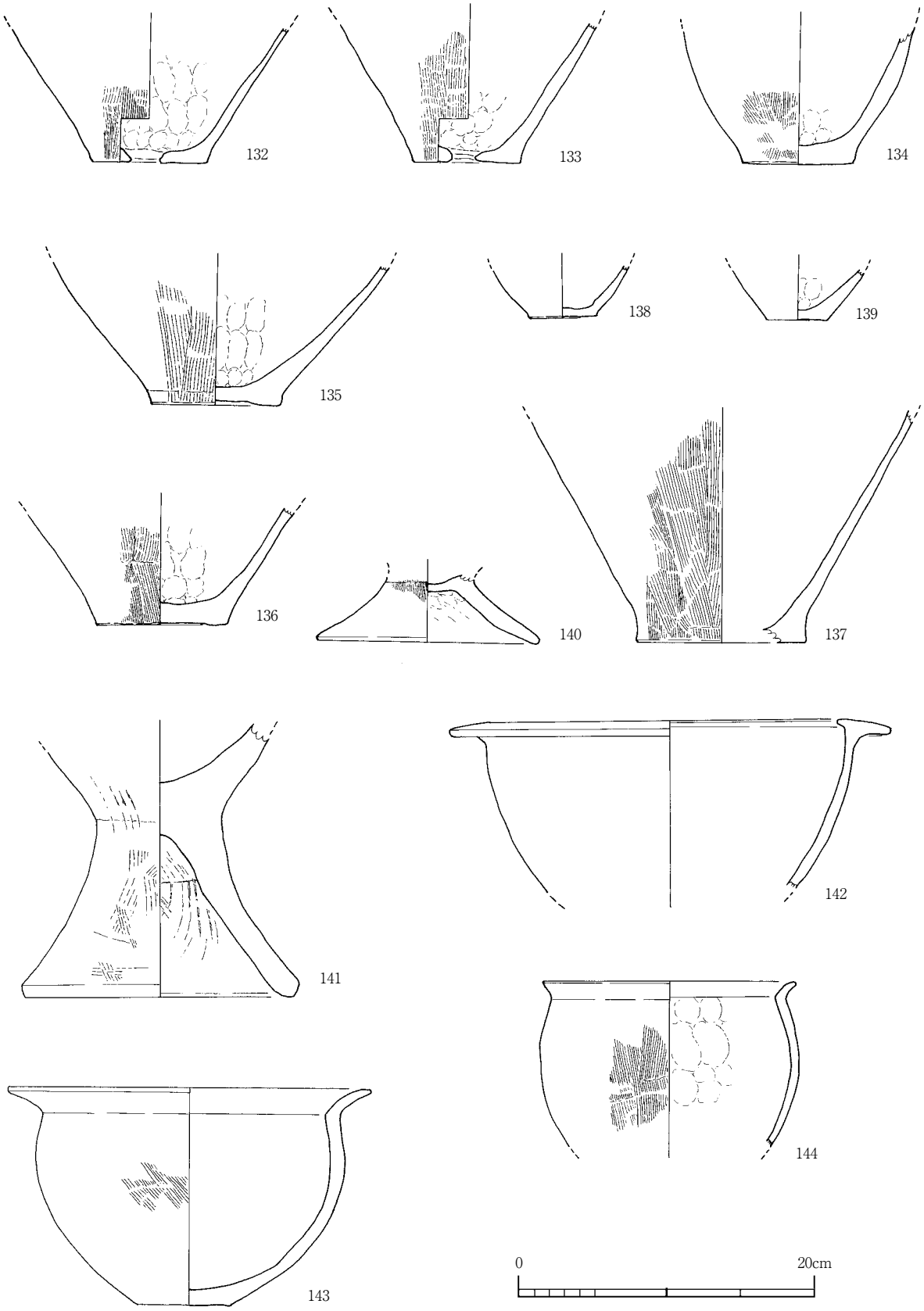
第 13 図　ＳＤ０１出土土器実測図 10（C-7 区）（1/4）



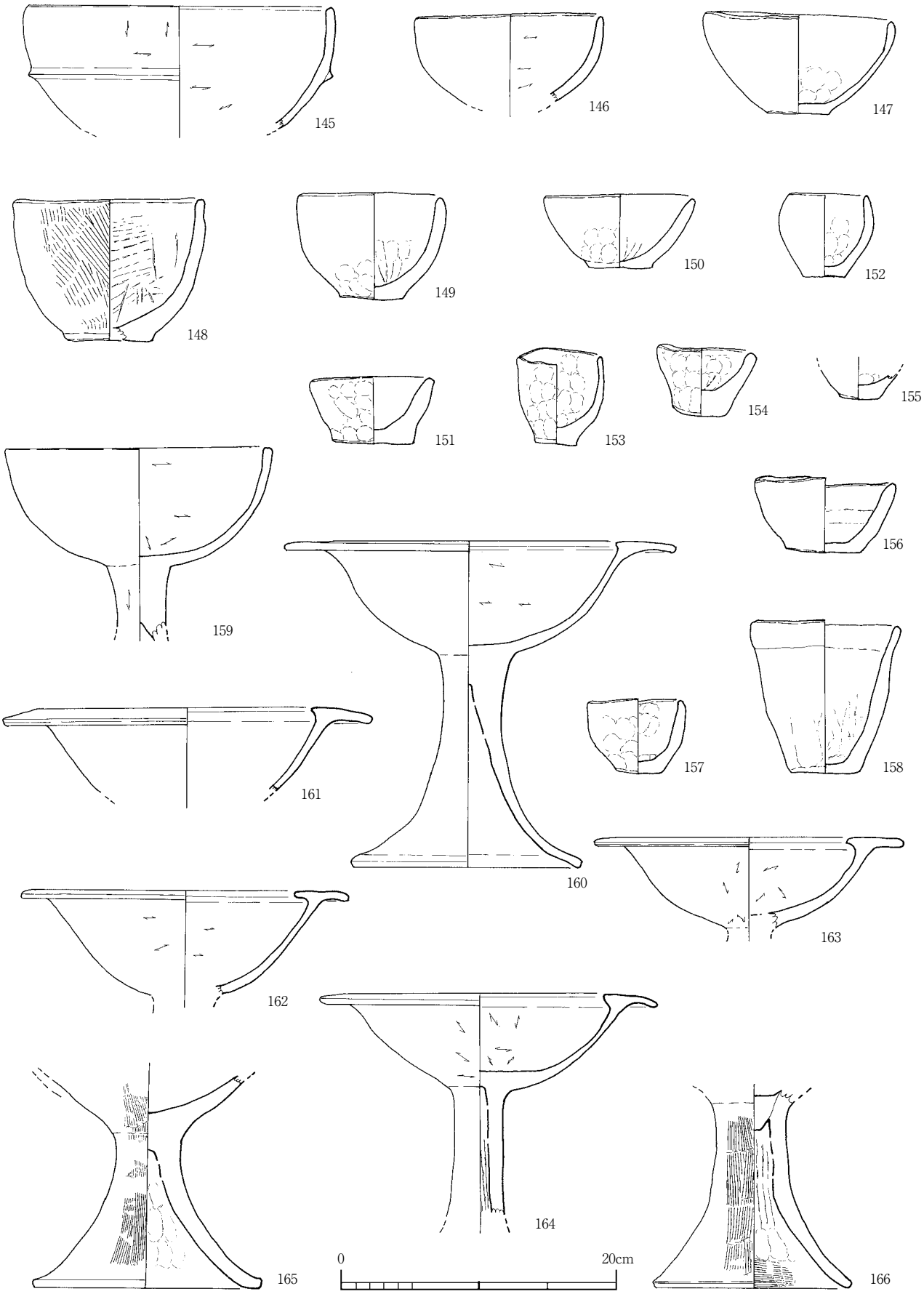
第 14 図　ＳＤ０１出土土器実測図 11（C-7 区）（1/4）



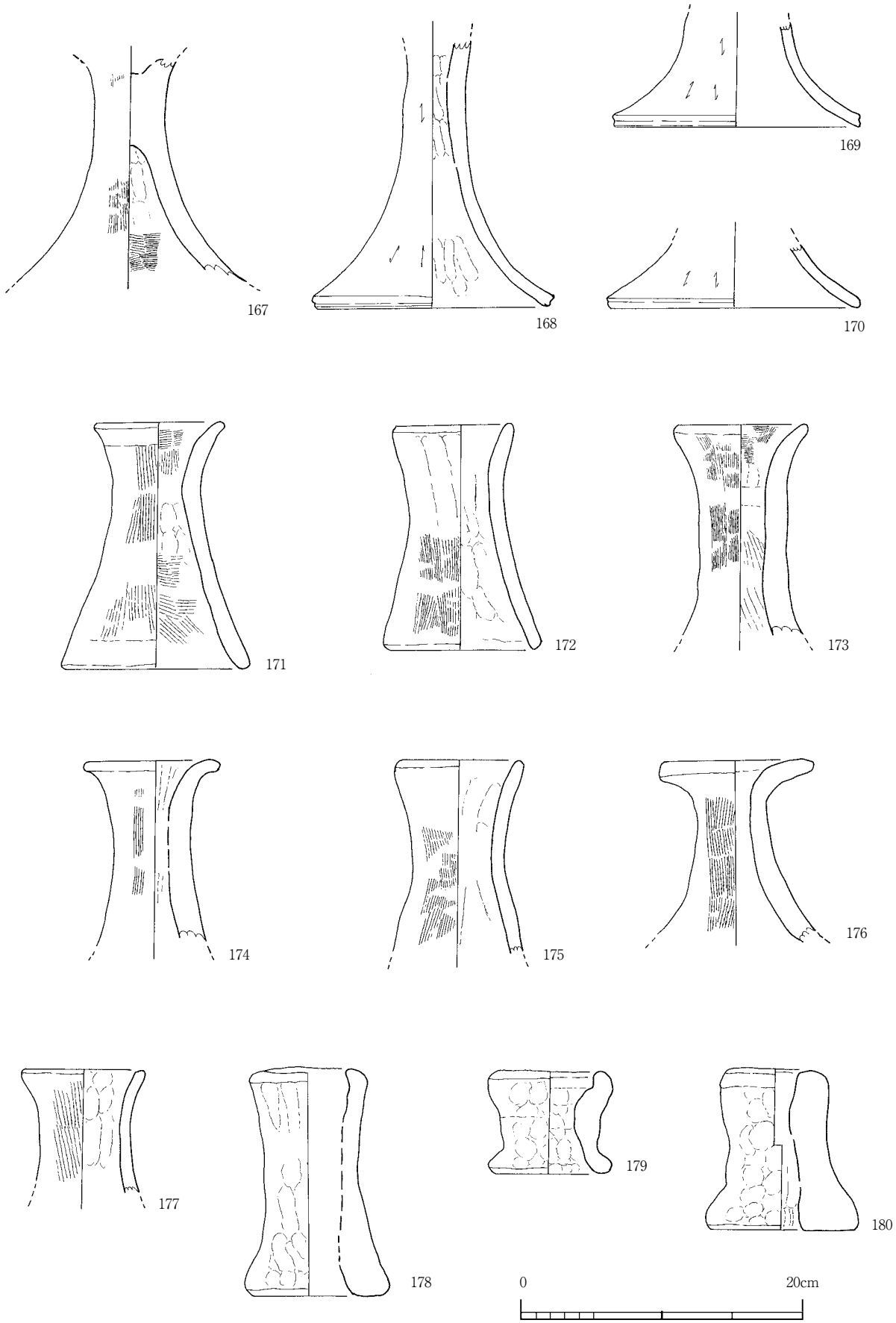
第 15 図　ＳＤ０１出土土器実測図 12（C-7 区）（1/4）



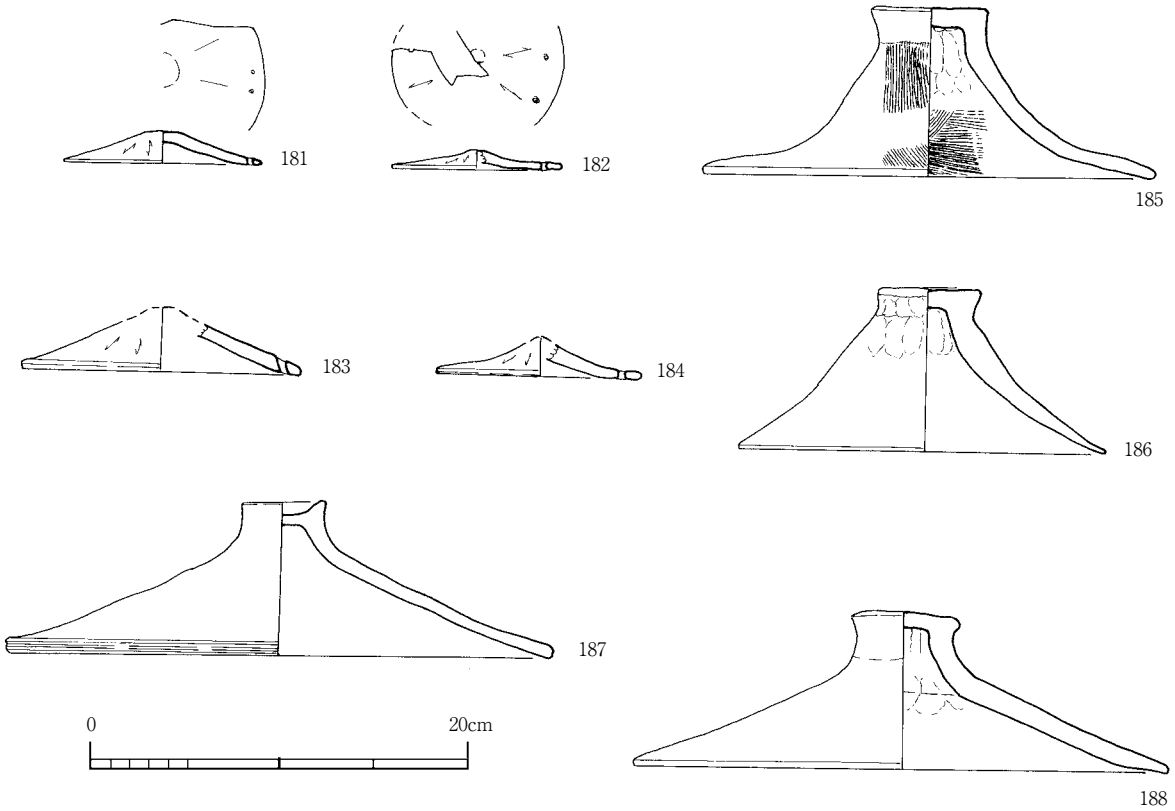
第 16 図　ＳＤ０１出土土器実測図 13（C-7 区）（1/4）



第 17 図　ＳＤ０１出土土器実測図 14（C-7 区）（1/4）



第18図　ＳＤ０１出土土器実測図15（B～D-7区）（1/4）

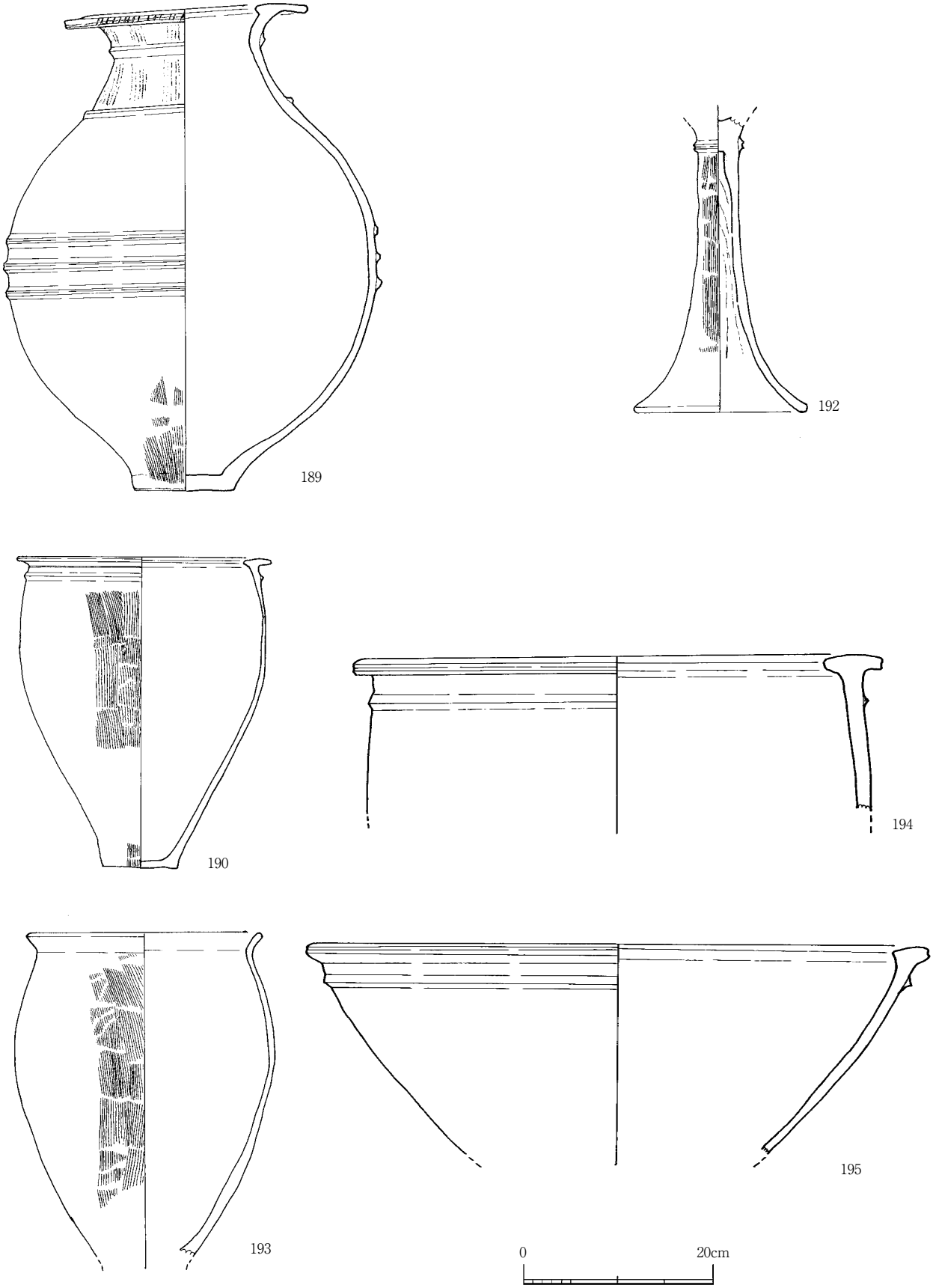


第19図　ＳＤ０１出土土器実測図16（C-7区）（1/4）

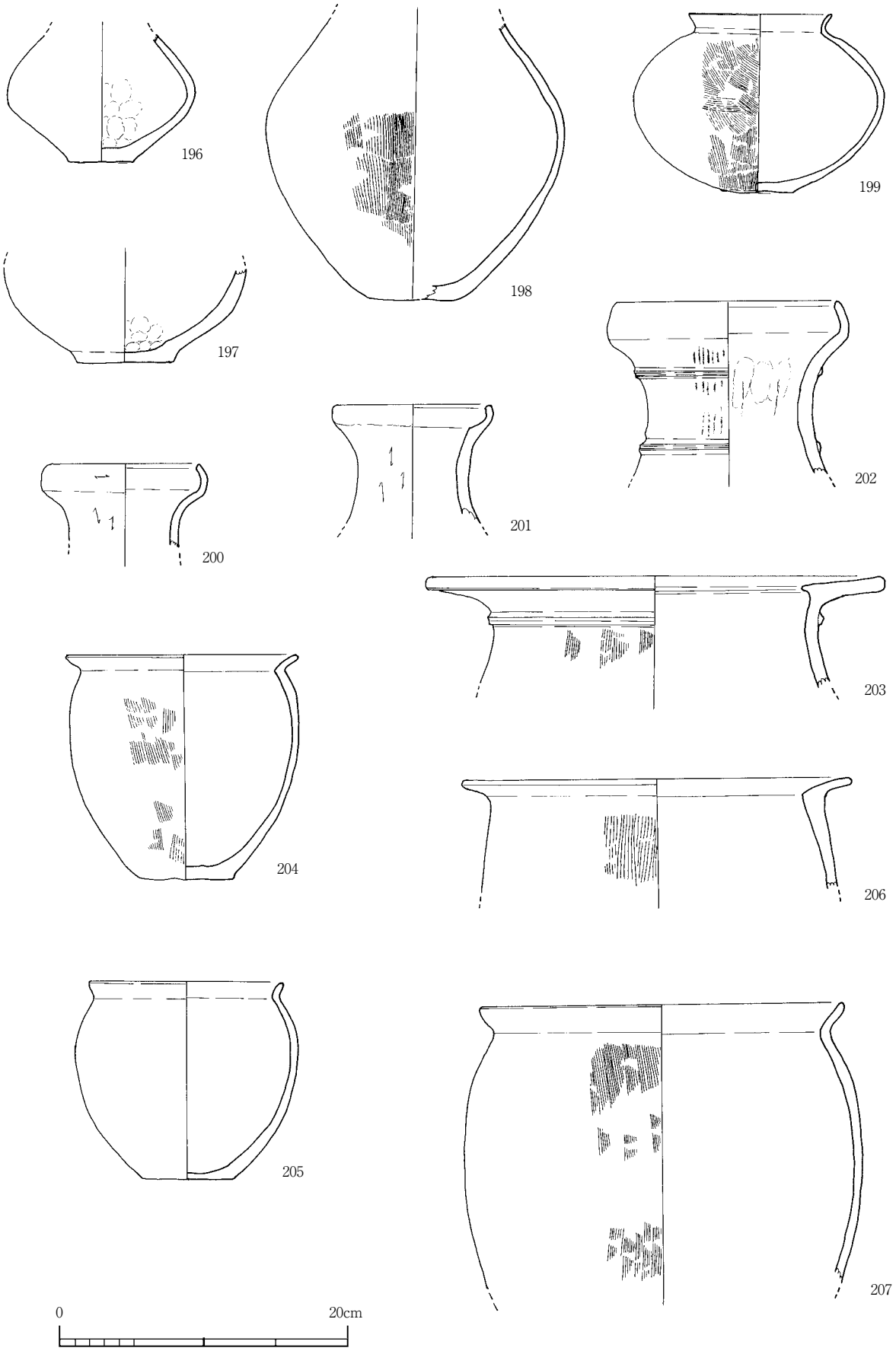
80・81は口縁部が「く」字状に短く外反する鉢で、口径は80が25.6cm、81は27.4cmとやや大型である。82はやや異形のミニチュアで、直口する口縁部下に5mm径の円孔を穿っている。一見、タコツボに似ている。88は器高46.7cmの無形壺で、口縁部は肉厚のＴ字状で逆倒卵形の胴部中位には２条のM字凸帯が巡っている。89は口縁部が逆L字状の甕で、底部に1.5～2cm径の円孔を焼成後に穿ち甑に転用している。94は丹塗の広口口縁壺で、口径は25.7cm、器高31.5cmを測る。口縁部は短く内傾し、頸部から緩やかに外反する。98は大型の無頸壺で、口径28cmを測る。Ｔ字状の口縁部で、逆卵形の胴部上半には3条のM字凸帯が巡っている。99は壺で、頸部中位と胴部との境に2条のM字凸帯が巡り、その間には3～4mm間隔で暗文を施文する。

110はＣ－7区出土の陶質土器である。全体球形に近い形状を成している。外面には細かい格子目タタキを施し、10条以上の細い凹線が巡っている。内面はナデで仕上げている。全体に焼成は軟質で、色調は灰黒色を呈している。118は「く」字状口縁の甕で、胴上部はハケ目、下半部は掻き上げ状のケズリを施している。119～123は鋤先口縁の甕で、123の口縁部上唇にはヘラ先工具による4点の刺突文を線刻している。125の逆L字状口縁は上唇が水平で頸部には3条の細凹線が巡る。150～157はミニチュアの手捏ね鉢。口縁部がストレートに外反するタイプ（150・151・154・156）、直口するタイプ（157）、内湾するタイプ（152・153）がある。160～170は高坏で、166を除いて丹塗りである。

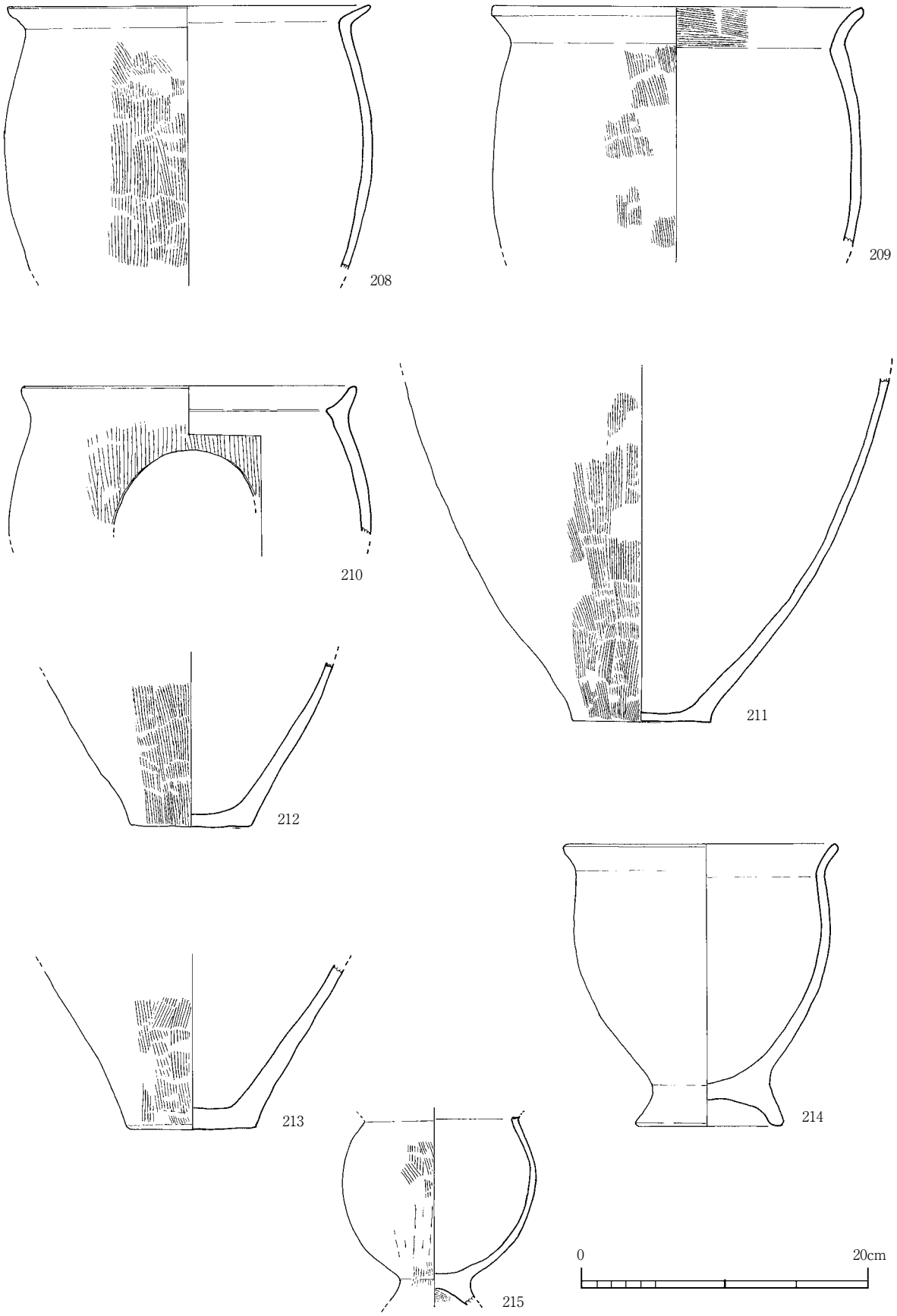
171～180は器台。受部が短く外反し裾部がラッパ状に開くタイプ（171～175）、受部が大きく外反するタイプ（176）と直口するタイプ（177）、筒状に立ち上がるタイプ（178）がある。179は器高が7.2cm、受部径が7.8cmの小型品で筒状の体部は短く口縁部は直口し裾部は外方に小さく摘み出す。180の受部と裾部は肉厚の体部から直口する。181～184は陣笠状の無形壷蓋で、外縁には2孔一対の結紐孔を穿っているいずれも丹塗りである。



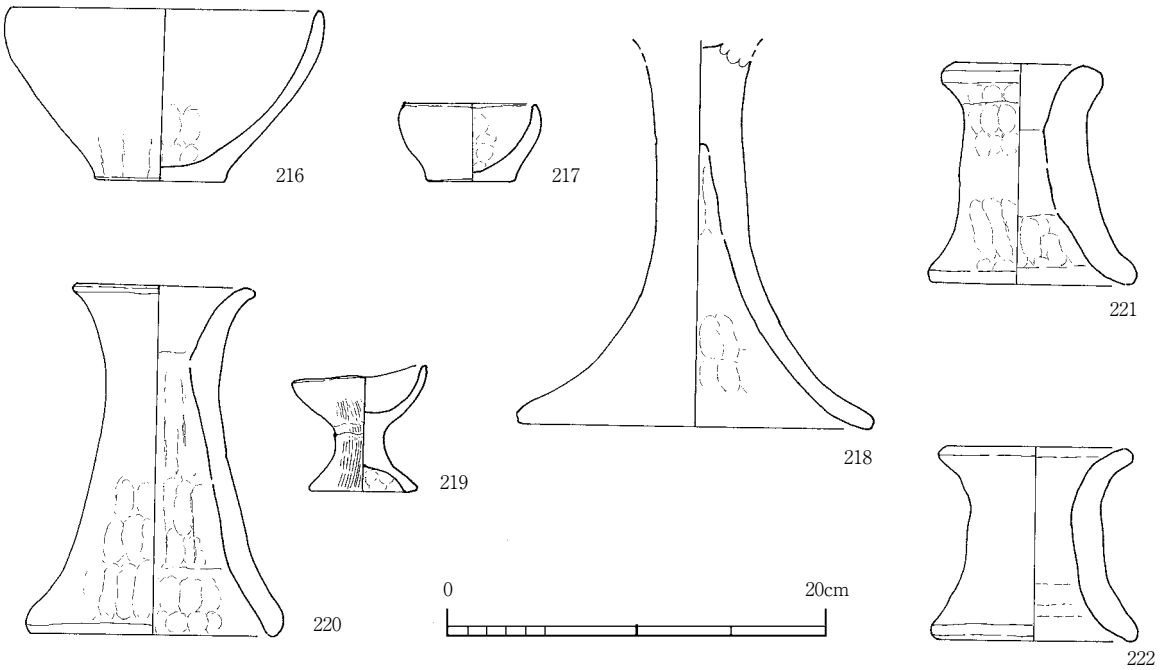
第20図　ＳＤ０１出土土器実測図17（C・D-7区）（1/6）



第 21 図　ＳＤ０１出土土器実測図 18（C-8 区）（1/4）



第 22 図　ＳＤ０１出土土器実測図 19（C-8 区）（1/4）

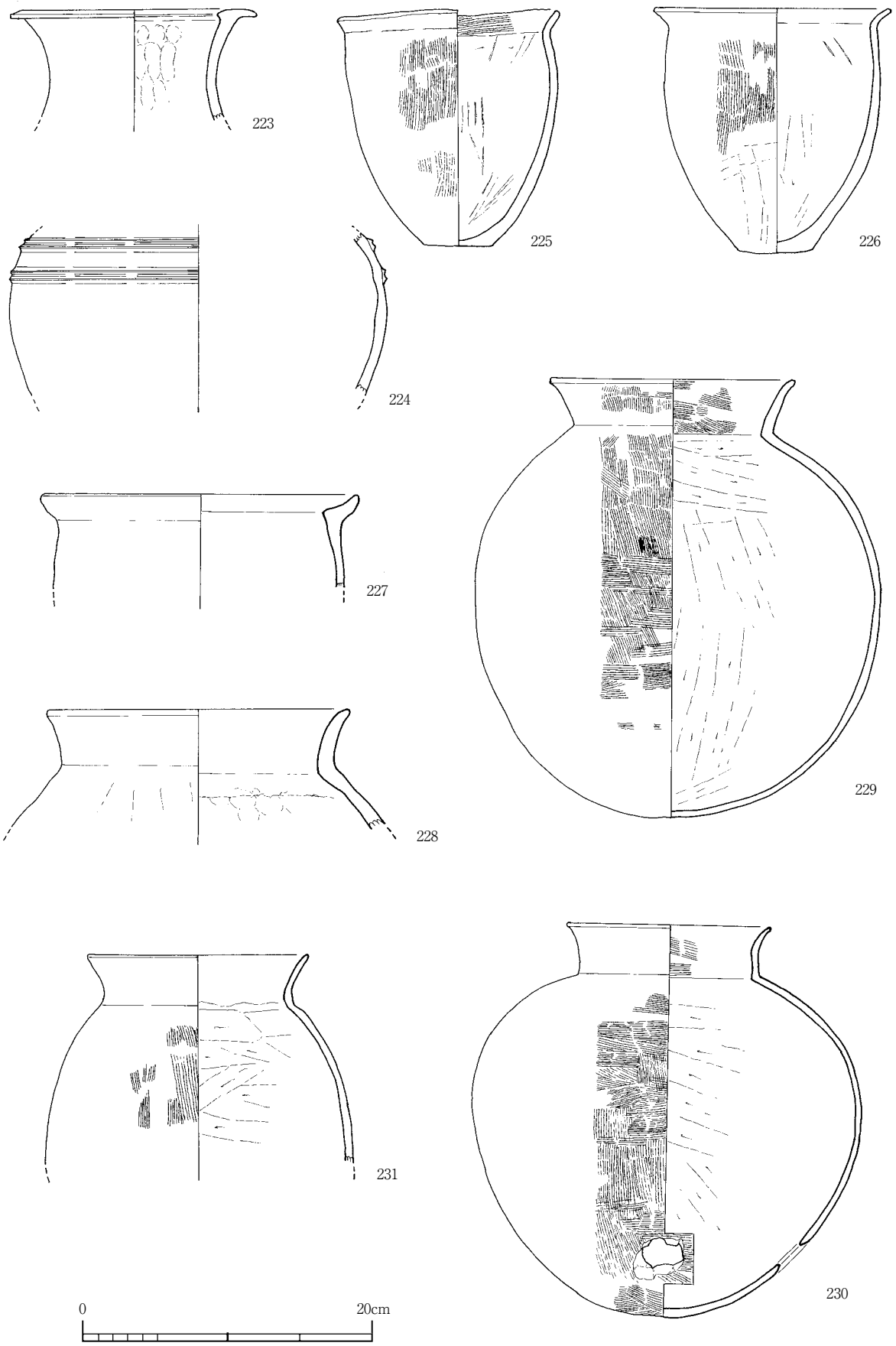


第23図　ＳＤ０１出土土器実測図20（C-8区）（1/4）

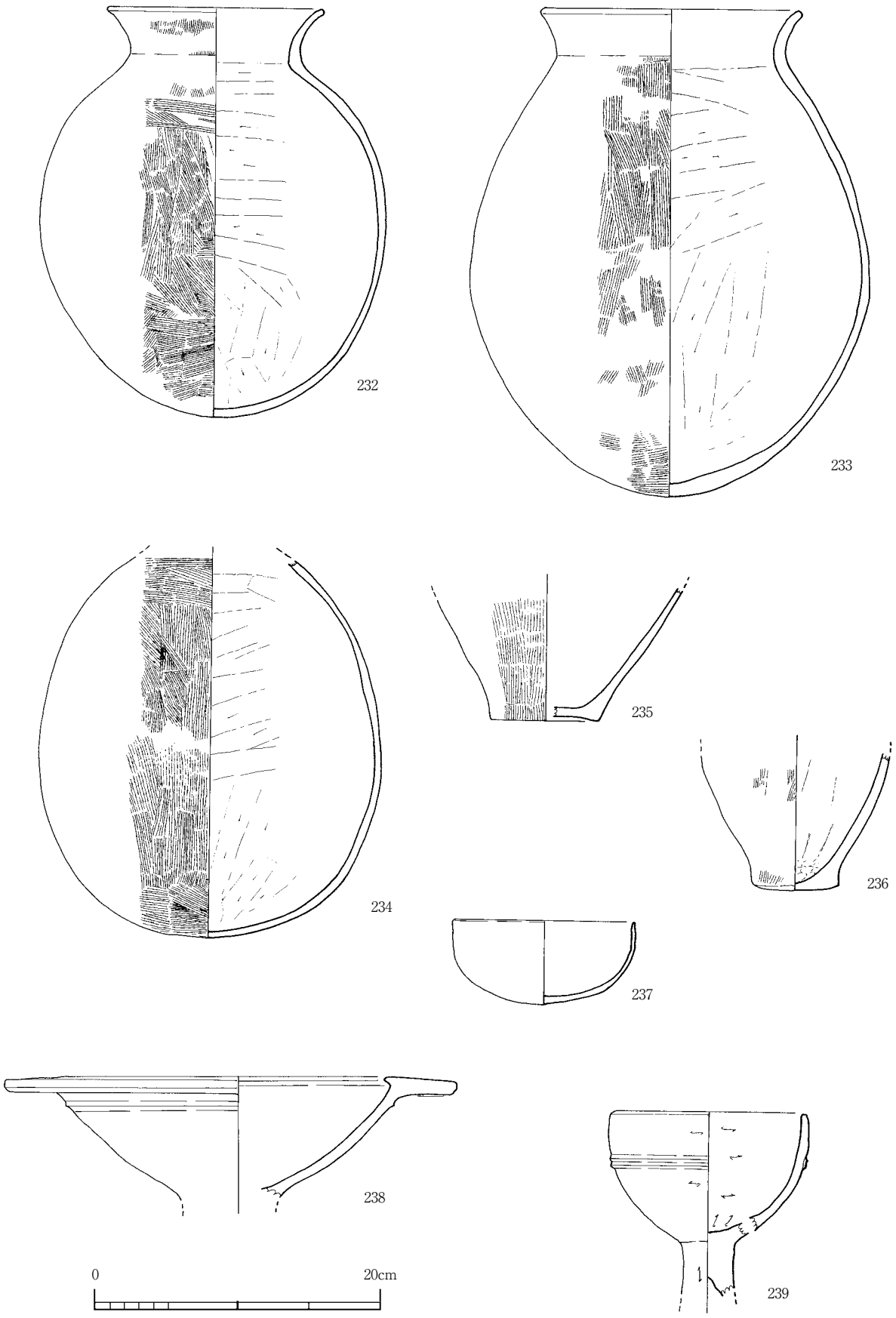
189は器高52.2cmを測る壺で、頸部中位に1条の三角凸帯、胴部との境と卵形の胴部中位に3条のコ字凸帯が巡り頸部には凸帯を挟んで2段の暗文を施文している。196～198・200～202は袋状口縁壷で196・197・200～202は丹塗りである。199は口径が10cm、器高が12.6cmで口縁部は偏球形の胴部から「く」字状に短く外反する。203は口径が32cmの鋤先口縁壷で口縁部下には1条のM字凸帯が巡り頸部には暗文を施文する。204～213は甕。210は跳ね上げ口縁の甕で倒卵形の胴部上半には10cm径の大きな円孔を焼成前に穿っている。口径は23.4cm。214・215は台付甕。214は口縁部が緩やかな「く」字状を成し台部は低い。口径は19.2cm、台径は10.4cm、器高は20cmを測る。225～236は甕。225～233は「く」字状口縁の甕で口縁部は225がストレートに226～233は反り気味に外反する。229～234は外面がハケ目、内面はヘラケズリで調整している。230の底面近くには2～3cm大の円孔一対を、焼成後に穿っている。

238は丹塗りの鋤先口縁高坏で口縁部下には1条の三角凸帯が巡る。239は口縁部が直口する半球形の高坏で、坏中位に1条のM字凸帯が巡る。

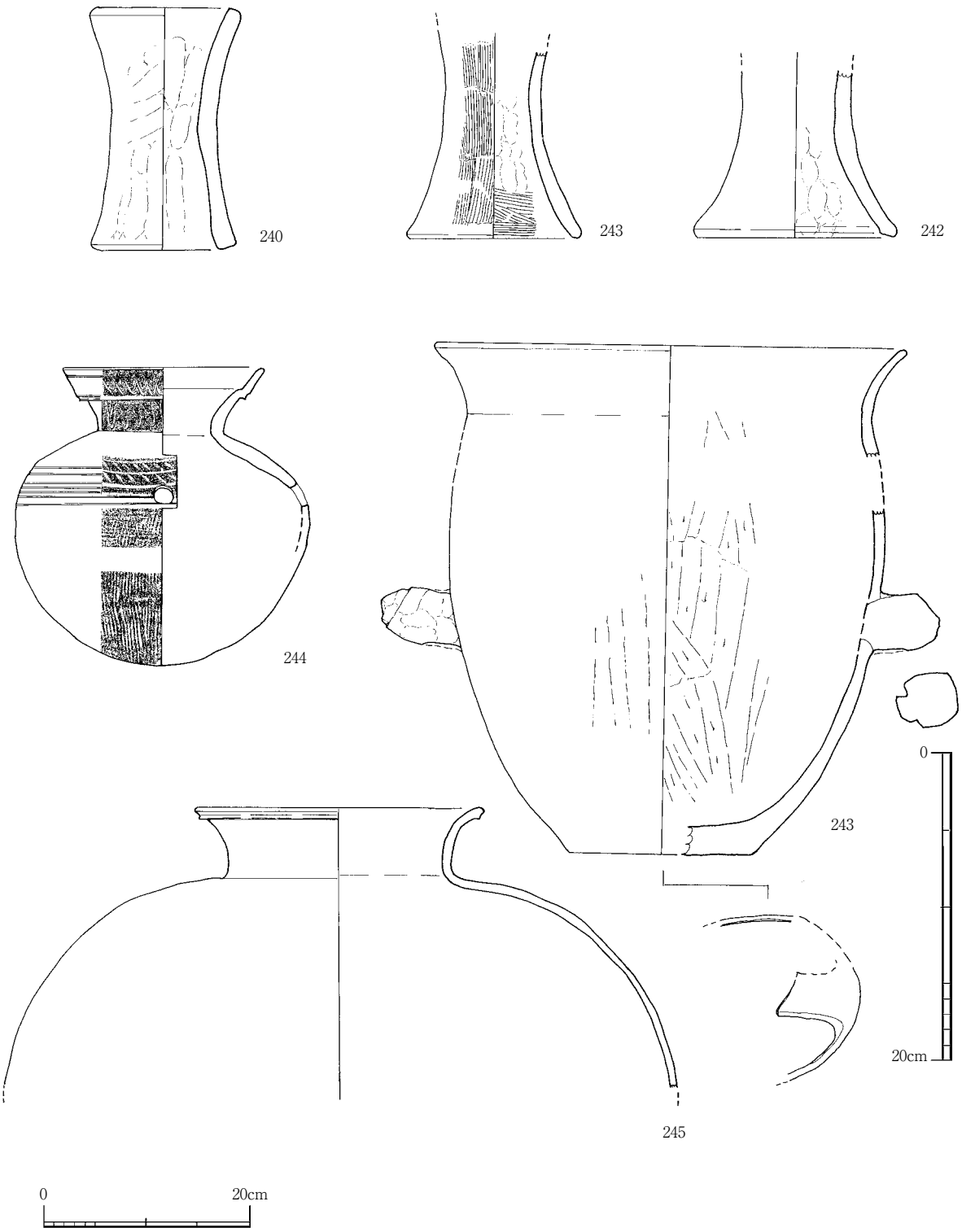
244は須恵器の甑で、口径13cm、器高19.4cmを測る。口縁部は二重口縁状をなし口頸部には櫛描波状文を、胴部上半には3条の凹線間に線刻文を施文している。245は須恵器大甕である。246～252は壺。246は丹塗広口壺で口径は38cm。頸部にはランダムに暗文を施文する。247は丹塗無頸壺。球形の胴部大径部に円孔を穿っている。248は鋤先口縁壺で口径は11.8cm、器高は12.4cm。250は肩の張った球形の胴部上半にM字凸帯が3条巡る。253～264は甕、265～270は丹塗高坏である。265・266は鋤先口縁で口径は265が28cm、266が27.6cm。坏部は内外ともに研磨、脚部は外面が研磨で裾部はラッパ状に開く。271～278は器台。受部が大きく台反するタイプ（273・274）受部と裾部が対称的に緩やかに外反するタイプ（271・272・277）がある。278はいわゆる沓形器台。279～283は甕蓋。口縁部は多く外反し把手は外方に摘み出す。口径は26.8～30cmを測る。294・297・300は鋤先口縁の丹塗高坏。297の坏と脚の結節部には１条のM字凸帯が巡る。299は胴下半に楕円形の円孔を穿つ。



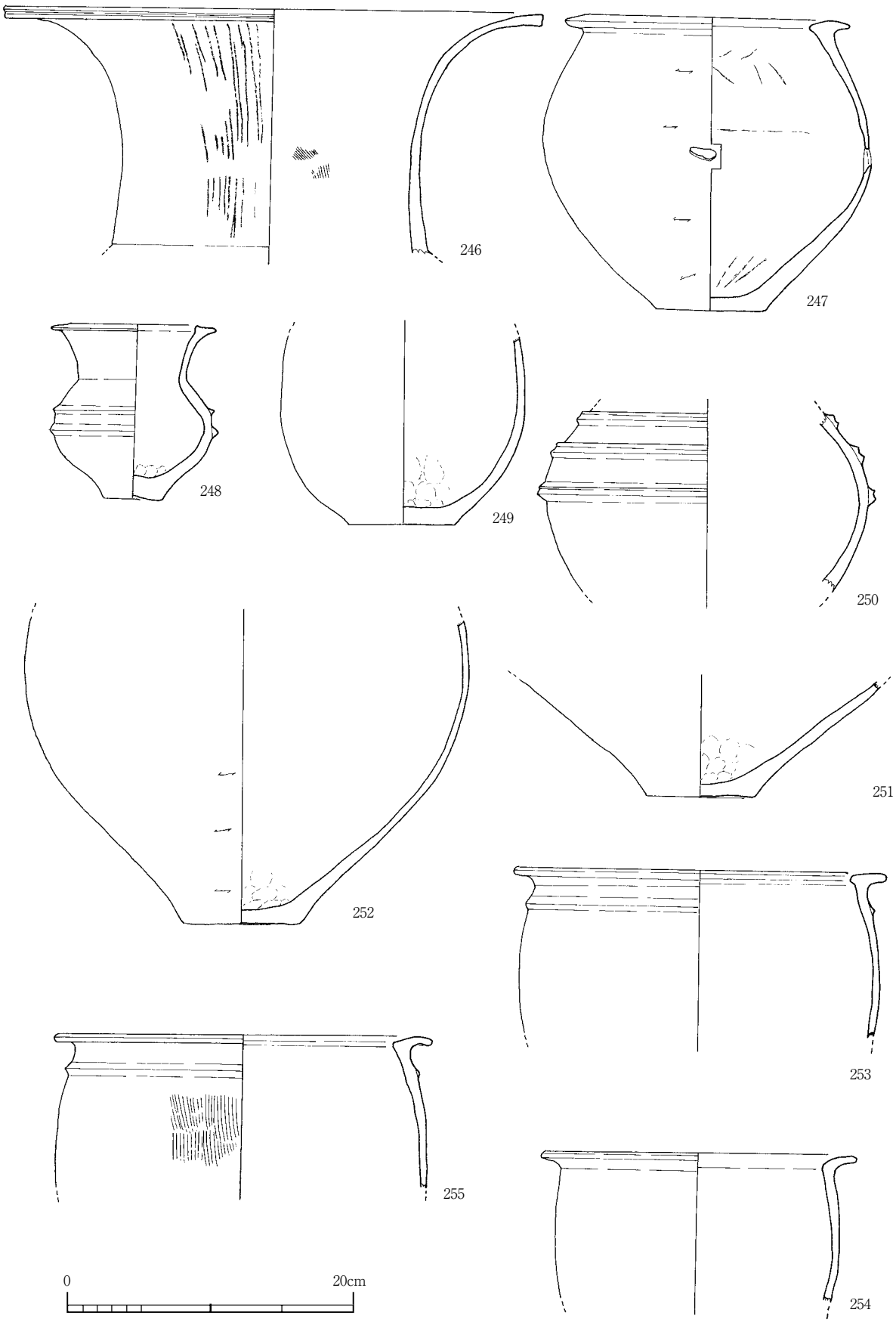
第 24 図　ＳＤ０１出土土器実測図 21（C-10 区）（1/4）



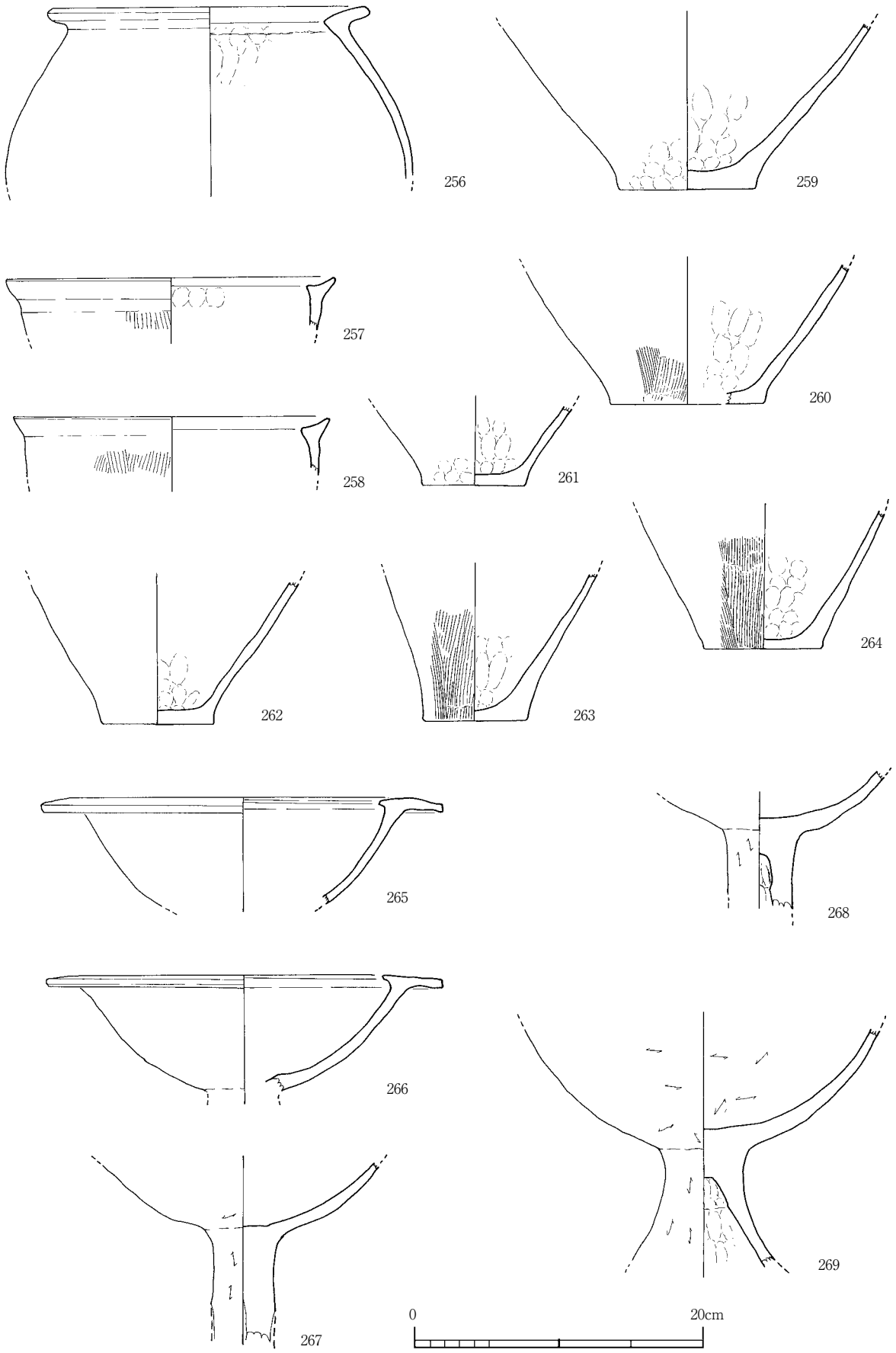
第 25 図　ＳＤ０１出土土器実測図 22（C-10 区）（1/4）



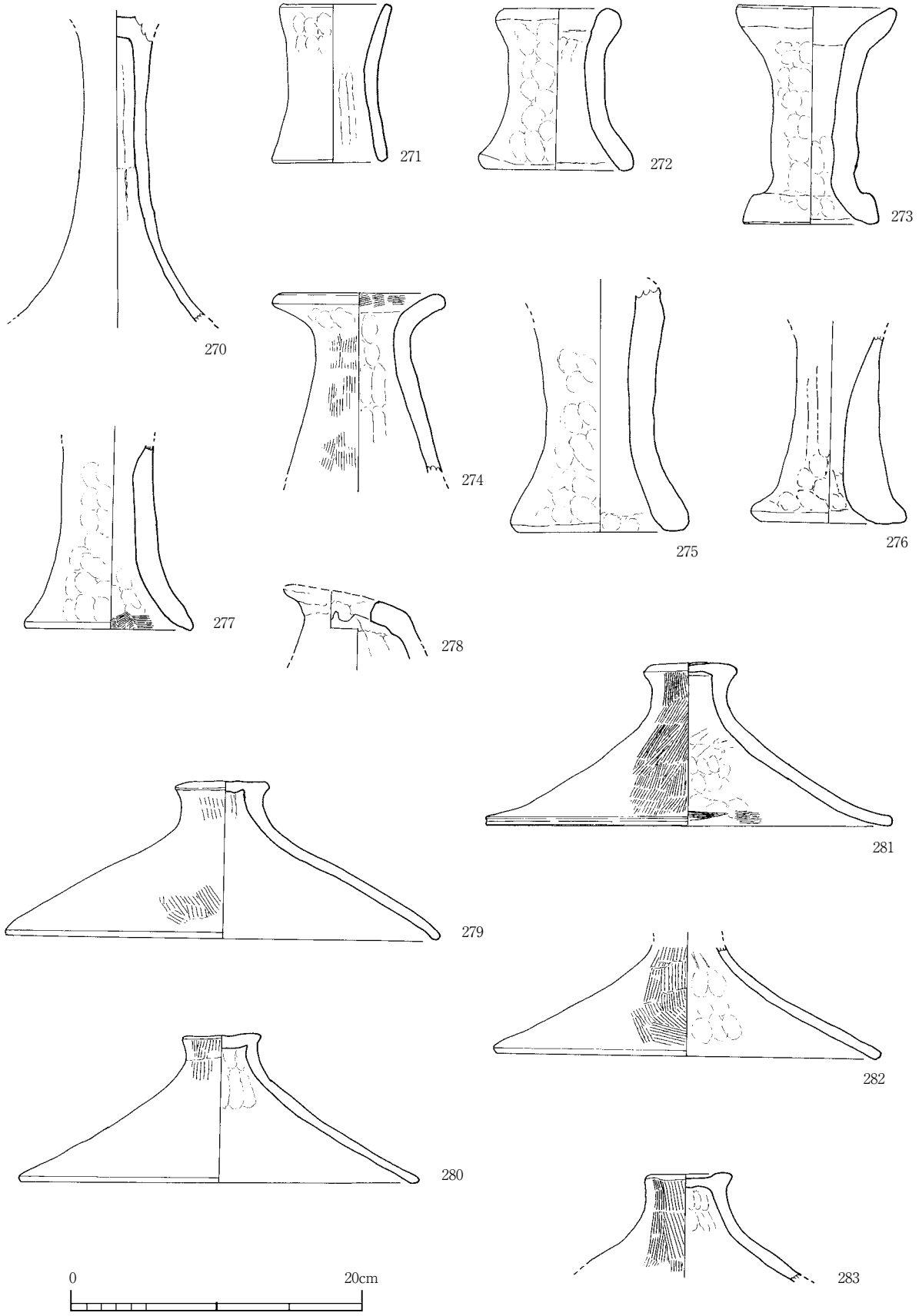
第 26 図　ＳＤ０１出土土器実測図 23（C-10 区）（1/4、1/6）



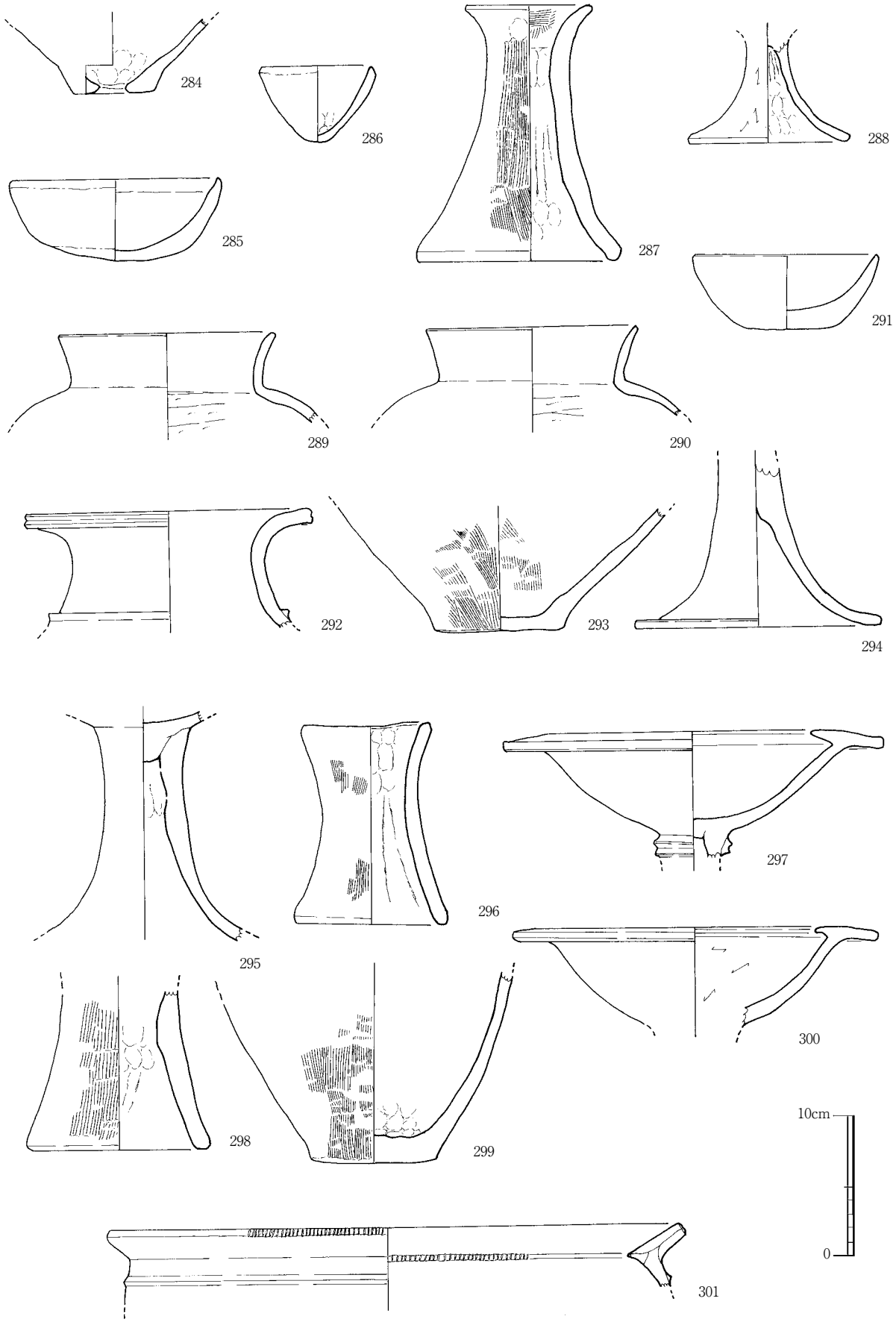
第 27 図　ＳＤ０１出土土器実測図 24（D-8 区）（1/4）



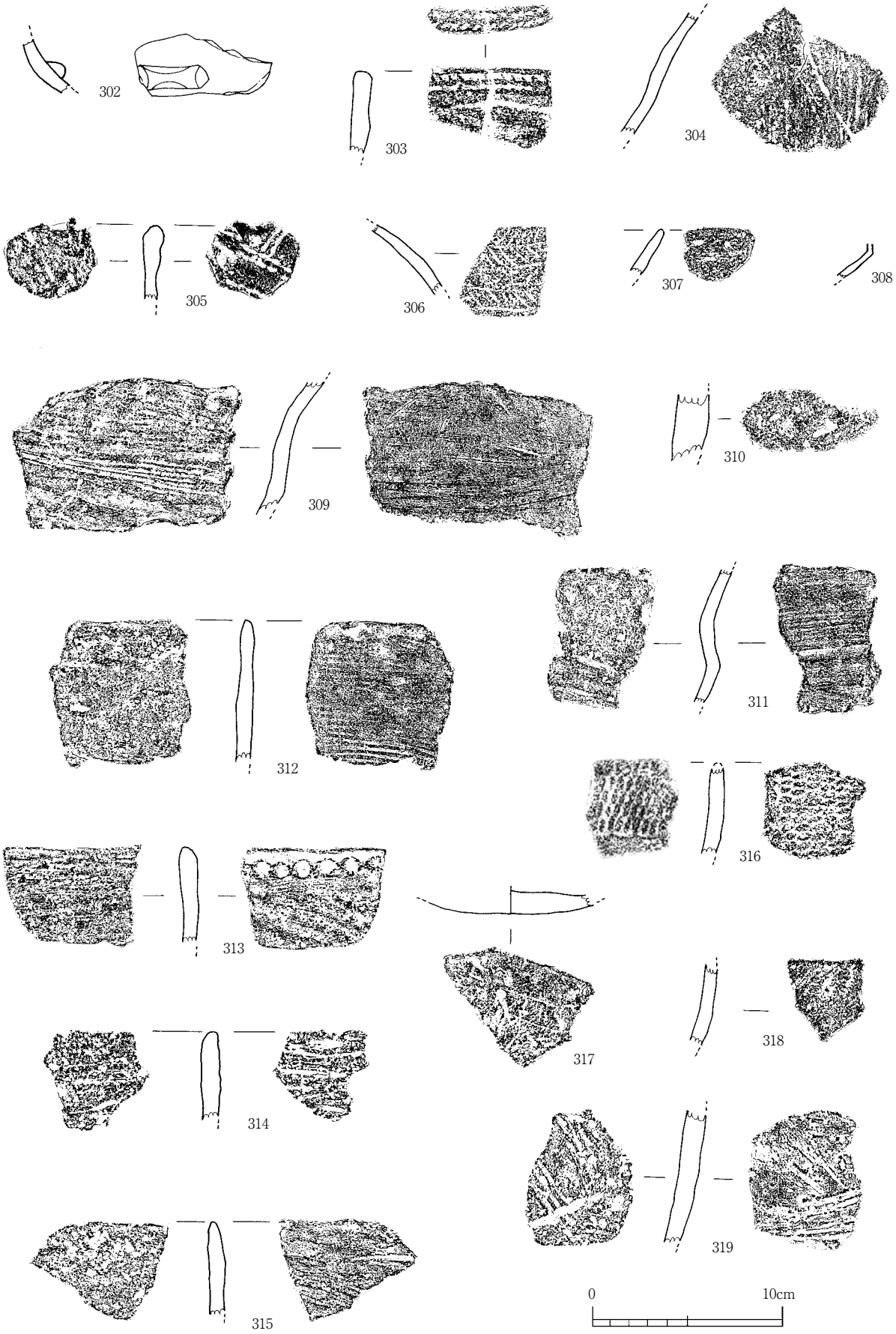
第 28 図　ＳＤ０１出土土器実測図 25（D-8 区）（1/4）



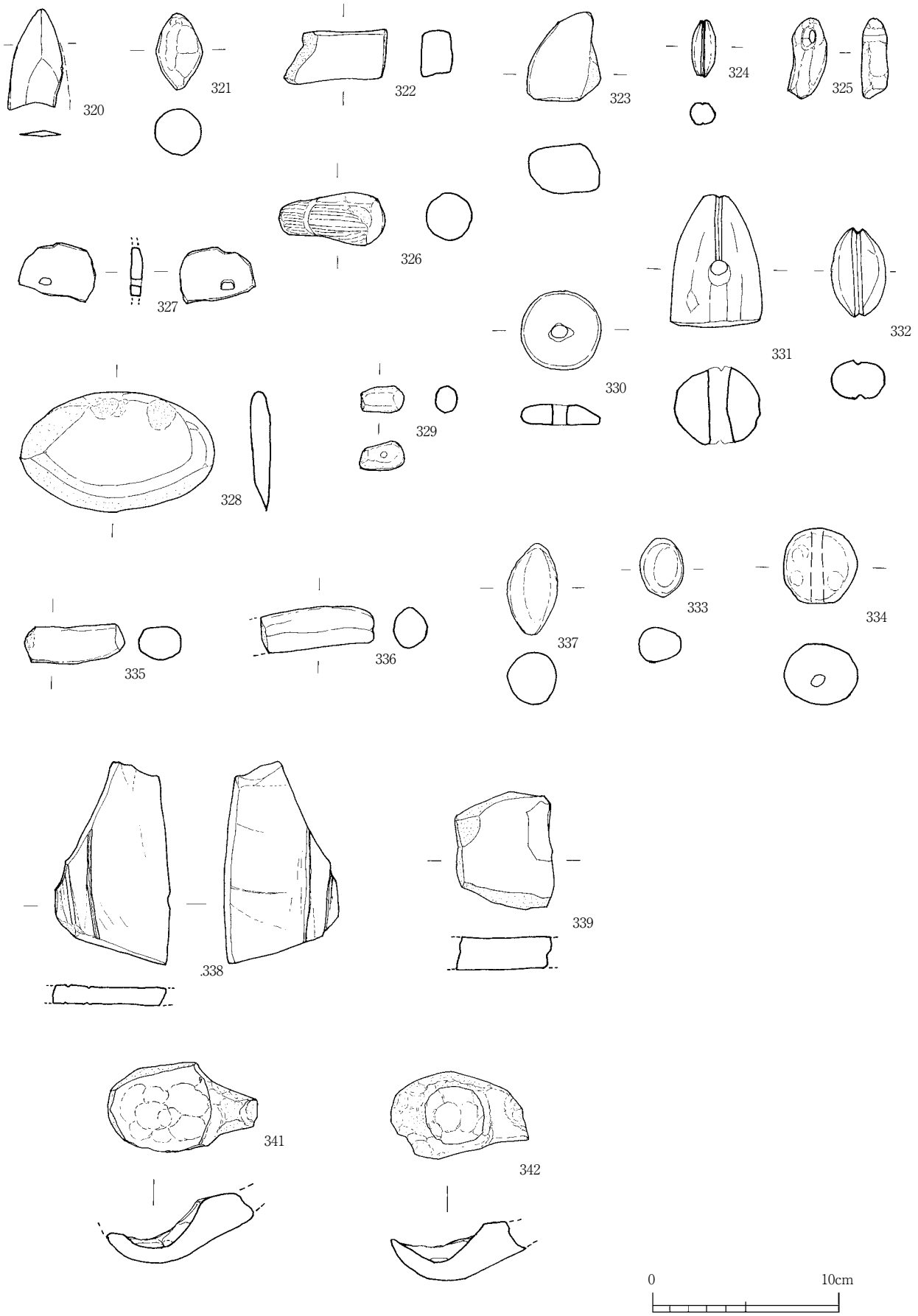
第29図　ＳＤ０１出土土器実測図26（D-8区）（1/4）



第30図　ＳＤ０１出土土器実測図27（1/4）
（C-9・11、D-7・8、E-7・8区）



第 31 図　Ⅰ区出土土器実測図 28（1/3）



第 32 図　Ⅰ区出土土製品・石製品・石器実測図（1/3）

302はリボン状突起を施した晩期の土器。303・305・310は滑石入りで、303・305は連続する刺突を施している。305にはM字に近い山形突起が付く。306は弥生時代前期板付式土器で有軸綾杉文を施している。313は太い刻目突帯を持つ。316は押形文土器。他は晩期の土器片である。

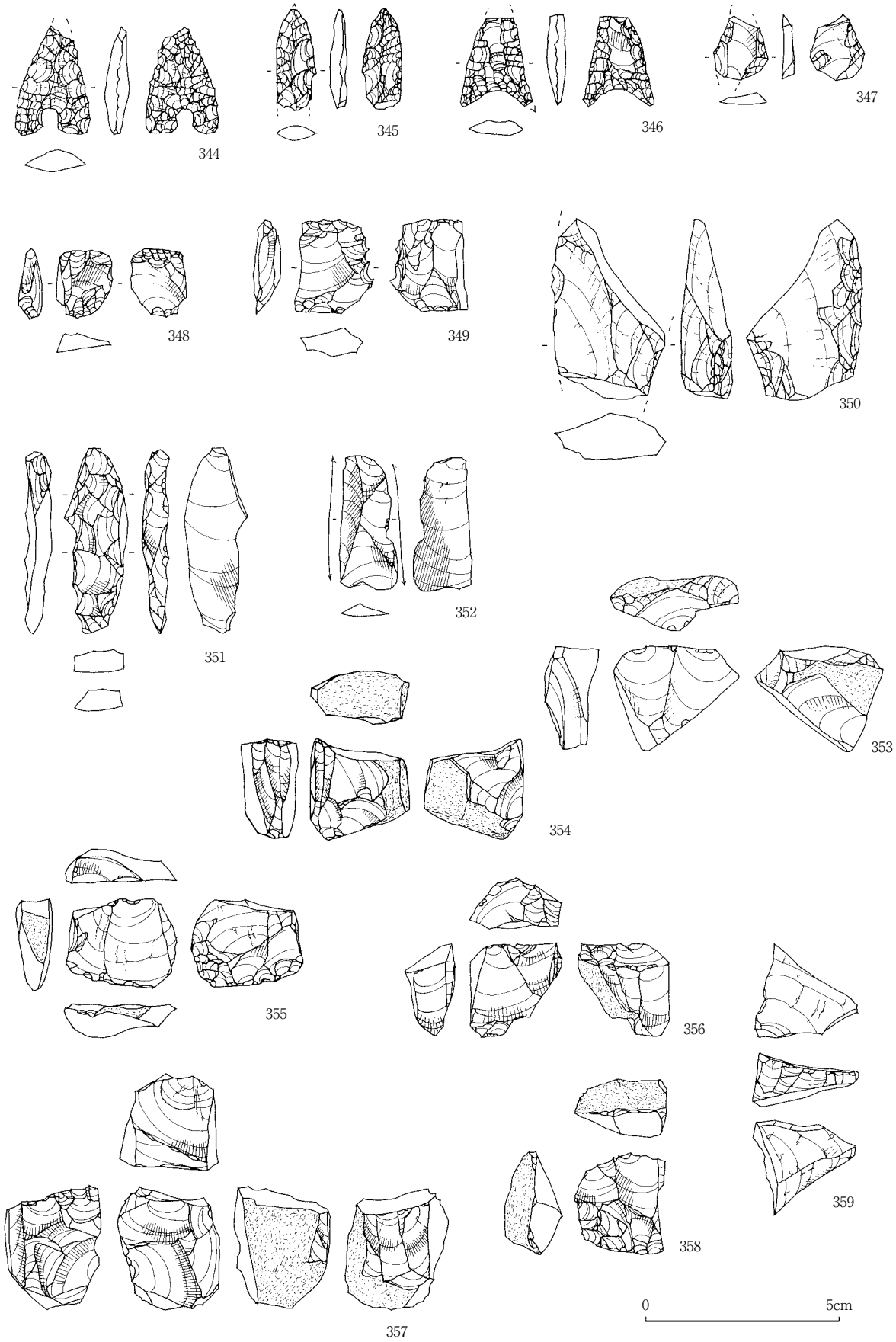
320からは石器・土製品である。325は土製勾玉、337は土製投弾、341・342は匙状土製品である。320は磨製石鏃である。凝灰岩質で長さ5.4cmを測る。

344～359は剥片石器と石核である。344～347は黒曜石製の石鏃または石鏃未成品である。348・349は黒曜石製楔形石器。350は小破片のため不明確だが、石槍であろうか。安山岩製。351は黒色黒曜石製で細石核スポールと考えられる。353～358は黒曜石製の石核で，357は打面を転移している。

360～392は礫石器である。360～364は石包丁で、361・362は輝緑凝灰岩製，その他は灰色の凝灰岩質の石材である。他に破片が５点前後ある。365～368は石鎌もしくはその可能性がある石器である。いずれも研磨を施している。368はやや厚い印象を受ける。370～373は両刃石斧である。両刃石斧はこの他にも数点ある。図示したものはいずれも灰色を呈するもので、摩滅が著しいが、玄武岩製の可能性が高い。他の数点も玄武岩のものが多いが，緑泥片岩と思われるものが1点ある。374は扁平片刃石斧である。

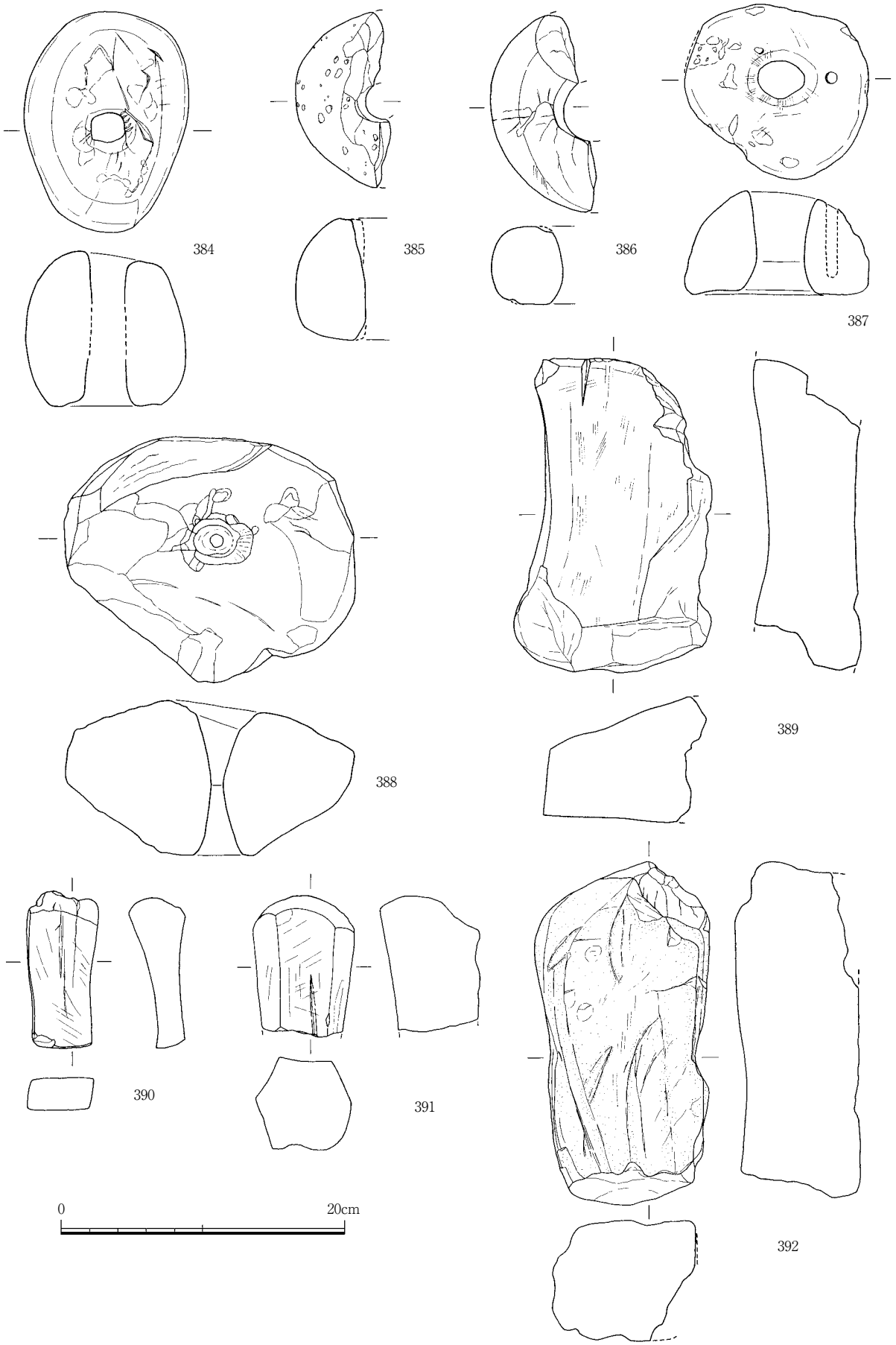
375～378は小型の石錘、有溝石錘といわゆる玄界灘式タイプのものがある。379は下端が折れ、体部中央に段を有し，段から下が磨かれている。ドリルか。380・381は磨石・叩石、382は石弾か。383は小型の砥石である。

384～388は大型の石錘でいずれも滑石製である。他に数点ある。中央に縄を通すための大きな孔があるが、387はその横に貫通していない小孔がある。389～392は中・大型の砥石で、砂岩質の石材と思われる。



第 33 図　Ⅰ区出土剥片石器・石核実測図（2/3）

第34図　Ⅰ区出土礫石器実測図１（1/3）



第 35 図　Ⅰ区出土礫石器実測図 2（1/4）

表１　出土遺物一覧表

観察表凡例
表の作成にあたっては複数に及ぶ実測者の見識差があり、表記の統一を図ることが困難であったため，実測者の記述を尊重しながら極力統一に努めて記述した。
（1）サイズ
　上段が器高、中段が口径、下段が底径の順に表記したが、蓋は下段に摘径を示した。（単位はcm）
　完結しない数値は、現存長の後に＋ α で表記した。
（2）胎土
　砂粒の大小については、微細＜細＜小：1mm＜中：1～3mm＜粗：4mm～の順で示し、砂粒の前に冠した。
（3）焼成
　焼成については、不良＜軟質＜良好＜堅緻に区分した。
（4）→調整：手法の特徴
　調整の用語は、カタカナで内外面に区分して略式的に記載した。
（5）→その他には、器形の形態や丹彩、穿孔、被熱などの特徴を記載した。
（6）→グリット中の数字（C-7 169）は取り上げ時のNoを示す。

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　土	焼成	色調（外：内）	調　整（外）	調　整（内）	
4	1	弥生	鉢	SD-01 A-10	13 14.8 6.4	石英粗砂粒と長石粒を少量含む	良好	淡褐色	口縁部はヨコナデ　胴部はナデ？	口縁部～胴部はストレートに立ち上がる	口縁部～胴部はストレートに立ち上がる
4	2	弥生	甕	SD-01 C-8 D-7	34.5+ α 24.0 ～ 24.5	良質で多くの石英中砂粒と少量の雲母微細粒を含む	良好	内面淡明赤褐色 外面くすんだ黄褐色	口縁部はヨコナデ　胴部は押圧ナデ～粗いハケ目	口縁部はヨコナデ　胴部は指頭押圧ナデ	外面に煮零れによる炭化物付着　摩滅顕著
4	3	弥生	蓋	SD-01 C-9	3.2 17.3 2.7 ～ 2.9（天径）	精良で微細～小砂粒を僅かに含む	良好	外：赤褐色 内：黄橙色	ナデ後に巾が３～5mm のヘラ工具による丹塗研磨	押圧ナデ	丹塗無頸壺蓋。外面は黒色顔料の塗布後に丹を重ねて放射状に研磨している。無頸壺と繋ぐ円孔は未穿孔
4	4	弥生	蓋	C-8	19.4+ α 6.2	精良で微細～小砂粒と僅少の赤鉄鉱塊を含む	良好	にぶい橙色	摩滅	摩滅	丹塗無頸壺蓋　外縁に孔径が5mm の円孔を穿つ　２孔１対？
4	5	弥生	壺底部	SD-01 C-9	9.1+ α 12	微細～小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	暗灰褐色	指頭押圧～ナデ	指頭・指先による押圧ナデ	大型壺の底部
4	6	弥生	台付甕	SD-01 C-9	14.3+ α 10.1	やや粗く細～石英中砂粒を多く含む	良好	黄燈褐色	裾部がヨコナデの外は指頭～指先による押圧ナデ	台部は指頭　甕は指頭～指先による押圧ナデ	浅く窪む台部は肉厚で胴部は倒卵形をなそう
4	7	弥生	器台	SD-01 C-9	10.5 + α 13.7	細～石英小砂粒と雲母微細をっく含む	良好	くすんだ黄橙色	目巾が 1.5 ～ 2mm の粗いハケ目	裾部はヨコナデ　体部は指頭～指先による押圧ナデ	裾部はラッパ状に緩やかに外反する
4	8	弥生	壺	SD-01 C-10	15.6 11.8 6	粗く細～小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	外：淡黒色 内：淡黄灰色	ナデ	底部は指頭押圧ナデ 胴部は押圧ナデ	口縁部は短く「く」字状に外反　胴部はやや肩の張った玉葱状
4	9	弥生	甕	SD-01 C-10	6.8+ α 27	精良で少量の小～中砂粒を含む	良好	外面は赤橙色 内面はにぶい橙色	ナデ	上唇はヨコナデ　胴部は指先による押圧ナデ	鋤先状の口縁部はあ内唇を僅かに摘み出す　頸部には中位には１条のＭ字凸帯が巡り口縁部との間に5mm 間隔で暗文を施文する　丹塗り
4	10	弥生	壺	東側斜面 腐食土	9.0+ α 14	精良で少量の細砂粒を含む	良好	灰黄褐色	ナデ	ヨコナデ～ナデ～絞り	丹塗袋状口縁壺。口縁部下と頸部中位および胴部との境にＭ字凸帯を貼り付けその凸帯上にはヘラ先工具に因るい暗文を施文
4	11	弥生	壺	SD-01 C-10	2.9+ α 4.4 + α	精良であるが細～石英中砂粒を比較的多く含む	良好	淡黄褐色	押圧ナデ	指頭押圧ナデ	無頸壺？底部に丹塗り痕あり　摩滅顕著
4	12	弥生	無頸壺	SD-01 C-10	4.2 + α 8.7	精良で細砂粒を含む	良好	にぶい橙色	研磨？	内唇は研磨　胴部は押圧ナデ	口縁部には孔径が 3mm の円孔を穿つ
4	13	弥生	壺	SC-02	28.8 + α	やや粗く石英・長石の細～中砂粒を多く含む	良好	明赤褐色	ハケ目	頸部は押圧ナデ　胴部はケズリ	頸部はストレートに内傾し胴部は球形をなす
5	14	弥生	壺	SD-01 C-10	9.4 9.6	多くの細～石英中砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	くすんだ淡黄橙色	押圧ナデ後にナデ？	底部は指頭、胴部は指先による押圧ナデ	外底面に黒斑がある　摩滅顕著
5	15	弥生	鉢	SD-01 C-10	9.9+ α 25.2	細～石英小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡灰褐色	口縁部はヨコナデ　体部は指頭押圧ナデ	口縁部はヨコナデ　体部は指頭押圧ナデ	体部は半球形で口縁部は僅かに外反する
5	16	古墳	ﾐﾆﾁｭｱ 鉢	SD-01 C-10	4.2 + α 6.7	多くの細～石英中砂粒の外に雲母微細を含む	良好	濃赤褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	体部は半球形で口縁部は直口して立ち上がる　内面には黒色物の付着痕がある
5	17	弥生	丹塗り 無頸壺蓋	SD-01 C-10	2.6 20.6	精良であるが多くの微細～石英小砂粒と少量の雲母微細を含む	良好	外：濃赤褐色 内：淡明赤橙色	押圧ナデ後に丹塗研磨	押圧ナデ	口縁に沿って孔径が 3mm の円孔を焼成前に穿つ
5	18	弥生	蓋	SD-01 C-10	9.2 22 6.2（天径）	粗く多くの細～石英粗砂粒と雲母微細を含む	良好	外：くすんだ橙褐色　内：くすんだ橙褐色～淡灰黒色	ナデ後に目巾が 2mm の粗いハケ目	天井部～体部上半は押圧ナデ　体部下半は粗いヨコハケ目	口縁部は大きくラッパ状に外反し、摘み部は外方に摘み出す　内面には２次被熱時の煤付着　全体に歪みあり
5	19	弥生	器台	SD-01 下 C-10	19.2 12.7 11.3	多くの細～石英小砂粒と少量の石英粗砂粒を含む	良好	淡黄灰褐色	受部と裾部はヨコナデ　体部はナデ	受部は押圧ナデ　裾部は指先による押圧ナデ	裾部は短く外方に摘み出す　外面に２次被熱による淡灰黒色物付着　歪
5	20	弥生	器台	SD-01 下 C-10	19.8 11.8 14.2	比較的多くの微細～石英小・中砂粒と雲母微細を含む	良好	淡灰褐色	目巾が 3mm の粗いハケ目	指頭～指先による押圧ナデ	受部・裾部は緩やかに外反する　外面には２次被熱による煤付着　調整は粗い
5	21	弥生	器台	SD-01 下 C-10	17.8 13.4	微細～細砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡黄褐色	目巾が 2mm の粗いハケ目	指先による押圧ナデ	裾部は緩やかに外反する
5	22	弥生	甕	SD-01 C-11	33.9 23.8 ～ 24.4 8.2+ α	多くの細～石英中砂粒の外に僅少の雲母微細を含む	良好	くすんだ黄灰褐色	口縁部はヨコナデ　胴部は目巾が 3mm の粗いハケ目	口縁部はヨコナデ　胴部は指先による押圧ナデ　底部は指頭押圧ナデ	口縁部は倒卵形の胴部から「く」字状に外反する　胴部の内面上半には炭化物の付着があり外面下半には２次被熱による器面の剥落がある
5	23	弥生	無頸壺	SD-01 C-11	10.3 10 5.8	多くの細～石英中砂粒の外に雲母微細と赤鉄鉱塊を含む	良好	外：淡明赤橙色 内：淡橙～淡灰白色	口縁部はヨコナデ	口縁部はヨコナデ　胴部は指先による押圧ナデ	胴部は扁平な球形で口縁部は短く「く」字状に外反する　摩滅顕著　丹塗か？

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　　土	焼成	色調（外：内）	調　　整（外）	調　　整（内）	
5	24	弥生	甕	SD-01 C-11	5.7 + α 8.0 ～ 8.2	微細～石英小砂粒を比較的多く含む	良好	淡灰褐色	目巾が 1mm の細かいハケ目	指頭～指先による押圧ナデ	底部には孔径が 4.5cm の円孔を穿つ　甑に転用
5	25	古墳	鉢	SD-01 下 C-11	5.1 13.6	石英微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	明赤橙色	口縁部ヨコナデ　体部ナデ　底部ヘラ先状工具による粗いナデ	口縁～体部はヨコナデ底面は押圧ナデ	体部は扁平な球形で口縁部は小さく外反する
6	26	弥生	高坏	SD-01 C-11	27 29.6 17	精良で比較的多くの微細～石英小・中砂粒と少量の雲母微細を含む	良好	明赤褐色	脚部はナデ後に丹塗研磨	坏部は粗い研磨　脚部上半は捩り後に押圧ナデ裾部はナデ	丹塗高坏　鋤先状の口縁部は強く張り出し、外面は丹に剥落が顕著脚部外面には黒色顔料の塗布後に丹を重ねて研磨している
6	27	弥生	丹塗り 高坏	SD-01 C-11	10.2+ α 26.6	精良で微細～細砂粒を引か雨滴多く含む外に僅少の赤鉄鉱の小塊含む	良好	外：濃赤褐色 内：明赤橙色	やや粗い研磨	ヨコナデ～押圧ナデ	鋤先状の口縁部は小さく内傾　脚部との境には２条の凸帯がＭ字状に連続して巡る
6	28	弥生	高坏	SD-01 C-11	9.0+ α 25.6	精良で微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	赤褐色	ヨコナデ後にヘラ工具による丹塗研磨	ナデ後に巾が２～3mm の粗い丹塗研磨	丹塗高坏。鋤先状の口縁部は半球形の体部から水平に張り出し、研磨はやや粗い
6	29	弥生	支脚	SD-01 東 D-8	13.1 6.5 8	粗く微細～石英小砂粒を多く含む	良好	淡明橙褐色	受部はヨコナデ　体部は指頭押圧ナ	受部はナデ　体部は絞り後に指先による押圧ナデ	受部は上唇が水平で内唇が張り出し裾部は小さくストレートに外反する
6	30	弥生	器台	SD-01 東 D-8	8.7+ α 11.1	粗く多くの細～石英中砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	淡明赤橙色	指先による押圧ナデ	指先による押圧ナデ	ラッパ状の裾部は緩やかに開く外面には２次被熱による赤変がある
6	31	弥生	丹塗り 壺	SD-01 東 D-8	21.6 + α 28.6	精良で精良で比較的多くの微細～小砂粒と少量の雲母微細を含む	良好	外面：赤橙色 内面：赤橙～黒色	頸部は巾 4mm のヘラ先状工具による研磨 胴部は押圧後に研磨	口頸部は押圧ナデ　頸部下半～胴部は指先による押圧ナデ	口頸部は玉葱状の胴部から短く外反し口唇部は浅く凹線状に窪む
6	32	弥生	壺	SD-01 東 D-8	3.4 + α 28	精良で容量の微細～小砂粒を含む	良好	明赤橙色	ヨコナデ	ヨコナデ	丹塗鋤先口縁壺　鋤先状の口縁部は大きく外方に摘み出し、端部にヘラ状工具で刻み目を施文し口縁下に４～6mm の間隔で暗文を施文
6	33	弥生	丹塗り 壺	SD-01 東 D-8	7.0 + α 30	微細～小砂粒を比較的多く含む	良好	くすんだ黄橙色	口縁部はヨコナデ　頸部は押圧ナデ	指先による押圧ナデ	鍬先状の口縁部は端部が凹レンズ状に浅く窪み、上唇には丹塗り痕がある　摩滅で丹の剥落が顕著
6	34	弥生	壺	SD-01 D-8	10 36	粗く微細～中・粗砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡明灰白色	ヨコナデ	ヨコナデ～押圧ナデ	丹塗壺　肉厚の鋤先状口縁部は頸部から水平に張り出し、凹レンズ状に窪む　端部と頸部に巡るＭ字状凸帯の上下端にヘラ先工具による刻目を施す　この凸帯と口縁部の間に暗文
6	35	弥生	丹塗り？ 袋状口縁壺	SD-01 D-8	4.4+ α 13	精良で微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	淡黄褐色	ヨコナデ	指頭押圧ナデ	口縁部は直口気味に立ち上がる
6	36	古墳	小型丸底壺	SD-01 D-8	6.1+ α	精良で微細～細砂粒を含む	良好	外：淡黄橙色 内：淡黒色	口頸部は押圧後にヨコナデ	口頸部は押圧ナデ　体部は指頭押圧後にヨコナデ	口頸部はストレートに外反し体部は扁平な玉葱状をなす　体部と頸部の境は凹線状に窪む
6	37	弥生	甕	SD-01 D-8	17 15 7	石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	ヘラ工具によるナデ後に一部ハケ目	押圧ナデ	胴部は倒卵形で口縁部は小さい逆Ｌ字状をなす
7	38	弥生	甕	SD-01 D-8	15.5+ α 7	精良で少量の小～細砂粒を含む	良好	外：橙色 内：にぶい褐色	摩滅	摩滅	摩滅顕著
7	39	弥生	甕	SD-01 D-8	26	石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	口縁部はヨコナデ　胴部はハケ目	ナデ	逆Ｌ字状の口縁部上唇にヘラ工具による３条の線刻がある
7	40	弥生	甕	SD-01 D-8	6.0+ α 29	比較的多くの細～小砂粒の外に僅少の雲母微細を含む	良好	外：赤褐色 内：淡黄灰褐色	口縁部はヨコナデ　胴部は目巾が 1.5mm のやや粗いハケ目	指先による押圧ナデ	逆Ｌ字状の口縁部下には１条のＭ字凸帯が巡る　外面には２次被熱による煤が付着　器面の剥落が著しいが丹塗りの可能性がある
7	41	弥生	甕	SD-01 D-8	12.1+ α 29	比較的多くの細～小砂粒の外に僅少の石英中砂粒と雲母微細を含む	良好	淡明黄橙色	押圧ナデ後に丹塗り研磨？	指頭・指先による押圧ナデ	逆Ｌ字状の口縁部下には１条の三角凸帯が巡り、外面には丹痕がある。丹塗りの可能性？
7	42	弥生	甕	SD-01 D-8	9.3+ α 23	多くの微細～石英小砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	外：赤褐色 内：淡明黄灰色	ナデ？	指先による押圧ナデ	口縁部は「く」字状に短く外反する　内面には丹零れがあり丹塗りの可能性がある　摩滅顕著で調整不詳
7	43	弥生	鉢	SD-01 D-8	6.7+ α 15.8	精良で比較的多くの微細～細砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	くすんだ淡黄橙色	押圧後にナデ	指頭押圧後にナデ	直口気味に立ち上がる口縁部は僅かに内傾する
7	44	弥生	丹塗り 高坏	SD-01 D-8	9.4+ α 27.6	精良で多くの微細～細砂粒と僅少の雲母微細・赤鉄鉱塊を含む	良好	赤褐色	押圧ナデ後丹塗り研磨	指先による押圧ナデ後に丹塗り研磨	鍬先状の口縁部は小さく下がる外面は丹の剥落が顕著
7	45	弥生	丹塗り？ 高坏	SD-01 D-8	12.0+ α 25	精良で多くの微細～石英小砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	外：淡明黄橙～淡明赤橙色 内：赤褐色	坏部はナデ　脚部は丹塗り研磨	坏部は指頭押圧ナデ脚部は絞り後にナデ	坏内面には丹痕がある鍬先状の口縁上唇には２次被熱による煤が付着
7	46	弥生	高坏	SD-01 D-8	15.4+ α 18.7	多くの細～小砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	くすんだ淡赤橙色	押圧後に研磨状のナデ	絞り後に押圧ナデ	脚部はラッパ状に大きく外反する
7	47	弥生	高坏	SD-01 D-8	14.3+ α	粗く微細～石英中砂粒と雲母微細を多く含む	良好	くすんだ赤橙色	目巾が 1mm 余のやや粗いハケ目	絞り後に押圧ナデ	脚部はラッパ状に外反する調整は粗く摩滅顕著
7	48	弥生	ﾐﾆﾁｭｱ 高坏	SD-01 D-8	4.3+ α	精良で微細～細砂粒を比較的多く含む	良好	淡橙褐色	ナデ	絞り後にナデ？	
7	49	弥生	ﾐﾆﾁｭｱ 高坏	SD-01 D-8	3.3+ α	微細～細砂粒を含む	良好	淡橙色	ナデ～押圧ナデ	ナデ～押圧ナデ	脚外面は巾が５～7mm のヘラ工具によるナデ　坏内面に丹痕が残り丹塗りミニチュアの可能性あり

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　　土	焼成	色調（外：内）	調　　整（外）	調　　整（内）	
7	50	弥生	支脚？	SD-01 D-8	7.7+ α 6.7	石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	指頭押圧ナデ	押圧ナデ	脚裾はストレートに外反　脚部は棒状に延びる
8	51	弥生	支脚	SD-01 D-8	14.3 7.8 7.8	粗く微細～石英中砂粒と雲母微細を多く含む	良好	くすんだ赤茶褐色	受部と裾部がナデ　体部は指頭・指先による押圧ナデ	絞り後に指頭押圧ナデ	筒状の体部は肉厚で水平に整えた上唇は外方に小さく摘み出す　調整は粗く外面は２次被熱による器面の剥落と赤変がある　歪みが著しい
8	52	弥生	支脚	SD-01 D-8	15 7.7 9.1	微細～小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	暗赤橙色	受部下と裾部上が指頭押圧ナデ　体部は指先による押圧ナデ	絞り後に押圧ナデ	肉厚の体部は筒状で受部上唇は僅かに内傾し、外面に２次被熱による器面の剥離と赤変がある　調整は粗い
8	53	弥生	支脚	SD-01 D-8	14 7.2 7.6	極めて粗く微細～石英中砂粒と雲母粒を多く含む	良好	濃赤橙色	指頭・指先による押圧ナデ	絞り後に指先による押圧ナデ	肉厚な体部は筒状で僅かに内傾する受部と裾部は外方に小さく摘み出す　調整は粗く外面は２次被熱による器面の剥落と赤変がある
8	54	弥生	器台	SD-01 D-8	12.9 9.7	粗く多くの微細～石英小砂粒と僅少の中砂粒・雲母微細粒を含む	良好	外：くすんだ暗橙褐色　内：淡茶褐色	口縁部はヨコナデ　体部は目巾が2mmの粗いハケ目	口縁部はヨコナデ　体部は指先による押圧ナデ	受部は緩やかに外反し調整は粗い
8	55	弥生	器台	SD-01 D-8	7.5+ α 9.6	微細～石英中砂粒と雲母微細粒を多く含む	良好	くすんだ黄褐色	受部はヨコナデ　体部はやや粗いハケ目	口縁部はヨコナデ　体部は絞り後に指先による押圧ナデ	受部は「く」字状に外反し体部はストレートに伸びた後に大きく開く　調整は粗い
8	56	弥生	器台	SD-01 D-8	7.7+ α 10.3 ～ 10.7	微細～小砂粒と雲母微細を含む	良好	明黄橙色	押圧ナデ	指頭・指先による押圧ナデ	体部はストレートに伸び内傾する裾部は小さく摘み出す　調整は粗く歪みがある
9	57	弥生	甕	216	30.5 23.5 8.0 ～ 8.2	石英・長石の中～粗砂粒を少量含む	良好	外：褐色 内：淡褐色	押圧後に目巾が３～4mmの粗いハケ目	押圧ナデ 内底面は指頭押圧ナデ	口縁部は倒卵形の胴部から「く」字状に短く外反する
9	58	弥生	甕	198 D-7	19 6.9	石英・長石粒を含む	良好	橙色	摩滅	内底面は指頭押圧ナデ	胴部は倒卵形？　摩滅顕著
9	59	弥生	甕	216	12.3 14.4 4	精良で細～石英小砂粒と長石粒を僅かに含む	良好	淡褐色	粗いハケ目	口唇部はヨコハケ目 胴部は指頭押圧ナデ	口縁部は内傾する胴部から短く「く」字状に外反する
9	60	弥生	鉢	216	10.2 15.6 6.2	精良で僅少の石英・長石細～小砂粒を含む	良好	外：淡褐～淡灰色 内：淡灰褐色	口縁部はヨコナデ　体部はやや粗いハケ目～ナデ	指頭押圧ナデ	口縁部は半球形の体部から直口して立ち上がる
9	61	弥生	鉢	216	9.3 16.8 6	少量の石英・長石粒を含む	やや軟質	褐色	口縁部はヨコナデ　胴部はタテハケ目～ナデ	口縁部はヨコナデ　胴部はタテハケ目～ナデ	口縁部は半球形の胴部からストレートに立ち上がる　全体に摩滅が顕著
9	62	弥生	丹塗り 無頸壺 蓋	216	3.4 15.6 1.6（摘径）	精良で細～小砂粒を僅かに含む	良好	外：赤色 内：褐色	ナデ後に放射状の丹塗研磨	ナデ	天部にボタン状の摘みは付き外縁には2.5 ～ 3cm巾で２孔１対の円孔がある
10	63	弥生	支脚	C-9	8.7+ α 9.0 ～ 9.4	微細～小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	暗赤褐色	指頭押圧ナデ	指頭～指先による押圧ナデ	極めて肉厚で裾部は水平に整えている
10	64	弥生	器台	SD-170	16 15.1 18.1	多くの微細～石英小砂粒と少量の雲母微細を含む	良好	くすんだ黄橙褐色	口縁部・裾部はヨコナデ　体部は押圧後にナデ	口縁部・裾部はヨコナデ　体部は指頭～指先による押圧ナデ	受部は内傾する体部から大きく屈曲して外反し、ラッパ状に開く裾部は上唇を小さく摘み上げている外面は摩滅顕著
10	65	弥生	器台	SD-170	15.8 14 16.9	多くの微細～小砂粒と少量の雲母微細を含む	良好	外：淡黄橙色 内：淡黄灰色	指頭・指先による押圧後にナデ	受部と裾部がヨコナデ体部は指頭・指先による押圧ナデ	受部は筒状のストレートな体部から強く屈曲して外反し、裾部はラッパ状に伸びやかに開く
10	66	弥生	器台	SD-207	18.5 11.4 12.3~12.6	多くの微細～小砂粒と僅少の石英粗砂粒と雲母微細を含む	良好	外：淡橙色 内：淡橙褐色	目巾が3mmの粗いハケ目	口縁部と裾部がヨコナデに他は指先による押圧ナデ	体部は肉厚で筒状をなし口縁部と裾部は緩やかに外反する
10	67	土師器	器台	SD-207	14.3+ α 9.9 ～ 10.1	多くの微細～細砂粒と雲母微細の外に僅少の石英小砂粒を含む	良好	外：くすんだ黄橙～明橙色 内：くすんだ灰乳色	指頭による押圧ナデ後に裾部はハケ目	指頭・指先による押圧ナデ	裾部は細い体日から緩やかにラッパ状に開く　裾部には２次被熱による赤変があり摩滅が著しい
10	68	弥生	器台	SD-170	17.0+ α 15.8	微細～小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	外：淡橙～淡灰橙色　内：淡灰橙色	裾部はヨコナデ　体部は指頭押圧後にナデ	裾部がヨコナデの外は指頭・指先による押圧ナデ	裾部は大きくラッパ状に開く調整は粗く摩滅が著しい
10	69	弥生	丹塗り 鋤先口縁壺	SD-207	47.8 28.5 10	石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	淡褐色	ナデ後にハケ目	上唇は研磨　頸～胴部は押圧ナデ	頸部は内傾して立ち上がった後に直口して鋤先口縁へと延びる　頸部と倒卵形の胴部の境には１条のM字凸帯が巡る
10	70	古墳	壺	193	23.5 15.7	精緻で僅少の白色粒と橙色粒子を含む	軟質	灰白色	口頸部はヨコナデ　胴部は縦方向の並行タタキ	ヨコナデ	外来系
10	71	弥生	壺	SD-507 SD-207	34.6 24.2 7.7	精良で石英と長石の小～粗砂粒を含む	良好	外面は赤橙色 内面は淡褐色	ナデ～研磨	押圧ナデ	丹塗鋤先口縁壺・頸部と胴部の最大径部に２条の三角凸帯が巡り頸部の凸帯間には暗文を施文する胴部最大径部に穿孔あり
11	72	弥生	ﾐﾆﾁｭｱ 鉢	A-8 168	4.85 9.2 3.6	細～中砂粒を多く含む	良好	褐色	ナデ	押圧ナデ	体部は内湾気味に立ち上がる
11	73	弥生	鉢	A-8 168	5.3 10.8 3.8	細～中砂粒を多く含む	良好	褐色	摩滅	摩滅	口縁部はストレートに外反する摩滅が著しく調整不詳
11	74	弥生	器台	A-8 168	10.5 7.4 10.6	やや粗く石英粗砂粒と長石粒を多く含む	良好	褐色	受部はヨコナデ　体部は指頭押圧ナ	受部はヨコナデ　体部は指頭押圧ナ	口縁部と脚裾は緩やかに外反
11	75	弥生	高坏	A-9 168	17.2 24.2 14.6	良質であるが細～粗砂粒を多く含む	良好	淡赤褐色	摩滅	脚部は押圧ナデ	口縁部は扁平な半球形の体部から大きく屈曲して外反する　脚部はラッパ状に開く

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　　土	焼成	色調（外：内）	調　　整（外）	調　　整（内）	
11	76	弥生	器台	A-9 168	9.7 7.4 9	粗く多くの石英粗砂粒と長石粒を含む	良好	褐色	受部と裾部端がヨコナデの外は指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ？	受部は緩やかに裾部は強く短く外反する
11	77	弥生	ﾐﾆﾁｭｱ 鉢	SD-01 A-9	4.2 3.15 2.4	細～中砂粒を含む	良好	褐色	口縁部はヨコナデ　体部は押圧ナデ	指頭押圧ナデ	体部は直口し口縁部は小さく外反
11	78	弥生	壺	B-8 167	8.25 9 7.4	石英細～粗砂粒と長石細砂粒を多く含む	良好	外：淡褐色～灰黒色 内：褐色～灰黒	口頸部はヨコナデ 胴部は押圧後にやや	指頭押圧後にヘラナデ	胴部はやや偏球形で口縁部は小さく内傾する頸部から短く直口する
11	79	弥生	鉢	B-8	10.2 15.1 5.3	やや粗く石英と長石の細～中砂粒を多く含む	良好	明褐色～淡褐色	口縁部はヨコナデ、胴部は目巾が 1 ～ 1.5mm の細かいハケ目	押圧ナデ	胴部は直口して立ち上がり、口縁部は短く外反する
11	80	弥生	鉢	B-8	16.9 25.6 8.6	やや粗く石英と長石の小～粗砂粒を比較的多く含む	良好	褐色	口縁部はヨコナデ　胴部はやや粗いハケ目	内唇部はヨコハケ目 胴部は押圧ナデ	口縁部は扁平な半球形の胴部から緩やかに「く」字状に外反する
11	81	弥生	丹塗り 鉢	B-8	21.6 27.4 8.6	やや粗く石英・長石の細～中砂粒を比較的多く含む	良好	褐色　外面は丹塗りの赤色	口縁部はヨコナデ 胴部は目巾が 2 ～ 3mm の粗いハケ目	口縁日はやや粗いハケ目　胴部はナデ　内底面は指頭押圧	胴部は玉ねぎ状の半球形で口縁部は「く」字状に緩やかに外反する
11	82	弥生	ﾐﾆﾁｭｱ 鉢	B-8	5.4 4.7 4	精良で僅少の細～中砂粒を含む	良好	淡灰褐色	ナデ	指頭押圧後にナデ	直口気味に立ち上がる口縁部下には孔径が mm の円孔を斜めに穿つ一部に丹彩痕があり丹塗か？
11	83	弥生	丹塗り 無頸壺 蓋	B-8	3.5 17	精良で比較的多くの細～小砂粒を含む	良好	淡褐色	丹塗研磨	押圧ナデ	外縁には孔径が 3mm の円孔を 1.5 ～ 2mm の巾で 2 孔 1 対穿つ
11	84	弥生	蓋	B-8	11 32 7.2（天径）	比較的精良で石英と長石の小～粗砂粒を僅かに含む	良好	淡褐色	摘み部は押圧ナデ　体部はナデ	指頭及び指先による押圧ナデ	体部上半には煤付着
11	85	弥生	器台	B-8	20 13.3 14.7	粗く石英・長石の小～粗砂粒を多く含む	良好	外：淡赤褐色 内：淡赤褐色～淡褐色	上縁はやや細かいハケ目　　下半部は粗いハケ目	押圧ナデ	肉厚で受部は短く外反する
11	86	弥生	器台	B-8	11.1 9 9.6	少量の石英・長石砂粒を含む	良好	外：淡赤褐色～褐色　内：淡灰褐色	口縁部・裾部はヨコナデ　体部は押圧ナデ	口縁部・裾部はヨコナデ　体部は押圧ナデ	受部と裾部は筒状の体部から短く外反する
11	87	弥生	器台	B-8	11.8 6.5 6.4	比較的良質で少量の石英と長石の細～中砂粒を含む	良好	暗褐色	口縁部はヨコナデ 体部は押圧ナデ　　脚部は指頭押圧ナデ	指頭押圧後にナデ	体部は筒状で受部と脚裾部は小さく外反する
12	88	弥生	壺	A-10 B-10 216	46.7 20.9 10.9	粗く石英粗砂粒と長石粒を多く含む	良好	褐色	口縁部と凸帯部がヨコナデ　胴部は押圧ナデ	押圧ナデ　底部は指頭押圧ナデ	胴部中位に 2 条の M 字凸帯が巡る
12	89	弥生	甕	B-10 216	29 24.8 7.2	やや粗く石英小～中砂粒と長石小多く含む	良好	明褐色～褐色	口縁部はヨコナデ　胴部はやや粗いハケ目	指頭押圧後にナデ	底部には孔径が 1.5 ～ 2cm の円孔を焼成後に外面から穿つ　甑に転用
12	90	弥生	鉢	B-10 216	17.9 26.6 8.7	やや粗く比較的多くの石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	明褐色～淡褐色	口縁部はヨコナデ　胴部はナデ？	押圧ナデ	胴部は玉葱状の半球形で口縁部は逆 L 字状をなす　摩滅顕著
12	91	弥生	蓋	B-10 216	9.5 28 6.3（天径）	少量の石英粗砂粒と長石粒を含む	良好	褐色	天井部はナデ　体部は粗いハケ目	指先押圧ナデ～ナデ	口縁部～体部上半に煤付着し外面には丹痕が残る
12	92	古墳	椀	B-10 SX194	5.8 14.8	精良で細～小砂粒を僅かに含む	良好	灰黒色	口縁部はヨコナデ　体部はナデ	ナデ	口縁部は扁平な半球形の体部から小さく外反する
12	93	弥生	器台	B-10 216	16.7 1O 11	やや粗く細～中砂粒を比較的多く含む	良好	褐色	受部・脚裾はヨコナデ 体部は押圧ナデ	受部・脚裾はヨコナデ 体部は押圧ナデ	受部は肉薄で筒状の体部から緩やかに外反する
13	94	弥生	丹塗り 壺	C-7	31.5 25.7 8.6	精良で比較的多くの細～中砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	にぶい黄燈色	頸部～胴部はやや粗い研磨	孔径部はヨコナデ　胴部は押圧ナデ　内底面は指頭押圧ナデ	頸部は倒卵形の胴部から小さく内傾して立ち上がり、口縁部は緩やかに外反する
13	95	弥生	長頸壺	C-7	4+ α 24.8	微細砂と雲母微細を比較的多く含む	良好	くすんだ赤橙色	押圧ナデ	指先による押圧ナデ	鋤先状の口縁部端は凹レンズ状に浅く窪む　調整はやや粗い
13	96	弥生	壺	C-7	9.3+ α 12.6+ α	細～小砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	ナデ	ナデ	口縁部はストレートに外反する頸部から短く逆 L 字状に摘み出す胴部は肩の張った倒卵形
13	97	弥生	丹塗り 長頸壺	C-7	9.9 8	良質であるが微細砂と雲母微細を比較的多く含む	良好	外：赤褐色 内：くすんだ赤橙色	ナデ後に丹塗研磨	口縁部はヨコナデ　頸部は指先による押圧ナデ	口縁部は直口して立ち上がる
13	98	弥生	壺	C-7	30+ α 28	石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	ナデ	押圧ナデ	口縁部は T 字状　胴部上半には 6.6cm と 10.5cm の間をおいて 3 条の M 字凸帯が巡る
13	99	弥生	丹塗り 壺	C-7	13.5+ α 27	精良で細～小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	外：淡赤褐色 内：淡赤橙色	口縁部はヨコナデ　頸部はナデ後に研磨	指先による押圧ナデ	口縁部は鋤先状で頸部には 2 条の M 字凸帯が巡る　その凸帯を境に 2mm 巾の暗文を 3 ～ 4mm の間で施文している
13	100	弥生	袋状口縁壺	C-7	9+ α 15.2	やや多くの石英中砂粒と若干の雲母・角閃石微細を含む	良好	外：褐色～赤褐色　内：にぶい褐色	口縁部はヨコナデ　頸部は細かいハケ目	口縁部はヨコナデ　頸部は細かいハケ目	口縁部は緩やかに屈曲して逆「く」字状に内湾する　丹塗り？
13	101	弥生	丹塗り 袋状口縁壺	C-7	8.5+ α 11.6	精緻で微細砂と雲母微細を僅かに含む	良好	外：褐色～赤褐色　内：くすんだ淡橙色	口縁部はヨコナデ後にヨコ研磨　頸部はタテ研磨	口縁部はヨコナデ　頸部は指先による押圧ナデ	緩く内湾する袋状口縁下には 1 条の M 字凸帯が巡り内面には丹零れがある
13	102	弥生	袋状口縁壺	C-7	12.7+ α 19.2	やや粗く多くの微細～小砂粒と少量の雲母微細 w 含む」	良好	くすんだ淡黄灰色	口縁部と凸帯部がヨコナデの外は押圧ナデ後にハケ目	口縁部はヨコナデ　頸部は押圧ナデ？	袋状の口縁部は短く内傾し頸部と胴部との境には 1 条の三角凸帯が巡る　調整は粗く、器面の摩滅が顕著

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　土	焼成	色調（外：内）	調　整（外）	調　整（内）	
14	104	弥生	壺	C-7	10.2 9.7 4.9	石英と長石の小～粗砂粒をやや多く含む	良好	外：にぶい橙色 内：にぶい黄燈色	口頸は場ヨコナデ　胴部は上半がナデ下半は指頭押圧ナデ	口頸部はヨコナデ　胴部は上半がナデ下半は指頭押圧ナデ	口縁部は玉葱状の胴部から緩やかに「く」字状の外反する
14	105	弥生	丹塗り？ 無頸壺	D-7 198	8.8 11 5	精良で細かい石英・調査粒を含む	良好	外：赤橙色 内：にぶい黄燈色	研磨？	押圧ナデ	口縁部は玉葱状の胴部から緩やかに屈曲して外反する　口唇には孔径が2mmの2孔1対の円孔を穿つ
14	106	弥生	無頸壺	C-7	4+ α 3.8	精良で石英・長石の細～中砂粒と雲母片を含む	良好	にぶい黄燈色	研磨	押圧ナデ	
14	107	弥生	無頸壺	C-7 169	13 10.4 5.5	石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	外面は赤褐色 内面は灰褐色	口縁部はヨコナデ　胴部は研磨	口縁部はヨコナデ　胴部は指頭押圧ナデ	口縁部は短く外反し胴部は胴の張った偏球形をなす　口縁部には蓋受けの円孔が付く可能性がある
14	108	弥生	無頸壺	C-7	15.5 17 10	精良で僅少の微細砂を含む	良好	外面は赤褐色 内面は淡黄燈色	ナデ後に研磨	ナデ～指頭押圧ナデ	丹塗　口縁部は逆L字状で胴部は樽状をなす　内面に小さな丹零れがある
14	109	弥生	壺	C-7 169	11.2 7.2	石英と長石の細～小砂粒を含む	良好	浅黄色	ナデ	指頭押圧ナデ～ナデ	胴部は球形？
14	110	古墳	甕	C-7	15.8 + α	小～粗砂粒を含む	やや軟質	灰黒色	細かい格子目タタキ	ナデ？	球形の胴部上半には10条以上の細凹線が巡る
14	111	弥生	壺	C-7	7 7.4	精良で細～石英中砂粒を多く含む	良好	外：濃赤褐色 内：淡黒色	ナデ後にやや粗い研磨	指頭押圧ナデ	丹塗　摩滅顕著
14	112	弥生	丹塗り 壺	C-7	7.3 6.8	精良で少量の小～中砂粒と雲母微細を含む	良好	外：橙色 内：にぶ黄橙色	ナデ後に丹塗研磨	指頭押圧ナデ	胴部は肩の張った倒卵形？
14	113	弥生	甕	D-7 198	22 7	石英・長石の細～小砂粒を含む	良好	橙色	摩滅	ナデ～指頭押圧ナデ	口縁部は逆L字状をなす　摩滅顕著
14	114	弥生	鉢	C-7	8 11 5	石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	口縁部はヨコナデ　胴部はやや粗いハケ目	押圧ナデ	口縁部は短く逆L字状に摘み出す
14	115	弥生	甕	C-7	6 24	細砂粒と雲母微細粒を比較的多く含む	良好	くすんだ灰黄褐色	口縁部はヨコナデ　胴部は目巾が1.5mmのやや粗いハケ目	口縁部はヨコナデ　胴部は指先による押圧ナデ	逆L字状の口縁部は外唇が小さく下がる
14	116	弥生	甕	C-7	8.4 24.6	微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	外：黒色 内：くすんだ灰黄褐色	口縁部はヨコナデ　胴部は目巾が2mmの粗いハケ目	押圧ナデ	口縁部は外唇が下がった逆L字状をなし外面には2次被熱による煤が付着
14	117	弥生	甕	C-7	8.7 25	微細～細砂粒を多く含む	良好	外：黒色 内：くすんだ灰茶褐色	口縁部はヨコナデ　胴部は目巾が2～3mmの粗いハケ目	押圧ナデ	口縁部は逆L字状をなし外面には2次被熱による煤が付着
14	118	弥生	甕	Ⅱ区 X-7	15.15 14.4 3.2	石英と長石の小～中砂粒を僅かに含む	良好	外：黒褐色 内：淡灰褐色	口縁～胴部上半はやや細かいハケ目　下半部はケズリ	口縁部はハケ目　胴部は押圧ナデ　底部は指頭押圧ナデ	口縁部は短く外反し、外面全体に被熱による煤が付着
15	119	弥生	甕	C-7	15.2+ α 25	細砂粒と雲母粒を含む	良好	くすんだ黄橙色	口縁ヨコナデ　胴部は目巾が3mmの粗いハケ目	指先による押圧ナデ	逆L字状の口縁部下には1条の三角凸帯が巡り外面には煮零れ様の煤が付着
15	120	弥生	甕	C-7	12.4 + α 23～23.8	石英・長石の小～中砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	口縁部～凸帯下はヨコナデ　胴部は粗いハケ目	ナデ	逆L字状の口縁部下には1条の三角凸帯が巡る　胴部は倒卵形
15	121	弥生	甕	C-7	22 + α 34.4	石英・長石の小～中砂粒と赤色粒を含む	良好	外：にぶい黄橙色　内：にぶい褐色	目巾が2mmの粗いハケ目	押圧ナデ	逆L字状の口縁部下には1条の三角凸帯が巡る　胴部は倒卵形
15	122	弥生	甕	C-7	11.9+ α 27	良質で石英と長石の細～中砂粒を少量含む	良好	褐色	ヨコナデ	ナデ	逆L字状の口縁部下に1条のシャープな三角凸帯が巡り上唇にはヘラ先状工具による4点の刺突文を線刻
15	123	弥生	甕	X-7	5.4+ α 25	石英・長石の細～小砂粒を少量含む	良好	褐色	ヨコナデ	ナデ	逆L字状の口縁部下に1条のシャープな三角凸帯が巡り上唇にはヘラ先状工具による4点の刺突文を線刻
15	124	弥生	丹塗り 甕	C-7	9.5+ α 22.4	精良 微細～小砂粒と僅少の赤鉄鉱塊を含む	良好	外：赤褐色 内：淡明橙色	押圧ナデ後に丹塗研磨	指先による押圧ナデ	口縁部は逆L字状をなし内面には煮零れがある
15	125	弥生	壺	C-7	3.8+ α 14	石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	暗赤褐色	摩滅	摩滅	口縁部は逆L字状の短く摘み出し頸部には3条の細凹線が巡る
15	126	弥生	甕	C-7	15+ α 25.4	やや粗く石英・長石の小～中砂粒を含む	良好	にぶい褐色	口縁部はヨコナデ	口縁部はハケ目　胴部は押圧ナデ	「く」字状の口縁部は短く外反する
15	127	弥生	甕	C-7	12+ α 28	石英・長石の小～中砂粒を含む	良好	外：にぶい黄褐色　内：暗褐色	口縁部はヨコナデ　胴部は目巾が2mmの粗いハケ目	内唇はハケ目　胴部は押圧ナデ	「く」字状の口縁部は倒卵形の胴部から大きく屈曲して外反する
15	128	弥生	甕	C-7-169	11+ α 8	石英と長石の細～小砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	ナデ？	指頭・指先による押圧ナデ	
15	129	弥生	甕	D-7	3.5 + α 0.7*1（孔径） 7.2	多くの石英と長石の小～粗砂粒，雲母微細を含む	良好	外：橙色 内：明黄褐色	摩滅	底部は指頭押圧ナデ	底部中央に7～11mmの円孔を焼成後に穿つ 甑に転用
15	130	弥生	甕	D-7	6.0+ α 7.2	細～粗砂粒と雲母微細を多く含む	良好	くすんだ淡灰黄褐色	目巾が3mmの粗いハケ目	底部は指頭押圧ナデ 胴部は押圧ナデ	底部中央に10mmの円孔を焼成後に穿つ　甑に転用
15	131	弥生	甕		7.4+ α	粗く微細～石英中砂粒と雲母微細を多く含む	良好	暗灰褐色	摩滅	指頭押圧ナデ後にナデ～ハケ目	内面には炭化物様の黒色物が付着し外面は摩滅顕著

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　土	焼成	色調（外：内）	調　整（外）	調　整（内）	
16	132	弥生	甕	C-7	9.3+ α 7.6 ～ 7.8	比較的多くの微細～細砂粒の外に僅少の石英粗砂粒と雲母微細を含む	良好	くすんだ淡橙褐色	目巾が 1mm の細かいハケ目	底部は指頭、胴部は指先による押圧ナデ	底部には孔径が 2cm の円孔を焼成後に穿つ　甑に転用　外面は 2 次被熱による器面の劣化が顕著
16	133	弥生	甕	C-7	9.7+ α 7.2	微細～小砂粒を比較的多く含む	良好	淡赤橙色	目巾が 2mm 弱の粗いハケ目	底部は指頭押圧　胴部は指先による押圧ナデ	底部には孔径が 1.5cm の円孔を焼成後に穿つ　甑に転用
16	134	弥生	甕	C-7	9.5+ α 7.6	やや粗く多くの石英・長石の小～粗砂粒と僅少の角閃石粒を含む	良好	にぶい黄褐色～黄褐色	ハケ目	指頭・指先による押圧ナデ	摩滅顕著
16	135	弥生	鉢	C-7	10.7+ α 8.8	粗く多くの細～小砂粒と雲母微細の外に僅少の赤鉄鉱塊を含む	良好	外：淡黄橙色 内：赤褐色	押圧後に目巾が 2 ～ 3mm の粗いハケ目	底部は指頭押圧ナデ 胴部は指先による押圧ナデ	内　面　丹　塗　鉢か？
16	136	弥生	甕	C-7	8.1+ α 8.8 ～ 9.1	細～石英中砂粒を多く含む	良好	くすんだ燈褐色	目巾が 1mm の細かいハケ目	指頭押圧ナデ	調整は粗く内面には炭化物付着痕がある
16	137	弥生	甕	C-7	15.9+ α 11.6	少量の細～石英粗砂粒と雲母微細を含む	良好	外面は灰褐色 内面はにぶい黄燈色	ハケ目	指頭・指先による押圧ナデ	胴部は倒卵形
16	138	弥生	壺	C-7	3.4+ α 4.6	微細～細砂粒と僅少の赤鉄鉱小塊を含む	良好	くすんだ淡黄燈色	ナデ	胴部はナデ　底部は指頭押圧ナデ	摩滅顕著
16	139	弥生	甕	C-7	3.3+ α 4	比較的多くの微細～小砂粒の外に僅少の雲母粒を含む	良好	外：くすんだ淡黄灰色　内：淡橙色	摩滅	胴部はナデ　底部は指頭押圧ナデ	壺？　外面には煤様の黒色物は付着　摩滅顕著
16	140	弥生	台付甕	C-7	4.3+ α 15.1	多くの細～小砂粒と僅少の雲母・赤鉄鉱微細を含む	良好	灰黄褐色	押圧後に細かいハケ目	押圧ナデ	脚は短くラッパ状に開く
16	141	弥生	台付甕	C-7	18.5+ α 18.8	やや粗く多くの石英・長石砂と僅少の雲母微細を含む	良好	にぶい黄燈色	ハケ目後にナデ	ナデ	全体に肉厚で脚部はラッパ状に開く
16	142	弥生	鉢	C-7	11.5+ α 30	石英や長石の細～粗砂粒と赤鉄鉱小塊を含む	良好	橙色	口縁部はヨコナデ	ナデ	逆 L 字状の口縁部は小さく外傾する　胴部は半球形　摩滅顕著
16	143	弥生	鉢	C-7	14.8 24.5 6.5	粗く石英や長石の小～粗砂粒と雲母粒を多く含む	良好	外:灰褐色　内:にぶ褐色	胴部はハケ目後にナデ	ナデ	口縁部はやや扁平な球形の胴部から屈曲して「く」字状に外反する
16	144	弥生	鉢	C-7	11.2+ α 17	粗く多くの微細～小砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	外：淡灰黄～淡黄橙色　内：くすんだ淡黄橙色	目巾が 1.5mm 程のハケ目	指頭押圧ナデ	口縁部は短く外反する　調整は粗く煤様の黒色物が付着
17	145	弥生	鉢	C-7	9.0+ α 22.6	精良で少量の微細～細砂粒を含む	良好	外：明赤色 内：淡橙色	丹塗研磨	丹塗研磨	丹塗鉢　直口気味に立ち上がる口縁部は僅かに内傾し体部中位には 1 条の三角凸帯が巡る　高坏か？
17	146	弥生	鉢	C-7	6.4+ α 13.8	精良で小～中砂粒を含む	良好	赤橙色	研磨？	研磨	丹塗り　体部は半球形で口縁部は直口して立ち上がる
17	147	弥生	鉢	C-7	7.4 14 4.6	石英・長石・赤色鉱物を含む	良好	橙色	口縁部～体部上半はヨコナデ　下半はナデ	口縁部～体部はナデ 底部は指頭押圧ナデ	体部は扁平な半球形で口縁部は短く直口して立ち上がる
17	148	弥生	鉢	C-7	10.5 14 6.4	細～石英小砂粒と雲母微細を僅かに含む	良好	外：にぶい黄橙色　内：黒色	粗いハケ目	押圧ナデ？	体部は肉厚で口縁部は直口して立ち上がる
17	149	弥生	鉢	C-7	7.7 10.6 4.6	石英小砂粒を多量に含む	良好	にぶい黄橙色	ヨコナデ～ナデ	ヨコナデ～ナデ	口縁部は直口ぎみに立ち上がる
17	150	弥生	ﾐﾆﾁｭｱ 鉢	C-7	5.2 11 4.5	石英・長石の小～中砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	灰黄色	ナデ	指頭押圧ナデ	口縁部はストレートに立ち上がる
17	151	弥生	鉢	C-7	4.9 9 5.9	細～石英小砂粒と雲母微細・赤鉄鉱塊を含む	良好	外：にぶい橙～にぶい褐色 内：にぶい黄橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	体部は肉厚でストレートに立ち上がる
17	152	弥生	丹塗り ﾐﾆﾁｭｱ 鉢	A-7	6 5.45 3	石英・長石小～中砂粒を比較的多く含む	良好	褐色	ヨコナデ	指頭押圧ナデ	口縁部は僅かに内傾氏内外綿には丹彩痕がある
17	153	弥生	ﾐﾆﾁｭｱ 鉢	C-7	6.9 6.4 3	石英・長石の小～中砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	口縁部は半卵形の胴部からやや内湾気味に立ち上がる
17	154	弥生	鉢	C-7	5.2 7.2 4	石英小～中砂粒と雲母微細と赤鉄鉱塊を含む	良好	外：にぶい褐色 内：黒褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	肉厚の体部は小さく内湾気味に立ち上がる
17	155	古墳	ﾐﾆﾁｭｱ 鉢	C-7	2.2+ α 2.8	多くの微細～細砂粒・雲母微細と僅少の石英小砂粒を含む	良好	くすんだ淡黄褐色	押圧ナデ	指頭押圧ナデ	
17	156	弥生	鉢	C-7	5.6 10.3 5.4	石英小～中砂粒と僅少の雲母粒を含む	良好	灰黄色	ナデ	指頭押圧ナデ	体部はやや肉厚でストレートに立ち上がる
17	157	弥生	ﾐﾆﾁｭｱ 鉢	C-7	5.5 7.1 3.3	やや多くの石英・長石の細～中砂粒と僅少の雲母を含む	良好	明黄褐色	ナデ	指頭押圧ナデ	直口気味に立ち上がる口縁部は僅かに内傾する
17	158	弥生	鉢	D-7	11 11 5.4	やや粗く多くの石英砂と僅少の雲母微細を含む	良好	褐色	口縁部はヨコナデ	口縁部はヨコナデ 胴部は押圧ナデ	口縁部は摘み上げ気味にストレートに立ち上がる
17	159	弥生	丹塗り 高坏	C-7	13.0+ α 19.5	精緻で僅少の微細～細砂粒を含む	良好	外：暗赤褐色 内：にぶい黄燈色	脚部はタテ研磨	丹塗研磨	坏部は扁平な半球形　坏部外面は摩滅が著しい

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　　土	焼成	色調（外：内）	調　　整（外）	調　　整（内）	
17	160	弥生	丹塗り？ 高坏	C-7	23.8 28.6 16.4	石英・長石の細～中砂粒と僅少の赤鉄鉱粒を含む	良好	にぶい橙色	脚部はナデ後に研磨？	坏部は研磨？　脚部上半は絞り後に押圧ナデ下半は指頭押圧～ナデ	鋤先状のっ口縁部は長く張り出す坏部は摩滅が著しいが丹塗の可能性が大？
17	161	弥生	高坏	D-7	6.0+ α 27	精良で僅少の細～小砂粒を含む	良好	橙色	摩滅	摩滅	鋤先状の口縁部は口唇が下方に外反する　丹塗り？
17	162	弥生	丹塗り？ 高坏	C-7	8.0+ α 24	良質で石英や長石の小～粗砂粒を比較的多く含む	良好	橙色	研磨	押圧後に研磨	口縁部は外方に長く摘み出したT字状　摩滅顕著
17	163	弥生	丹塗り 高坏	C-7	6.6+ α 22.6	精良で微細～小砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡赤橙色	口縁部はヨコナデ　胴部は押圧ナデ後に丹塗研磨	押圧ナデ	鋤先状の口縁部は水平に摘出す
17	164	弥生	高坏	C-7	16.3+ α 24.8	微細～細砂粒を比較的多く含む	良好	外：明赤色 内：淡明黄橙色	押圧後に丹塗研磨	坏部は丹塗り研磨　脚部は絞り後にナデ	丹塗高坏。口縁部は鋤先状をなし外唇は僅かに下がる　摩滅顕著
17	165	弥生	高坏	C-7	15.6+ α 16.3 ～ 16.6	やや粗く多くの細～石英中砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	外：濃赤褐色 内：淡灰黄色	間巾が 1mm の細かいハケ目後に丹塗り研磨？	坏部は押圧ナデ　脚部は指先による押圧ナデ	脚部は朝顔状に開き端部は水平に摘み出す　外面は全面丹塗
17	166	弥生	高坏	C-7	14.1 + α 14.4 ～ 14.5	やや粗く多くの細～石英中砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	くすんだ灰黄褐色	ハケ目	絞り・押圧ナデ後にハケ目	全体に整形・調整ともに粗い
18	167	弥生	丹塗り 高坏	C-7	16+ α	粗く微細～石英中砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡灰褐色	ナデ後にハケ目	脚上部は指頭押圧ナデ下半部はハケ目	脚部はラッパ状に大きく開く外面には丹痕がある
18	168	弥生	高坏	C-7	19+ α 17.2	精良で石英小～中砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	にぶい黄橙色	研磨	指頭・指先による押圧ナデ	脚部は細長く裾部は大きくラッパ状に開く
18	169	弥生	高坏	D-7	7.5+ α 17.6	精良で少量の微細～細砂粒と雲母微細を含む	良好	外：赤褐色 内：淡明橙色	巾が 2 ～ 3mm のヘラ先工具による丹塗り研磨	裾部がヨコナデの外は指先による押圧ナデ	丹塗高坏　ラッパ状に外反する脚部は端部が凹レンズ状に浅く窪む裾内面には籾圧痕がある
18	170	弥生	丹塗り 高坏	C-7	4.7+ α 18	精良で少量の微細～小砂粒を含む	良好	外：赤褐色 内：淡明赤橙色	押圧ナデ後に研磨	指先による押圧ナデ	脚部は朝顔状に開き端部は凹レンズ状に浅く窪む
18	171	弥生	器台	C-7	17.5 9.4 13.6	やや粗く石英と長石の小～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	受部と裾部はヨコナデ体部はあらいハケ目	受部と裾部はヨコナデ体部は押圧後に粗いハケ目	受部は粗利気味に外反し体部～裾はラッパ状に緩やかに開く
18	172	弥生	器台	C-7	16 8.6 11.2	微細～小砂粒を含む	良好	淡褐色	ナデ　ハケ目	押圧ナデ	受部・裾部は緩やかに外反する
18	173	弥生	器台	C-7	15.3+ α 9.5	比較的多くの石英・長石の小～粗砂粒と僅少の雲母粒を含む	良好	外:橙色　内:にぶい黄橙色	押圧後にハケ目	ナデ	口縁部は細く伸びた体部から短く外反する
18	174	弥生	器台	B-7	13.0+ α 9.7	やや粗く石英・長石の小～粗砂粒を比較的多く含む	良好	淡褐色	ヨコナデ～ハケ目	指頭押圧ナデ	口縁部は短く外反する
18	175	弥生	器台	C-7	14+ α 9.2	やや粗く石英小～中砂粒を比較的多く含む	良好	外：橙色 内：明黄褐色	口縁部はヨコナデ　体部はやや粗いハケ目	押圧ナデ	受部は緩やかに外反し裾部は内湾気味に開く
18	176	弥生	器台	B-7	13.2+ α 11	やや粗く石英砂と長石の細～粗砂粒を比較的多く含む	良好	外：褐色 内：淡褐色	口縁部はヨコナデ　体部は目巾が 2mm の粗いハケ目	口縁部はヨコナデ　押圧ナデ	受部は細く内傾して立ち上がる体部から大きく外反し裾部はラッパ状に開く
18	177	弥生	器台	C-7	8.8+ α 8.9	石英・長石の細～小砂粒を含む	良好	橙色	目幅が 3mm の粗いハケ目	指先による押圧ナデ	受部は小さく外反する　　長頸壺？
18	178	弥生	器台	D-7	16.2 8.2 10.3	粗く多くの石英・長石の小～粗砂粒の外に僅少の角閃石や雲母微細を含む	良好	外：淡赤褐色 内：褐色～淡赤褐色	指頭・指先による押圧ナデ	指頭押圧ナデ	受部は短く直口して立ち上がり脚裾部は小さく外反する
18	179	弥生	器台	B-7	7.2 7.8 9	石英・長石の中～粗砂粒を多く含む	良好	外：淡赤褐色 内：褐色～	口縁部はヨコナデ　体部は指頭押圧ナデ	受部はナデ　裾部は指頭押圧ナデ	受部は体部から直口して立ち上がり裾部は屈曲して外方に摘み出す
18	180	弥生	器台	D-7	11.5 7 11	やや粗く石英・長石の細～中砂粒と雲母粒を多く僅少の角閃石を含む	良好	褐色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	肉厚で受・裾部は直口して立ち上がる
19	181	弥生	丹塗り 蓋	C-7	1.8 10.6 1.8（天径）	精良で微細～細砂粒を含む	良好	外：赤色 内：にぶい橙色	ナデ後に放射状の丹塗研磨	押圧ナデ	外縁には孔径が 2mm の円孔を 1cm の間で 2 孔 1 対穿つ天井部はフラット
19	182	弥生	蓋	C-7	1 9.2 0.9（天径）	精良で細砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	放射状の研磨	押圧ナデ	体部は低く天井部には小さなプラット面が付く。外縁には孔径が 3mm 弱の 2 孔 1 対の円孔が 2cm の間をおいて穿たれている円孔は口径が 3mm 弱
19	183	弥生	丹塗り 無頸壺 蓋	C-7	2.6+ α 14.8	微細～小砂粒を含む	良好	外：赤褐色 内：くすんだ赤橙色	押圧ナデ後に丹塗研磨	押圧後にナデ	口縁に沿って孔径が 3mm の円孔を 2.5cm の間で焼成前に穿つ
19	184	弥生	丹塗り 無頸壺 蓋	C-7	1.8 10.8	精良であるが細～小砂粒を比較的多く含む	良好	外：赤褐色 内：くすんだ赤橙色	ナデ後に放射状の丹塗研磨	押圧ナデ	陣笠状で外縁には口径が 3mm の 2 孔 1 対の円孔を 1.5cm の間で配する
19	185	弥生	蓋	B-7	8.9 24 6.2（天径）	多くの微細～小砂粒と雲母赤色鉱物を含む	良好	赤褐色	横ナデ・ハケ目	押圧ナデ・ハケ目	両面とも赤色顔料痕跡
19	186	弥生	蓋	D-7	8.6 19.4 4.4（天径）	比較的多くの微細～小砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	淡黄褐色	摘み部は指頭押圧ナデ口縁～体部は指先による押圧ナデ	口縁部はヨコナデ上部は指先による押圧ナデ　体部は押圧ナデ	全体に歪で摘み部は小さく外方に摘み出す　体部はラッパ状に大きく開　く調整は粗い
19	187	弥生	蓋	C-7	8.2 29 4.5（天径）	石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	橙色	摩滅	指頭押圧ナデ～ナデ	外天部は凹レンズ状をなし伸びやかに開く外縁には 2 次被熱による煤が付着

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　　土	焼成	色調（外：内）	調　　整（外）	調　　整（内）	
19	188	弥生	蓋	C-7	8.4 28.4 5.8（天径）	やや粗く多くの石英・長石の細～中茶褐の外に角閃石微細を僅かに含む	良好	外面は橙色　内面は鈍い褐色	摩滅	体部はナデ　摘み部は絞り後に指頭押圧ナデ	体部はストレートに大きく開き、摘み部は小さく外方に摘み出す　外縁には２次被熱による黒変がる
20	189	弥生	丹塗り 壺	C-7	52.2 26 10.5	精良で石英中砂粒と長石片の外に僅少の赤鉄鉱塊を含む	良好	にぶい黄燈色	ヨコナデ～研磨　ナデ～粗いハケ目	ヨコナデ～押圧ナデ	鍔先口縁は水平に整え頭部中位と胴部との境に１条のM字凸帯が巡る　この凸帯間と口縁部下には５本を１単位とする暗文が施文されている　卵形の胴部中位にも３条のM字凸帯が巡る
20	190	弥生	甕	C-7 169	33 27.3 8.2	石英と長石の細～中砂粒を含む	良好	外面は橙色 内面はにぶい橙色	口縁部はヨコナデ　胴部はやや粗いハケ目	更新部はヨコナデ　胴部は押圧ナデ　内底部は指頭押圧ナデ	胴部は倒卵形をなし逆Ｌ字状の口縁部下には１条の三角凸帯が巡る
20	192	弥生	高坏	C-7 169	31.2+ α 18.8	精良で石英・長石の小～粗砂粒と赤鉄鉱塊を含む	良好	外面は赤褐色 内面はにぶい黄燈色	研磨	絞り後に押圧ナデ	坏下には１条のＭ字凸帯を配しその接合面には調整具の刺突痕が残る　脚部は細長く裾部は大きくラッパ状に開く　丹塗り
20	193	弥生	甕	C-8-166	34.5+ α 25.4	粗く石英や長石の小～粗砂粒を多く含む	良好	にぶい黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部はやや細かいハケ目	口縁部はヨコナデ　胴部はナデ	胴部は面長の倒卵形で口縁部は緩やかに外反する
20	194	弥生	甕	D-7	17+ α 57	石英小～粗砂粒と長石粒を含む	良好	にぶい黄燈色	ヨコナデ～押圧ナデ	ヨコナデ～押圧ナデ	甕棺片　口縁部下に三角凸帯
20	195	弥生	鉢	D-8 197	21.5+ α 66.8	石英小砂粒と長石粒を多く含む	良好	にぶい黄燈色	ヨコナデ～押圧ナデ？	ヨコナデ～押圧ナデ？	甕棺蓋片　口縁部下に三角凸帯　摩滅顕著
21	196	弥生	丹塗り？ 壺	C-8	8.9+ α 4.4	精良で微細～細砂粒を含む	良好	外：赤褐色 内：くすんだ黄褐色	押圧ナデ後に巾が5mm のヘラ先工具で研磨	底部は指頭・胴部は指先による押圧ナデ	胴部が玉葱状になる丹塗りの袋状口縁壺の可能性あり
21	197	弥生	壺	C-8	7.7+ α 6.5	微細～石英小砂粒と雲母を比較的多く含む	良好	くすんだ淡灰黄褐色	押圧後に丁寧なナデ	底部は指頭・胴部は指先による押圧ナデ	調整は丁寧で丹塗りの袋状口縁壺の可能性あり
21	198	弥生	壺	C-8 166	19.5+ α 6.2	細～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	細かいハケ目	押圧ナデ	胴部は緩やかに肩の張った卵形
21	199	弥生	壺	C-8	12.6 10 4.9	石英・長石の小～粗砂粒と雲母を含む	良好	にぶい黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部はやや粗いハケ目	押圧ナデ	胴部は肩が大きく張った偏球形で口縁部は小さく「く」字状に外反する　胴部下半に孔径が３×９mm 楕円形の円孔を焼成後に穿つ
21	200	弥生	壺	C-8	5.9+ α 10.2	精良	良好	にぶい黄燈色	研磨	ねで～押圧ナデ	丹塗り袋状口縁壺　　袋状の口縁部は緩やかに内湾する
21	201	弥生	壺	C-8-166	8.3+ α 11.2	精良で石英・長石の小～中砂粒と雲母微細を含む	良好	にぶい黄燈色	研磨	口縁部はヨコナデ　頸部は押圧ナデ	丹塗り袋状口縁壺　　小さく内傾する口縁部は口唇が直口気味に立ち上がる
21	202	弥生	壺	C-8	12.2+ α 15.6	精良で石英・長石の細～小砂粒と僅少の赤鉄鉱塊を含む	良好	橙色	ナデ	押圧ナデ	丹塗り袋状口縁壺。口縁部下に２条のＭ字凸帯が巡り口縁部下と凸帯間には細いヘラ先状工具で暗文を施文
21	203	弥生	壺	C-8-166	7.9+ α 32	石英・長石の小～粗砂粒の外に僅少の雲母微細を含む	良好	外：にぶい黄燈色 内：淡黄燈色	ナデ・ヨコナデ・ハケ目	押圧ナデ	鍔先状の口縁部は外唇を僅かに摘み上げる。口縁部下には１条のＭ字凸帯が巡りその下には暗文を配す　　丹塗り
21	204	弥生	甕	C-8	15.6 16.2 6.8	石英・長石の細～小砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部はハケ目	押圧ナデ	「く」字状の口縁部は強く屈曲して外反する
21	205	弥生	甕	C-8	13.8 13.6 6.4	やや粗く石英・長石の小～中砂粒を多く含む	良好	灰黄色	摩滅	摩滅	口縁部は「く」字状に短く外反　摩滅顕著で調整不詳
21	206	弥生	甕	C-8	8.6+ α 27	粗く多くの細～石英小砂粒と雲母微細の外に少量の石英中砂粒を含む	良好	外：くすんだ黄灰褐色 内：淡明黄褐色	目巾が 1.5mm のやや粗いハケ目	指先による押圧ナデ	逆Ｌ字状の口縁部は小さく内傾する　口縁部上唇には煮零れによる煤様の黒色物が付着
21	207	弥生	甕	C-8	18.4+ α 25.4	石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	橙色	口縁部はヨコナデ　胴部はやや粗いハケ目	口縁部はヨコナデ　胴部は押圧ナデ	口縁部は短く「く」字状に外反する
22	208	弥生	甕	C-8	18.4+ α 23.4	石英・長石の細～中砂粒と僅少の赤鉄鉱塊を含む僅少の赤鉄鉱塊を含む	良好	にぶい黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部はやや粗いハケ目	口縁部はヨコナデ　胴部はナデ	胴部は倒卵形で口縁部は短く「く」字状に外反する
22	209	弥生	甕	C-8	16.8+ α 26	良質であるが石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	外：褐灰色 内：にぶい黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部はやや細かいハケ目	口縁部はやや細かいハケ目　胴部はナデ	口縁部は倒卵形の胴部から「く」字状に外反する
22	210	弥生	甕	C-8	10.3+ α 23.4	石英・長石の細老室～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部は目巾が 3mm の粗いハケ目	口縁部はヨコナデ　胴部は押圧ナデ	短く「く」字状に外反する口縁部は内唇を内方に摘み出す　胴部上半には短径が 10cm の楕円形の円孔を穿つ
22	211	弥生	甕	C-8-166	24.2+ α 9.8	石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	細かいハケ目	押圧ナデ	
22	212	弥生	甕	C-8	11.5 + α 8.4	良質であるが石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	ハケ目	押圧ナデ	
22	213	弥生	甕	C-8	11.4+ α 9	良質	良好	外面はにぶい黄燈色　　内面は灰黄褐色	ハケ目	指頭押圧ナデ	
22	214	弥生	台付甕	C-8	19.8 19.2 10.4	石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	橙色	摩滅	高台は指頭押圧ナデ	高台は低く内湾気味に立ち上がり口縁部は短く「く」字状に外反する　　摩滅顕著

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　　土	焼成	色調（外：内）	調　　整（外）	調　　整（内）	
22	215	弥生	台付甕	C-8	13.2+ α	石英と長石の小～中砂粒を含む	良好	にぶい橙色	ナデ？	押圧ナデ	胴部はやや形の張った球形　脚部は短く朝顔状に開く
23	216	弥生	鉢	C-8	9.2 16.8 7	細～小砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	ナデ	胴部はナデ　内定部は指頭押圧ナデ	胴部はやや扁平な半球形で口縁部は直口気味に立ち上がる
23	217	弥生	ﾐﾆﾁｭｱ 鉢	C-8	4.2 7 4.5	微細～石含む英中砂粒と雲母微細を多く	良好	くすんだ黄褐色	押圧ナデ	指頭押圧ナデ	口縁部は直口気味に立ち上がる
23	218	弥生	丹塗り 高坏	C-8	19.4+ α 18.8	精良であるが細～石英小砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	外：赤褐色 内：淡明赤橙色	押圧ナデ後に丹塗研磨	脚上半は絞り下半は指先による押圧ナデ	ラッパ状の脚部は伸びやかに外反し裾端部はヘラ状工具で凹レンズ状に浅く窪む
23	219	弥生	高坏	C-8	6.9 7.2 5.8	石英・長石の細～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	ハケ目	指頭押圧ナデ	
23	220	弥生	器台	C-8	18.5 9.6 13.6	粗く多くの細～石英中砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	淡黄橙色	受部と裾部はヨコナデ体部は指先による押圧後にナデ	絞り後に指先による押圧ナデで裾部は指頭押圧ナデ	受部は緩やかに裾部は小さくストレートに外反する　調整は粗い
23	221	弥生	器台	C-8	11.6 8.5 11.6	粗く微細～石英小砂粒を多く含む	良好	淡黄灰色	受部と裾部がヨコナデ体部は指頭～指先による押圧ナデ	指頭～指先による押圧ナデ	受部と裾部は肉厚の体部から小さく外反する
23	222	弥生	器台	C-8	10.4 10.4 11	石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	橙色	押圧ナデ	押圧ナデ	受部・裾部ともラッパ状に短く外反する
24	223	弥生	壺	C-10	7.7+ α 17	多量の微細～石英中砂粒と僅少の雲母微細粒を含む	良好	淡黄灰色	ナデ～研磨？	指頭～指先による押圧ナデ	丹塗鋤先口縁壺　頸部には巾が2～3mmの暗文痕が残る　器面の剥落が顕著
24	224	弥生	壺	C-10	12.4+ α	精良で多くの微細～細砂粒と雲母微細の外に僅少の小砂粒を含む	良好	外：淡明黄橙色 内：ややくすんだ淡灰褐色	ヨコナデ～ナデ	指先による押圧ナデ	丹塗壺　卵形の胴部上半には2条のM字凸帯が巡りその凸帯下には黒色顔料の塗布痕がある　→　黒色顔料塗布上に丹塗り
24	225	弥生	甕	C-10-193	16.5 15.6 4.9	石英・長石の小～中砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部はハケ目	口縁部はヨコハケ目 胴部はヘラ状工具によるナデ	口縁部は短く「く」字状に外反する
24	226	弥生	甕	C-10-193	17 16.4 5	やや粗く石英・長石の細～中砂粒を多量に含む	良好	にぶい黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部はナデ～ハケ目	口縁部はヨコナデ　胴部は押圧ナデ	口縁部は短く「く」字状に外反する
24	227	弥生	甕	C-10 SD-01	6.65+ α 22	やや粗く石英や長石の中～粗砂粒を多く含む	良好	褐色～灰褐色	ハケ目？	口縁部はヨコナデ　胴部は押圧ナデ	短く「く」字に外反する口縁部は跳ね上げ気味に内湾し口縁部下にはハケ目工具痕が羽状に残る
24	228	弥生	甕	C-10-193	8.4+ α 21	粗く細～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄褐色	口頸部はヨコナデ	口頸部はヨコナデ 胴部は指頭押圧～ナデ	「く」字状の口縁部は端部が小さく外反する
24	229	古墳	甕	C-10-193	30.5 17	石英・長石の微細～小砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	ハケ目	口縁部は細かいハケ目 胴部はヘラケズリ	ストレートに外反する「く」字状の口縁部は口唇を小さく摘み出す胴部は球形
24	230	弥生	甕	C-10-193	27.3 14.3	良質で微細～小砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部は目巾が1mmの細かいハケ目	粗いヘラケズリ	「く」字状の口縁部は直口して立ち上がった後に小さく外反胴部下半には2.5～3cm径の不整な円孔を一対焼成後に穿つ
24	231	古墳	甕	C-10-193	15+ α 15.3	石英・長石の小～中砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	口縁部はヨコナデ　胴部はナデ後に巾が1mm余のハケ目	口縁部はヨコナデ　胴部はヘラケズリ	口縁部は「く」字状に外反し胴部は卵形をなす
25	232	古墳	土師器 甕	C-10-193	28.8 15.2	石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部はハケ目	口縁部はヨコナデ　胴部はヘラ削り	胴部は倒卵形で口縁部は「く」字状
25	233	古墳	甕	C-10-193	34.2 18.5	石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部は細かいハケ目	口縁部はヨコナデ　胴部はヘラケズリ	「く」字状の口縁部は緩やかに外反し胴部は卵形をなす
25	234	古墳	甕	C-10-193	26.8+ α	やや粗く石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	外面は灰黄褐色 内面はにぶい黄燈色	細かいハケ目	ヘラケズリ	
25	235	弥生	甕	C-10	9.5+ α 7.6	細～小砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	ややハケ目	指頭押圧ナデ	
25	236	弥生	甕	C-10	9.7+ α 5.9	やや粗く石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	ハケ目	押圧ナデ	
25	237	古墳	鉢	C-10-193	5.9 12.8	小～中砂粒と赤色粒を含む	良好	にぶい黄燈色	ナデ	ナデ	口縁部は直口して立ち上がり体部は半球をなす
25	238	弥生	丹塗り 高坏	C-10	8.5+ α 32.6	多くの細～石英中砂粒と少量の雲母微細を含む	良好	淡黄灰色	口縁部はヨコナデ	押圧後にヨコナデ～ナデ	鋤先状をなす口縁部は外唇が小さく下がり口縁下には緩やかな三角凸帯状の摘み出しが巡る
25	239	弥生	高坏	C-10	12.9+ α 13.6	精良で石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	外：赤橙色 内：坏部が赤橙色　脚部がにぶい橙色	研磨	坏部は研磨　脚部は絞り～押圧ナデ？	半卵形の坏部中位には1条のM字状凸帯が巡る　丹塗
26	240	弥生	器台	C-10	7.9 10 9.4	やや粗く石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	にぶい橙色	押圧ナデ	押圧ナデ	受部・裾部とも緩やかに外反
26	241	弥生	器台	C-10	13.5+ α 11.4	細～石英中砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	くすんだ灰褐色	押圧後に目巾が2mmの粗いハケ目	裾部は粗いハケ目　体部は指先による押圧ナデ	筒状の体部は緩やかに外反し裾部には2次被熱による煤様の黒色物が付着

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　　土	焼成	色調（外：内）	調　　整（外）	調　　整（内）	
26	242	弥生	器台	C-10	10.9+ α 13.2	細～石英中砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡灰橙～赤橙色	押圧後にナデ	裾部は指頭・体部は指先による押圧ナデ	裾部は緩やかに外反し内唇は僅かに撮み出す　外面下半部には２次被熱による赤変がある
26	243	弥生	甑	C-10-193	33+ α 30.7 11.8	石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	口縁部はヨコナデ　胴部はナデ	口縁部はヨコナデ　胴部はヘラケズリ	口縁部は緩やかに外反する底部には半月形の円孔を穿孔する
26	244	古墳	鼎	C-10-193	19.4 13	精良で小～粗砂粒を含む	堅緻	灰色	口縁～胴部上半はヨコナデ　下半はタタキ	口頸部はヨコナデ	口縁部は二重口縁でその堺にはシャープな凸帯が巡り上下２段にヘラ工具による波状文を肩部には斜めの線刻を施文する　肩部には口径が 1.5cm の円孔を穿つ
26	245	古墳	甕	C-10	27+ α 28.8	石英・長石の小～粗砂粒を含む	堅緻	濃灰色	タタキ後ナデ消し	タタキの当て具痕ナデ消し	須恵器大甕　大きく外反する口縁部の外唇は凹線状に凹む　胴部は大きく肩の張った球形
27	246	弥生	丹塗り 壺	D-8-197	17.0+ α 38	精良で石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	明赤橙色	ナデ	ナデ	広口壺　口縁部は大きく外反し頸部にはランダムに暗文を施文する
27	247	弥生	丹塗り 無頸壺	D-8-197	20.7 20 7.6	精良で石英・長石の細～中砂粒と赤鉄鉱小塊を含む	良好	外：赤褐色 内：橙色	丹塗研磨	指頭押圧ナデ	逆Ｌ字状の口縁部は水平に外反やや偏球形をなす胴部の最大径部には９～ 20mm の楕円形孔う穿つ
27	248	弥生	壺	D-8-197	12.4 11.8 4.2	良石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	ナデ	底部が指頭押圧ナデの外はナデ	口縁部は緩やかに外反する頸部から鋤先状に小さく外傾する　胴部中位にはシャープな２条の三角凸帯が巡る
27	249	弥生	壺	D-8-197	13.3+ α 7.6	粗く多くの微細～小・中砂粒の外に雲母微細と赤鉄鉱塊を含む	良好	淡明黄褐色	押圧ナデ	指頭～指先による指先による押圧ナデ	摩滅が著しいが外面の丹痕があり丹塗りの可能性がある
27	250	弥生	壺	D-8-197	12.7+ α	石英・長石の細～小砂粒と僅少の雲母を含む	良好	明赤褐色	ナデ	押圧ナデ	球形の胴部上半には３条の M 字凸帯が巡る
27	251	弥生	壺	D-8-197	8.3+ α 7.6	精良で石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	外面は浅黄色 外面は黄橙色	研磨？	指頭押圧ナデ～ナデ	丹塗り
27	252	弥生	丹塗り 壺	D-8-197	21+ α 8.4	精良で石英・長石粒と赤鉄鉱小塊を含む	良好	外：赤橙色 内：橙色	ナデ後に丹塗研磨	底部は指頭押圧ナデ 胴部は押圧ナデ	
27	253	弥生	甕	D-8-197	11.7+ α 26	粗く微細～石英小砂粒を多く含む	良好	外：淡明橙色 内：淡黄橙色	摩滅	指先による押圧ナデ	口縁部は上唇を水平に整えた逆Ｌ字状をなし口縁部下には浅い凹線と三角凸帯が各１条巡る
27	254	弥生	甕	D-8-197	10.4+ α 22	粗く多くの微細～石英粗砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	外：淡明黄褐色 内：明赤橙色	摩滅	口縁部下は指頭　胴部は指先による押圧ナデ	口縁部は倒卵形の胴部から短く緩やかに外反する
27	255	弥生	甕	D-8-208	10.8+ α 26.6	やや粗く多くの石英・長石の細～中砂粒と少量の雲母微細を含む	良好	にぶい黄橙色	口縁部はヨコナデ　凸帯下は粗いハケ目	指頭押圧ナデ～ナデ	逆Ｌ字状の口縁部下には１条の三角凸帯が巡る
28	256	弥生	甕	D-8-197	11.9 + α 22.1 ～ 22.3	やや粗く多量の微細～小砂粒と少量の雲母微細を含む	良好	淡明黄橙色	押圧ナデ	指頭・指先による押圧ナデ痕	逆Ｌ字状の口縁部は小さく内傾し丹彩痕あり　丹塗甕の可能性がある
28	257	弥生	甕	D-8	4.2 + α 23	細～中砂粒と赤鉄鉱小塊を含む	良好	浅黄橙色	口縁部はヨコナデ　胴部は粗いハケ目	ナデ	「く」字状の口縁部は短く跳ね上げる
28	258	弥生	甕	D-8	4+ α 22	細～中砂粒と赤鉄鉱小塊を含む	良好	にぶい黄橙色	口縁部はヨコナデ　胴部は粗いハケ目	ナデ	「く」字状の口縁部は短く跳ね上げる
28	259	弥生	甕	D-8-197	11.5+ α 9.4 ～ 9.8	微細～石英小・中砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	外：淡黄灰褐色 内：淡明橙色	ナデ？	いぇいぶは指頭押圧 胴部は指先による押圧ナデ	摩滅顕著　外面には黒斑あり
28	260	弥生	甕	D-8-208N	9.7+ α 10.6	微細～小砂粒と雲母を含む	良好	淡黄橙色	押圧根出後に目巾が１～ 1.5mm のやや粗いハケ目	いぇいぶは指頭押圧 胴部は指先による押圧ナデ	摩滅顕著
28	261	弥生	甕	D-8-197	5.5+ α 7.2	粗く多量の微細～石英小砂粒と僅少の石英粗砂粒・雲母微細を含む	良好	淡黄灰褐色	ほぼ摩滅	底部は指頭　胴部は指先による押圧ナデ	内面には炭化物付着　外底面には２次被熱による明赤橙色の赤変があり器面の剥落が顕著
28	262	弥生	甕	D-8-197	9.9+ α 7.7	粗く細～中砂粒と雲母微細を多く含む	良好	外：明赤橙色 内：淡黒色	ナデ	底部は指頭　胴部は指先による押圧ナデ	外面は２次被熱による赤変あり
28	263	弥生	甕	D-8-197	10.3+ α 7.0 ～ 7.2	やや粗く微細～石英粗砂粒と雲母微細を多く含む	良好	外：淡明赤橙～明赤橙色 内：淡黒色	押圧ナデ後に目巾が 2mm の粗いハケ目	底部は指頭　胴部は指先による押圧ナデ	調整は粗く２次被熱による器面の剥離がある　胴部は倒卵形？
28	264	弥生	甕	D-8-208N	9.6+ α 8	微細～細砂粒と雲母微細の外に僅少の小砂粒を含む	良好	外：淡明黄灰色 内：淡黄灰色	目巾が 1mm の細かいハケ目	底部は指頭　胴部は指先による押圧ナデ	内面には炭化物付着　外底面には２次被熱による明赤橙色の赤変があり器面の剥離が顕著
28	265	弥生	丹塗り 高坏	D-8 SD-01	5.6+ α 28	精良で細～小砂粒を含む	良好	橙色	摩滅	丹塗研磨	鋤先状の口縁部は内唇をシャープに摘み出す
28	266	弥生	丹塗り 高坏	D-8-197	8+ α 27.6	精良で石英・長石の中～粗砂粒と赤鉄鉱小塊を含む良好	良好	赤橙色	丹塗研磨	丹塗研磨	鋤先状の口縁部は内唇をシャープに摘み出す
28	267	弥生	丹塗り 高坏	D-8-197	12.6+ α 20	精良で石英・長石の細～小砂粒う含む	良好	外：にぶい黄橙色　内：橙色	丹塗研磨	ナデ	坏内面は摩滅顕著
28	268	弥生	丹塗り 高坏	D-8-208N	9.7+ α 18	精良で僅少の微細～小砂粒と長石粒を含む	良好	にぶい黄橙色	脚部は丹塗研磨	坏部は絞り後にナデ	坏部の調整は研磨？　摩滅顕著

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　　土	焼成	色調（外：内）	調　　整（外）	調　　整（内）	
28	269	弥生	高坏	D-8 SD-01	18.9+ α 24.6	やや粗く微細～小砂粒と雲母微細粒を多く含む	良好	外：暗赤橙色 内：くすんだ淡灰褐色	巾が5mmのヘラ工具による丹塗研磨	坏は丹塗研磨　脚部は指頭～指先による押圧ナデ	丹塗高坏　　坏部は半球形で脚部はラッパ状に大きく開く 調整は粗く、摩滅顕著
29	270	弥生	高坏	D-8-197	21+ α	精良で少量の石英・長石粒と僅少の赤鉄鉱・雲母微細を含む	良好	外：にぶい黄燈色　内：橙色	研磨	絞り後に押圧ナデ	脚部は大きくラッパ状に開く
29	271	弥生	器台	D-8	11 7.6 8	微細～小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	淡明赤橙色	口縁物裾部はヨコナデ 体部は指先による押圧ナデ	口縁部と裾部は指頭押圧ナデ　体部は指先による押圧ナデ	筒状の体部は肉薄で口縁部と裾部は緩やかに外反する　外面に淡橙灰色の部位があり２次被熱か？
29	272	弥生	器台	D-8-197	11.2 8.7 10.8	石英・長石の小～粗砂を含む	良好	橙色	指頭押圧ナデ	指頭押圧ナデ	受部と裾部は緩やかに外反し筒状の体部は肉厚
29	273	弥生	器台	D-8-197	15 11.1 9.4	やや粗く石英・長石の小～粗砂粒を多く含む	良好	にぶい橙色	指頭押圧ナデ	指頭・指先による押圧ナデ	口縁部はストレートに外反　裾部は短く屈曲して外唇を直口気味に調整　体部は筒状
29	274	弥生	器台	D-8-197	12.8+ α 12	良質であるが石英・長石の小～粗砂多く含む	良好	橙色	指頭押圧後にハケ目	口唇部はハケ目　体部は押圧ナデ	体部はラッパ状に外反し受部は大きく外方に開く
29	275	弥生	器台	D-8-197	17+ α 12.3	やや粗く石英・長石の小～粗砂粒を多く含む	良好	外面は橙色 内面はにぶい黄燈色	指頭と指先による押圧ナデ	押圧ナデ	肉厚で裾部は小さく外反する
29	276	弥生	器台	D-8-197	13+ α 10.7	石英・長石の中～粗砂粒を含む	良好	橙色	指頭・指先による押圧ナデ	指頭押圧ナデ	肉厚の裾部は短く外方に摘み出す
29	277	弥生	器台	D-8-197	12.8+ α 11.6	石英・長石の小～粗砂粒を含む	良好	橙色	指頭押圧ナデ	ナデ　裾部はヘラ状工具によるヨコナデ	体部は筒状で裾部は緩やかに外反する
29	278	弥生	器台	D-8-197	4+ α	石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	外面は橙色 内面は褐灰色	ナデ	指頭押圧ナデ	杏形器台
29	279	弥生	蓋	D-8-197	10.8 30 6.5（摘径）	石英・長石の細～中砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	橙色	ハケ目	指頭押圧ナデ～ナデ	摘みは小さく外方に摘み出す　口縁部内唇には薄い黒変がある　摩滅顕著
29	280	弥生	蓋	D-8-208N	10.4 27.5 5.4（摘径）	やや粗く石英・長石の小～粗砂粒を多く含む	良好	淡黄燈色	ハケ目	押圧ナデ～ナデ	摘部外縁は外方に小さく摘出す摩滅顕著
29	281	弥生	蓋	D-8-197	11.2 28 6.4（摘径）	石英・長石の小～中砂粒と僅少の雲母微細を含む	良好	外面はにぶい黄～黒褐色　内面は黄燈～黒褐色	やや細かいハケ目	指頭押圧ナデ　内縁はハケ目	体部は緩やかに外反　摘み上縁は僅かに凹レンズ状に窪む
29	282	弥生	蓋	D-8-208N	8+ α 26.8	石英と長石の細～中砂粒を含む	良好	にぶい黄燈色	目巾が2mm余の粗いハケ目	指頭押圧ナデ	
29	283	弥生	蓋	D-8-197	7.4 + α 5.9（摘径）	石英・長石砂粒と僅少の角閃石微細を含む	良好	外面はにぶい黄燈色内面はにぶい黄色	粗いハケ目	指頭押圧ナデ	摘み部は内底でやや歪に摘み上げる
30	284	弥生	甕	C-9	5.2+ α 5.8	微細～細砂粒と雲母微細を少量含む	良好	淡黄灰褐色	押圧後に丁寧なナデ	底部は指頭　胴部は指先による押圧ナデ	底面には1.9 × 2.3cm大の円孔を焼成前に穿ち瓶を前提にして制作か？
30	285	弥生	鉢	C-9	5.8 15	微細～小砂粒と雲母微細粒を多く含む	良好	明赤橙色	押圧後にナデ　下半部はケズリ状のナデ	底部はナデ　体部は押圧後にナデ	体部は扁平な半球形で口縁部はストレートに立ち上がる
30	286	弥生	ﾐﾆﾁｭｱ 鉢	C-9	5.4 8 1.3	微細～石英小砂粒を多く含む	良好	淡黄橙色～灰黄色	口縁部はヨコナデ　体部は指頭押圧ナデ	口縁部はヨコナデ　体部は指頭押圧ナデ	体部は半卵形をなし口縁部は小さく摘み上げて直口する
30	287	弥生	器台	C-9	18.3 9 14.5	多くの微細～小砂粒と少量の雲母微細を含む	良好	外：くすんだ淡黄灰褐色 内：濃灰褐色	口縁部・裾部はヨコナデ 体部は目巾が1～1.5mmのやや粗いハケ目	受部はヨコハケ目　体部は指頭～指先による押圧ナデ	裾部は緩やかなラッパ状をなし、受部は短く外反する
30	288	弥生	丹塗り 高坏	C-9 C-10 SD-200	7.4+ α 11.4	外：赤褐色 内：灰黄色	良好	外：赤褐色 内：灰黄色	ナデ後に巾が２～3mmのヘラ工具による丹塗研磨	指頭押圧ナデ　上半部には絞り痕がある	ラッパ状の脚部は短く外反する
30	289	古墳	甕	C-11	6.4+ α 15.4	多くの細～中砂粒の外に少量の雲母微細・小粒を含む	良好	外：くすんだ灰赤褐色　内：淡灰茶褐色	口縁部はヨコナデ　胴部はナデ	口縁部はヨコナデ 胴部はヘラケズリ	「く」字状の口縁部は緩やかに外反し２次被熱による煤が付着
30	290	古墳	甕	C-11	6+ α 15	細～中砂粒と雲母微細を比較的多く含む	良好	灰茶～淡黄燈色	口縁部はヨコナデ　胴部はナデ	口縁部はヨコナデ 胴部はヘラケズリ	「く」字状の口縁部は緩やかに外反し２次被熱による煤が付着
30	291	古墳	鉢	C-11	5.4 13.2	比較的多くの微細～細砂粒と雲母微細の外に僅少の赤鉄鉱小塊含む	良好	外：赤橙色 内：黒色	押圧後にナデ	ナデ～指頭押圧ナデ	体部は半球形で口縁部はストレートに立ち上がる　調整は粗い
30	292	弥生	壺	D-7	8.4+ α 20.4	精良で少量の微細～細砂粒と雲母微細の外に僅少の赤鉄鉱塊を含む	良好	淡明黄色	ヨコナデ～ナデ	口縁部はヨコナデ　頸部は押圧ナデ	口縁部は内傾する頸部から大きく外反し端部は凹レンズ状に浅く窪む
30	293	弥生	甕	D.E-8-197	8.3+a 9.2	やや粗く多量の石英・長石の小～粗砂粒と僅少の赤鉄鉱塊・雲母微細を含む	良好	淡黄燈色	ハケ目	底部は指頭押圧ナデ 胴部は押圧ナデ	
30	294	弥生	高坏	D.E-8-197	11.8+ α 17.7	良質であるが石英・長石の小～粗砂粒を多く含む	良好	にぶい黄色	ナデ？	ナデ	脚部はラッパ状に大きく外反する 脚裾上に丹痕あり→丹塗りか？
30	295	弥生	高坏	D.E-8-197	16.3+ α	良質であるがやや多くの石英・長石砂を含む	良好	灰黄色	ナデ	絞り後に押圧ナデ	
30	296	弥生	器台	D.E-8-197	14.4 9.2 10.8	やや粗く多量の石英・長石粒の外に微小の雲母を含む	良好	にぶい黄燈色	押圧後にハケ目	指頭押圧ナデ～ナデ	受部・裾部ともに緩やかに外反する

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　　土	焼成	色調（外：内）	調　　整（外）	調　　整（内）	
30	297	弥生	丹塗り 高坏	D.E-8-197	9+ α 27.1	良質で多くの石英・長石砂と僅少の赤鉄鉱塊を含む	良好	外：橙～明赤褐色　内：橙色	丹塗研磨	丹塗研磨？	鋤先状の口縁部は内唇を大きく摘み出してＴ字状をなす　坏部下にはシャープなＭ字凸帯が巡る　丹塗
30	298	弥生	器台	D.E-8-197	11.4+ α 13.2	やや粗く石英・長石の小～粗砂粒を多量に含む	良好	外：にぶい黄橙色　内：橙色	押圧ナデ後に目巾が3mmの粗いハケ目	指頭・指先による押圧ナデ	裾部は緩やかに外反する
30	299	弥生	甕	D.E-8-197	13.5+ α 8.9	やや粗く石英・長石の細～中砂粒を多く含む外に僅少の雲母微細を含む	良好	外：にぶい橙色 内：明褐色	やや粗いハケ目	ナデ　底面は指頭押圧ナデ	底部上には楕円形の円孔を穿つ
30	300	弥生	丹塗り 高坏	D.E-8-197	6.8+ α 26	精良で僅少の中～粗砂粒と雲母微細を含む	良好	外：にぶい橙色 内：にぶい赤褐色	摩滅	研磨	鋤先状の口縁部は水平に摘出す丹塗り
30	301	弥生	甕	E-7	4.5+ α 41.8	やや粗く微細～石英小・中砂粒と雲母微細を多く含む	良好	明赤褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	逆Ｌ字状の口縁部下には１条の細い三角凸帯が巡る　　口縁部外唇と内唇にはヘラ工具による刻み目を２～3mm間隔で施文している　甕棺か？
31	302	縄文	鉢	Ⅰ区 A-8 SD-01	3.1+ α	石英・長石の小～粗砂粒を比較的多く含む	良好	外：暗褐色 内：暗茶褐色～灰褐色	条痕？	ヨコナデ	リボン状の粘土塊を張り付けている
31	303	縄文	鉢	Ⅰ区 A-8 SD-01	4.25+ α	少量の石英粗砂粒と多くの雲母粒を含む	良好	淡灰褐色	ヨコナデ	ヨコナデ	口縁部外唇と上唇に刺突文で施文刺突文土器片　前～中期？
31	304	縄文	深鉢	SK-173		小～中砂粒の石英・長石粒を含む	良好	外：橙色 内：浅黄橙色	条痕	ナデ	
31	305	縄文	鉢	Ⅰ区 A-10 SD-01	4.1+ α	多くの滑石粒を含む	良好	淡灰褐色	ナデ	擦痕あり	口縁部外唇に線刻がある　後期初？
31	306	弥生	壺	A-10		石英・長石の小～中砂粒を多く含む	良好	褐色	ナデ	押圧ナデ	胴肩部に２段の有軸羽状文を施文している
31	307	縄文	鉢	C-7		細砂粒を含む	良好	にぶい橙色	ナデ	ナデ	
31	308	縄文	浅鉢	C-7		少量の小～中砂粒を含む	良好	灰黄褐色	ナデ？	ナデ？	口縁部は直口して立ち上がる
31	309	縄文	鉢	B-10	7+ α	石英・長石の小～粗砂粒を比較的多く含む	良好	灰褐色	ナデ	頸部は貝殻条痕　胴部はナデ	
31	310	縄文		C-7		滑石微細～小粒を多く含む	良好	にぶい橙色	摩滅	摩滅	摩耗顕著で調整不詳
31	311	縄文	鉢	B-10	7+ α	石英・長石の細～小砂粒を少量含む	良好	淡黒褐色	貝殻条痕	ナデ	貝殻条痕文
31	312	縄文	鉢	B-10	7.4+ α	石英・長石の小～粗砂粒を比較的多く含む	良好	外：暗褐色 内：褐色	貝殻条痕	ナデ	貝殻条痕文
31	313	縄文	鉢	B-10	5+ α	石英・長石の中～粗砂粒を多く含む	良好	淡灰褐色	ナデ	条痕	凸帯文
31	314	縄文	鉢	B-10	4.7+ α	石英・長石の細～中砂粒を多く含む	良好	淡灰褐色	ヨコナデ	条痕	条痕文
31	315	縄文	鉢	B-10	5+ α	石英・長石の小～粗砂粒を比較的多く含む	良好	淡灰褐色	条痕	ナデ	条痕文
31	316	縄文	鉢	Ⅱ区　V-8 SD-02		石英・長石の小～粗砂粒を多く含む	良好	灰褐色	押型文	押型文	早期か？
31	317	縄文	鉢	Ⅱ区 V-7	1.3+ α	少量の石英・長石砂粒を含む	良好	外：灰黒色 内：明褐色	ナデ	ナデ	外底面には木の葉状の凹線文を刻む
31	318	縄文	鉢	Ⅱ区 X-7-S-121		少量の石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	暗灰褐色	条痕文	ナデ	
31	319	縄文	鉢	Ⅱ区　X-8 SD-02	7.15+ α	石英・長石の中～粗砂粒を比較的多く含む	良好	外：灰褐色 内：淡灰褐色	条痕	条痕	条痕文
32	320	弥生	磨製石鏃	SD-01	長 5.4 厚 0.3	凝灰岩質	良好	淡灰白色	条痕	ナデ	刃部の鎬は鏃先から 2.6cm で刃部に沿って分岐。研ぎは丁寧
32	321	弥生	投弾	SD-01 C-10	長 4.01 巾 2.65	精良で少量の微細～小砂粒を含む	良好	くすんだ淡赤橙色	押圧ナデ	―	不整なラグビーボール状で表面に十状の浅い切込があり土錘か？
32	322	弥生	不明土製品	SD-01 C-10	長 4.5 幅 2.5 厚 1.7	細～小砂粒と赤鉄鉱塊を含む	良好	にぶい橙色	―	―	厚板状の不明品
32	323	弥生	円盤	SD-170	長 4.8 幅 4 厚 2.7	微細～小砂粒と雲母微細を多く含む	良好	濃橙褐色	ナデ？	―	復原ｹｲｶﾞ～ 8cm、厚さが 2.7cm の円盤になろうか？

図	番号	時代	器種	出土場所	器高（cm） 口径（cm） 底径（cm）	胎　　土	焼成	色調（外：内）	調　　整（外）	調　　整（内）	
32	324	弥生	円盤	216	長 4.1 幅 1.8	滑石	良好	淡灰白色	―	―	ラグビーボール状で巾が゛2mm、深さが 1mm の結節溝をタテ軸に沿って彫り込んでいる
32	325	弥生	勾玉	SX-217	長 4.08+ α 幅 1.87	微細～小砂粒を多く含む	良好	淡灰褐色	押圧ナデ	―	頭頂部に孔径が 7 ～ 8mm の円孔を穿つ
32	326	弥生	土製品 匙柄	A-9	長 5.7 径 2.6	少量の石英・長石の細～小砂粒を含む	良好	淡褐色	研磨状？	―	括れ部に浅い繰り込みがある
32	327	弥生	不明土製品	A-8 SD-01	2.7+ α	石英・長石の小～粗砂粒を比較的多く含む	良好	褐色	ハケ目？	ハケ目？	巾が 4 ～ 7mm の片隅を丸くした方形孔を穿っている
32	328	弥生	石包丁	A-9	長 10.5 幅 6.4 厚 1	輝緑凝灰岩		―	―	―	未製品　　叩打後に研磨成形して刃部を研ぎ出している
32	329	弥生	不明土製品	A-9	長 2.4+ α 径 1.2*1.4	石英・長石の細～中砂粒を少量含む	良好	淡褐色	ナデ		棒状の先端部に孔径が 2 ～ 3mm の円孔を穿つ　丹彩痕あり
32	330	弥生	紡錘車	B-8	径 4.35 厚 1.1	精良で僅少の細～中砂粒を含む	良好	褐色	ナデ	ナデ	土製紡錘車。中央に孔径が 7mm の円孔を穿つ
32	331	弥生	石錘	B-9 SD-01	長 7.05 大径 4.2 ～ 4.4 209 g	滑石	良	―	―	―	天部～巾が 3 ～ 10mm の結節溝を刻みその中央よりやや下方に孔径が 10 ～ 12mm の紐通孔を穿つ
32	332	弥生	石錘	B-9	長 4.8 径 2 ～ 2.9 34.9 g（重）	粘板岩質	良	―	―	―	ラグビーボール状で長軸に沿って巾が 4mm の結節溝を刻み込む
32	333	弥生	投弾	Ⅰ区 B-10	長 3.1 幅 2.3 厚 1.85	細～小砂粒を僅かに含む	良好	暗褐色	―	―	土製品　ラグビーボール状
32	334	古墳	土錘	B-10	径 3.4 ～ 4 50.1 g	精緻で微細～細砂粒を含む	良好	褐色	押圧ナデ	―	球形で真ん中に孔径が 6 ～ 7mm の結節孔を穿つ
32	335	弥生	棒状土製品	C-7	長 5.4+ α 径 1.5*2.2	石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	ナデ	―	匙状土製品の柄か？
32	336	弥生	棒状土製品	C-7	長 6.3+ α 径 1.5 ～ 2.1	石英・長石の細～中砂粒を含む	良好	にぶい黄橙色	ナデ	―	匙状土製品の柄か？
32	337	弥生	投弾	C-10	長 4.9 巾 2.7	微細～小砂粒を含む	良好	淡赤橙～淡橙色	押圧ナデ	―	ラグビーボール状
32	338	弥生	砥石	C-7	長 10.7+ α 幅 6.1 厚 1.1	頁岩質？	良	―	―	―	表裏両面に研ぎ痕と刃物（？）痕が残る
32	339	弥生	不明土製品	C-7	長 6.5+ α 巾 5.2 厚 1.7	細～小砂粒を含む	良好	表：灰黒色 裏：灰色	ナデ	ナデ	瓦質　平瓦片か？
32	341	古墳	匙状土製品	SD-01 C-10	長 8+ α 幅 4.8+ α	多くの微細～石英小砂粒の外に少量の雲母微細と石英中砂粒を含む	良好	くすんだ褐灰色	指頭押圧ナデ	―	
32	342	古墳	匙状土製品	C-11	長 7.4+ α 幅 4.7+ α	多くの微細～石英小砂粒の外に少量の雲母微細と石英中砂粒を含む	良好	くすんだ褐灰色	指頭押圧ナデ	―	

図	番号	出土位置		種類	石材 or 色調	長さ(cm)	幅 (cm)	厚さ(cm)	
33	344	ＳＤ０１	Ａ－８区土器群 168	打製石鏃	黒色黒曜石	3.83	1.91	0.63	鍬形鏃
33	345	ＳＤ０１	Ｃ－７区	打製石鏃	黒色黒曜石	2.54	1.06	0.45	
33	346	ＳＤ０１	Ｃ－９区	打製石鏃	黒色黒曜石	2.32	1.82	0.51	
33	347	ＳＤ０１	Ｃ－７区	打製石鏃	黒色黒曜石	1.64	1.39	0.38	未成品か
33	348	ＳＤ０１	Ｃ－７区	楔形石器	黒色黒曜石	1.74	1.49	0.62	
33	349	ＳＤ０１	Ｄ－８区	楔形石器	黒色黒曜石	2.40	2.05	0.45	
33	350	ＳＤ０１	Ｂ－10区西側斜面暗灰色砂質土	石槍？	安山岩	4.65	3.00	1.44	
33	351	ＳＤ０１	Ａ－９区包含層上部	細石核スポール	黒色黒曜石	4.83	1.56	0.71	
33	352	ＳＤ０１	Ａ－８区土器群 168	ＵＦ	黒色黒曜石	3.51	1.48	0.34	
33	353	ＳＤ０１	Ｂ・Ｃ－９・10区交点上部	石核	黒色黒曜石	2.69	3.31	1.14	
33	354	ＳＤ０１	Ｂ－８区包含層上部	石核	黒色黒曜石	2.67	2.58	1.40	腰岳製
33	355	ＳＤ０１	Ａ－10区暗褐色土包含層中	石核	黒色黒曜石	2.30	2.91	0.87	腰岳製
33	356	ＳＤ０１	Ｂ－７区包含層上部	石核	黒色黒曜石	2.45	2.42	1.30	腰岳製
33	357	ＳＤ０１	Ａ－９区暗灰色土	石核	黒色黒曜石	3.10	2.51	2.53	打面転移コア
33	358	ＳＤ０１	Ａ－８区斜面	石核	黒色黒曜石	2.66	2.40	2.51	腰岳製
33	359	ＳＤ０１	Ｃ－８・９区東斜面青灰色土	打面再生剥片	黒色黒曜石	2.48	2.68	1.35	腰岳製
34	360	ＳＤ０１	Ｃ－９区バルト下部	石包丁	灰色	12.2	4.9	0.3	32.1g
34	361	ＳＤ０１	Ｃ－７区包含層上部	石包丁	輝緑凝灰岩	7.4	5.1	0.8	44.8g
34	362	ＳＤ０１	Ｃ－７区黒色土包含層	石包丁	輝緑凝灰岩	9.6	4.9	0.6	47.9g
34	363	ＳＤ０１	Ａ－10区清掃時	石包丁	オリーブ灰色	4.0	4.8	0.6	15.8g
34	364	ＳＤ０１	Ｄ－８区白色砂	石包丁	灰色	7.2	3.6	0.2	11.9g
34	365	ＳＤ０１	Ａ－９区茶褐色土	石鎌	灰オリーブ色	7.1	3.9	0.5	226g
34	366	ＳＤ０１	Ｂ－９区ベルト下部	石鎌	灰色	5.6	3.2	0.7	26.8g
34	367	ＳＤ０１	Ｃ－10区黒褐色土	石鎌？	灰色	11.4	5.2	0.8	103.4g
34	368	ＳＤ０１	Ｂ－９区ベルト下部	石鎌？	灰色	7.8	4.5	0.5	47.9g
34	369	ＳＤ０１	Ｅ－７区東斜面	紡錘車	灰色	4.4	4.3	0.6	23.8g
34	370	ＳＤ０１	Ｃ－７区下部暗褐色砂質土	磨製石斧	玄武岩	7.4	3.9	3.5	245.5g
34	371	ＳＤ０１	Ａ－８区斜面	磨製石斧	灰色	9.1	4.3	ー	50.3g
34	372	ＳＤ０１	Ｂ－10区西斜面下部砂礫層	磨製石斧	灰色	10.8	5.6	1.8	143.2g
34	373	ＳＤ０１	Ｂ－10区西斜面下部砂礫層	磨製石斧	灰色	12.3	5.3	2.9	277g
34	374	ＳＤ０１	Ｂ－９区中央ベルト中	扁平片刃石斧	灰白色	5.6	3.1	0.8	47g
34	375	ＳＤ０１	Ｃ－７区包含層上部	石錘	灰色	4.1	1.8	1.8	16.5g
34	376	ＳＤ０１	Ｂ－９区中央ベルト中	石錘	灰オリーブ色	6.0	4.8	3.6	125g
34	377	ＳＤ０１	Ｂ－10区中央部黒灰色砂	石錘	明オリーブ灰色	6.5	4.6	3.1	130.5g
34	378	ＳＤ０１	Ｂ－６・７区包含層上部	石錘	灰色	10.0	3.4	2.8	99.5g
34	379	ＳＤ０１	Ｂ－８区底面流路	？	灰黄色	8.8	5.1	4.6	213.5g
34	380	ＳＤ０１	Ｂ－９区中央ベルト中	磨石	灰オリーブ色	8.3	7.6	6.1	534g
34	381	ＳＤ０１	Ｂ－８区包含層上部	敲石・磨石	明オリーブ灰色	7.4	4.8	3.7	216g
34	382	ＳＤ０１	Ｃ－７区下部暗褐色砂質土	石弾？	灰オリーブ色	5.3	3.8	2.3	76.4g
34	383	ＳＤ０１	Ｃ－７区土器群 169	砥石	灰色	8.0	1.5	1.0	27.6g
35	384	ＳＤ０１	Ｄ－８区土器群 197	石錘	滑石	15.7	11.8	11.0	2650g
35	385	ＳＤ０１	Ｂ－８区包含層上部	石錘	淡黄色	12.5	8.7	5.0	609g
35	386	ＳＤ０１	Ｃ－７区包含層上部	石錘	滑石	13.9	5.4	5.5	514g
35	387	ＳＤ０１	Ｃ－７区下部暗褐色砂質土	石錘	滑石	13.0	12.4	7.4	1246g
35	388	ＳＤ０１	Ｂ－11区下部	石錘	滑石	20.7	17.4	11.0	4800g
35	389	ＳＤ０１	Ｂ－８包含層上部	砥石	灰色	22.2	13.9	8.9	2900g
35	390	ＳＤ０１	Ｂ－９区ベルト内上部	砥石	灰色	11.2	5.1	4.0	208g
35	391	ＳＤ０１	Ｂ－９区西斜面暗灰色砂	砥石	浅黄色	10.0	7.2	7.1	631.5g
35	392	ＳＤ０１	Ｃ－10区水田直下黒色土	砥石	浅黄色	23.8	12.5	8.6	3950g

3　元岡・桑原遺跡群遺跡第52次調査における自然科学分析

株式会社　古環境研究所

Ⅰ．放射性炭素年代測定

1．はじめに

放射性炭素年代測定は、光合成や食物摂取などにより生物体内に取り込まれた放射性炭素（^{14}C）の濃度が放射性崩壊により時間とともに減少することを利用した年代測定法である。樹木や種実などの植物遺体、骨、貝殻、土壌、土器付着炭化物などが測定対象となり、約５万年前までの年代測定が可能である。

2．試料と方法

試料No.	地点・層準等	種類	前処理・調整	測定法
No.1	C -7 区，根株	樹木（クスノキ）	acid/alkali/acid	AMS
No.2	W -8 区，根株	樹木（クスノキ）	acid/alkali/acid	AMS
No.3	SK-172，炭化材	炭化材	acid/alkali/acid	AMS
No.4	D-10 区，Pre 含む黒色土	土壌	acid washes	AMS
No.5	D-10 区，No.3 石器直上	土壌	acid washes	AMS

acid/alkali/acid：酸 - アルカリ - 酸洗浄，acid washes：酸洗浄
AMS：加速器質量分析法（Accelerator Mass Spectrometry）

3．測定結果

試料No.	測定No.	δ^{13}C（‰）	^{14}C 年代（年 BP）	暦年代（較正年代）	
				1σ（68%確率）	2σ（95%確率）
No.1	PED-14623	−27.6	2235 ± 20	Cal BC 380-350 Cal BC 290-230	Cal BC 390-340 Cal BC 320-200
No.2	PED-14624	−29.1	2190 ± 20	Cal BC 360-290 Cal BC 230-200	Cal BC 360-270 Cal BC 260-180
No.3	PED-14625	−26.7	2100 ± 20	Cal BC 170-90	Cal BC 180-50
No.4	Beta-268928	−24.0	10500 ± 60	Cal BC 10700-10440	Cal BC 10750-10280 Cal BC 10250-10220
No.5	Beta-268929	−23.3	10520 ± 60	Cal BC 10720-10440	Cal BC 10790-10410 Cal BC 10320-10290

BP：Before Physics（Present），Cal：Calibrated，BC：紀元前

（1）δ^{13}C（デルタ）測定値

試料の測定^{14}C/^{12}C比を補正するための炭素安定同位体比（^{13}C/^{12}C）。この値は標準物質（PDB）

の同位体比からの千分偏差（‰）で表す。試料のδ13C値を-25（‰）に標準化することで同位体分別効果を補正する。

（２）^{14}C年代測定値

試料の^{14}C/^{12}C比から、現在（AD1950年基点）から何年前かを計算した値。^{14}Cの半減期は5730年であるが、国際的慣例によりLibbyの5568年を用いている。

（３）暦年代（Calendar Age）

過去の宇宙線強度や地球磁場の変動による大気中14C濃度の変動および^{14}Cの半減期の違いを較正することで、より実際の年代値に近づけることができる。暦年代較正には、年代既知の樹木年輪の詳細な14C測定値およびサンゴのU/Th（ウラン/トリウム）年代と14C年代の比較により作成された較正曲線を使用した。較正曲線データはIntCal 04である。

暦年代（較正年代）は、^{14}C年代値の偏差の幅を較正曲線に投影した暦年代の幅で表し、１σ（シグマ）（68％確率）と２σ（95％確率）で示した。較正曲線が不安定な年代では、複数の１σ・２σ値が表記される場合もある。

４．所見

加速器質量分析法（AMS）による放射性炭素年代測定の結果、№１の樹木では 2235±20年BP（２σの暦年代でBC 390～340, 320～200年）、№２の樹木では 2190±20年BP（BC 360～270, 260～180年）、№３の炭化材では 2100±20年BP（BC 180～50年）、№４の土壌では 10500±60年BP（BC 10750～10280, 10250～10220年）、№５の土壌では 10520±60年BP（BC 10790～10410, 10320～10290年）の年代値が得られた。

文献

Paula J Reimer et al.,（2004）IntCal04 Terrestrial radiocarbon age calibration, 26-0 ka BP. Radiocarbon 46, 1029-1058.

中村俊夫（1999）放射性炭素法．考古学のための年代測定学入門．古今書院，p.1-36.

Ⅱ．植物珪酸体分析

１．はじめに

植物珪酸体は、植物の細胞内に珪酸（SiO_2）が蓄積したもので、植物が枯れたあともガラス質の微化石（プラント・オパール）となって土壌中に半永久的に残っている。植物珪酸体分析は、この微化石を遺跡土壌などから検出して同定・定量する方法であり、イネをはじめとするイネ科栽培植物の同定および古植生・古環境の推定などに応用されている（杉山，2000）。

２．試料

分析試料は、第42次調査南壁のⅡｄ層からⅣａ層について採取された計13点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

３．分析法

植物珪酸体の抽出と定量は、ガラスビーズ法（藤原，1976）を用いて、次の手順で行った。

１）試料を105℃で24時間乾燥（絶乾）
２）試料約１ｇに対し直径約40μｍのガラスビーズを約0.02g添加（0.1mgの精度で秤量）
３）電気炉灰化法（550℃・６時間）による脱有機物処理
４）超音波水中照射（300W・42KHz・10分間）による分散
５）沈底法による20μｍ以下の微粒子除去
６）封入剤（オイキット）中に分散してプレパラート作成
７）検鏡・計数

同定は、400倍の偏光顕微鏡下で、おもにイネ科植物の機動細胞に由来する植物珪酸体を対象として行った。計数は、ガラスビーズ個数が400以上になるまで行った。これはほぼプレパラート１枚分の精査に相当する。試料１ｇあたりのガラスビーズ個数に、計数された植物珪酸体とガラスビーズ個数の比率をかけて、試料１ｇ中の植物珪酸体個数を求めた。

また、おもな分類群についてはこの値に試料の仮比重（1.0と仮定）と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体１個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚１cmあたりの植物体生産量を算出した。これにより、各植物の繁茂状況や植物間の占有割合などを具体的にとらえることができる（杉山，2000）。

４．分析結果

（１）分類群

検出された植物珪酸体の分類群は以下のとおりである。これらの分類群について定量を行い、その結果を表１および図１に示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。

〔イネ科〕

イネ、イネ（穎の表皮細胞由来）、ヨシ属、キビ族型、ススキ属型（おもにススキ属）、ウシクサ族Ａ（チガヤ属など）

〔イネ科－タケ亜科〕

ミヤコザサ節型（ササ属ミヤコザサ節など）、未分類等

〔イネ科－その他〕

表皮毛起源、棒状珪酸体（おもに結合組織細胞由来）、未分類等
〔樹木〕
ブナ科（シイ属）、ブナ科（アカガシ亜属）、クスノキ科、マンサク科（イスノキ属）、アワブキ科、その他

（２）植物珪酸体の検出状況（図１）
下位のⅣａ層（試料１）とⅢｊ層（試料３）では、植物珪酸体がほとんど検出されなかった。Ⅲｈ層（試料４）では、樹木（照葉樹）のブナ科（シイ属）が比較的多く検出され、クスノキ科、アワブキ科なども認められた。また、イネ科ではイネ、ウシクサ族Ａ、ミヤコザサ節型などが検出された。イネの密度は1,500個/gと比較的低い値であり、稲作跡の検証や探査を行う場合の判断基準としている5,000個/gを下回っている。Ⅲｇ層（試料５、６）では、イネが増加し、イネの籾殻（穎の表皮細胞）、ヨシ属、ススキ属型、および樹木（照葉樹）のブナ科（アカガシ亜属）、イスノキ属などが出現している。イネの密度は、同層上部の試料６では6,200個/gと高い値である。Ⅲｆ層（試料８、９）からⅡｄ層（試料19、21）にかかても、おおむね同様の結果であるが、Ⅲａ層（試料17）より上位ではイネの籾殻（穎の表皮細胞）が認められなかった。イネの密度は、Ⅲｆ層（試料８）では5,900個/g、Ⅲｄ層（試料12）では6,500個/g、Ⅲａ層（試料17）では5,500個/g、Ⅱｄ層（試料21）では5,700個/gといずれも高い値である。おもな分類群の推定生産量によると、Ⅲｇ層より上位ではイネが優勢であり、部分的にヨシ属も多くなっている。

５．植物珪酸体分析から推定される植生と環境

下位のⅣａ層とⅢｊ層では、植物珪酸体がほとんど検出されなかった。植物珪酸体が検出されない原因としては、河川の影響など何らかの原因でイネ科植物の生育には適さない環境であったこと、土層の堆積速度が速かったこと、水流や粒径による淘汰・選別を受けたこと、および風化作用によって植物珪酸体が分解消失したことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。
弥生土器包含層のⅢｇ層からⅢｄ層にかけては、イネが多量に検出され、イネの籾殻（穎の表皮細胞）に由来する植物珪酸体も認められた。これらの層準は土器包含層であり、土層の堆積状況が不安定であることから、ここで稲作が行われていた可能性は低いと考えられる。したがって、ここで検出されたイネや籾殻の植物珪酸体については、他所からの混入もしくは何らかの形で他所から持ち込まれた稲藁や籾殻に由来すると考えられる。稲藁の利用としては、屋根材や壁材、敷物、藁製品（俵、縄、ムシロ、草履等）など多様な用途が想定される。
各層準の堆積当時は、ヨシ属が生育するような湿地的な環境であり、周辺の比較的乾燥したところにはススキ属やチガヤ属などが生育していたと考えられる。また、遺跡周辺にはシイ属、カシ類（アカガシ亜属）、クスノキ科、アワブキ科などの照葉樹林が分布していたと推定される。
Ⅲａ層からⅡｄ層にかけては、調査地点もしくはその近辺で稲作が行われていたと考えられるが、土層の堆積状況から、前述のように他所からの混入もしくは何らかの形で稲藁が持ち込まれた可能性も想定される。

文献

杉山真二・藤原宏志（1986）機動細胞珪酸体の形態によるタケ亜科植物の同定－古環境推定の基礎資料として－．考古学と自然科学，19，p.69-84.

杉山真二（1999）植物珪酸体分析からみた九州南部の照葉樹林発達史．第四紀研究．38（2），p.109-123.

杉山真二（2000）植物珪酸体（プラント・オパール）．考古学と植物学．同成社，p.189-213.

藤原宏志（1976）プラント・オパール分析法の基礎的研究（1）－数種イネ科植物の珪酸体標本と定量分析法－．考古学と自然科学，9，p.15-29.

藤原宏志・杉山真二（1984）プラント・オパール分析法の基礎的研究（5）－プラント・オパール分析による水田址の探査－．考古学と自然科学，17，p.73-85.

Ⅲ．花粉分析

１．はじめに

花粉分析は、一般に低湿地の堆積物を対象とした比較的広域な植生・環境の復原に応用されており、遺跡調査においては遺構内の堆積物などを対象とした局地的な植生の推定も試みられている。花粉などの植物遺体は、水成堆積物では保存状況が良好であるが、乾燥的な環境下の堆積物では分解されて残存していない場合もある。

２．試料

分析試料は、第42次調査南壁のⅡｄ層からⅣａ層について採取された計８点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。

３．方法

花粉の分離抽出は、中村（1967）の方法をもとに、以下の手順で行った。

１）試料から１cm3を秤量
２）0.5％リン酸三ナトリウム（12水）溶液を加えて15分間湯煎
３）水洗処理の後、0.5mmの篩で礫などの大きな粒子を取り除き、沈澱法で砂粒を除去
４）25％フッ化水素酸溶液を加えて30分放置
５）水洗処理の後、氷酢酸によって脱水し、アセトリシス処理（無水酢酸９：濃硫酸１のエルドマン氏液を加え１分間湯煎）を施す
６）再び氷酢酸を加えて水洗処理
７）沈渣に石炭酸フクシンを加えて染色し、グリセリンゼリーで封入してプレパラート作成
８）検鏡・計数

検鏡は、生物顕微鏡によって300～1000倍で行った。花粉の同定は、島倉（1973）および中村（1980）をアトラスとして、所有の現生標本との対比で行った。結果は同定レベルによって、科、亜科、属、亜属、節および種の階級で分類し、複数の分類群にまたがるものはハイフン（－）で結んで示した。イネ属については、中村（1974，1977）を参考にして、現生標本の表面模様・大きさ・孔・表層断面の特徴と対比して同定しているが、個体変化や類似種もあることからイネ属型とした。

４．結果

（１）分類群

出現した分類群は、樹木花粉30、樹木花粉と草本花粉を含むもの４、草本花粉28、シダ植物胞子２形態の計64である。また、寄生虫卵３分類群が検出された。分析結果を表１に示し、花粉数が100個以上計数された試料については花粉総数を基数とする花粉ダイアグラムを示した。主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下に出現した分類群を記載する。

〔樹木花粉〕

マキ属、モミ属、ツガ属、マツ属複維管束亜属、マツ属単維管束亜属、スギ、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、ヤマモモ属、サワグルミ、ノグルミ、ハンノキ属、カバノキ属、ハシバミ属、クマシデ属－アサダ、クリ、シイ属－マテバシイ属、ブナ属、コナラ属コナラ亜属、コナラ属アカガシ亜属、ニレ属－ケヤキ、エノキ属－ムクノキ、アカメガシワ、サンショウ属、モチノキ属、ニシキギ科、カ

エデ属、シナノキ属、ツバキ属、モクセイ科、トネリコ属
〔樹木花粉と草本花粉を含むもの〕
　クワ科－イラクサ科、バラ科、マメ科、ニワトコ属－ガマズミ属
〔草本花粉〕
　ガマ属－ミクリ属、オモダカ属、イネ科、イネ属型、コムギ型、カヤツリグサ科、イボクサ、ミズアオイ属、タデ属サナエタデ節、ギシギシ属、ソバ属、アカザ科－ヒユ科、ナデシコ科、キンポウゲ属、カラマツソウ属、アブラナ科、ワレモコウ属、ツリフネソウ属、ノブドウ、キカシグサ属、チドメグサ亜科、セリ亜科、ナス科、ゴキヅル、タンポポ亜科、キク亜科、オナモミ属、ヨモギ属
〔シダ植物胞子〕
　単条溝胞子、三条溝胞子
〔寄生虫卵〕
回虫卵、鞭虫卵、マンソン裂頭条虫卵

（２）花粉群集の特徴（図２）
　下位のⅣa層（試料１）とⅢj層（試料３）では、樹木花粉の占める割合が約50～65％を占める。樹木花粉ではコナラ属コナラ亜属、ハンノキ属が優勢で、シナノキ属、クマシデ属-アサダ、カバノキ属などが伴われる。草本花粉ではヨモギ属、カヤツリグサ科が優勢で、イネ科、キンポウゲ属などが伴われる。
　Ⅲg層（試料６）では、エノキ属－ムクノキが優占し（花粉の集塊あり）、次いでコナラ属アカガシ亜属が優勢で、シイ属－マテバシイ属、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属などが伴われる。草本花粉ではイネ科（イネ属型、コムギ型を含む）が優勢で、カヤツリグサ科、アカザ科－ヒユ科、ヨモギ属などが伴われ、樹木・草本花粉のクワ科－イラクサ科（集塊あり）も認められた。また、寄生虫卵（鞭虫卵、マンソン裂頭条虫卵）がわずかに検出された。
　Ⅲf層（試料８）では、草本花粉のアブラナ科が増加し、樹木花粉のエノキ属－ムクノキは減少している。また、寄生虫卵（マンソン裂頭条虫卵）がわずかに検出された。Ⅲd層（試料10、12）では、草本花粉ではアカザ科－ヒユ科が増加し、シダ植物胞子も約15％を占める。樹木花粉ではイチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、スギが増加し、エノキ属－ムクノキはほとんど見られなくなっている。また、寄生虫卵（回虫卵、鞭虫卵、マンソン裂頭条虫卵）や石細胞が検出された。
　Ⅲa層（試料17）とⅡd層（試料21）では、草本花粉が約80％を占める。草本花粉では、イネ科（イネ属型、コムギ型を含む）が卓越し、カヤツリグサ科、ヨモギ属、アブラナ科が伴われ、Ⅱd層（試料21）ではソバ属も認められた。樹木花粉ではコナラ属アカガシ亜属、シイ属－マテバシイ属、コナラ属コナラ亜属などが認められた。また、Ⅲd層（試料12）では寄生虫卵（回虫卵、鞭虫卵、マンソン裂頭条虫卵）や石細胞が検出された。

５．花粉分析から推定される植生と環境

　下位のⅣa層とⅢj層の堆積当時は、ヨモギ属、カヤツリグサ科、イネ科などの草本類が生育していたと考えられ、周辺にはナラ類（コナラ属コナラ亜属）やハンノキ属を主として、シナノキ属、クマシデ属-アサダ、カバノキ属なども生育する冷温帯落葉広葉樹林が分布していたと推定される。森林植生に暖温帯要素が見られないことから、当時は冷涼な気候であったと考えられ、完新世以前の晩氷期頃の環境が示唆される。

弥生土器包含層のⅢｇ層では、少量ながらイネ属型およびコムギ型の花粉が認められることから、周辺で稲作およびムギ類の栽培が行われていた可能性が考えられる。また、周囲の比較的乾燥したところにはクワ科－イラクサ科（カラムシ、カナムグラ等）などの草本類が生育し、遺跡周辺にはカシ類（コナラ属アカガシ亜属）、シイ類（シイ属－マテバシイ属）などの照葉樹およびエノキ属－ムクノキなどの落葉広葉樹が分布していたと推定される。エノキ属－ムクノキは花粉の集塊が認められることから、比較的近隣に生育していた可能性が考えられる。

弥生土器包含層のⅢｆ層からⅢｄ層にかけては、アブラナ科が増加している。アブラナ科は虫媒花であり、風媒花と比較して現地性が高く花粉の生産量も少ないことから、当時は近隣にアブラナ科が生育していたと考えられる。アブラナ科には、アブラナ（ナタネ）、ダイコン、ハクサイ、タカナ、カブなど多くの栽培植物が含まれており、これらが栽培されていた可能性も考えられる。周辺の森林植生としては、イチイ科－イヌガヤ科－ヒノキ科、マツ属複維管束亜属、スギなどの針葉樹が増加し、エノキ属－ムクノキはあまり見られなくなったと考えられる。

弥生土器包含層のⅢｇ層からⅢｄ層にかけては、寄生虫卵（回虫卵、鞭虫卵）が認められたが、低密度であることから、集落周辺などの人為環境における通常の生活汚染に由来するものと考えられる。回虫と鞭虫は、どちらも中間宿主を必要とせず、虫卵の付着した野菜・野草の摂取や水系により経口感染する。寄生虫に起因する回虫症や鞭虫症は、腹痛を主とする消化器病症がおこり、多数寄生の場合は症状が重い。

Ⅲａ層からⅡｄ層にかけては、稲作をはじめムギ類やソバなどの栽培も行われており、周囲の比較的乾燥したところにはヨモギ属などの草本類が生育していたと考えられる。遺跡周辺に森林は少なく、やや遠方にカシ類、シイ類、ナラ類などが分布していたと推定される。

文献

金原正明（1993）花粉分析法による古環境復原．新版古代の日本第10巻古代資料研究の方法，角川書店，p.248-262.

島倉巳三郎（1973）日本植物の花粉形態．大阪市立自然科学博物館収蔵目録第５集，60p.

中村純（1967）花粉分析．古今書院，p.82-110.

中村純（1974）イネ科花粉について、とくにイネ（Oryza sativa）を中心として.第四紀研究,13,p.187-193.

中村純（1977）稲作とイネ花粉．考古学と自然科学，第10号，p.21-30.

中村純（1980）日本産花粉の標徴．大阪自然史博物館収蔵目録第13集，91p.

Ⅳ．珪藻分析

１．はじめに

珪藻は、珪酸質の被殻を有する単細胞植物であり、海水域や淡水域などの水域をはじめ、湿った土壌、岩石、コケの表面にまで生息している。珪藻の各分類群は、塩分濃度、酸性度、流水性などの環境要因に応じて、それぞれ特定の生息場所を持っている。珪藻化石群集の組成は、当時の堆積環境を反映しており、水域を主とする古環境復原の指標として利用されている。

２．試料

分析試料は、第42次調査南壁のⅡｄ層からⅣａ層について採取された計８点である。試料採取箇所を分析結果の模式柱状図に示す。これらは、花粉分析に用いられたものと同一試料である。

３．方法

以下の手順で、珪藻の抽出と同定を行った。

１）試料から１ cm^3 を採量
２）10％過酸化水素水を加え、加温反応させながら１晩放置
３）上澄みを捨て、細粒のコロイドを水洗（５～６回）
４）残渣をマイクロピペットでカバーグラスに滴下して乾燥
５）マウントメディアによって封入し、プレパラート作成
６）検鏡、計数

検鏡は、生物顕微鏡によって600～1500倍で行った。計数は珪藻被殻が200個体以上になるまで行い、少ない試料についてはプレパラート全面について精査を行った。

４．結果

（１）分類群

試料から出現した珪藻は、真塩性種（海水生種）３分類群、真－中塩性種（海－汽水生種）４分類群、中－貧塩性種（汽－淡水生種）３分類群、貧塩性種（淡水生種）84分類群である。破片の計数は基本的に中心域を有するものを１個とし、中心域がない種については両端２個につき１個と数えた。分析結果を表３に示し、珪藻総数を基数とする百分率を算定したダイアグラムを図３に示す。珪藻ダイアグラムにおける珪藻の生態性についてはLowe（1974）や渡辺（2005）、陸生珪藻については小杉（1986）、環境指標種群の海水生種から汽水生種については小杉（1988）、淡水生種については安藤（1990）の記載を参照した。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記し、主要な分類群について顕微鏡写真を示す。以下にダイアグラムで表記した主要な分類群を記載する。

〔貧塩性種〕

Achnanthes lanceolata、*Amphora copulata*、*Amphora montana*、*Amphora* spp.、*Cymbella silesiaca*、*Diploneis elliptica*、*Diploneis* spp.、*Gomphonema angustum*、*Gomphonema gracile*、*Gomphonema minutum*、*Gomphonema parvulum*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula confervacea*、*Navicula contenta*、*Navicula cryptocephala*、*Navicula cryptotenella*、*Navicula elginensis*、*Navicula kotschyi*、*Navicula mutica*、*Navicula pupula*、*Navicula* sp.、*Navicula* spp.、*Navicula veneta*、*Nitzschia amphibia*、*Pinnularia gibba*、*Pinnularia microstauron*、*Pinnularia schroederii*、*Pinnularia subcapitata*、*Pinnularia viridis*、*Stauroneis anceps*

（２）珪藻群集の特徴（図３）

下位のⅣａ層（試料１）とⅢｊ層（試料３）では、珪藻が検出されなかった。Ⅲｇ層（試料６）からⅢｄ層（試料10）にかけては、陸生珪藻の占める割合が約40～60％であり、真・好流水性種、流水不定性種も比較的多い。陸生珪藻では*Amphora montana*、*Hantzschia amphioxys*、*Navicula mutica*が優占する。真・好流水性種では中～下流性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*がやや多く、上位に向かい増加傾向を示す。沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginensis*、好流水性種の*Gomphonema parvulum*、流水不定性種では*Navicula kotschyi*、*Navicula cryptotenella*、*Navicula cryptocephala*、*Navicula* spp.などが低率に出現する。Ⅲｄ層（試料12）では、陸生珪藻の占める割合が増加し、真・好流水性種が減少する。*Hantzschia amphioxys*、*Navicula contenta*が増加し、真・好流水性種では中～下流性河川環境指標種群の*Achnanthes lanceolata*などが減少する。Ⅲａ層（試料17）からⅡｄ層（試料21）にかけては、流水不定性種の占める割合が高くなり、陸生珪藻の占める割合が低くなっている。流水不定性種では*Amphora copulata*を主に、*Cymbella silesiaca*、*Diploneis* spp.、*Gomphonema angustum*、*Gomphonema minutum*などが増加する。真・好流水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の*Navicula elginensis*、好流水性種の*Gomphonema parvulum*が増加する。好止水性種では沼沢湿地付着生環境指標種群の*Gomphonema gracile*、好止水性種の*Diploneis elliptica*が増加する。陸生珪藻では*Navicula confervacea*が増加し、下位で優占した分類群は減少している。

５．珪藻分析から推定される堆積環境

下位のⅣａ層とⅢｊ層では、珪藻が検出されなかった。珪藻が検出されない原因としては、珪藻の生育に適さない乾燥した堆積環境であったこと、水流や粒径による淘汰・選別を受けたこと、土層の堆積速度が速かったことなどが考えられるが、ここでの原因は不明である。

弥生土器包含層のⅢｇ層からⅢｄ層にかけては、湿潤な陸域の環境、河川の影響を受ける不安定な流水域の環境など、多様な環境が共存もしくは繰り返されていたと考えられる。Ⅲａ層からⅡｄ層にかけては、流水の影響のある沼沢湿地、水草の生育する不安定な滞水域、湿潤な陸域など、多様な環境が共存もしくは繰り返されていたと考えられ、水田域もしくはその周辺の環境が反映されていると推定される。

文献

Lowe, R. L.（1974） Environmental Requirements and pollution tolerance of fresh?water diatoms. National Environmental Reserch Center, 333p.

安藤一男（1990）淡水産珪藻による環境指標種群の設定と古環境復原への応用．東北地理, 42, p.73-88.

伊藤良永・堀内誠示（1991）陸生珪藻の現在に於ける分布と古環境解析への応用．珪藻学会誌，6, p.23-45.

小杉正人（1986）陸生珪藻による古環境解析とその意義－わが国への導入とその展望－．植生史研究, 第１号，植生史研究会，p.29-44.

小杉正人（1988）珪藻の環境指標種群の設定と古環境復原への応用．第四紀研究，27，p.1-20.

渡辺仁治（2005）群集解析に基づく汚濁指数DAIpo, pH耐性能．淡水珪藻生態図鑑．内田老鶴圃, 666p.

Ⅴ．樹種同定

１．はじめに

木材は、セルロースを骨格とする木部細胞の集合体であり、解剖学的形質の特徴から樹種の同定が可能である。木材は花粉などの微化石と比較して移動性が小さいことから、比較的近隣の森林植生の推定が可能であり、遺跡から出土したものについては木材の利用状況や流通を探る手がかりとなる。

２．試料

試料は、Ｃ-７区とＷ-８区で出土した樹根から採取された２点である。

３．方法

カミソリを用いて新鮮な横断面（木口と同義)、放射断面（柾目)、接線断面（板目）の基本三断面の切片を作製し、生物顕微鏡によって40～1000倍で観察した。同定は、解剖学的形質および現生標本との対比によって行った。

４．結果

表１に結果を示し、主要な分類群の顕微鏡写真を示す。以下に同定根拠となった特徴を記す。

クスノキ　*Cinnamomum camphora Presl*　クスノキ科　写真１・２

横断面：中型から大型の道管が単独および２～数個放射方向に複合して散在する散孔材である。道管の周囲を鞘状に軸方向柔細胞が取り囲んでいる。これらの柔細胞の中には大きく膨れ上がったものが存在する。放射断面：道管の穿孔は単穿孔で、道管の内壁にらせん肥厚が存在する。放射組織はほとんどが平伏細胞で上下の縁辺部のみ直立細胞からなる。直立細胞のなかには大きく膨れ上がり、油を含むものが見られる。　接線断面：放射組織は異性放射組織型で１～３細胞幅であり、上下の縁辺部の直立細胞のなかには、しばしば大きく膨れ上がり、油を含むものが見られる。

５．所見

樹種同定の結果、Ｃ-７区とＷ-８区の樹根は、いずれもクスノキと同定された。クスノキは西南日本に分布する照葉樹林の主要構成要素で、通常高さ25ｍ、径80cmぐらいであるが、高さ50ｍ、径５ｍに達するものもある。材は堅硬で耐朽性が強く、保存性が高く芳香がある。建築、器具、楽器、船、彫刻、ろくろ細工などに用いられる。

文献

島地 謙・佐伯 浩・原田 浩・塩倉高義・石田茂雄・重松頼生・須藤彰司（1985）木材の構造．文永堂出版，290p.

島地 謙・伊東隆夫（1988）日本の遺跡出土木製品総覧．雄山閣，296p.

表 1　元岡遺跡群第 42 次調査における植物珪酸体分析結果
検出密度（単位：× 100 個 /g）

分類群	地点・試料	調査区南壁												
	学名	1	3	4	5	6	8	9	10	12	14	17	19	21
イネ科	Gramineae													
イネ	*Oryza sativa*			15	38	62	59	55	38	65	31	55	50	57
イネ籾殻（穎の表皮細胞）	*Oryza sativa* (husk Phytolith)				8	6	7	34		13				
ヨシ属	Phragmites					6	7		6	20	6	20	7	6
キビ族型	Paniceae type				8					7	6			
ススキ属型	*Miscanthus type*				8	6	7	28	19	46	25	34	14	
ウシクサ族A	Andropogoneae A type			15	30	25	26	34	45	46	31	34	64	25
タケ亜科	Bambusoideae													
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi			30	8	6		14		7	6	7	14	6
未分類等	Others			7		25	20	7	6	13	6			13
その他のイネ科	Others													
表皮毛起源	Husk hair origin		7	15	23	12	26		6	72	37	27	14	13
棒状珪酸体	Rodshaped		15	52	8	118	66	83	109	189	112	96	71	134
未分類等	Others		15	45	53	68	46	48	58	26	37	89	121	121
樹木起源	Arboreal													
ブナ科（シイ属）	*Castanopsis*			104	158	25	53	41	90	39	44	34	36	51
ブナ科（アカガシ亜属）	*Quercus subgen. Cyclobalanopsis*				8	6		14			12		14	6
クスノキ科	Lauraceae			22	68	12	13	21	32	13	12	34	14	25
マンサク科（イスノキ属）	*Distylium*				15				6				14	13
アワブキ科	Sabiaceae			30	8	12	7	21	13	13	19	27	14	13
その他	Others			104	135	25	26	89	38	52	62	20	71	64
（海綿骨針）	Sponge spicules													
植物珪酸体総数	Total	0	37	440	572	416	361	488	467	618	450	478	520	547

おもな分類群の推定生産量（単位：kg /㎡・cm）：試料の仮比重を 1.0 と仮定して算出														
イネ	*Oryza sativa*			0.44	1.11	1.83	1.74	1.62	1.13	1.91	0.92	1.61	1.47	1.68
ヨシ属	*Phragmites*					0.39	0.41		0.40	1.23	0.39	1.29	0.45	0.40
ススキ属型	*Miscanthus* type				0.09	0.08	0.08	0.34	0.24	0.56	0.31	0.42	0.18	
ミヤコザサ節型	*Sasa* sect. Crassinodi			0.09	0.02	0.02		0.04		0.02	0.02	0.02	0.04	0.02

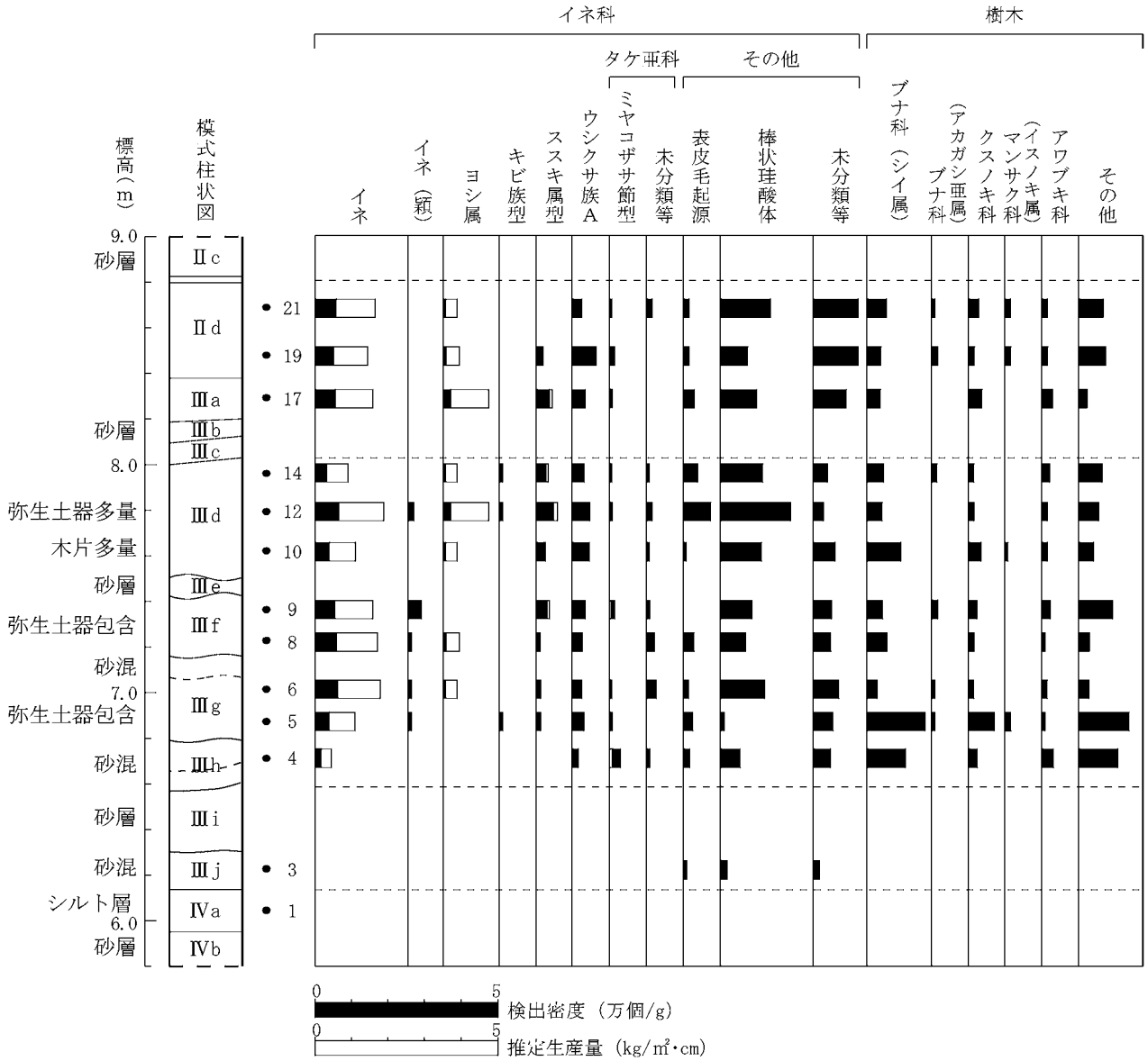


図1　元岡遺跡第42次調査南壁における植物珪酸体分析結果

表２　元岡遺跡第 42 次調査における花粉分析結果

分類群		調査区南壁							
学名	和名	1	3	6	8	10	12	17	21
Arboreal pollen	樹木花粉								
Podocarpus	マキ属			3					
Abies	モミ属				1	1	1	1	5
Tsuga	ツガ属		3						2
Pinus subgen. Diploxylon	マツ属複維管束亜属		2	12	9	13	4	12	13
Pinus subgen. Haploxylon	マツ属単維管束亜属		1						1
Cryptomeria japonica	スギ		2	3	7	11	5	7	8
Taxaceae-Cephalotaxaxeae-Cupressaceae	イチイ科 - イヌガヤ科 - ヒノキ科			15	19	37	10	5	
Myrica	ヤマモモ属								1
Pterocarya rhoifolia	サワグルミ		1						
Platycarya strobilacea	ノグルミ					1			
Alnus	ハンノキ属	26	33	1	1			1	
Betula	カバノキ属		14	1	1				1
Corylus	ハシバミ属	1		2	1				
Carpinus-Ostrya japonica	クマシデ属 - アサダ	5	18	5					1
Castanea crenata	クリ			2	2				
Castanopsis-Pasania	シイ属 - マテバシイ属			23	35	10	11	23	29
Fagus	ブナ属		2						
Quercus subgen. Lepidobalanus	コナラ属コナラ亜属	22	48		3			10	15
Quercus subgen. Cyclobalanopsis	コナラ属アカガシ亜属		1	69	35	14	4	24	32
Ulmus-Zelkova serrata	ニレ属 - ケヤキ	1	5	1		1		1	
Celtis-Aphananthe aspera	エノキ属 - ムクノキ			169*	27	1		1	3
Mallotus japonicus	アカメガシワ			1					
Zanthoxylum	サンショウ属			1					
Ilex	モチノキ属			2			1		
Celastraceae	ニシキギ科				7	1			
Acer	カエデ属	1							
Tilia	シナノキ属	5	39						
Camellia	ツバキ属			1					
Oleaceae	モクセイ科								1
Fraxinus	トネリコ属					1			
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉								
Moraceae-Urticaceae	クワ科 - イラクサ科			20*	19	20	10	9	6
Rosaceae	バラ科			3	2				1
Leguminosae	マメ科			1			1	4	2
Sambucus-Viburnum	ニワトコ属 - ガマズミ属			2		1		1	
Nonarboreal pollen	草本花粉								
Typha-Sparganium	ガマ属 - ミクリ属								1
Sagittaria	オモダカ属							4	1
Gramineae	イネ科	7	10	76	54	37	58	198	282
Oryza type	イネ属型			10	2			16	37
Triticum aestivum type	コムギ型			4				1	
Cyperaceae	カヤツリグサ科	12	38	8	5	4	6	31	39
Aneilema keisak	イボクサ								2
Monochoria	ミズアオイ属							1	10
Polygonum sect. Persicaria	タデ属サナエタデ節	2			2			1	1
Rumex	ギシギシ属			1		1		10	1
Fagopyrum	ソバ属								1
Chenopodiaceae-Amaranthaceae	アカザ科 - ヒユ科			8	9	9	21	5	1
Caryophyllaceae	ナデシコ科					1	1	6	4
Ranunculus	キンポウゲ属	2	1	2	4	4		5	1
Thalictrum	カラマツソウ属		3						
Cruciferae	アブラナ科			24	81	29	21	18	12
Sanguisorba	ワレモコウ属		1						
Impatiens	ツリフネソウ属	2							
Ampelopsis brevipedunculata	ノブドウ			2	1				
Rotala	キカシグサ属								1
Hydrocotyloideae	チドメグサ亜科							4	6
Apioideae	セリ亜科	2						2	6
Solanaceae	ナス科								1
Actinostemma lobatum	ゴキヅル			1					
Lactucoideae	タンポポ亜科				1			7	3
Asteroideae	キク亜科		1	1			1	4	7
Xanthium	オナモミ属					5	2	4	1
Artemisia	ヨモギ属	27	34	5	2	4	13	57	34
Fern spore	シダ植物胞子								
Monolate type spore	単条溝胞子	9	5	10	12	18	7	10	6
Trilate type spore	三条溝胞子		4	14	13	22	20	13	6
Arboreal pollen	樹木花粉	61	169	311	148	91	36	85	112
Arboreal・Nonarboreal pollen	樹木・草本花粉	0	0	26	21	21	11	14	9
Nonarboreal pollen	草本花粉	54	88	142	161	94	123	374	452
Total pollen	花粉総数	115	257	479	330	206	170	473	573
Pollen frequencies of 1cm3	試料 1cm3 中の花粉密度	7.1 $\times 10^{2}$	2.6 $\times 10^{3}$	6.4 $\times 10^{3}$	3.1 $\times 10^{3}$	2.3 $\times 10^{3}$	1.9 $\times 10^{3}$	1.8 $\times 10^{4}$	2.1 $\times 10^{4}$
Unknown pollen	未同定花粉	4	6	12	14	6	5	5	5
Fern spore	シダ植物胞子	9	9	24	25	40	27	23	12
Helminth eggs	寄生虫卵								
Ascaris（*lumbricoides*）	回虫卵					2	3		
Trichuris（*trichiura*）	鞭虫卵			3		19	14		
Diphyllobothrium mansoni	マンソン裂頭条虫卵			2	1	3	1		
Total	計	0	0	5	1	24	18	0	0
Helminth eggs frequencies of 1cm3	試料 1cm3 中の寄生虫卵密度	0.0	0.0	6.5 × 10	0.9 × 10	2.9 × 10 2	1.8 × 10 2	0.0	0.0
Stone cell	石細胞					(+)	(+)		
Digestion rimeins	明らかな消化残渣	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)
Charcoal fragments	微細炭化物							(+)	

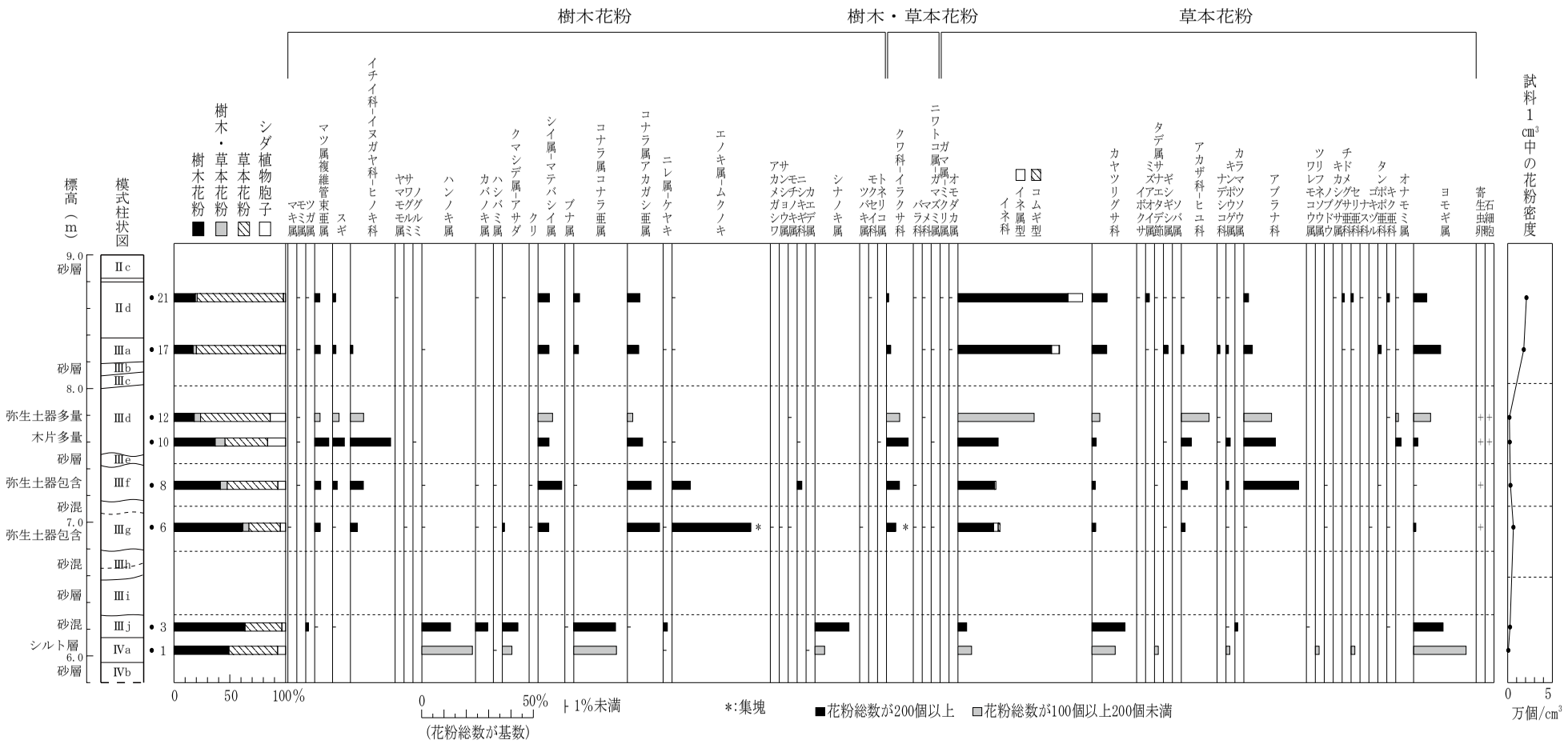


図２　元岡遺跡第 42 次調査南壁における花粉ダイアグラム

表3　元岡遺跡第 42 次調査における珪藻分析結果

分類群	調査区南壁							
	1	3	6	8	10	12	17	21
貧塩性種（淡水生種）								
Achnanthes hungarica			1	2			2	
Achnanthes lanceolata			21	51	66	15	13	2
Amphora copulata			1	1	4	1	52	46
Amphora fontinalis			7	6	6			
Amphora montana			113	56	16	49		2
Amphora spp.			20	6				
Aulacoseira ambigua								1
Caloneis silicula				1	1	1		4
Cymbella cuspidata							3	2
Cymbella lanceolata								2
Cymbella naviculiformis				1			6	3
Cymbella silesiaca			1				12	14
Cymbella tumida							1	
Diploneis elliptica			1	1	2	1	28	12
Diploneis ovalis							1	
Diploneis spp.						1	9	22
Diploneis yatukaensis							2	3
Eunotia minor				2	1		7	10
Eunotia pectinalis				1			1	1
Eunotia praerupta							3	
Fragilaria brevistriata			3					
Fragilaria capucina				2	1			3
Fragilaria pinnata				1				
Fragilaria spp.								5
Frustulia vulgaris			5	4	1			2
Gomphonema acuminatum								2
Gomphonema angustatum							5	
Gomphonema angustum					2	1	22	3
Gomphonema gracile					1		20	5
Gomphonema minutum			3	3	5		11	20
Gomphonema parvulum			8	11	14	4	31	23
Gomphonema pseudoaugur			1					
Gomphonema pseudosphaerophorum							1	
Gomphonema spp.			2	1			3	2
Gyrosigma spp.			1	1				1
Hantzschia amphioxys			55	22	31	71	2	6
Meridion circulare v. constrictum			1			2	11	1
Navicula americana							3	1
Navicula capitata				2				
Navicula clementis								9
Navicula confervacea				1	2	1	36	81
Navicula contenta			7	1	14	29		2
Navicula cryptocephala			14	8		2		7
Navicula cryptotenella			10	15	11	2	1	6
Navicula cuspidata					1		1	1
Navicula elginensis			17	22	6	5	5	45
Navicula gallica				1		6		
Navicula goeppertiana			2					
Navicula ignota			1	1	1	5	1	
Navicula kotschyi			9	49	6		2	
Navicula laevissima				1		4		13
Navicula mutica			33	38	96	90	12	17
Navicula mutica v. ventricosa			14					
Navicula pupula			7	11	7	2	3	16
Navicula slesvicensis				5				
Navicula sp.			3	5	7	48	1	
Navicula spp.			7	8	8	7	3	4
Navicula veneta			19	5				
Neidium ampliatum			1	2		1	7	1
Nitzschia amphibia			12	9	11	8	1	
Nitzschia brevissima			1	1	3	2		
Nitzschia capitellata				2				
Nitzschia gracilis				1				
Nitzschia levidensis			1	1	1	1		1
Nitzschia palea			2		4	8		
Orthoseira roeseana			1	2				
Pinnularia acrosphaeria							1	1
Pinnularia borealis			2	1	1	2		
Pinnularia gibba				2	2		21	12
Pinnularia interrupta					2		6	1
Pinnularia majer							3	1
Pinnularia microstauron			4	5	12	9		1
Pinnularia schroederii			3	2	2	1	11	10
Pinnularia sp.					1			
Pinnularia spp.				3				
Pinnularia subcapitata			6	7	13	9	3	5
Pinnularia viridis			2	2	5	1	8	6
Rhopalodia gibba		1					3	2
Stauroneis anceps			2	21	1	1	1	2
Stauroneis phoenicenteron				1	1		8	6
Stauroneis smithii			5	8		1		1
Surirella angusta			2	2	4	6	1	1
Surirella ovata			1		3	3		
Synedra ulna			1	1			3	2
中－貧塩性種（汽－淡水生種）								
Amphora holsatica				4				
Navicula menisculus				1				
Rhopalodia gibberula			1		1	1	6	4
真－中塩性種（海－汽水生種）								
Achnanthes delicatula				3				
Cocconeis scutellum			2			5		
Nitzschia granulata			1	1				
Nitzschia plana				1	1			
真塩性種（海水生種）								
Glyphodesmis sp.				1				
Grammatophora macilenta				1				
Thalassiosira sp.				1				
合　計	0	1	437	432	378	406	397	456
未同定	0	0	7	11	7	8	9	6
破片	3	0	99	126	98	83	368	529
試料 1 cm^3 中の殻数密度	0.0	2.0 $\times 10^2$	1.2 $\times 10^6$	7.9 $\times 10^5$	3.1 $\times 10^5$	6.1 $\times 10^5$	6.8 $\times 10^5$	7.4 $\times 10^5$
完形殻保存率（%）	–	–	81.8	77.9	79.7	83.3	52.5	46.6

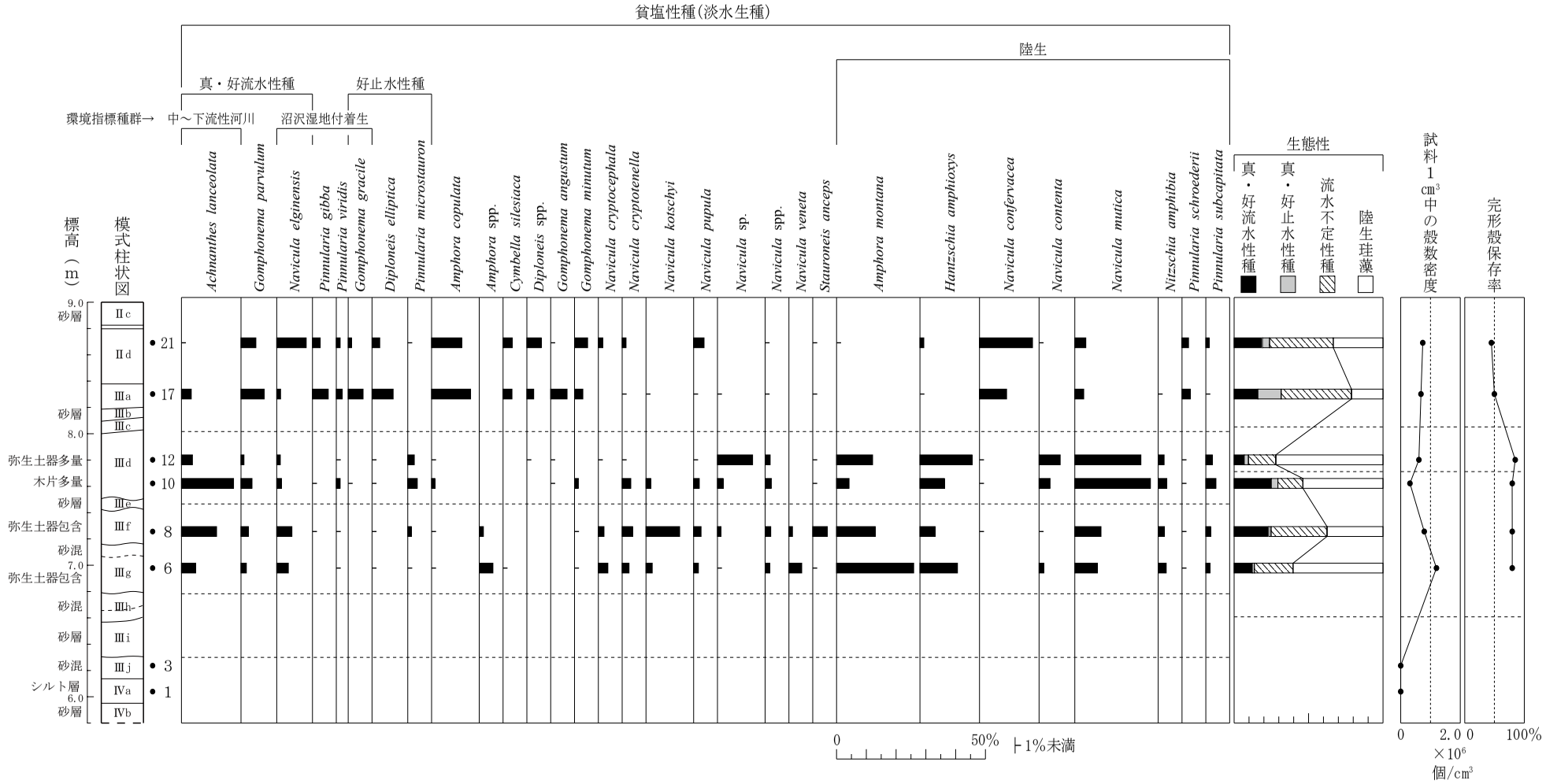
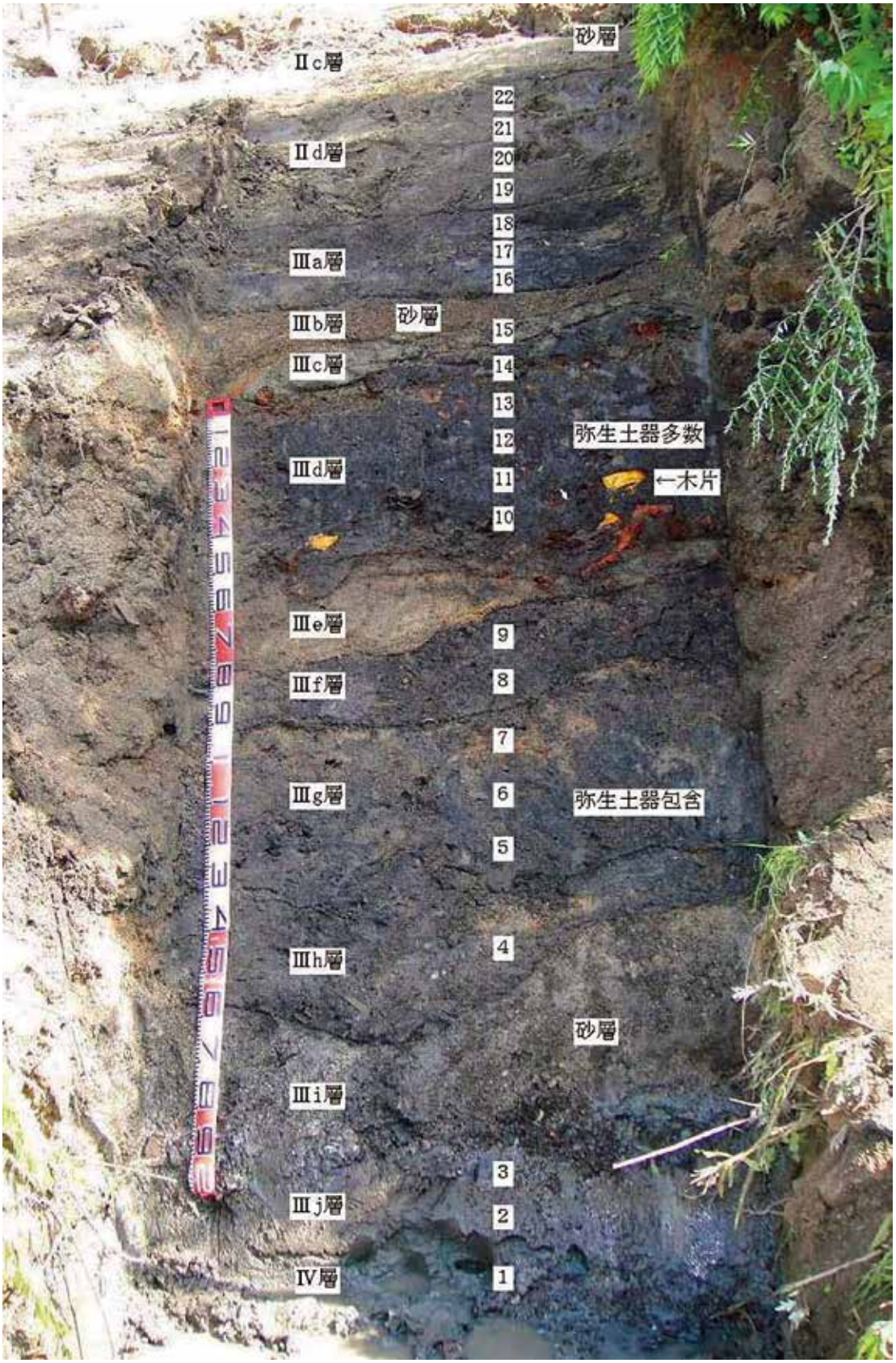
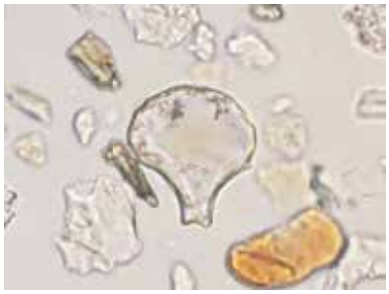


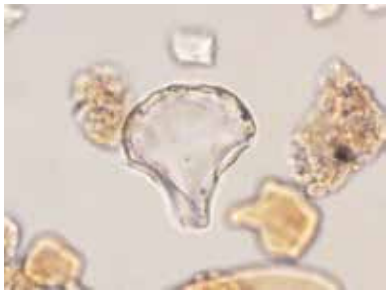
図3　元岡遺跡第 42 次調査南壁における主要珪藻ダイアグラム



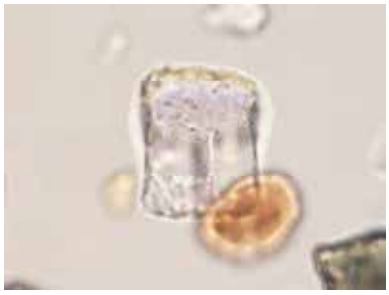
元岡遺跡第 42 次調査南壁における試料採取箇所（下部）

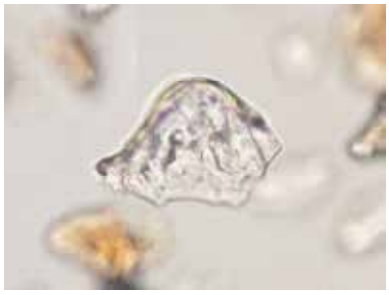
元岡遺跡の植物珪酸体（プラント・オパール）

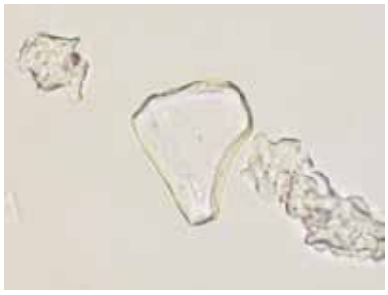

イネ

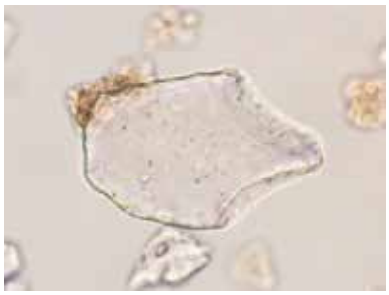

イネ

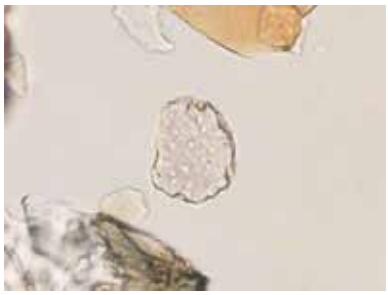
イネ


イネ（側面）

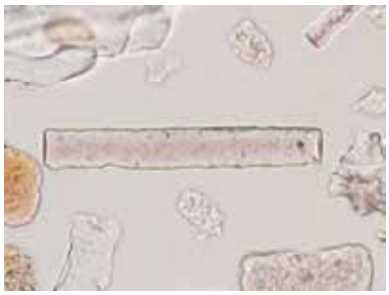

イネの籾殻（穎の表皮細胞）

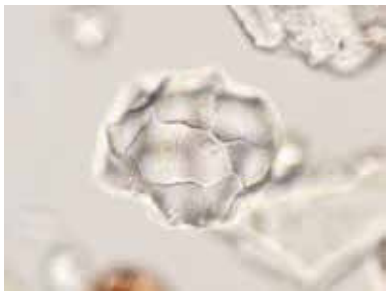

ススキ属型


ヨシ属


ミヤコザサ節型

表皮毛起源


棒状珪酸体


ブナ科（シイ属）

クスノキ科

イスノキ属

アワブキ科

海綿骨針

50 μm

元岡遺跡の花粉・寄生虫卵

1　マツ属複維管束亜属

2　スギ

3 イチイ科-イヌガヤ科-ヒノキ科

4　ハンノキ属

5　シイ属-マテバシイ属

6　コナラ属コナラ亜属

7　コナラ属アカガシ亜属

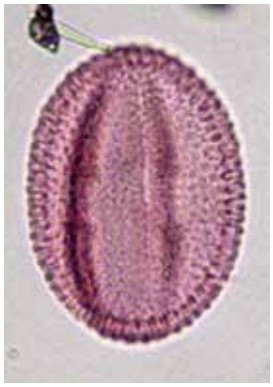
8　エノキ属－ムクノキ

9　シナノキ属

10　イネ属型

11　カヤツリグサ科

12 ミズアオイ属


13　ソバ属

14　アブラナ科

15　ヨモギ属

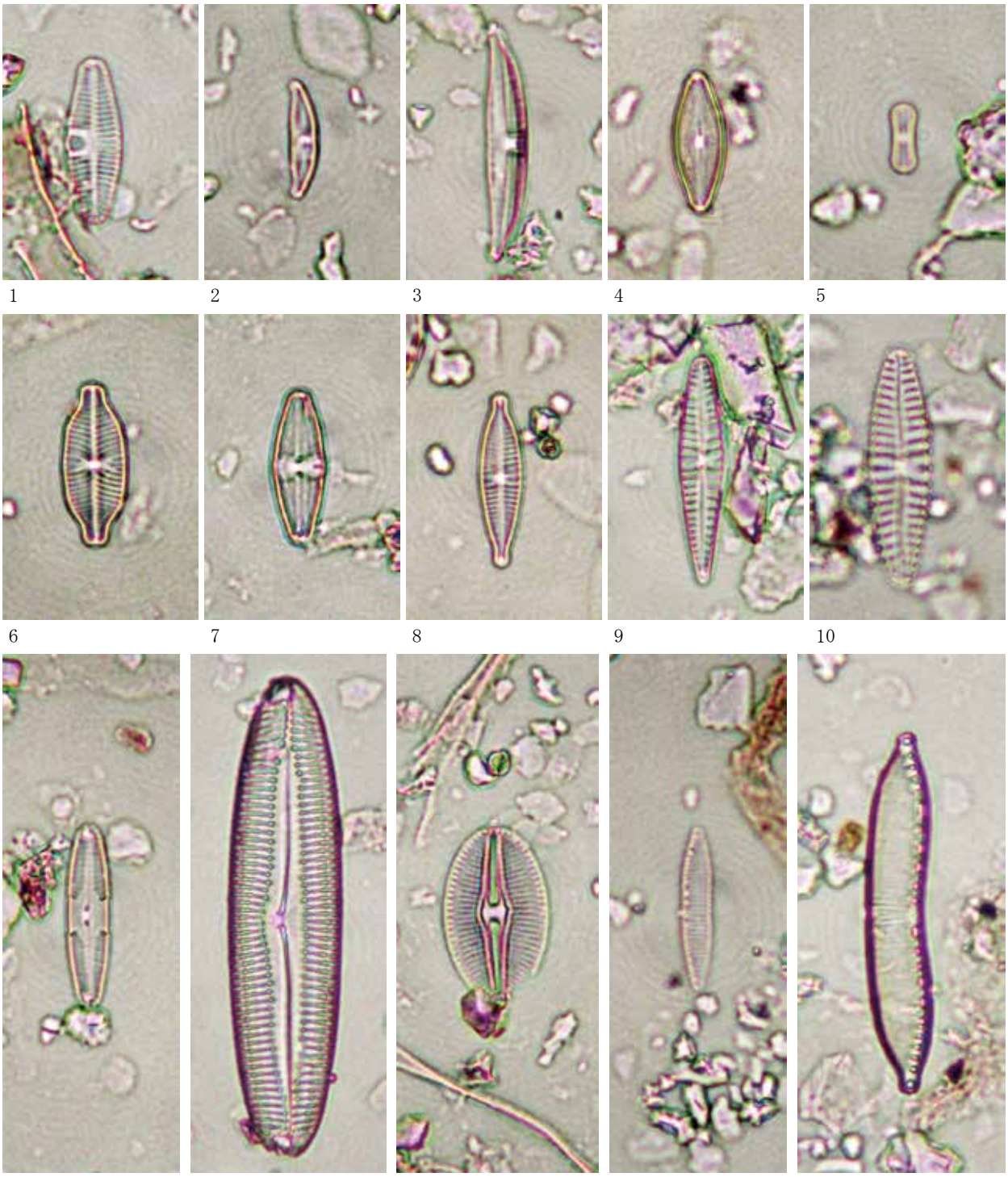
16　回虫卵

17　鞭虫卵

18　マンソン裂頭条虫卵

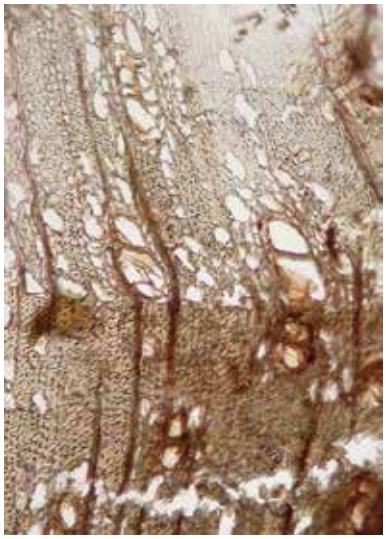
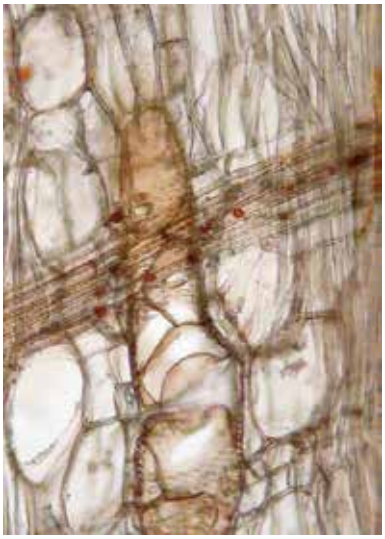
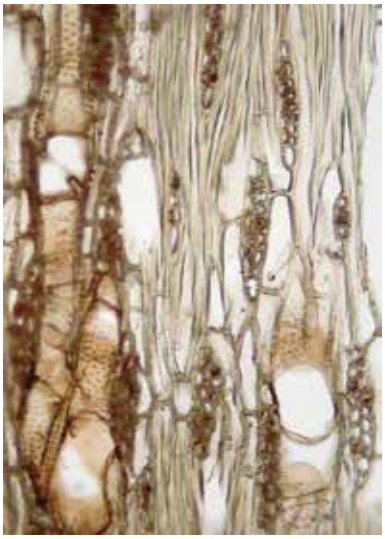
10μm

元岡遺跡の珪藻



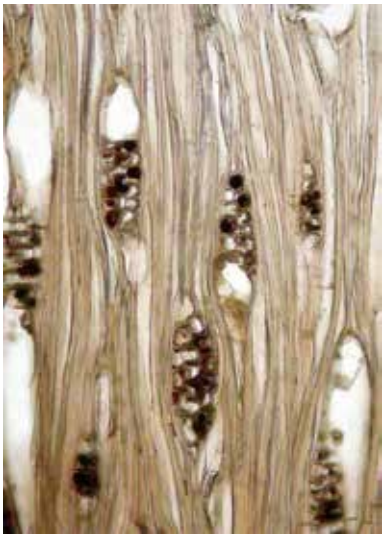
1－15：10μm

1．*Achnanthes lanceolata* 2．*Amphora montana* 3．*Amphora copulata* 4．*Navicula confervacea*
5．*Navicula contenta* 6．*Navicula elginensis* 7．*Navicula mutica* 8．*Gomphonema parvulum*
9．*Gomphonema gracile* 10．*Gomphonema angustum* 11．*Pinnularia subcapitata* 12．*Pinnularia viridis*
13．*Diploneis elliptica* 14．*Nitzschia amphibia* 15．*Hantzschia amphioxys*

横断面 ━━━━━━ ： 0.5㎜　放射断面━━━━━━ ： 0.2㎜　接線断面━━━━━━ ： 0.2㎜

１．Ｃ－７区樹根　クスノキ

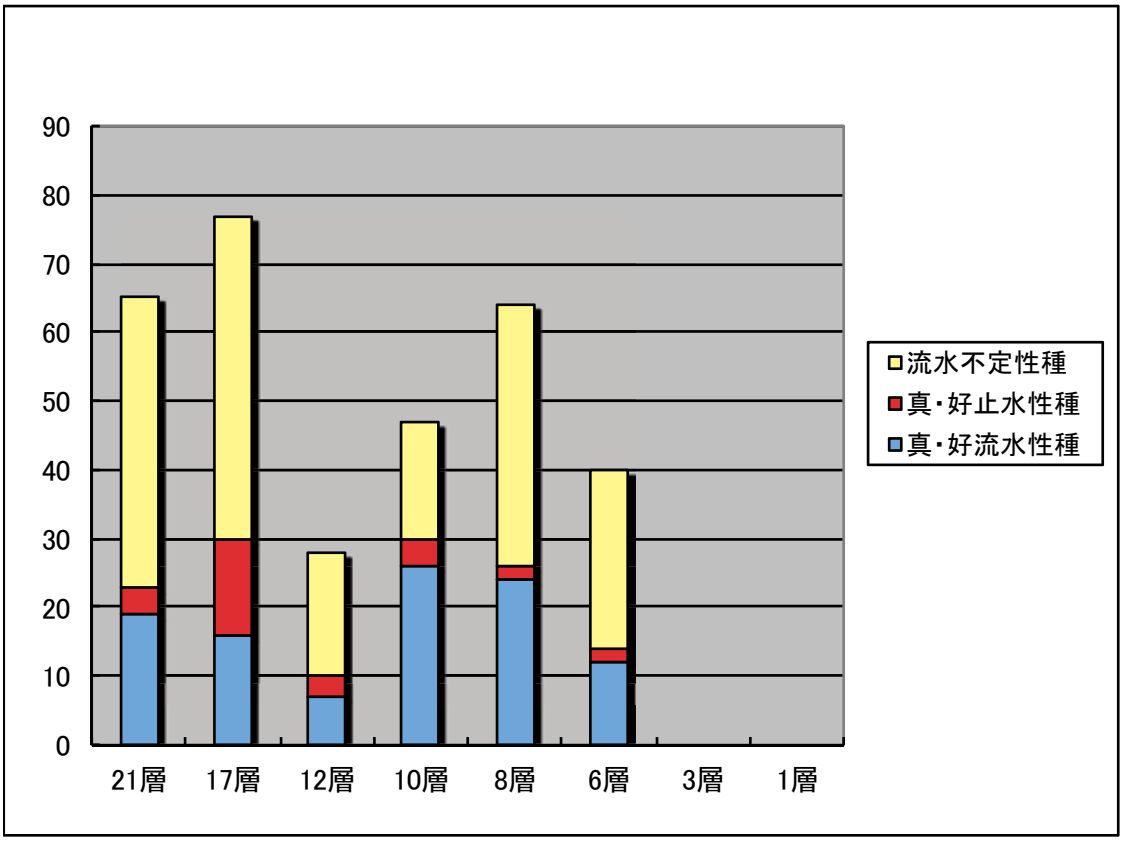


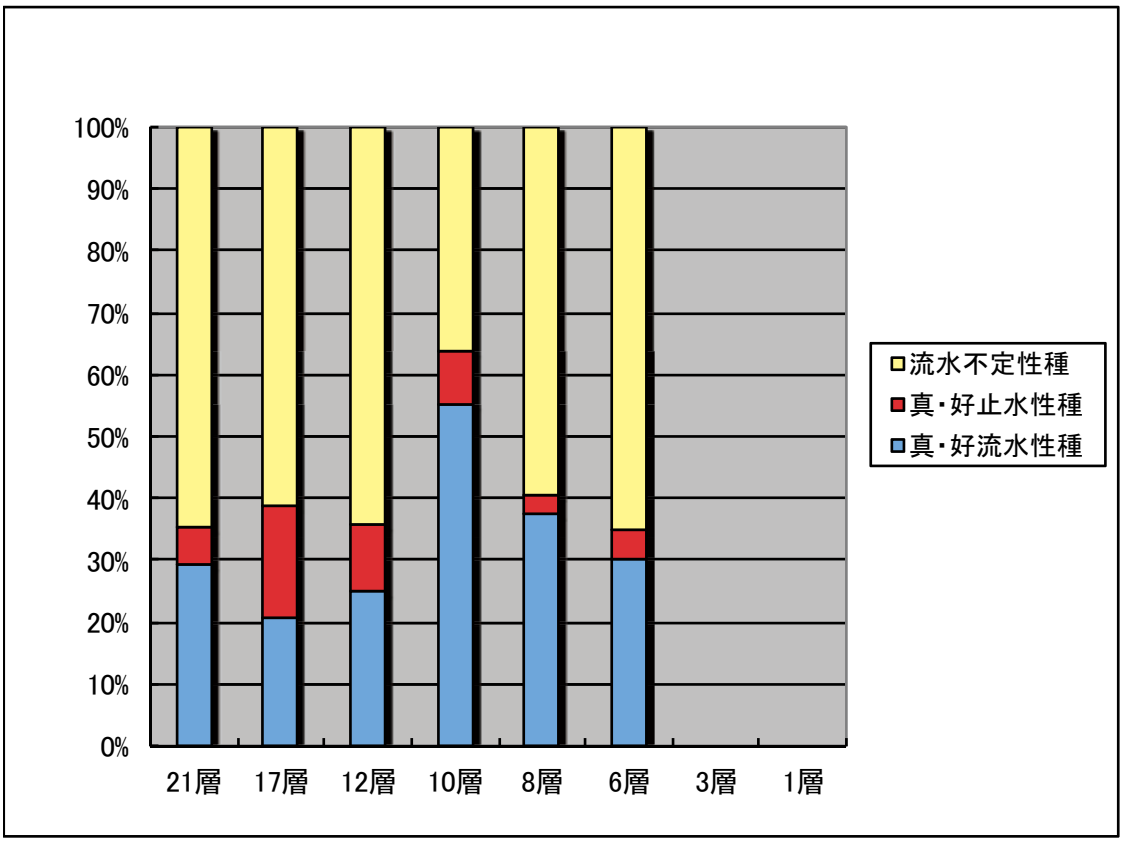
横断面 ━━━━━━ ： 0.5㎜　放射断面━━━━━━ ： 0.2㎜　接線断面━━━━━━ ： 0.2㎜

２．Ｗ－８区樹根　クスノキ

表４　元岡遺跡における樹種同定結果

試料	結果（学名／和名）
Ｃ－７区樹根	*Cinnamomum camphora* Presl　クスノキ
Ｗ－８区樹根	*Cinnamomum camphora* Presl　クスノキ


90
80
70
60
50
40
30
20
10
0
21層
17層
12層
10層
8層
6層
3層
1層
流水不定性種
真・好止水性種
真・好流水性種


100%
90%
80%
70%
60%
50%
40%
30%
20%
10%
0%
21層
17層
12層
10層
8層
6層
3層
1層
流水不定性種
真・好止水性種
真・好流水性種

4 おわりに

冒頭で述べたように、第52次調査Ｉ区は吉留秀敏が発掘調査を担当したが、調査終了後逝去したため、米倉が報告書制作を担当し、小林義彦の助力を得て本書を刊行した。残された図面や写真等から事実関係の把握務めたが、米倉の現在の職務（福岡市博物館学芸課長）の業務の傍ら、時間的な不足もあり、極めて不十分な報告書になってしまった。Ｉ区は、ほとんどをＳＤ－０１が占めているが、その遺構の記述は十分成すことができなかった。また出土遺物についても、グリッドや層の分類ができず、同じグリッドの遺物を別の図に分けて記載するなど、混乱したまま刊行に至ってしまった。出土グリッド名は一覧表に記載しているので参照いただきたい。また縄文土器や石器など、未掲載の遺物も多く、これらはすべて編者の責に帰するものである。以下、不十分ながら、主に出土遺物について簡単にまとめたい。

ＳＤ０１から出土した土器のほとんどは、第42次調査区と同様、弥生時代中期中葉から古墳時代初頭に及ぶ。出土量は第42次調査区に比べ、相当少ない。出土状況をの写真や図面を見ても、第42次の遺物の集中に比べると、どちらかというと散漫的である。その中でも、窓付き土器（210）など、特徴的な土器も若干含んでいる。また、丹塗土器は比較的多く出土しており、小林が後述している。

第42次調査では、上記のように中国系遺物のほか、朝鮮半島系の土器も出土しているが、当調査区でも朝鮮半島製瓦質土器（110）が1点出土した。10条前後の細い凹線が胴部最大径付近に巡り、細かい格子目タタキを施したもので、弥生時代終末頃に相当する土器であろう。比較的早い時期の須恵器（244）が出土しているのも目を引く。この時期の遺物は元岡・桑原遺跡群全体を見ても多くはない。6世紀以降の須恵器も比較的多く出土した。図示したのは数点のみであるが、すぐ近くにある元岡古墳群とのかかわりも考えられる。（米倉）

元岡・桑原遺跡群の遺物群を短絡的に概観するに、先進の大陸や半島と倭国の文化流入の窓口と云える伊都国や奴国などの政治的中心域との中継地としていち早く半島系の突出した遺物が出土する反面で、地勢的には鄙地とも云える地域によるものか、中心域、殊に福岡平野を中心に国域を拡げる奴国の同期の土器群と比較するとその繊細さや美的美しさには及ばない傾向が窺え、これがこの元岡地区の地域的特徴として云えようか。

更に、中期後葉のNo.26の高坏やNo.223の壷などの丹塗土器の一群にはその制作に於いて特徴的な技法を示す。それは制作最終段階の丹塗り研磨の手順として調整後の胎土上に直接的に丹を塗り研磨するのではなく、まず始めに炭様の黒色顔料を塗りその上に3～6mm巾のヘラ先状工具によって幾重にも擦り付ける様に丁寧に研磨している一群が散見される。この二度塗りとも云える特徴的な技法は東方に連なる今宿平野の今宿五郎江遺跡出土の丹塗り土器群でも散見されており、後日に改めて丹塗り土器の一群を実見して制作技法に係る所見を述べたい。（小林）

最後に縄文土器と石器について、簡単に触れる。ＳＤ－０１は縄文時代晩期の開削と考えられ、第42次調査では孔列文土器なども出土した。当調査でも同時期の遺物が出土したが、量的には多くはない。その時期以外にも押型文土器や後期初頭の滑石混入土器などが出土した。

石器の出土傾向も第42次調査に近い。図示していない遺物も多いが、全体的な傾向は図化したものに近く、特に石錘・砥石の出土量が多い。石錘は大型のものから小型のものまで各種あり、第42次で出土した船材とともに、海に近い遺跡を表している。（米倉）

図版 1

第 52 次調査全景（東より）

第 52 次調査全景（北東より）

第 52 次調査全景（東より）

縄文草創期調査区とＳＤ０１（東より）

図版３

ＳＤ０１土層断面

遺構面（最上層）下土層断面

遺物出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況

図版 5

遺物出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況

遺物出土状況

図版７

出土石器

Ⅲ　第54次調査の報告－2

１．第54次調査の概要

第54次調査地点は元岡・桑原遺跡群の北東側の北へ開く谷内に位置する。同じ谷内の第20次調査地点1区と2区の間の未調査範囲について、平成20年10月6日から21年1月9日に調査を行い、平成23年度に報告（1173集）を行っている。今回はその追加報告である。

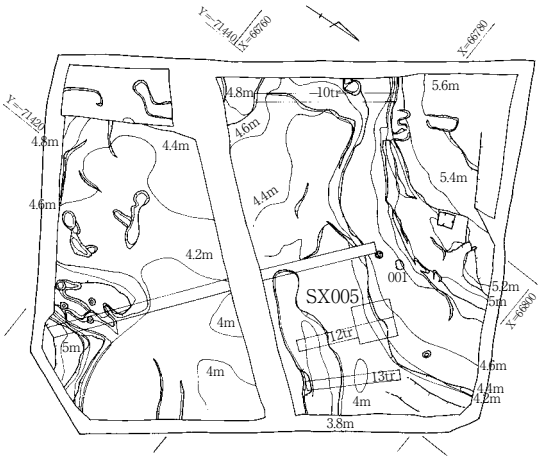
第20次調査（962集ほか）では、池状遺構ＳＸ００１から大宝元（701）年の紀年銘資料などが出土し、そこから下流へ流路ＳＸ００２が流れ、池状遺構ＳＸ０４４と合流する。第54次調査地点は、この合流地点のすぐ下流に位置し、調査区の大部分を流路が占める。この流路を谷部と呼称した。

谷内には灰褐色から暗褐色の粘質土が堆積し、4層に分けたうち、1、2層は8世紀までの遺物に加え中世の遺物を少量含み、4層は弥生時代中期から6世紀までの遺物が多く出土した。木製品は主に4層の出土である。4層以下は青灰色粘質、砂礫層の谷底又は粗砂を主体とした流路（5層）となり、4本のトレンチを掘削したが遺物はわずかである。上記の他に旧石器、縄文中期・晩期などの遺物も出土している。以下では、未報告であった黒曜石石刃等集中部ＳＸ００５と調査区出土の剥片石器の追加、谷部出土の木製品について報告する。

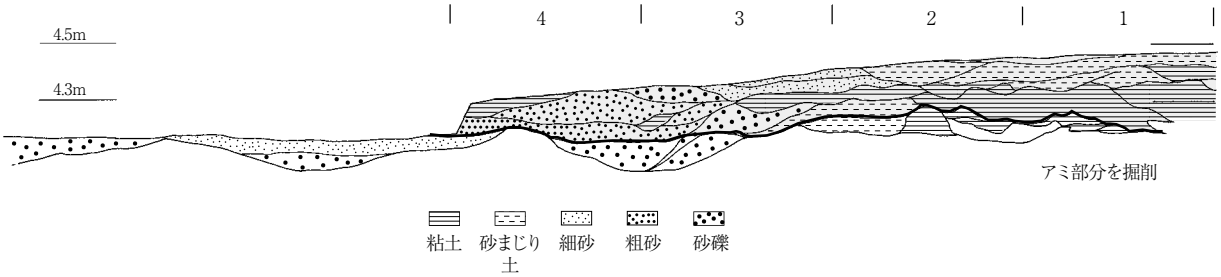
２．黒曜石石刃等集中部ＳＸ００５

谷部の粘質土の掘削終了後、下部の流路に直交して設けた12トレンチの掘削中に、黒曜石の大型コア（1173集Fig.42-355）が出土し、周囲から黒曜石の剥片が出土した。このため4×4mの範囲に25cmメッシュを設定し、ＳＸ００５として土壌を採取し、水洗を行った。出土した遺物は黒曜石の剥片・砕片多数、安山岩の剥片、土器片である。遺物が出土した土層は灰茶色粗砂、細砂、細砂を含む粘質土が細かく重なっており、深さ20～30cmの範囲を掘削し、上部10～15cmでの出土が多い。

出土遺物のうち土器は縄文土器の小片で摩耗しており、黒曜石の集中との関連はないと考える。後晩期と思われるが明確ではない。安山岩の剥片も同様である。以下、出土した黒曜石について報告する。



第１図　第54次調査全体図下面（1/800）



第２図　12トレンチおよびＳＸ００５土層図（1/40）

（1）　ＳＸ００５出土石器（第3～6図、7図-50･68）

本調査区では4×4mの範囲から、1mm以下の極小砕片を除き約670点の剥片（石刃）、砕片が出土している。大半は佐賀県伊万里市腰岳産の黒曜石であるが、混入と考えられる安山岩片もある。ＳＸ００５の端部では、大形の石核（または形を整えた黒曜石原石：第3図355）が見られるが、中央部では石核は認められない。1･7･10は残核ではなく、剥片（石刃）剥離の状況が明らかな剥片と言える。明らかに、目的剥片（石刃）剥離を行っていた空間と言える。ほぼ石刃に限定されることから、鈴桶型石核に関するものと思われる。第4図～7図に代表的な剥片類59点を図示し、その概要を述べる。

石刃類（1～35）

石刃1･2の接合関係を示したのが3である。下位の打面は認められないが、上下両面から石刃剥離を行っている様子が良く分かる。1や2の打面端部には、接触によって生じる磨りガラス状のキズ痕が線状に認められる。その下部には細かな剥離痕が認められ、剥離面頭部調整行っていたと思われる。このような痕跡は7･10にも認められる。1を含めこれらは一見残核のようであるが、剥離に失敗し、やや厚手の剥片が剥離されたものと思われる。2には右側面に調整痕が認められる。8や11にも同じような調整が施されている。

2（3）･10は両側面に自然面が認められることから、幅の狭い原石であると思われる。小口より石刃剥離を行っている。10には両側面ともに調整の痕跡は存在しない。7には左側面に調整痕があるが、一部は剥片剥離面と思われ、打面転移を行っているものと思われる。

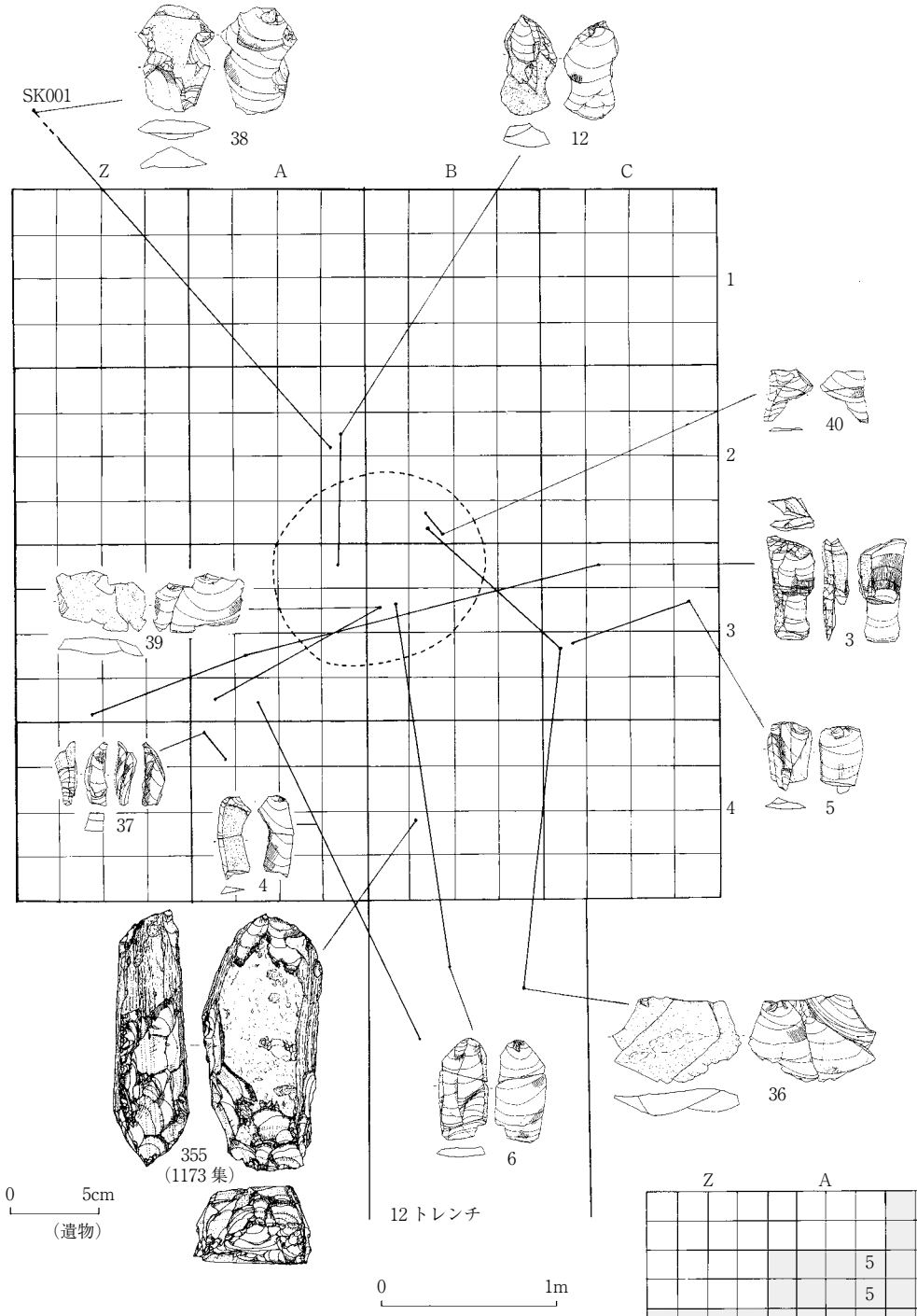
8は一見クレステッド・フレイク状であるが、稜部より右側への調整痕が明確でない。11は上部と下部で加撃方向に違いがある。このように、石刃核の最初の段階に生じるクレステッド・フレイクは認められないが、それを簡略化し石刃剥離へと繋げているものと思われる。真正の石刃技法とは言えないかも知れないが、石刃を連続剥離しているのは明らかである。

5･12は、剥片（石刃）2枚が接合したものである。5は自然面が存在せず、石核の中央部付近のものである。やや幅広品と細長石刃の組み合わせで、剥離面の加撃方向から上下に打面を設けていることが明らかである。12は剥片剥離の初期段階のもので、自然面が大きく残っている。この例からは、剥片（石刃）剥離の初期段階でクレステッド・フレイクのような調整を行っているようには見えない。

4･6･9･13は折断面の接合した縦長剥片（石刃）である。4･6･13は上下二方向に加撃の痕跡が認められ、打面を二面持つ石核から剥離されている。ところが、9は下端に自然面が認められ、打面は上部のみである。細かな剥離面頭部調整を行っており、形状は典型的石刃である。

14～35は縦長剥片（石刃）である。26は左側辺の一部に両面からの調整痕が認められ、加工痕ある石器とすべきだろう。比較的小形で薄いものが多く、石器素材として適当な大きさのものは、20や29のように欠損している。大形のものは剥片鏃など定形石器に加工されたものと思われる。なお、本地点では定形石器製作の痕跡が認められず、別の地点で行われたと考えられる。ここで検出された石器の大半は、定形石器の素材として適さないものであると思われる。

剥離面の方向を良く観察すると、次の三種に分類できる。一方向のみのもの（19～26、30～32）、上下二方向から加撃が認められるもの（17、18、27～29、33～35）、多方向の加撃痕があるもの（14～16）である。この点は前述の接合資料などのあり方と一致しており、石刃製作技術に若干の違いがあることを示している。30は正面に自然面が大きく残っており、原石面に直接剥片剥離を行っている。また、17のように大きく打面を残すものと、25のように殆どないものがある。一般的に剥離面頭部調整は顕著で、磨りガラス状の痕跡も確認出来る。

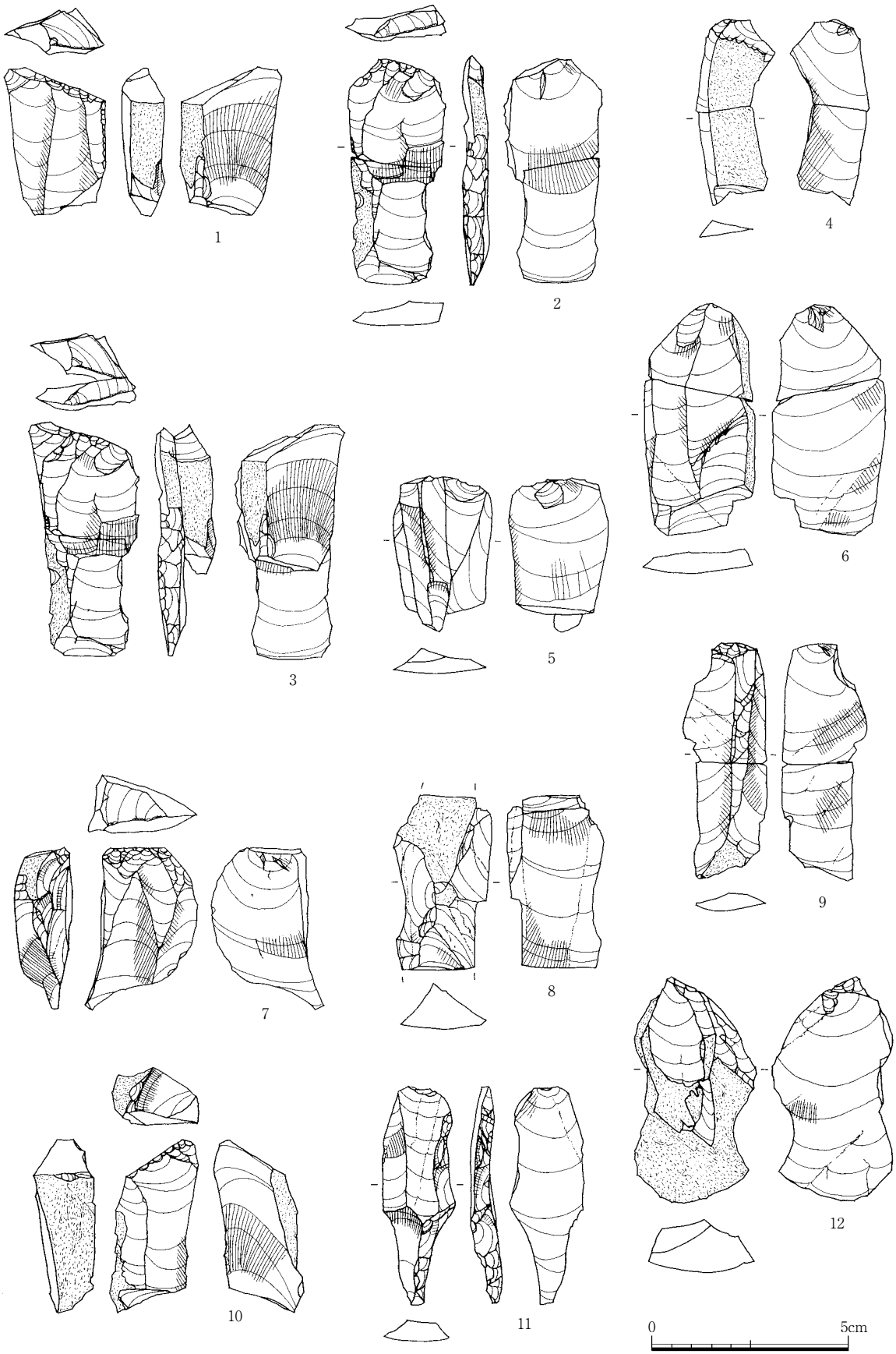


SX005 を中心とした接合関係

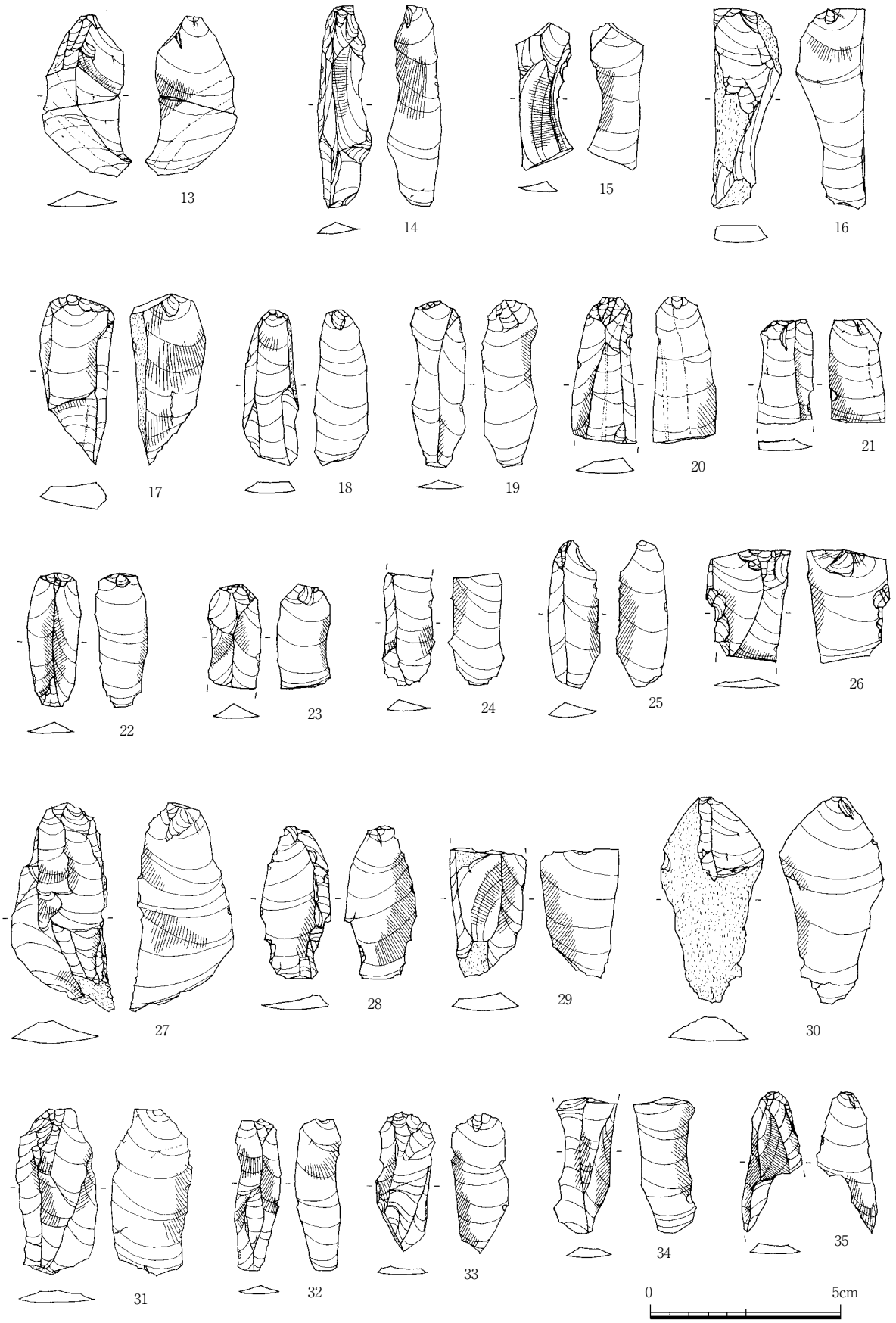
	Z				A				B				C			
1								5								
								5								
								9	+	4						
								31	4	9						
2					+		+	24	37	2	1	1				
								44	3	5	14	2				
	+	+	2	4	+	21	20	46	15	64	9	8	4	6	24	2
	+	6	+	3	+	1	3	+	33	17	4	+	11	6	2	8
3			+	1	3	6	5	+	9	+	+		23	4	3	2
		11	+	1	18	5	1	1	6	1	+	+			5	
					4	+	3	3	2	2	+	1	+	22	1	
					+	6		14	6	3					5	
4					3			11	18	+						
					3	+										

各グリッド出土黒曜石数（+ は微細片のみ、アミの範囲を掘削）

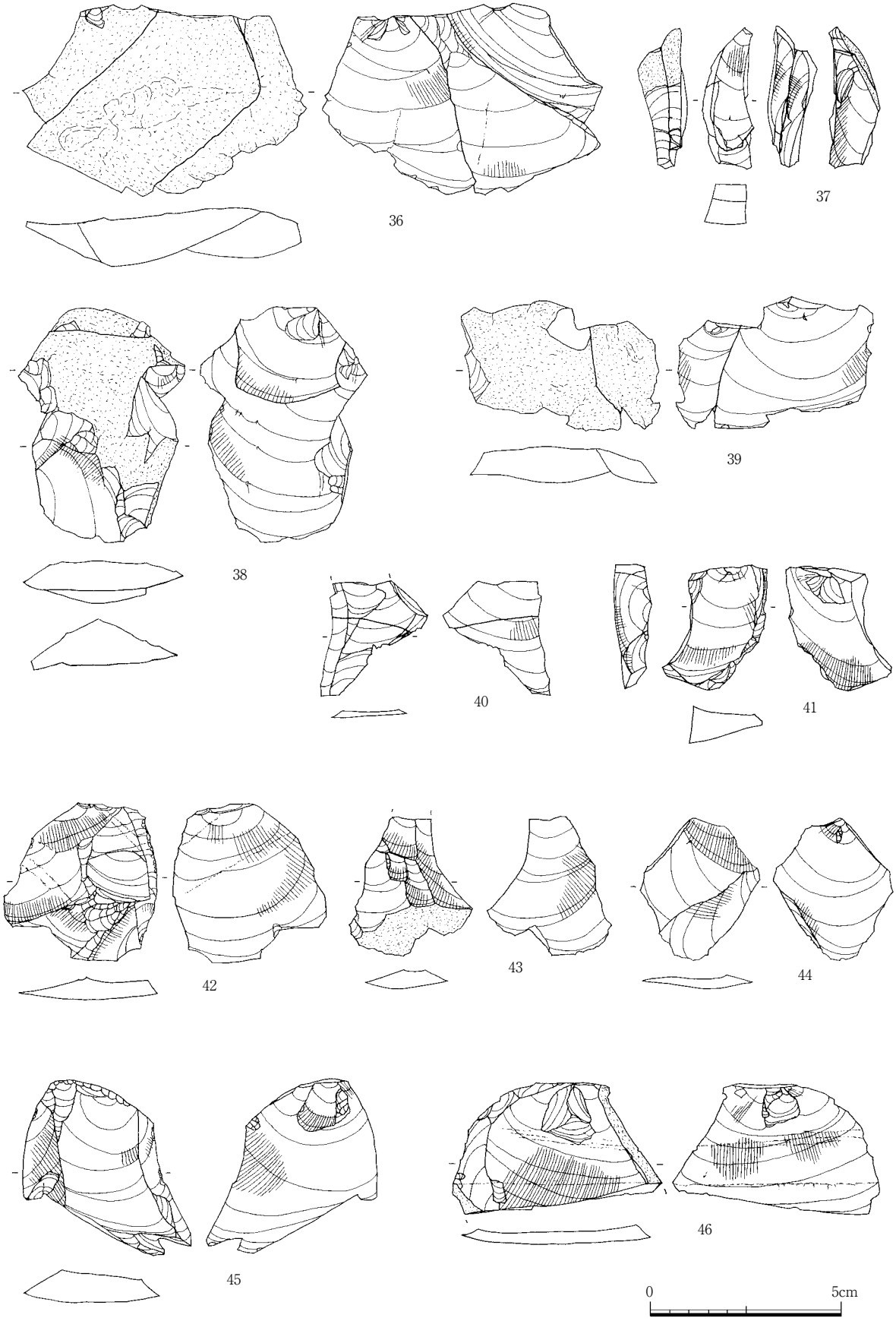
第３図　ＳＸ００５における石器分布状況（1/40、1/20）



第４図　ＳＸ００５出土石器１（2/3）



第５図　ＳＸ００５出土石器２（2/3）



第６図　ＳＸ００５出土石器３（2/3）

不定形剥片（36～46）

これらは、鈴桶型石核の打面や側辺調整に係わるものと考えられるが、一部の資料は別の素材生産システムによるものと思われる。42や45に代表される様な幅広剥片が剥離されており、鈴桶型とは別の定形石器の素材生産を目的としていたと思われる。

36～40は不定形剥片の接合例である。36･38･39は自然面を大きく残していることから、剥片剥離の初期段階のものである。38はやや縦長の資料であるが、36･39は幅広剥片を連続して剥離している様子が確認される。41･42、44～46は剥離が進行した段階の幅広剥片であり、その剥離を目的とした剥離技術が想定できる。37も同様の剥離技術と思われ、幅広剥片を連続剥離しているが、ほぼ同じ部分で折断されている。40･43は縦長剥片と幅広剥片の中間形態であるが、鈴桶型石核の製作過程で生じた可能性が高いようである。43は一方向だが、40は上下からの加撃が認められる。

本地点では、比較的短期間に行われた目的剥片剥離作業が確認される。まず、大形石核（整形した原石）から鈴桶型石核の素材を製作したものと思われる。鈴桶型石核は確認できないが、接合資料等からその存在が予測できる。その剥離に用いられたのが、68の礫（ハンマーストーン）と思われる。上面に研磨によって生じたような線状痕が認められるが、1･2･7･10の磨りガラス状の痕跡と対応するものと思われる。これらは打面端部に認められることから、剥離時に生じたものと推定される。50の石鏃は本地点で定形石器製作を行っていない点と形態等から、混入品と思われる。

（2）　ＳＸ００５における石器分布状況（第3図）

12トレンチを調査中に出土遺物（黒曜石片）の多い地点が見つかり、4×4mの範囲について25cmメッシュで区切り土壌を水洗し遺物を取り上げた。これをＳＸ００５と呼称している。遺物は満遍なく出土するのではなく、A-3区、B-2･3区を中心に確認された。本来第3図の点線内部（直径約1m）など、2～3ヶ所に集中分布していたものが、風雨等の影響により拡散したものと考えられる。

図3には大形石核（整形した原石）355と接合資料の大まかな出土位置を示した。大形の腰岳産黒曜石355は石核とも考えられるが、接合関係は認められず、本地点以外で剥離された可能性が高い。磨滅痕や運ぶ時に生じたと思われるキズ痕が認められることから、原産地で剥離を行った可能性が指摘できる。そうであれば、剥離痕は原石を採取した集団によってなされた可能性があり、黒曜石原石の整形痕と考えられる。58次調査地点（1301集）では、Ⅱ層の針尾中町産小形円礫は接合したが、Ⅰ層の腰岳産大形原石は接合せず、本地点のあり方と一致している。

近接したものが接合した事例が多いが、38のように離れたものもある。折断接合と剥離面接合では、距離に違いはないようである。ただし、38は大形の剥片がＳＫ００１付近に運ばれており、定形石器製作を意図していた可能性がある。

図には接合資料のみを示しているが、1～46は本地点および周辺部から検出された石器である。石核は認められないが、鈴桶型石核による素材生産活動が行われている。川に近い地点に黒曜石原石のデポがあり、その近くで定形石器の素材製作が行われており、58次調査地点のあり方とは明らかに異なっている。58次調査第Ⅰ・Ⅱ層では遺物分布の外れの最も標高の高い地点に認められたのである。また、デポと素材生産の場は離れた位置に存在している。縄文時代早期の58次地点とは、石器製作の基本的在り方に違いがあるものと思われる。原石の保管は集落外れの一定の場所に確保され、石器製作は集落内部で一連の行動を行っている。

大原Ｄ遺跡3次調査地点の縄文時代晩期前葉の河川跡ＳＸ０１では、3450点の腰岳産黒曜石（全体の98％）が検出された。内訳は、原石6、石核243、剥片・砕片類3163、定形石器38である。ここでは、

石器製作に関する一連の行動により生じた石器類が揃っている。原石の供給地点近くの一定の場所で、全ての行動を行っているのである。

54次調査地点の川に近いＳＸ００５は、遠くから運ばれてきた黒曜石原石の供給地点近くで素材生産を行い、定形石器に加工する目的剥片のみを他の地点に運んでいるのである。供給地点近くで石器製作の一部を行う点は同じだが、目的剥片のみを他地点に運ぶという行為は、時間的に近い大原Ｄ遺跡3次調査地点と異なっている。54次調査では石刃製石器が認められないことから、かなり遠くへ運ばれたものと思われる。

石刃で剥片鏃を製作したのであれば、狩猟具の可能性が強く、拠点遺跡を遠く離れた場所に移動した可能性が強いのである。集団間の争いであっても、離れた地点で行われる確率が高いと思われる。このように、本地点で行われた石刃製作活動は遺跡で行われる活動の中では特殊なものと言え、一般的な行動とは遺物分布に違いが認められるのである。

黒曜石原石には355のような大形石材と、小形の石材が認められる。大形石材は良質なものが多いが、整形の過程で確認していたと思われる。本地点の大形原石は鈴桶型石核の素材に利用された可能性が高いが、小形のものは一般的に不定形剥片を剥離する石核に利用されているようである。腰岳黒曜石の大形良質石材は、集団にとって重要な道具製作に使用されている可能性が指摘できる。

３．第54次調査出土石器（第7～9図）

47～87（50･68除く）は、ＳＸ００５関連以外の代表的石器である。前回の報告（1173集）でも石器を報告しており、今回はその追加になる。黒曜石（47～73）と安山岩などその他の石材に分けて報告する。

47は良質の腰岳産黒曜石を素材とし、左側辺と右側辺下端部は折断されているようである。左側辺には部分的に調整を施しており、ナイフ形石器と思われる。基部には自然面が認められる。

48は黒色の腰岳産黒曜石製不定形剥片を素材とし、両側辺に細かな調整痕の認められる台形石器と考えられる。短形の剥片を素材とし、刃部に刃こぼれが認められる。両面に、風雨によって動くことによって生じたと思われる磨滅痕が観察される。

49は、石刃の両側辺に斜め細調整を施したサイド・スクレーパーである。右側辺には背面からの調整痕が認められ、折断面からの調整痕もある。旧石器時代のもので、良質の黒曜石を素材としている。

51～53は石鏃の未製品または失敗品である。51は下端両面に調整痕が認められ、抉りを入れようした痕跡と考えられる。剥片鏃に加工しようとしたものと思われるが、ほかに調整痕が認められず、この時点で放棄したものと思われる。52は両面に調整痕が認められるが、全体に及んでおらず、途中で放棄したものと思われる。両面に磨滅痕が認められ、佐世保市針尾島の淀姫系黒曜石製。53は剥片鏃の抉りを整形した時に生じた製品である。小形の石刃の打面部である。

54･55は楔形石器である。54は両面と左側面に上下からの調整痕が認められる。樋状剥離痕は認められない。55は、左側面に上下方向の剥離面が認められ、小形ではあるが楔形石器と考えられる。右側面は、樋状剥離痕が明確に認められる。

56･57はスクレーパー類である。56は剥片（石刃）の下端部に調整を施しているが、背面への加工が主体である。上部は折断され、両面に磨滅痕が認められる。57は、自然面を打面とした不定形剥片の右側辺背面に、細調整を施したサイド・スクレーパーである。両面に磨滅痕が認められる。

58は不定形剥片の左側辺の一部に加工痕の認められる石器である。コンケイブ・スクレーパーとも考えられる。求心状に剥離を行う石核から剥離された、短形の薄い剥片を素材としている。

第７図　第 54 次調査出土石器１（2/3）

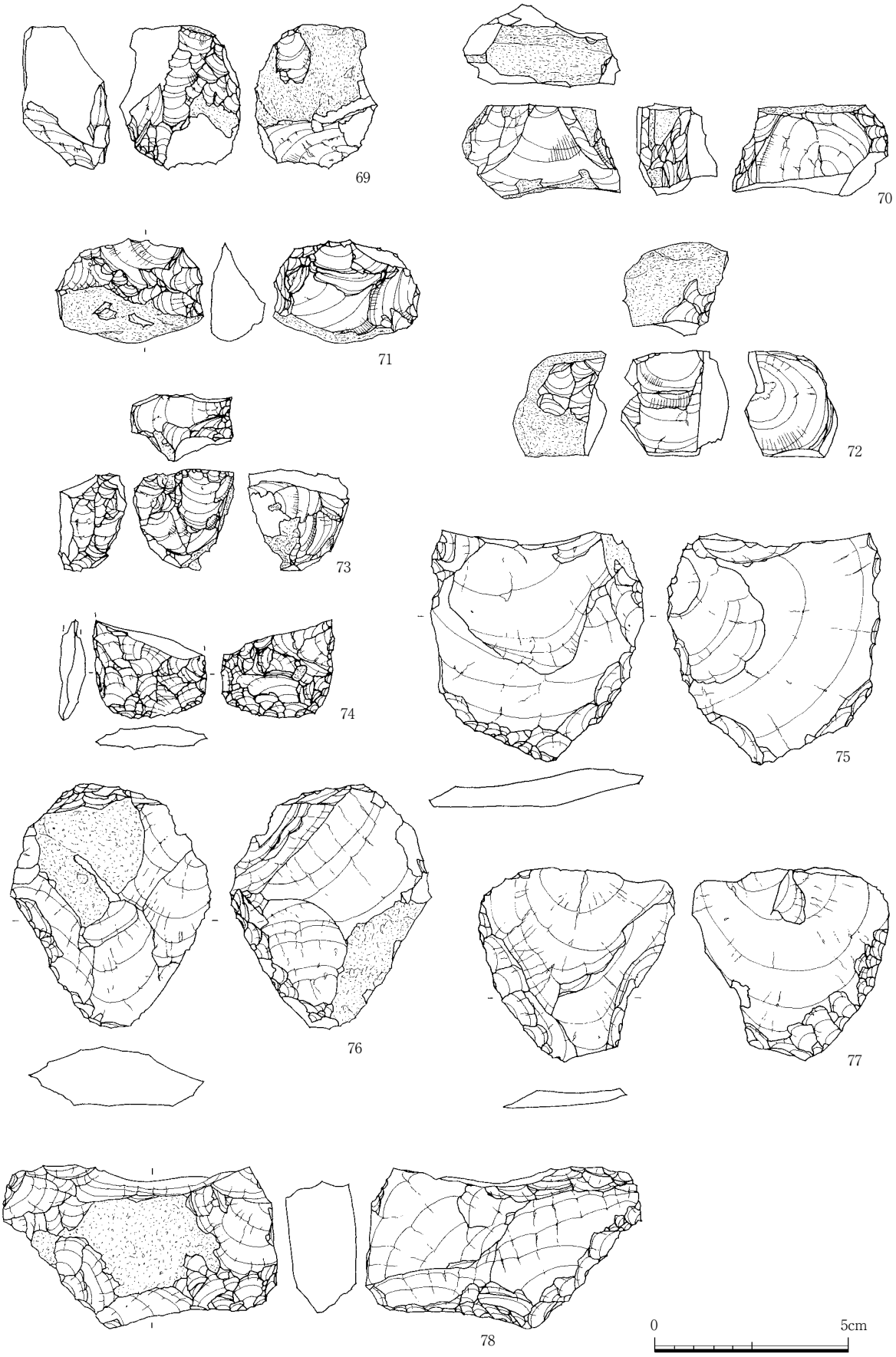
59～67は、使用痕ある剥片および剥片である。59は右側辺等に細かな刃こぼれが認められるが、自然の作用で形成されたものと思われる。60は、縦長剥片の両側辺に連続する微細な調整痕、稜部等に磨滅痕が認められる。61は、縦長剥片の右側辺に刃こぼれが認められる。両面に顕著な磨滅痕が観察される。62は三角形状の小剥片で、左側辺に連続する刃こぼれが認められる。63は、小形短形剥片の両側縁に刃こぼれまたは微細剥離痕が認められる。剥離面は新鮮である。64は上部が折断された小形の剥片で、右側縁に刃こぼれが認められる。65は正面に自然面を残す厚手の小剥片で、二重パティナを呈する。左側縁に微細剥離痕が認められる。顕著なキズ痕が観察される。66は、自然面を打面とする不定形剥片の一部に刃こぼれが観察される。稜部等に磨滅痕が認められる。67は風化の著しい貝殻状剥片（砕片）である。旧石器時代のものである可能性がある。

図69～73は石核である。69は、キズ痕の顕著な自然面を打面とする打面転移石核の一種と思われる。不純物の混じる腰岳黒曜石製。70も平坦な腰岳黒曜石の自然面を打面とする石核である。不定形の小形幅広剥片が剥離されている。打面転移石核の一種と考えられる。71は、松浦産の黒曜石円礫の分割品を素材とする求心状剥離石核で、両面に剥片剥離を行っている。旧石器時代から縄文時代早期のものと思われる。稜部等に顕著な磨滅痕が認められる。72は、自然面を打面とする四角柱形の小形石核である。平坦な部分を打面に利用し、その転移を行っている。腰岳黒曜石製。73は小形の石核で、打面転移を繰り返している。自然面や剥離面を打面に利用している。小形の腰岳黒曜石を用いている。これらは小形の剥片が剥離されており、小形石鏃より小さい石器の素材を生産していると思われる。

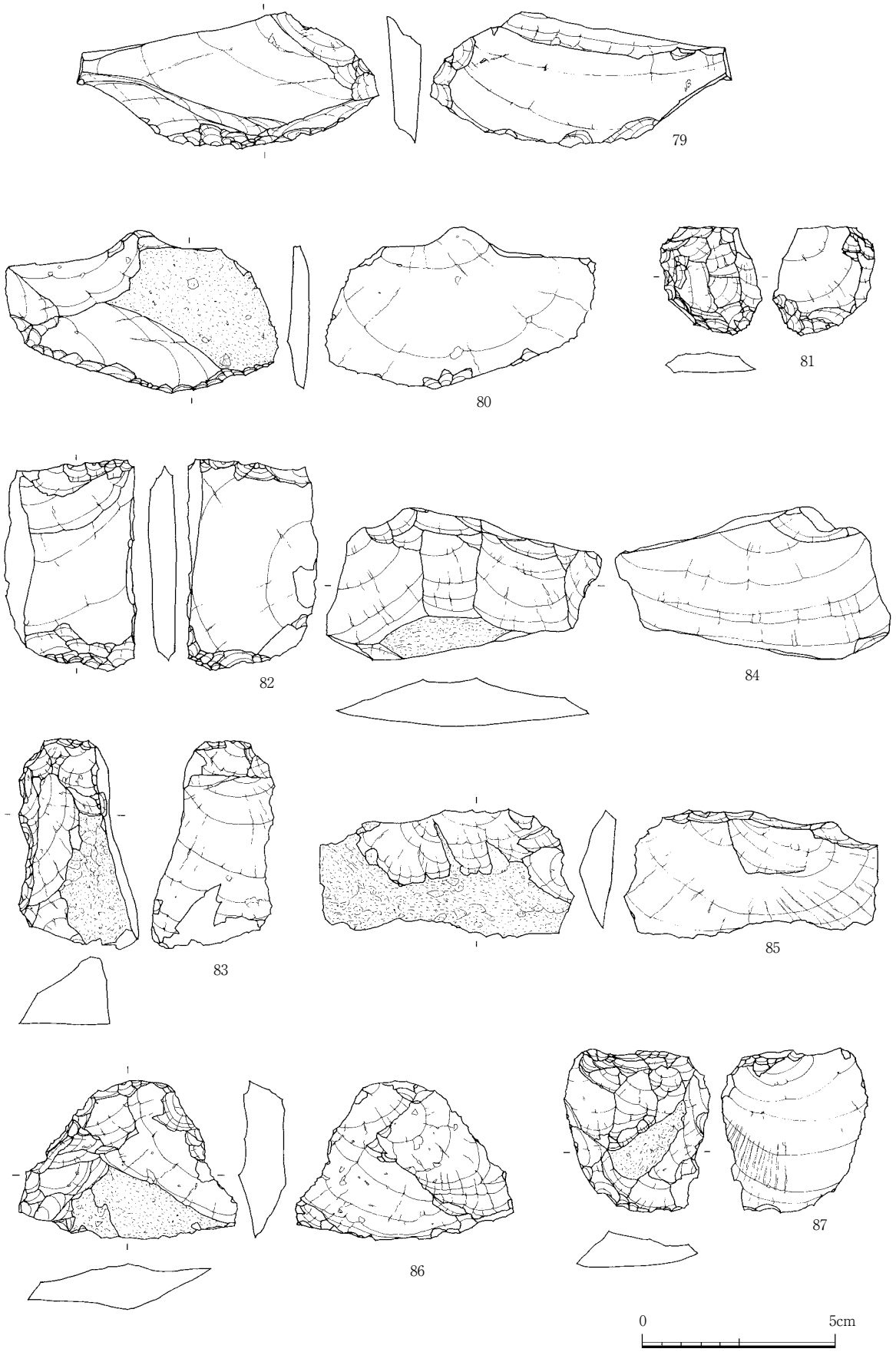
74は、良質ハリ質安山岩製の石槍基部と思われる。薄い製品で、両面に比較的丁寧な細調整が加えられている。基部に特徴があり、丸味を帯びている。

75～83はスクレーパー類である。75は、比較的薄い不定形幅広剥片の両側縁部に細調整を施したサイド・スクレーパーと思われる。細調整は両面におよんでいる。ハリ質安山岩製。76は75と同じような形状であるが、やや厚く、ハリ質安山岩の薄い礫を素材としている。右側縁は背面、左側縁は正面に細調整を施している。77は三角形状の薄いハリ質安山岩の側縁に細調整を加え、尖らしている。先端は欠損している。細調整は平坦細調整に近いもので。左側縁両面に認められる。78は、厚手の安山岩製不定形剥片の左側縁や下端部に細調整を施している。細調整は粗く、縁辺は鋸歯状を呈している。79は、安山岩製横広剥片の端部等に細調整を施した掻器である。刃部は丸味を帯びている。上部は折断しているが、整形した可能性もある。80も安山岩製幅広剥片の下端部細調整を施した、同じような形状の掻器である。刃部は丸味を帯びるように整形している。81は、ハリ質安山岩製小形剥片の下端部や左側縁に細調整を施した掻器である。丁寧な細調整が加えられている。打面部は欠損している。82は上下両端の両面に細調整が認められ、大形の楔形石器の可能性もある。右側辺は折断だが左側は欠損しており、明確な判断は下せない。ハリ質安山岩製。83は、ハリ質安山岩厚手剥片の左側縁に細調整を施したサイド・スクレーパーである。上端部にも細調整痕が認められるが、下端部は欠損している。

84～87は剥片類である。84はハリ質安山岩製の幅広剥片である。広い打面が認められ、頭部細調整を行っている。85は幅広の安山岩製不定形剥片で、正面に大きく自然面を残している。薄い剥片だが、細長い大きな打面が認められる。86は安山岩製の三角形を呈する剥片で、スクレーパーの素材として適当である。87は、四角形を呈する比較的薄い剥片である。比較的良質のハリ質安山岩製で、顕著な頭部細調整を行っている。



第8図　第54次調査出土石器2（2/3）



第９図　第 54 次調査出土石器３（2/3）

４．第54次調査出土木器（第10、11図）

概要で触れたように、谷部の堆積は4層を主体として多くはないが木質を含み、その中に木製品が見られた。1、2層は6世紀後半までを主体として8世紀から中世初めまでの遺物を含み、3層は遺物が少なく7世紀初めまでの遺物が出土している。4層は砂粒を多く含む暗褐色から黒褐色の粘質土で、弥生時代中期、古式土師器、6世紀後半から7世紀初頭の土器を主体として出土し、若干の8世紀代の遺物を含む。木製品の時期は特定しがたいが4層出土については7世紀初めを下限とすることが出来ると考えられる。また5層にも木質が見られ、中には長さ3.9m、幅0.5mほどの木が出土したが、特に加工を施したものは見られなかった。図には農具などの製品に加えて、加工がみられる木片を選んで掲載した。以下個々についてふれる。なお記載した樹種は104、105については生物顕微鏡による観察による同定（古環境研究所による）であるが、他は目視による判断である。

101から103は農耕土木具である。101は身の縦半分を欠き、二又鍬と考えられる。器面は荒れのため不明瞭だが、縦4cmほどの柄つぼに斜方向の切り込みが見られる。刃部内側縁は両面から成形し明瞭な稜を持つ。カシの柾目材とみられる。102は三又の鍬または鋤の破片で、柄つぼは縦2.5cmほどとみられる。頭部は厚さ2.6cmほどで、断面方形の刃部は先端へ細くなる。スギ材か。103は厚さ1.0～0.8cmほどの板材で、側辺以外は破面とみられるが、鍬の頭部の可能性がある。柾目のカシ。

104は木槌で全長23.5cmを測る。全体に腐食が進んで面は不明瞭である。本体中央は4面とも大きくくぼみ、使用度がうかがわれる。本体下端に刃物痕が見られる。樹種同定の結果はクスノキである。

105は器面を弧状に成形した木器で、鞘が縦に割れた状態を想定している。外面下部には浅い段を成形し、側面には漆がわずかに残る。内側下部は破面であるが、中位から上部はえぐるような成形がみられる。ただし破面との区別がつけ難い。板目で樹種は同定の結果はスギである。106は側面を多角に成形し、端部がすぼまる。全形は丸い断面になり、束飾りまたはツチノコなどを想定した。スギ。

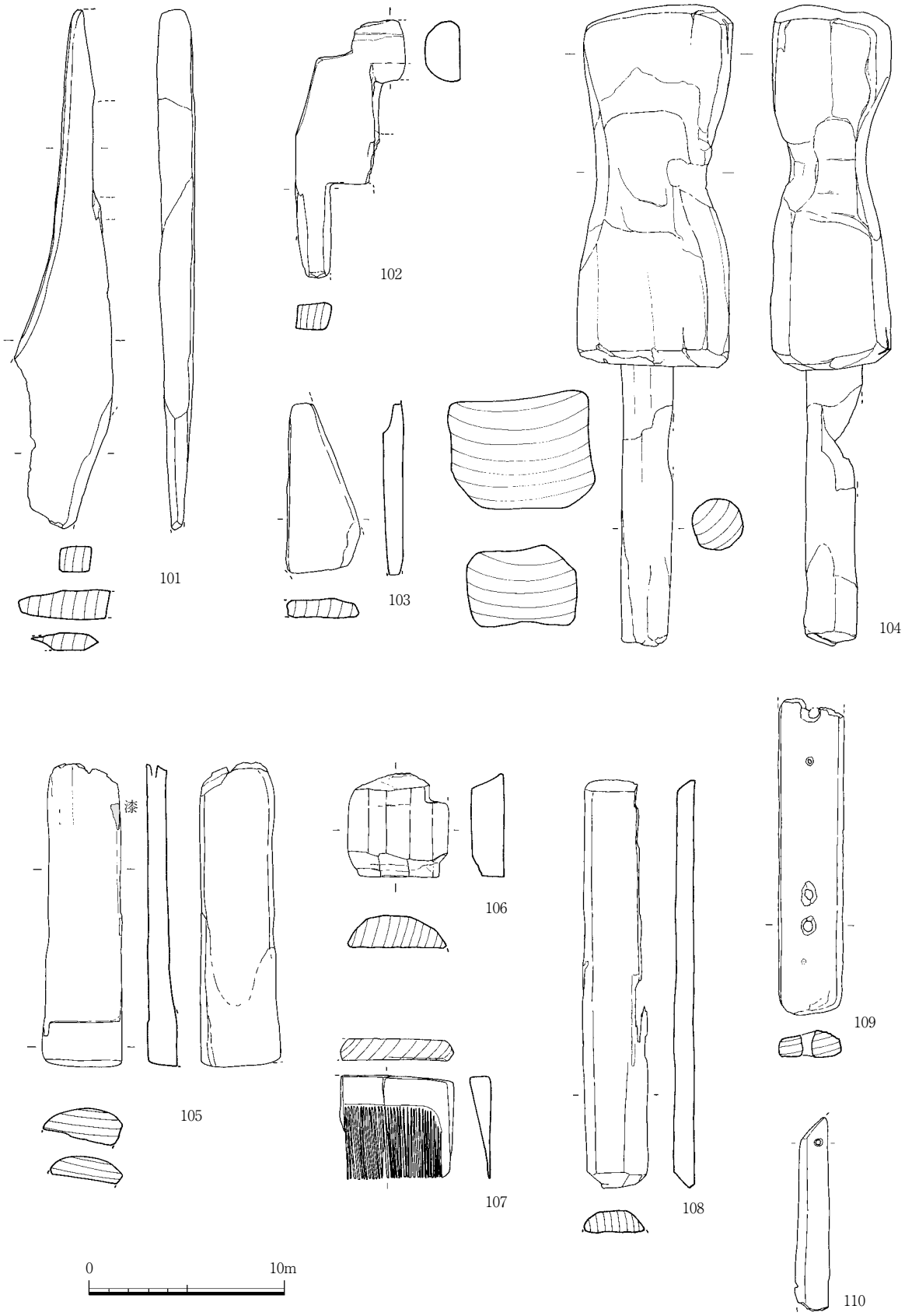
107は挽櫛で器面は平滑に仕上げる。刃の基部に沿って細い沈線が表裏両面に見られる。縦5.3cmほどで、横は5.7cmが残るが破面を再加工しているようにも見える。針葉樹を使用する。

108はスギの加工木材で縦方向に割れる。端部は一端を斜めに、他方をすぼまるように加工する。109はスギの柾目板で、二つずつ近接する4孔が見られ、図の下部には孔をあけようとしたかのような窪みが見られる。110はスギの板目の板で径4㎜ほどの孔をあけ、端部、側部を斜めに成形する。3㎜ほどと薄いが縦方向にも割れている可能性がある。111は針葉樹の板で腐食のため器面は不明瞭である。側辺は生きていると見える。一部径2.5cmが浅くくぼむように見られる。112は針葉樹の柾目板で片方の端部は刃状に成形し、他方は破面で幅が広がる。全体に焼けて特に破面は黒変し、側辺も黒ずむ。113はスギの板材で一方の端部を斜めに成形する。厚みが左右で異なり、図右側辺に工具で叩いたようなくぼみ、キズがある。114はスギの薄い板材で7mmほどの孔が見られる。115は針葉樹の板目の薄い板材で、図の上端に直角に加工した部分があり、これ以外は破面の可能性がある。

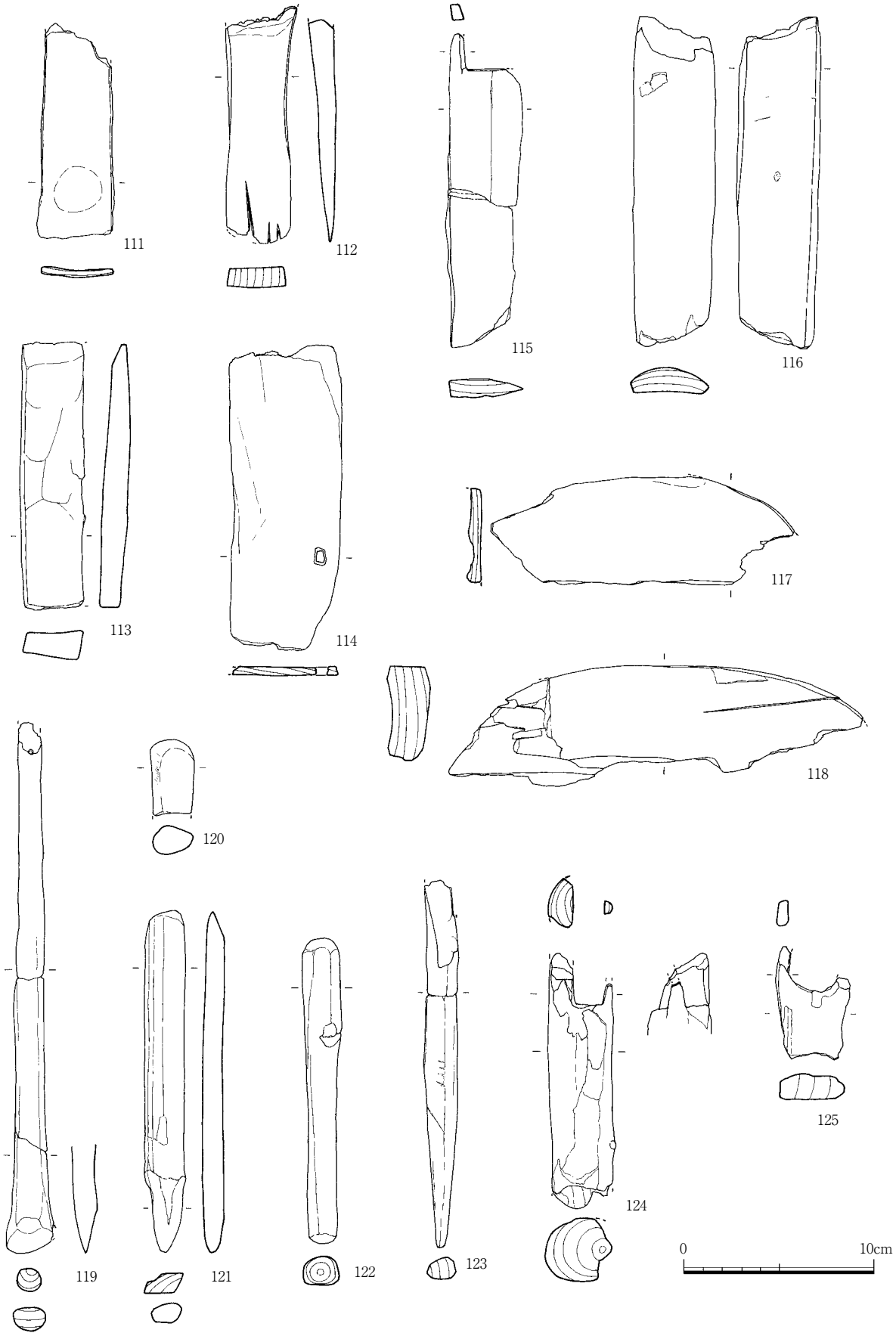
116はスギの板目材で器面を弧状に成形し、裏面には浅い傷がみられ破面ではないと考えた。102に似るが側辺が生きているようで、現状が全形と考えられる。

117はスギの板目の板材で、一部残る側辺から平面円形になると考えられ、曲げ物の蓋などが想定される。厚さは不明である。118もスギの板目の板材で平面は不整円形と考えられる。厚さは不明だが、原状で2.2cm以上と厚手で、タタリなどを想定している。

119から123は棒状の加工品である。119は先端をへら状にやや扁平に成形しており、何らかの工具か。柄部分は芯が残るが周囲を削る。120は棒状の木器の端部を丸く仕上げ、断面はやや扁平である。側面に斜方向の細かな擦痕が見られる。121は針葉樹の狭い板材の先端を丸く加工し、この部分のみ焼



第 10 図　第 54 次調査出土木器 1（1/3）



第 11 図　第 54 次調査出土木器 2（1/3）

けて黒変する。反対の端部は斜め方向に削る。122は芯持ちの棒状をなし、両端部は使用によると考えられる摩耗が見られる。側面も成形しているが器面が腐食し不明瞭である。123は端部が細く尖る棒状品で、側面は多面をなし、一部に平行した傷が見られる。

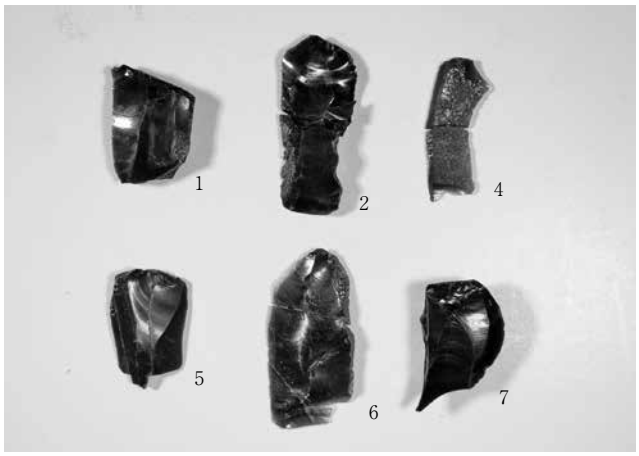
124は芯持ちのスギ材に四角の孔を穿ち、これに直交する方向やや斜めに丸い孔が見られる。後者の孔の内面は焼けて炭化している。焼けた金属等を通した痕跡か。125は針葉樹の柾目の板材で、円形になると考えられる径2.5cmほどの孔を穿つ。この孔の内面以外は破面の可能性がある。

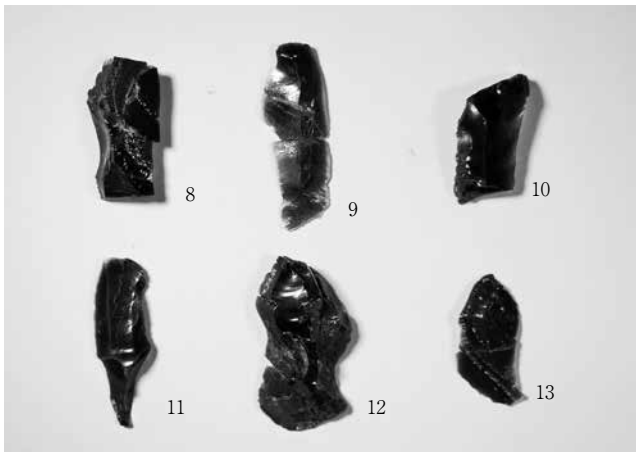
５．おわりに

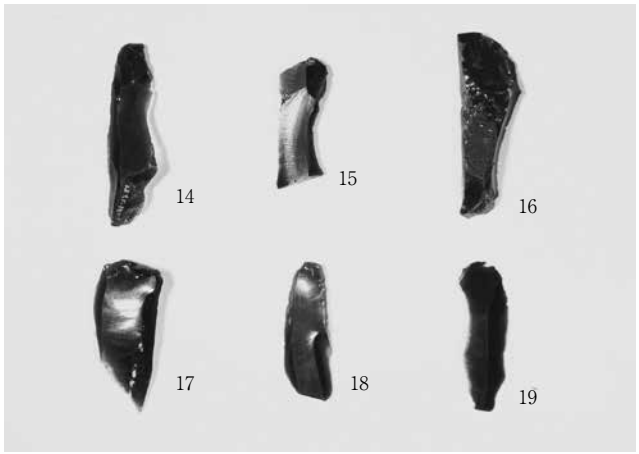
54次調査地点は、調査区の大半を谷部が占め、旧石器時代から中世初めまでの多彩な遺物が出土した。今回報告したＳＸ００５では、黒曜石製の石刃製作を行った場を確認し、定形石器に加工する目的剥片のみを外に運び出すという製品の使用の在り方を示すことができた。その時期は確定できないが、縄文時代後晩期と考えられる。

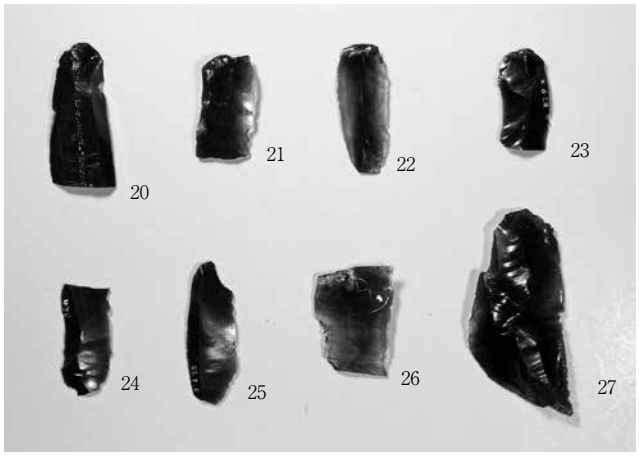
表２　出土木器

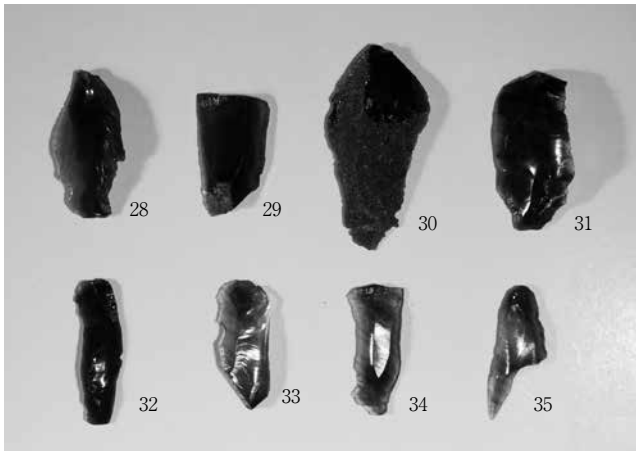
番号	出土遺構	種類・器形	材質	木取	法量　長さ／幅／厚さcm	備考
101	１区４層	又鍬	カシ	柾目	(26.3) / (5.0) / (1.5)	
102	１区４層	三又？鍬	カシ	柾目	(13.1) / (4.3) /1.3	
103	１区４層	鍬？	カシ	柾目	(8.5) / (3.6) / (1.0)	
104	１区４層	槌	クスノキ	芯去	32.5/7.6/6.1 柄径 2.5	樹種同定
105	１区４層	(鞘)	スギ	板目	(15.8) / (4.1) / (1.6)	樹種同定
106	１区４層	(束飾)	スギ	芯去	5.2/ (5.0) / (1.6)	
107	１区 1tr ２層	櫛	針葉樹	柾目	(5.2) /5.4/1.1	
108	１区４層	加工木材	スギ	柾目	20.5/ (3.2) / (0.6)	
109	１区４層	板材	スギ	板目	(16.0) /3.2/1.3	
110	１区４層	板状	スギ	板目	(9.8) / (1.7) / (0.3)	
111	１区４層	板状	針葉樹	板目	(11.2) /3.7/0.4	
112	１区４層	板材へら状	針葉樹	柾目	(12.5) /3.8/1.3	
113	１区 2tr ４層	板状	スギ	柾目	13.9/ (3.4) /1.5	
114	１区３層	板材	スギ	板目	(15.8) / (5.9) /0.4	
115	―	板状	針葉樹	板目	(16.3) / (3.8) / (0.9)	
116	ＳＸ００６		スギ	板目	(17.2) /4.2/1.3	６世紀後半遺物
117	１区４層	円形板状	スギ	板目	(15.3) / (5.7) / (0.7)	
118	１区４層	円形板状	スギ	板目	(21.5) / (5.5) / (2.1)	
119	１区４層	へら状工具	―	芯去	(27.6) / (2.6) /1.2	
120	ＳＸ００６	棒状	―	芯去	(4.0) /2.2/1.5	６世紀後半遺物
121	１区４層		針葉樹	柾目	17.7/2.1/1.0	
122	１区４層	棒状		芯持	15.3/1.9/1.5	
123	１区４層	棒状	―	芯去	(19.2) /1.5/1.2	
124	１区４層	棒状	スギ	芯持	(13.3) /3.3/3.3	
125	１区４層	棒状	針葉樹	柾目	(8.0) /3.9/1.4	

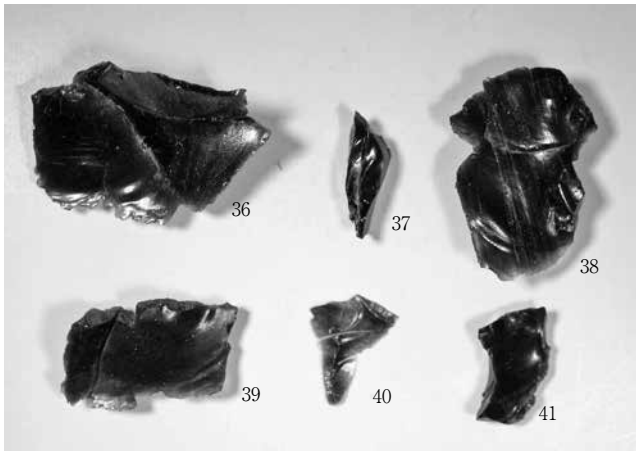

1
2
4
5
6
7

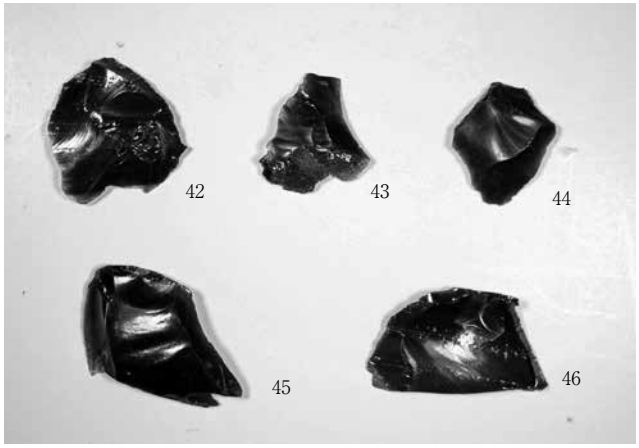

8
9
10
11
12
13

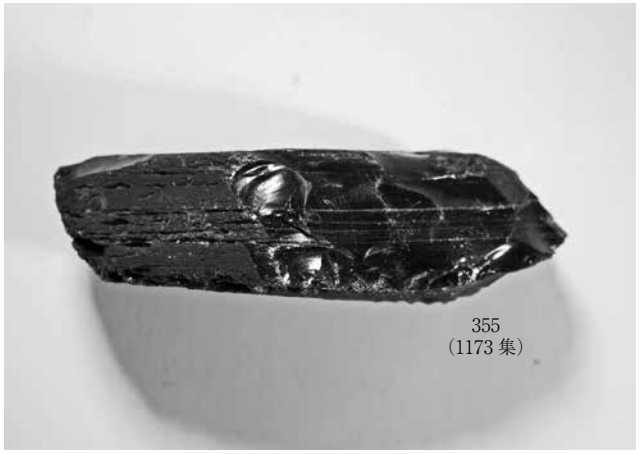

14
15
16
17
18
19

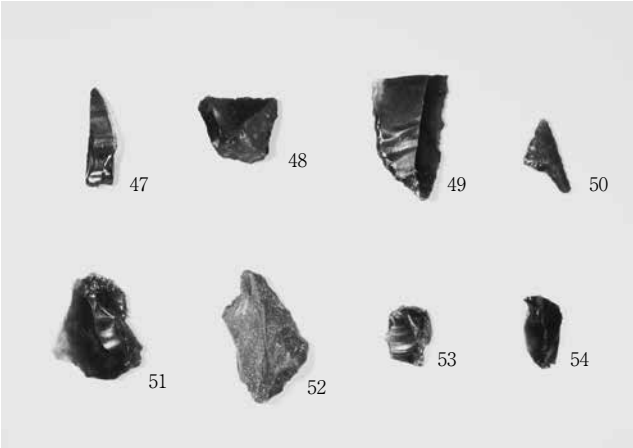

20
21
22
23
24
25
26
27

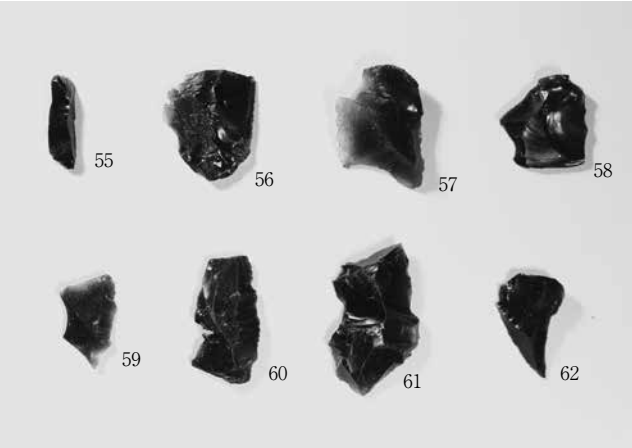

28
29
30
31
32
33
34
35

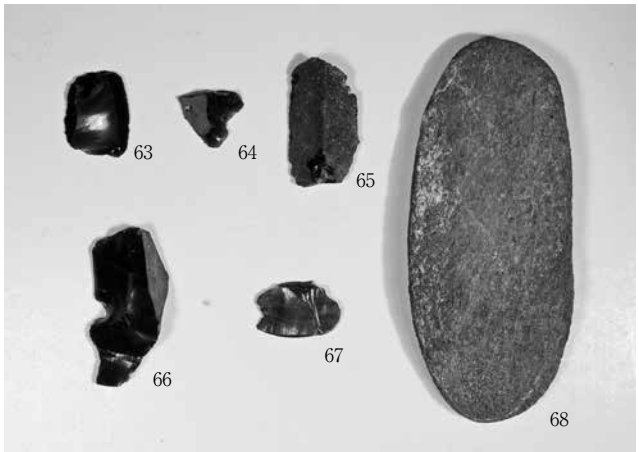

36
37
38
39
40
41

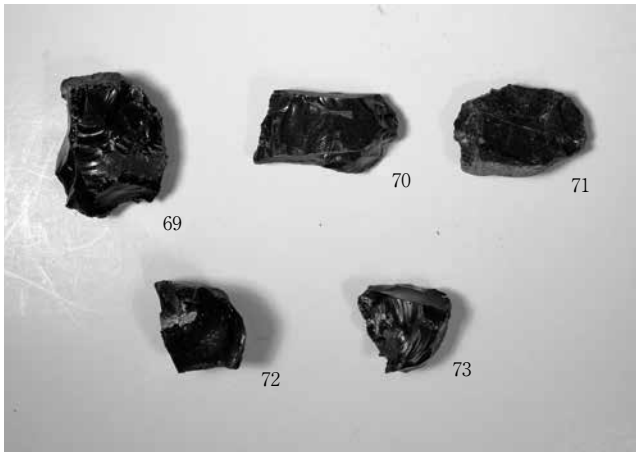

42
43
44
45
46

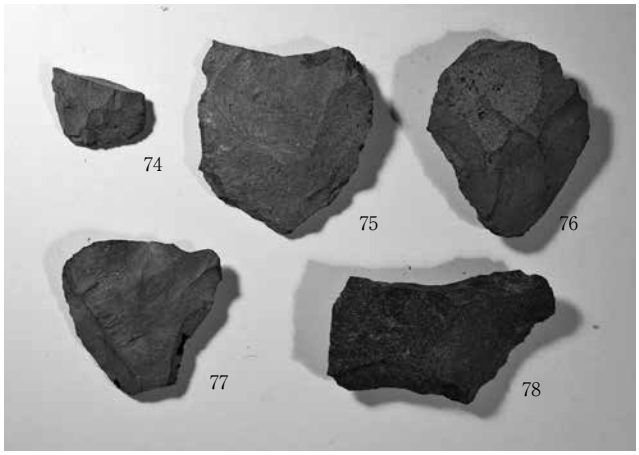

355
(1173 集)

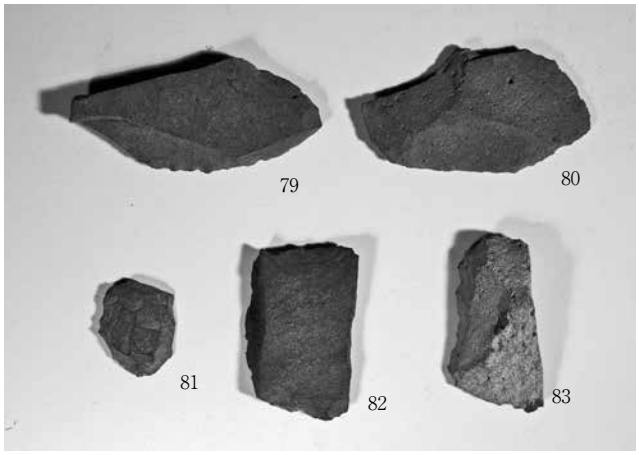

47
48
49
50
51
52
53
54

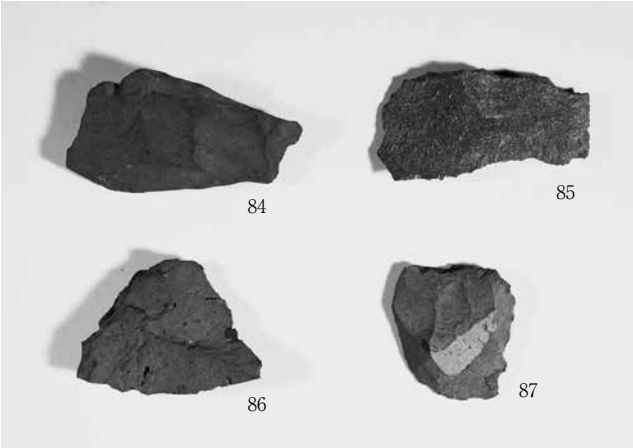

55
56
57
58
59
60
61
62

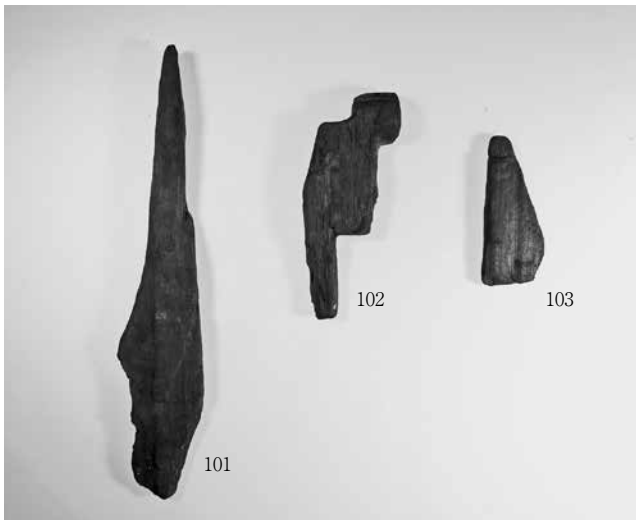

63
64
65
66
67
68


69
70
71
72
73

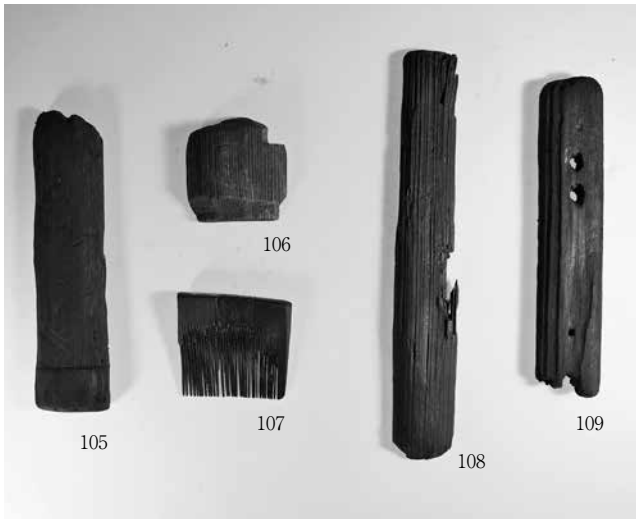

74
75
76
77
78

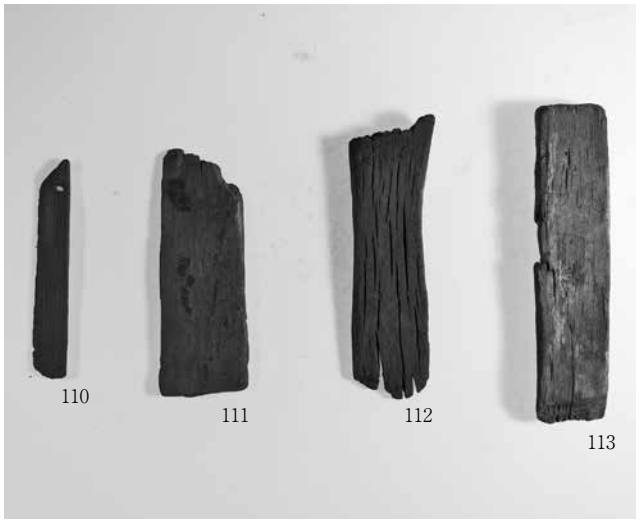

79
80
81
82
83

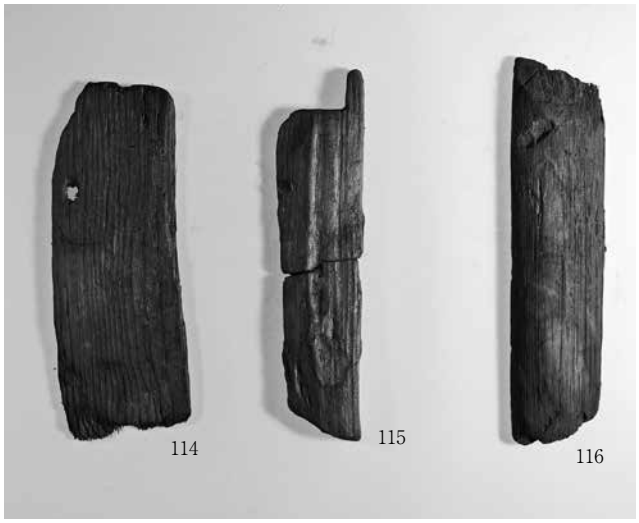

84
85
86
87

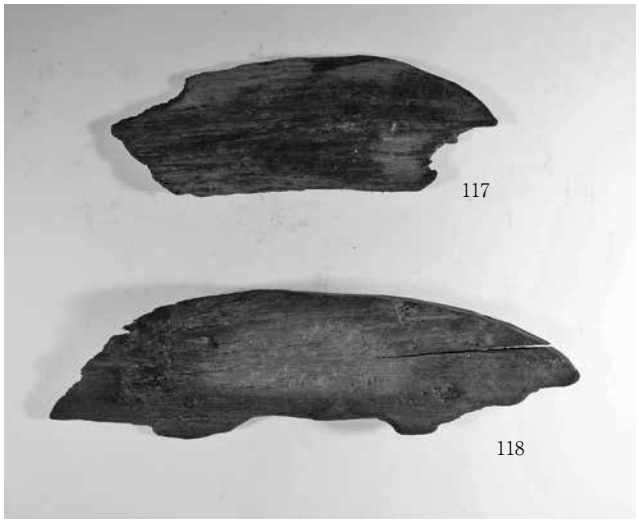

101
102
103

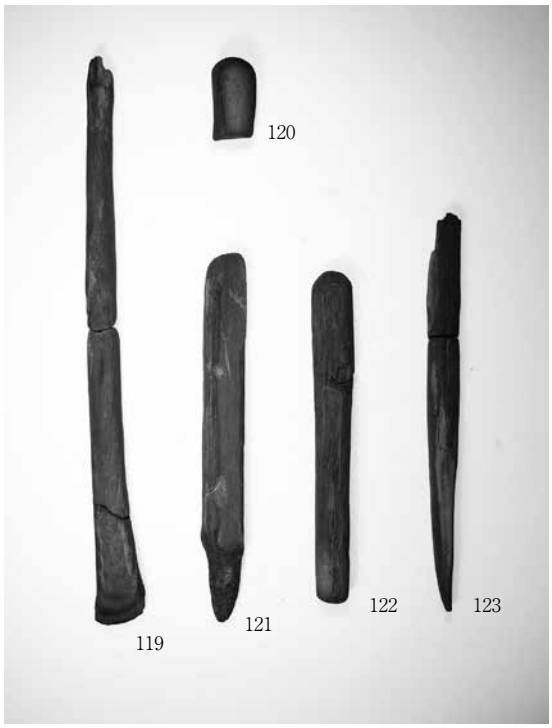
104


105
106
107
108
109


110
111
112
113


114
115
116


117
118



⬅ＳＸ００５

54 次１区下面（北東から）⬆

ＳＸ００５土層（北東から）

元岡・桑原遺跡群 42 次調査出土の動物遺体と骨角製品

新美倫子（名古屋大学博物館）

元岡・桑原遺跡群の 42 次調査では、河川跡の埋土中から多量の土器類に混じって動物遺体 305 点と骨角製品 4 点が出土した。これらの所属時期は、弥生時代中期後半～後期後半（紀元前 1 世紀～紀元後 3 世紀）である。動物遺体には魚類・鳥類・哺乳類が見られたが、そのほとんどにあたる 292 点は哺乳類であり、中でもイノシシ類が 185 点と多くを占めていた。これらの動物骨は発掘調査時に出土地点を記録して取り上げられたが、イノシシ類資料と一緒に取り上げられた土壌の中から出土したものも一部ある。すべての動物遺体について出土種名を表 1 に、魚類の出土内容を表 2 に、哺乳類の出土内容を表 3～5 に示し、骨角製品については図 1 に示した。なお、伊達市噴火湾文化研究所の西本豊弘先生には種同定に関して御教示をいただき、福岡市教育委員会の常松幹雄氏にはこの資料を分類する機会を与えていただいた。ここに感謝いたします。

1、魚類（表 2）

フグ類 11 点とヘダイ 1 点の計 12 点が出土した。フグ類はいずれも土器群 106 から出土しており、大型の歯板・関節骨・方骨・椎骨が見られた。ヘダイは土器群 123 から大きな右前上顎骨が出土した。

2、鳥類

土器群 106 でカモ類の左上腕骨遠位端が 1 点のみ出土した。資料の大きさは現生オナガガモ♂より少し小さかった。

3、哺乳類（表 3～5）

表 3～5 では哺乳類遺体の出土内容を土器の出土群ごとに示した。資料の保存状態は全体にかなり悪く、調査時にはかろうじて形状を保ったまま土ごと取り上げることができたものの、乾燥後に触れると粉状になってしまう資料も見られた。また、多くの歯では歯冠部表面のエナメル質と表面近くの象牙質が残っているだけで、歯の中心部や歯根部は腐食して粉状になっていた。

a. イノシシ類（表 3）

イノシシ類は 185 点出土したが、そのうち 7 割以上の 136 点は土器群 106 から出土している。土器群 106 においても他の土器群においても、部位ごとの出土点数は大きく偏っており、頭部の部位、中でも下顎骨・下顎歯が非常に多く、それ以外の部位は少ない。全身の部位が同じ条件下で捨てられても、下顎骨は組織が緻密で硬いので他の部位より多く残存する可能性は高いが、この偏りの大きさは、単にイノシシ類を食べた後に全身の骨を廃棄しただけで生じるとは考えにくい。もともと下顎骨が多数廃棄された－例えば菜畑遺跡（佐賀県）などで見られるように、複数の下顎骨の下顎枝に穿孔して棒を通した、あるいは連合部を利用して棒にかけたものが廃棄された－結果かも

表 1　出土動物種名

Ⅰ．魚類	Ⅲ．哺乳類
1　ヘダイ	1　ノウサギ
2　フグ類	2　ドブネズミ
	3　クジラ類
Ⅱ．鳥類	4　イヌ
1　カモ類	5　イヌ科の 1 種
	6　イタチ
	7　ニホンアシカ
	8　イノシシ類
	9　シカ

表 2　魚類出土内容

種	部位・点数	計
フグ類	歯板上左 1、右 1、下左 1 関節骨右 1 方骨左 2、椎骨 5	11
ヘダイ	前上顎骨右 1	1
計		12

表３　イノシシ類出土内容

土器群	部位・点数	年齢	No.	計	
106	上顎骨左（P ④ M1 ②）M2 未出 上左 M2M ③同一　M3 萌出始め～途中 上左 I2 1、P4 1、M2 1、右 M1 2、M3 1（萌出途中）、1（完了直前か） 頭蓋骨破片 11	幼 若	8 12	20	136
	下┌左 I ①未出 └右 I ① 下顎骨┌左 I ① -P ③ -（M1 ②）♂ I1P3 未出。M2 未出歯槽開く └右 I ① -I3CP1-m4　I3CP1 は萌出状態不明。乳切歯破片あり。 下┌左 M ②未出～萌出始め └右 M ② 下┌左 P ④未出 └右 P ④ 下顎骨┌左（I1 ②）-（CP1 × P34M12 ③）♂ M3 未出歯槽わずかに開く └右（I1 ②）-（C × P ② 34M12 ③）P2 萌出途中 下顎骨┌左（I1 ②× CP1 × P34M12 ③）♂ M3 未出歯槽開く、M3 破片のみ └右（I1 ②× C × P234M12） 下顎骨┌左（× I ②）-（C ×× P34M12 ③）♂ M3 未出で萌出直前か └右（× I ②）-（C ×× P34M12 ③）I2 未出 下顎骨┌左（I1 ②× C）-（M12 ③）♂ M3 未出、関節突起あり └右（I1 ②× C）-（M12 ③）I2 未出 下┌左 I ① └右 I ①② -P34M12 ③ I1 途中、I2 未出、M3 未出～萌出始め 下顎骨┌左（I1 ×××××× P4）-（M2 ③）♀ M3 萌出始め └右（I1） 下顎骨┌左（C）-（P234M12 ③）♂ M3 萌出途中 └右（C）-（P234M12 ③）連合部は底部のみ残存 下顎骨┌左（××× C × P234M12）M ③♂ M3 萌出途中 └右（××× C × P234M12 ③） 下┌左 M ③萌出途中 └右 M ③ 下顎骨┌左（I12 ××× P234M123）♀ M3 ほぼ萌出完了 └右（I12 ××× P234M123）右 P2 ～ M3 部分破損 下顎骨┌左（C）-P4-（M3）♂ M3 ほぼ萌出完了 └右（C）-P234（M12）M3　M12 部分は保存状態非常に悪く、歯も骨も破片のみ	幼～若 幼 幼 幼～若 若 若 若 若 若 若 若 若 若 若 若 成 成	15 15 15 15 77 76 53 57 16 74 71 58 15 72 59	15	
	下顎骨左 I12（C ×）♀ I2 かなり摩滅。下左 M3 破片 1 同一か 下顎骨左 P4M12（M ③）M3 未出。M1 は破損 下顎骨左（M2 ③）M3 萌出始め、関節突起あり。前臼歯破片とその部分の骨破片あり 下顎骨左（C ×× P34M12 ③）♂ M3 萌出始めか 下左 M2M ③ 同一、M3 萌出途中	成 若 若 若 若	7 15 10 75 68	5	
	下左 P2 1、P3 1、M1 3、M2 1（未出～萌出始め）、1（萌出完了直前か）、M3 1（萌出始め）、1			9	
	下顎骨右（P ③④）P34 未出～萌出始め + 下顎骨破片 10 下顎骨右（m4M1） 下右 M ②③ 同一、M2（破損）萌出途中か、M3（破損）未出 下顎骨右（M2）M2 ほぼ萌出完了。M3 未出か 下顎骨右（×× P4M12 ③）♀ M3 萌出直前～開始 下顎骨右（M2 ③）M3 萌出途中、同一？の下左 M3（破損）萌出途中あり 下顎骨右 P3（×× M2 ③）M3 萌出途中か。同一？の下左 M3 破片あり 下顎骨右（P4M123）♀ M3 ほぼ萌出完了。P4M1 は歯根のみ 下顎骨右（× M3）M3 萌出完了。M2 破片あり 下顎骨右（P4M1）-（M3）M3 萌出完了。M1M3 破損。M2 破片あり	幼～若 幼～若 若 若 若 若 若 成 成 成	24 82 17 37 55 73 61 60 5 8	10	
	下右 P2 1、P3 1、M1 1（萌出完了直前）、1（全面摩滅）、M3 1（未出）、左右不明 M3 ？破片 3			8	
	下顎関節突起左、下顎骨左破片 1、下顎筋突起右 1、下顎骨破片 40、下切歯破片 3、未出 C 破片？ 1、後臼歯破片 1			48	
	環椎破片 1、肩甲骨左 1、破片 3、右 1 若、上腕骨右下 1、1 焼、中 1、橈骨左上～中 1、尺骨左上 1、右 1、寛骨左 2、坐 + 恥 1 大腿骨左下 1 若ハズレ・なし焼、右下関節部のみ半欠 1 若、脛骨左上 1 若ハズレ・なし、椎骨半欠 1 若、破片 1 焼、足根骨 1			21	
103	上右 M3 1（未出～萌出始め） 下顎骨左（M2）同一未出 M3 破片 2 あり 下左 M3 1（萌出途中、後端欠）、右 M3 1（萌出ほぼ完了か）、歯破片 2 環椎 1	若	89	7	
104	下顎骨┌左（I1 ×× C ××× P4M123）♂ M3 萌出完了、関節突起あり、下顎枝に穿孔なし └右（I1 ～　I2 以降と連合部は土中に埋まって固められているため不明 肩甲骨右破片 1、大腿骨右中 1	成	なし	3	
110	下左 M2M3 同一	成	110	1	
112	上左 M3 1、右 M2 1（前 1/3 欠）、M3 1（萌出途中か）、1 下顎骨右（m4）-（M ②）骨ほとんど残存せず。M2 未出。同一未出 P3P4 と M1 破片あり 下左 I2 1、M2 1、M3 1（未出～萌出始めか）、1（萌出ほぼ完了か）	幼	118	9	
123	上右 M3 2（萌出完了直前か） 下顎骨┌左（××××× M ③）♀？ M3 萌出途中 └右（P23 ×××）M ③ 下右 M2 ③ 同一、M3 萌出途中 下左 M3 1（萌出途中～完了直前）	若 若	124 125	5	
130	下顎骨左（× P4M12 ③）M3 萌出途中か	若	126	1	
133	下右 M3 1			1	
135	上右 M2 ③ 同一、M3 は萌出始め～途中 上顎骨破片 1	若	128	2	
—	上左 P34M2 ③ 同一、M3 萌出途中 上左 M3 2（未出～萌出始め）、1、右 M1 ？ 1、M3 1（萌出ほぼ完了）、1 下顎骨左（× M2）M3 未出 下顎骨左（M ③）M3 萌出途中 下左 M3 1（萌出直前～始め）、1（萌出途中か） 下右 P4M1-M3 同一、同一 P 破片 2 あり 下右 m4 破片 1、M1 1、M3 2（萌出途中）、1（萌出ほぼ完了か） 歯破片 1 環椎破片 1 個分（上面欠）、距骨左 1	若 若 若 若 成	145 141 140 152	20	
計				185	

註　I：切歯、C：犬歯、P：前臼歯、M：後臼歯、i：乳切歯、c：乳犬歯、m：乳臼歯、I・P・M・i・m に伴う数字は歯の順番を示す。（　）は顎骨があることを示し、×は歯が脱落していることを示す。
○のついた歯は未出または萌出途中であることを示す。同一：同一個体。上：近位部、中：中間部、下：遠位部、上・中・下のないものは完存。幼：幼獣、若：若獣、成：成獣、幼・若のない ものは成獣。坐：坐骨部分、恥：恥骨部分。焼：焼けた資料。ハズレ・なし：成長途中であるため骨端が分離して、かつ残存していないことを示す。

しれない。なお、出土した下顎骨には下顎枝が残っている資料がほとんどなく、残っていたのは土器群104出土の下顎骨1点のみであった。この資料では下顎枝に穿孔されていなかったが、他の資料でこの部分に穿孔されていたかどうかは不明である。

資料中には、顎骨の骨自体は残っていなかったが、出土状況や歯の形態の検討結果から明らかにその存在が推定できる同一個体の歯のセットがかなり見られた。そこで、これらは顎骨と同じ扱いとし、顎骨とこれらについては表3中に歯の萌出交換状態から見た年齢区分と遺物No.を記載した。後臼歯の残る下顎骨あるいは下顎歯のセットから年齢群別の出土最小個体数を算出すると、幼獣が3個体、若獣が17個体、成獣が6個体となり、若獣が最も多い。このような若獣が主体となる年齢構成は、家畜集団に多く見られる。

また、イノシシ類の形質については、頭蓋骨では断片的な資料しか出土しておらず、下顎骨では保存状態の悪さから形質を観察できない資料が多数を占めるために、はっきりしない部分が多い。けれども、下顎の短縮化に伴うと思われる下顎連合部下面の凹みが見られる資料があることと、上面の高さが低い環椎が出土していることから、イノシシ類の中にはブタが含まれていると考えられる。これは、先述の若獣の多さとも矛盾しない。もっとも、資料中でのブタとイノシシの割合はよくわからない。

資料の大きさについては、歯・骨共に岐阜県産現生イノシシ標本よりも少し大きいものが多かった。肩甲骨については、土器群106でほぼ全体が残る資料が1点出土したが、土ごと固めて取り上げられたため背面は観察できなかった。他の資料も含め、観察可能な範囲では上骨として使用された形跡はなかった。

表4　シカ出土内容

土器群	部位・点数	計
106	下顎骨破片1 環椎破片ほぼ1個分、肩甲骨右3、1若 上腕骨右中～下1、下3、大腿骨左中～下1 脛骨左下破片1、右下1若ハズレ・あり 距骨左1、踵骨左1 中手骨下1、中足骨下半欠1、中手中足骨下1 角破片1、1（落角）一部焼、角座部分破片6（落角）	26
103	下左I1 1、P4 1、M2 1、右M2 1、歯破片8 肩甲骨左1、寛骨左腸1、右1 中足骨中破片1、中手中足骨下1、角破片1	18
104	下顎骨右P3（M123）M3萌出ほぼ完了 肩甲骨右1、上腕骨左中～下1 脛骨中破片1左右不明	4
135	脛骨左上1、右上1	2
—	下顎骨右（××）M23部分、萌出ほぼ完了。 上右M3 1 肩甲骨左1、中足骨中1、椎骨1	5
計		55

註　表3参照。ハズレ・あり：成長途中であるため骨端が分離して、かつ残存していることを示す。

表5　その他の哺乳類出土内容

土器群	種など	部位・点数	計
106	イヌ幼獣？	環椎半欠1、大腿骨左上1	27
	イヌ科	末節骨1	
	ウサギ	寛骨左1	
	イタチ	大腿骨右1	
	ネズミ類	上左I1 1、下顎骨左1 大腿骨右1、1若下ハズレ・なし	
	クジラ類	破片1	
	イルカ類	椎骨破片1	
	陸獣	破片16	
	陸獣 or 海獣	破片10	
103	クジラ類	鼓室胞右1	15
	イルカ類	椎骨3若	
	陸獣	破片9	
	陸獣 or 海獣	破片4	
104	陸獣	破片3	3
110	イルカ類	椎骨半欠1	1
135	陸獣	破片1	1
—	イノシシ類 or シカ	肋骨破片1焼	5
	アシカ♂	距骨左1	
	イルカ類	椎骨1若	
	陸獣	破片2	
計			52

註　表3参照。

b. シカ（表４）

55 点出土しているが、イノシシ類に比べるとかなり少ない。イノシシ類と同様に土器群 106 に含まれていた資料が多かったが、頭部の部位だけでなく四肢骨・椎骨など全身の部位があまり偏ることなく出土している点は異なっている。歯・骨共に、資料の大きさは愛知県産現生シカ標本よりも小さいものがほとんどである。肩甲骨では関節部以外はあまり残存していなかったが、残存したものには卜骨として使用された形跡はなかった。

c. その他の哺乳類（表５）

陸獣ではイヌ幼獣？２点、イヌ科１点、ウサギ１点、イタチ１点、ネズミ類４点が見られ、海獣ではイルカ類（小型クジラ類）６点、クジラ類２点、アシカ１点が見られた。イヌ科の末節骨はタヌキ程度の大きさで、ネズミ類とした資料は４点とも大きなドブネズミであった。クジラ類とした鼓室胞はゴンドウクジラ類程度の大きさであり、アシカの距骨は雄の成獣である。陸獣とした破片は、そのほとんどがイノシシ類またはシカのものであろう。

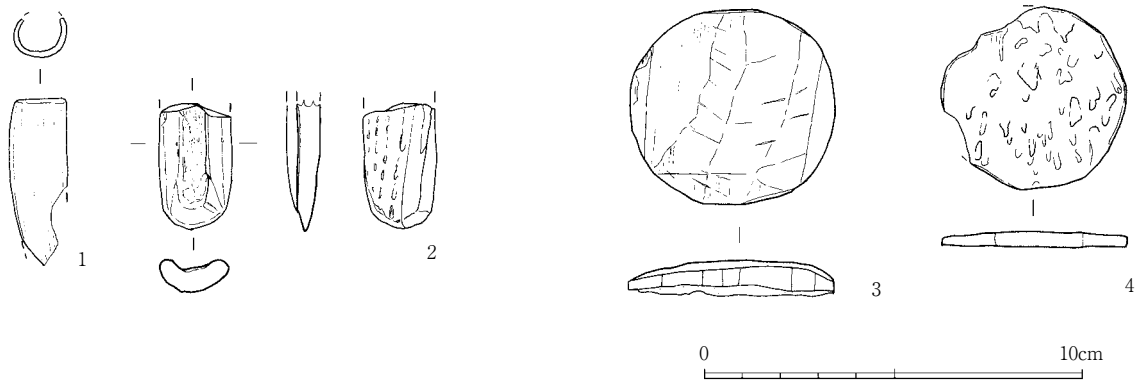
4、骨角製品（図１）

1：器種不明（No.102）。長径 1.50㎝、現存長 4.43㎝。鹿角を輪切りにし、外面は凸凹を完全に削り取って平滑にし、内側の海綿体もほとんど削り取って薄い筒状に加工したものの破片。切断面にも研磨を加え、なめらかにしている。内側の海綿体は一部で少し残っており、加工途中なのかもしれない。よく焼けて全体が白色化しており、内側の一部に赤色顔料が付着している。

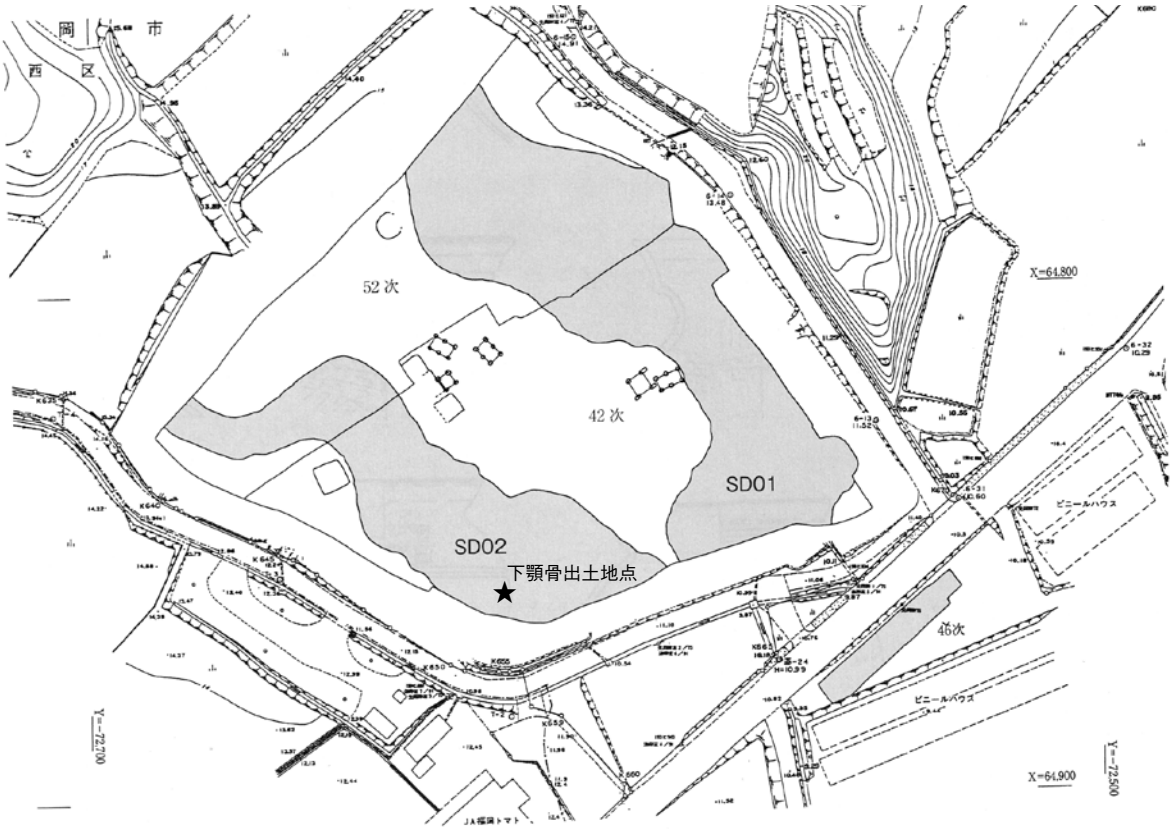
2：ヘラ（No.132）。幅 1.95㎝、現存長 3.30㎝。同一個体とみられる破片があるが、接合部を欠くため先端部のみを図化した。鹿角を長方形の板状に切りとり、使用部位は先端に向かって鋭角に削り出している。鹿角外面の凸凹はある程度削られ、かなり平らになっている。内側の海綿体は削り取られているが、少し残っている。

3：円盤状製品（No.1）。直径 5.45cm、厚さ 0.95cm。クジラ骨製で部位は不明である。表面と側面には金属器による削り痕が見られ、断面形がかまぼこ型になるよう整形されている。

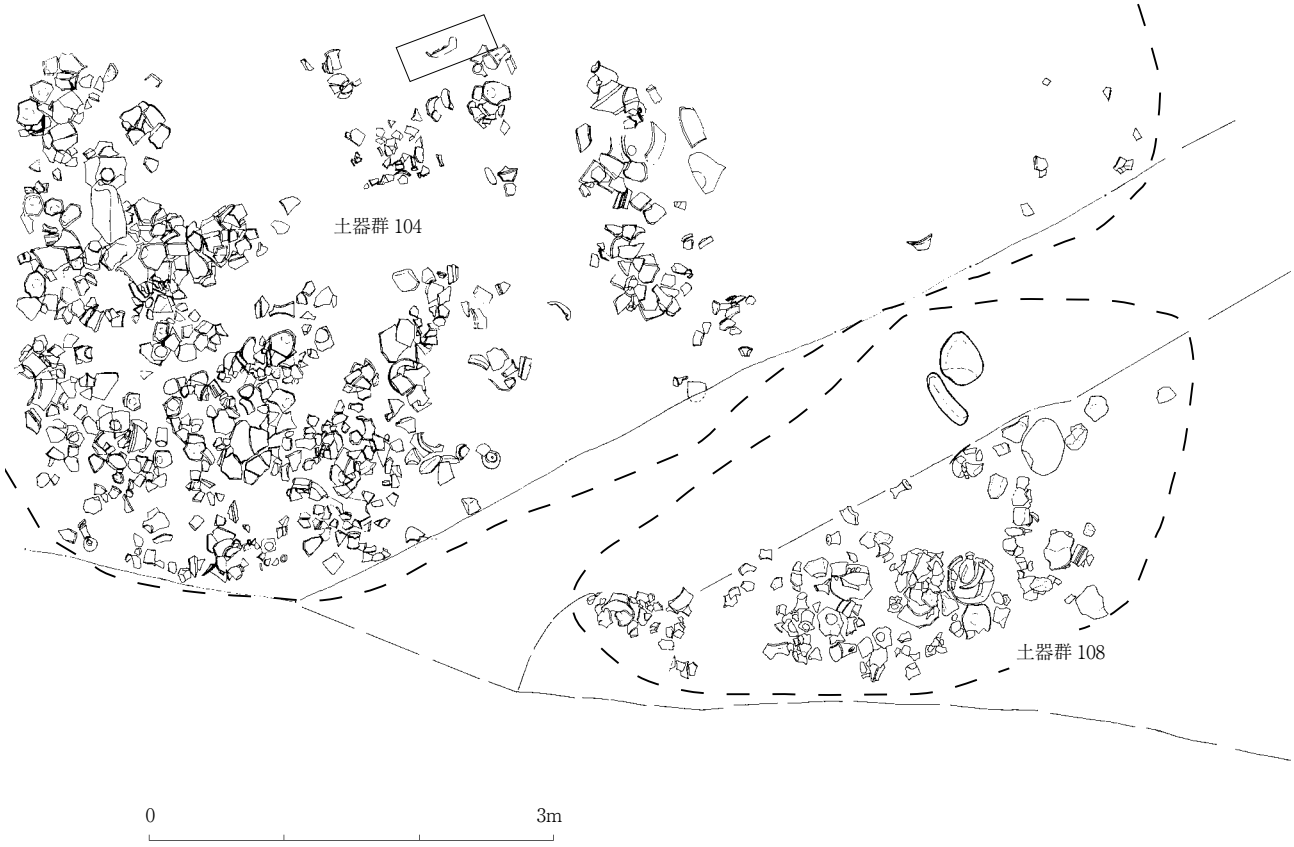
4：円盤状製品（No.2）。直径 4.81cm、厚さ 0.46cm。骨の緻密質の外面は荒れているが内側に残る海綿体が粗いので、陸獣骨だと思われる。種と部位は不明であるが、頭蓋骨や下顎骨などの平坦な部分を選び、これを割って内側の海綿体を削り取って利用している。なお、緻密質がある程度厚いので、肩甲骨ではないと思われる。



第１図　元岡・桑原遺跡群 42 次調査出土の骨角製品（1/2）

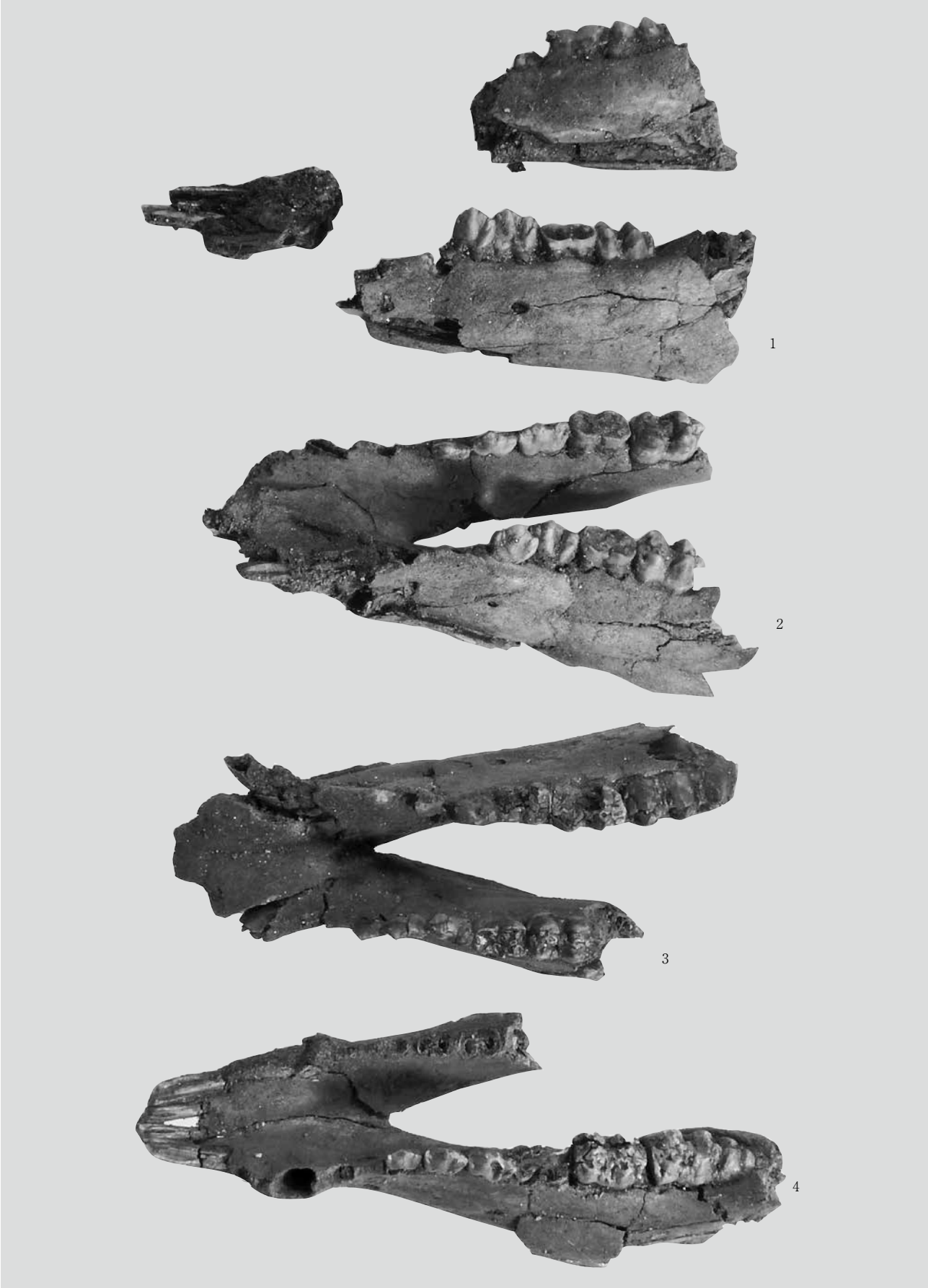


第２図　元岡・桑原遺跡群 42 次調査区イノシシ類下顎骨出土地点（1/1,500）



第３図　土器群 104 イノシシ類下顎骨出土状況（1/60）

1　動物遺体 1



動物遺体 1（約 2/3）

1. イノシシ類下顎骨 No.77　　2. イノシシ類下顎骨 No.76　　3. イノシシ類下顎骨 No.58

4. イノシシ類下顎骨 No.72

動物遺体２・骨角製品（約 2/3）

1. イノシシ類環椎（上面）　2. イノシシ類環椎（後面）　3. シカ下顎骨　4. シカ上腕骨　5. イルカ類椎骨
6. イノシシ類上腕骨　7. イノシシ類寛骨　8・9. 円盤状製品　3・4・6 は右側、7 は左側

3　動物遺体 3

1

2

動物遺体 3（1 は約 1/2、2 は約 2/3）

1. イノシシ類下顎骨出土状態　　2. イノシシ類左肩甲骨出土状態

元岡・桑原遺跡群出土玉類の保存科学的調査

比佐陽一郎（埋蔵文化財センター）

１．はじめに

古代の装身具に用いられる玉類の内、ガラス製品や石製品については、外形や色調といった肉眼観察で得られる情報の他に、顕微鏡や材質分析の装置を用いた調査によって、製作技法や資料を構成する元素組成などを知ることができる。その情報は、製品の産地や時代、更には流通などの検討に有益なものとなることが、先行研究によって示されている（肥塚ほか 2010）。

元岡・桑原 42 次および 52 次調査では、弥生時代を中心に様々な種類の玉類が出土している。これまでに刊行された報告書では実測図や一覧表などで出土に関する情報が掲載され、またガラス製玉類については材質分析も行っている。今回、玉類の調査について総括する意味で、出土事例や過去の分析について整理し、これまで分析が行われていないガラス玉や一部の石製玉類を対象に材質分析を行ったので、その結果を記す。

２．既往の調査と調査方法

まず当該発掘調査区における玉類の出土事例と、その調査事績を概観しておきたい。

42 次調査の最初の報告である福岡市埋蔵文化財調査報告書（以下、市報とする）第 1174 集では、図 130 に石製の管玉 1 点とガラス玉 2 点が図示されているが、これらに対する材質等の詳細調査は行われていない。

市報 1275 集では図 109 にガラス小玉と石製丸玉が 1 点ずつ図示されている。これも未調査である。

市報 1276 集ではⅡ区で検出された玉類について報告が行われ、ガラス玉と碧玉、水晶の玉については巻頭図版に顕微鏡で撮影された画像が掲載されている。

市報 1354 集では、52 次調査出土の玉類について報告が行われ、内、ガラス玉については詳細観察と材質分析結果が掲載されている。その際、合わせて 1276 集で報告されたガラス玉についても詳細調査が行われている。

通番	遺物番号	報告書	掲載 Fig	ラベル内容	資料名	色調	観察所見	分析所見
石製玉類								
1	0451　11001	1275	109-986	D-3 区土器群 9C 3 層目き - ⑥ -7 中	丸玉	淡灰青色	白や灰色の地にわずかに淡い青色が混じる。重量 1.175g、水中重量 0.457g ＝みかけの比重 2.57	Si を主として K、Al、Rb が特徴的に現れる他、Mg、Ca、Ti、Mn、Fe など微量→アマゾナイト
ガラス製玉類								
1	0451　11003	1275	109-985	C-6 区土器群 9C い - ⑩ -1 中	小玉	淡青	整ったドーナツ状。気泡は孔の長軸に平行して並ぶ。→引伸ばし	◎ Si ／● K ／○ Al、Cu、Pb ／△ Mg、Ca、Ti、Fe →カリガラスガラス
2	0451　11004	1174	130-1171	土器群 10 下	小玉	淡青	やや歪んだ形状。気泡は孔の長軸に平行して並ぶ。→引伸ばし	◎ Si ／● K ／○ Al、Ca、Cu、Pb ／△ Mg、Ti、Fe →カリガラスガラス
3	0451　11005	1174	130-1170	土器群 10 R42 下	小玉	青紺	半欠。本来は球形か。気泡は孔の長軸に平行して並ぶ。→引伸ばし	◎ Si ／● K ／○ Al、Ca、Mn、Fe ／△ Ti、Co、Cu →カリガラス
4	0451　11006	1275	未図化	C-7 区右下Ⅰ層黒色土下部	小玉？	淡青緑	砕片多数→製作技法不明	◎ Si ／○ Al、K、Ca、Mn、Fe、Cu ／△ Mg、Ti →不明
5	0451　12078	未報告	－	W-6 区ソージ中 2 層上	管玉？	青紺	不透明、気泡等の流れは読めない。孔の一部が残存。管玉の小口部分の破片か。	◎ Pb ／● Si、Ba ／△ Al、Ca、Fe、Cu →鉛バリウムガラス

記号は検出される元素の量を示す（◎＞●＞○＞△）

玉類の調査結果

以上を踏まえ、ここでは過去に分析が行われていないガラス玉５点と、肉眼による同定で問題のありそうな石製丸玉１点を対象として、ガラス玉については顕微鏡による製作技法の観察と、蛍光Ｘ線分析による材質調査を、また石製玉類については比重測定と蛍光Ｘ線分析を行った。蛍光Ｘ線分析の原理等詳細については、市報 1354 集のガラス玉調査報告を参照されたい。また調査に使用した装置や分析条件もこれに準じたものであり、ここでは割愛する。

３．調査の結果とまとめ

調査結果を一覧表に示す。材質分析については、今回の調査では完全非破壊分析による定性分析であり、得られた元素の種類と相対強度から判定している。なお、ガラスの材質的な分類は肥塚隆保氏らによる研究（肥塚ほか 2010）に従う。

ガラス小玉については、細片となっている１点を除き、これまでに分析調査を行った資料で大勢を占めていたカリガラスであった。また製作技法は、管状に引伸したガラスを細分し、加熱して丸くする方法で作られたものと考えられる。細片の１点は、カリウムとカルシウムのピーク比が破片によって異なるなど、不安定な検出結果となっている。これがガラスの種類に起因するのか風化の影響によるものか判断はつかない。ただ、共通してマンガンが強く現れ、通常、この特徴は青紺色ガラスにおいて着色剤のコバルトに伴う不純物と説明される。しかし本資料の色調は淡い青緑色であり、色調と検出元素に違和感がある。材質的な分類や詳細な評価は今後にゆだねたい。

管玉の破片と見られる不透明の淡青色ガラス片は、これまでの報告書で未報告であった。材質は鉛バリウムガラスである。これも弥生時代に多く見られるもので、中国の漢を出自とする資料とされるが、福岡平野ではこの種のガラスの加工具（掛け堰や鋳型）が出土しており、再加工が行われていたと考えられる。資料は破片で全体形状が不明なこともあり､最終形態がどこで整えられたものかは判断できない。

石製の丸玉は、比重が 2.57 で、これは硬玉の３～3.3 という数値と大きく異なっている。蛍光Ｘ線による検出元素の特徴や外観情報とも合わせると、アマゾナイト（天河石）と判断するのが妥当と思われる。一般的なアマゾナイトは鮮やかな青色を特徴とするが、本資料は白や灰色が強く、一見すると硬玉に見間違える。

硬玉は国内に幾つか産地が知られるが、特に有名なのが新潟県を主に流れる姫川上流で、ここから日本各地、更には朝鮮半島へも石材が流通したとされる。一方、アマゾナイトは明確な産地は明らかでないものの原三国時代の朝鮮半島に多くの事例が知られており（大坪 2015・庄田 2006)、日本国内の弥生遺跡で出土する場合、渡来文化との関連で語られる資料である。この様に石材種によって出自が異なるものであり、その同定（推定）は遺跡の性格付けや評価にも影響を及ぼす可能性がある。

蛍光Ｘ線分析やＸ線回折分析による分析は、石材種の同定において有効な手法であることは間違いなものの、これらの装置は文化財分野で普及が進んだとはいえ普遍的なものとはいい難い。しかし、たとえ分析が行えない環境でも、石材種の確定した資料を数多く見ることで、肉眼観察でも確度を高めることができるとともに、ある程度の精度を持った電子天秤があれば比重測定値という手がかりを加えた推定も可能となる。これらを念頭に置いた資料の正しい評価が進むことを望む。

【参考文献】

大坪志子 2015『縄文玉文化の研究－九州ブランドから縄文文化の多様性を探る－』雄山閣
肥塚隆保・田村朋美・大賀克彦 2010「材質とその変遷」『月刊文化財』566 号　第一法規
庄田慎矢 2006「朝鮮半島の玉文化」『季刊考古学』第 94 号　弥生・古墳時代の玉文化　雄山閣　p.85

045111001
落射光、S=×3

045111003
透過光、S=×8

045111004
透過光、S=×8

045111005
透過光、S=×8

045112078
落射光、S=×3

045111006
落射光、S=×10

分析調査を行った玉類（p125・126参照）

報　告　書　抄　録

ふりがな	もとおか・くわばらいせきぐん 32
書名	元岡・桑原遺跡群 32
副書名	―第 52 次・第 54 次調査の報告－
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1380 集
編著者名	米倉秀紀（編）池田祐司　常松幹雄　小林義彦　古環境研究所　新美倫子　比佐陽一郎
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8620　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１
発行年月日	2019 年 3 月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
もとおか・くわばらいせきぐん 元岡・桑原遺跡群 だいごじゅうにじ 第 52 次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくおおあざもとおか 西区大字元岡	40137	2782	33° 35′ 6″	130° 12′ 4″	2008.4.1 ～ 2009.6.30	3,900	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
桑原遺跡群 第 52 次	集　落	縄文時代草創期 弥生時代～古墳時代	自然流路 竪穴住居　掘立柱建物	縄文土器，弥生土器・土師器・朝鮮半島系土器・楽浪系土器，土製品，石錘，紡錘車，石斧，石包丁，石鏃，青銅器鋳型，木製品	絵画のある琴板、朝鮮系無文土器や山陰・瀬戸内などの外来系土器が出土。

要　約	
	（弥生～古墳）谷を南北に流れる２本の自然流路 (幅 30 m前後）と 流路の間の集落部分からなる。流路は、縄文時代晩期頃の開削と考えられ、最下部に同時期の遺物を含んでいるが、主体は弥生時代中期後半から古墳時代前期の遺物である。南側に隣接する第 42 次調査では、約 10000 箱の遺物が出土し、無文土器や楽浪系土器などの朝鮮半島系の土器，国内では中国地方の土器の搬入が目立ち、小銅鐸２点、五銖銭・貨泉などの漢代の貨幣、小形仿製鏡、青銅製鞘尻金具，辰砂の粒子，銅鏃 などの金属器類 が出土した。 本調査でも、ＳＤ０１（東側）、ＳＤ０２（西側）あわせて 3000 箱近い弥生時代中期～古墳時代の遺物が出土したが、42 次調査のような外来系遺物や金属器などの出土量が極めて少ない。 ＳＤ０１・０２，これら２本の流路の間には、竪穴住居や掘立柱建物群があり、弥生時代中期から後期にかけての時期に比定される。このようにきわめて豊富な出土遺物は，この地が弥生時代から古墳時代初頭にかけて糸島地方の祭祀・交易の拠点として長く機能したことを示している。 また、当調査区北端のＳＤ０１東側で縄文時代草創期の土器・石器が出土し、報告済である。

報　告　書　抄　録

ふりがな	もとおか・くわばらいせきぐん 32
書名	元岡・桑原遺跡群 32
副書名	―第 52 次・第 54 次調査の報告－
シリーズ名	福岡市埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第 1380 集
編著者名	米倉秀紀（編）池田祐司　常松幹雄　小林義彦　荻原博文　古環境研究所
編集機関	福岡市教育委員会
所在地	〒 810-8620　福岡県福岡市中央区天神１丁目８番１
発行年月日	2019 年 3 月 25 日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	発掘期間	発掘面積 （㎡）	発掘原因
もとおか・くわばらいせきぐん 元岡・桑原遺跡群 だいごじゅうよじ 第 54 次	ふくおかけんふくおかし 福岡県福岡市 にしくおおあざもとおか 西区大字元岡 あざとやま 字戸山	40137	2782	33°36′11″	130°13′40″	2008.10.6 ～ 2009.1.9	1,872	記録保存調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
元岡・桑原遺跡群 第 54 次	集　落	旧石器・縄文・弥生・古墳・古代	杭列・溝・土抗・河川・石器集中	ナイフ型石器・阿高式土器・石鏃・玄武岩砕片・土師器・須恵器・越州窯系青磁，木器	

要　約	20 次調査から続く古墳時代を主体とした河川とその立ち上がりに杭列、土坑を確認した。本報告では、黒曜石の石刃，剥片が集中して出土し接合したＳＸ００５と、河川堆積から出土した古墳時代から古代の木器を追加報告した。

元岡・桑原遺跡群 32

―第52次・第54次調査の報告―

福岡市埋蔵文化財調査報告書　第1380集

平成31年３月25日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区天神１丁目８番１号

印　刷　ダイヤモンド秀巧社印刷株式会社
福岡市東区松田３丁目９番32号